山梨市文化財調査報告書　第12集

三ケ所遺跡

― 市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書 ―

2010年1月

山　　梨　　市
山梨市教育委員会
㈶山梨文化財研究所

山梨市文化財調査報告書　第12集

三ケ所遺跡

― 市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書 ―

2010年1月

山　　梨　　市
山梨市教育委員会
㈶山梨文化財研究所

序

本書は、市道の改良に伴って行われた三ケ所遺跡発掘調査の報告書です。調査は、国宝の仏殿で著名な清白寺の参道と交差する東西140ｍ、南北15ｍの範囲にわたって行われ、平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、中世の溝が検出されました。竪穴住居は4軒が検出され、そのうち1号竪穴は10世紀前半のもので、床面からは「東大」と墨書された杯が出土しています。掘立柱建物は5棟が検出され、うち5号掘立柱は3×3間で柱穴径が大きく、注目に値するものです。溝は2本の平行したものが東西方向、南北方向それぞれ検出されており、道路側溝もしくは条里溝と見られており、今後のこの地域の条里制の成立時期や範囲、方向性などを考える上で大変貴重な発見であるといえます。

最後になりますが、調査を担当していただいた（財）山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成22年1月

山梨市教育委員会
教育長　堀　内　邦　満

例　言

1　本書は山梨県山梨市三ケ所564-2番地ほか所在、三ケ所遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は市道小原東東後屋敷線改良工事に伴い、山梨市より委託を受けて（財）山梨文化財研究所が実施した。

3　本書の原稿執筆は第４章第１～３節をパリノ・サーヴェイ株式会社（担当　松元美由紀　分析　松元美由紀・高橋敦・金井慎司）、第４節を植月学（山梨県立博物館）、第５章第３節を室伏徹（甲州市教育委員会　山梨県考古学協会）が行い、そのほかの執筆・編集は櫛原功一（（財）山梨文化財研究所考古第２研究室）が行った。また表３石製品観察表の石材鑑定は河西学（（財）山梨文化財研究所地質研究室）による。

4　発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は（株）テクノプラニングが実施した。

5　鉄製品の保存処理は、（財）山梨文化財研究所保存処理室にて実施した。

6　本書に関わる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。

7　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご協力、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

三澤達也（山梨市教育委員会）　松土一仁（山梨市役所建設課）　清白寺　河西学・鈴木稔・畑大介・宮澤公雄・平野修・望月秀和・中山千恵（（財）山梨文化財研究所）三枝哲雄（三枝興業）　森谷忠・柴田直樹（（株）テクノプラニング）　千葉博俊（パリノサーヴェイ株式会社）　室伏徹・入江俊行（甲州市教育委員会）植月学（山梨県立博物館）　岡野秀典（中央市教育委員会）　稲垣自由・古川明日香（山梨県埋蔵文化財センター）　加藤雄一郎（山梨学院大学学生）　甲陽建機リース株式会社

凡　　例

1　遺跡全体図におけるＸ・Ｙ数値は、平面直角座標第８系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

竪穴　　１：60
竈　　１：30
土坑・ピット　　１：30
溝　　１：100ほか　断面　１：60ほか
土器　　１：３
鉄製品　１：２
石器　　１：３
石鏃　　２：３
石造物　１：８

3　遺構図版中の数字は遺物番号を示し、遺物図版、写真図版、観察表の各番号と一致する。遺構平面図における遺物間実線は接合した２点の接合関係を示す。遺物分布図のドットは、現場でナンバーをつけて取り上げた個々の遺物を示し、うち図化した遺物については、図版番号と同一の番号を付した。なお、遺物の種別を示す記号は以下のとおり。

◎　土器　　●　土師器・土師質土器・土器　　▲　須恵器　　■陶磁器　　△　石器・石造物
◆　骨　　◈　粘土　　○　金属製品・銭貨

4　土器断面図中の破線は接合帯を、黒の塗りつぶしは須恵器を示す。

5　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

6　遺構図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察表番号と一致している。

7　本書図１は国土地理院発行の１/200,000地勢図、１/50,000地形図、図２は１/2,500山梨市発行都市計画図を使用した。

8　本文の註・参考文献については各節（章）の文末にまとめた。

本　文　目　次

序
例言
凡例
本文目次
挿図目次
写真目次
表目次
図版目次
写真図版目次
第１章　経過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 1
　第３節　整理等作業の経過 …… 4
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と成果 …… 10
　第１節　調査の方法 …… 10
　第２節　層序 …… 10
　第３節　遺構 …… 10
　第４節　遺物 …… 21
第４章　自然科学分析 …… 27
　第１節　７号土坑炭化物の放射性炭素年代測定（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 27
　第２節　種実遺体同定（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 28
　第３節　骨同定（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 31
　第４節　１号土坑のウマ遺体（植月　学） …… 33
第５章　総括 …… 35
　第１節　土師器類の年代と仏鉢形土器 …… 35
　第２節　遺構群の時期的変遷 …… 36
　第３節　「東大」墨書について …… 38
　第４節　三ケ所遺跡の掘立柱建築について（室伏　徹） …… 47

報告書抄録
奥付

挿図目次

図１　遺跡の位置 …… 6
図２　調査区位置図 …… 7
図３　聖原遺跡H380住出土仏鉢形土器 …… 36
図４　遺構の変遷 …… 37
図５「東大」関連墨書土器と出土遺跡 …… 39
図６　掘立柱建物の建築単位と年代 …… 48

写真目次

写真１　清白寺仏殿及び庫裏 …… 5
写真２　参道左脇の石造物群 …… 19
写真３　39号土坑古銭 …… 23

表　目　次

表１　ピット一覧表 …… 11
表２　遺構別遺物出土量 …… 12
表３　土器類観察表 …… 24・25
表４　土製品観察表 …… 26
表５　石器類観察表 …… 26
表６　金属製品観察表 …… 26
表７　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 27
表８　種実遺体同定結果 …… 29
表９　骨同定結果 …… 32
表10　馬歯同定結果 …… 34
表11　馬歯計測結果 …… 34
表12　山梨県内出土「東大」関連墨書一覧表 …… 41～45

図版目次

第１図　調査区及び周辺 …… 50
第２図　全体図 …… 51・52
第３図　全体図西区 …… 53・54
第４図　全体図中区 …… 55・56
第５図　全体図中・東区 …… 57・58
第６図　１号竪穴（1） …… 59
第７図　１号竪穴（2）、２・３号竪穴（1） …… 60
第８図　２・３号竪穴（2） …… 61
第９図　２・３号竪穴（3）、４号竪穴（1） …… 62
第10図　４号竪穴（2） …… 63
第11図　１号掘立柱建物、２号掘立柱建物（1） …… 64
第12図　２号掘立柱建物（2）、３号掘立柱建物 …… 65
第13図　４号掘立柱建物 …… 66
第14図　５号掘立柱建物（1） …… 67
第15図　５号掘立柱建物（2）、１号土坑 …… 68
第16図　２～７・17号土坑 …… 69
第17図　８～10号土坑 …… 70
第18図　11～14号土坑 …… 71
第19図　15・16号土坑 …… 72
第20図　18～21号土坑 …… 73
第21図　22～25号土坑 …… 74
第22図　26・27号土坑 …… 75
第23図　28～30号土坑 …… 76
第24図　31～35・38号土坑 …… 77
第25図　39～43号土坑 …… 78
第26図　台座地点 …… 79
第27図　１号池、１号配石 …… 80
第28図　１～３・６～８号溝（1） …… 81・82

第29図　1～3・6～8号溝（2）…… 83
第30図　9～11号溝 …… 84
第31図　4・5・12号溝 …… 85
第32図　出土遺物（1）…… 86
第33図　出土遺物（2）…… 87
第34図　出土遺物（3）…… 88
第35図　出土遺物（4）…… 89
第36図　出土遺物（5）…… 90
第37図　出土遺物（6）…… 91
第38図　出土遺物（7）…… 92
第39図　出土遺物（8）…… 93
第40図　出土遺物（9）…… 94

写真図版目次

図版1　調査区全景（合成写真）
図版2　1　調査区周辺空中写真（南より　中央は清白寺及び清白寺参道）
　　2　調査区空中写真（西より）
図版3　1　調査区空中写真（上より　盛り土反転後）
　　2　調査区空中写真（東より　中央は連方屋敷に通じる道）
　　3　西区1号溝ほか空中写真（上より）
　　4　中区空中写真（上より　1号竪穴ほか）
　　5　東区空中写真（上より）
図版4　1　1号竪穴遺物出土状況（西より）
　　2　1号竪穴遺物出土状況（東より）
　　3　1号竪穴遺物出土状況
　　4　1号竪穴遺物出土状況
　　5　1号竪穴床直遺物出土状況
　　6　土師器坏・皿出土状況
　　7　「東大」銘墨書土器出土状況
図版5　1　土師器出土状況
　　2　竈内支脚転用甕出土状況
　　3　1号竪穴竈（西より）
　　4　1号竪穴竈（支脚転用土器を外した状況）
　　5　1号竪穴完掘状況（西より）
　　6　1号竪穴掘り方状況（西より）
図版6　1　2号竪穴遺物出土状況（北より）
　　2　2号竪穴竈周辺遺物出土状況（南より）
　　3　2号竪穴竈截ち割り状況
　　4　2号竪穴竈礫出土状況（竈正面より）
　　5　竈礫出土状況（竈上より）
　　6　2号竪穴完掘状況（南より）
　　7　2号竪穴掘り方状況（北より）
図版7　1　3号竪穴ベルト（南より）
　　2　3号竪穴遺物出土状況（北より）
　　3　3号竪穴内鎌出土状況
　　4　3号竪穴竈周辺礫出土状況
　　5　3号竪穴竈完掘状況
　　6　3号竪穴掘り方状況
　　7　3号竪穴完掘状況（南より）
図版8　1　4号竪穴覆土断面（南より）
　　2　4号竪穴遺物出土状況
　　3　4号竪穴竈截ち割り状況（正面西より）
　　4　4号竪穴竈截ち割り状況（南より）
　　5　4号竪穴竈袖石・支脚石出土状況（西より）
　　6　4号竪穴竈袖石・支脚石出土状況（南より）
　　7　4号竪穴完掘状況（南より）
図版9　1　1号掘立10号ピット断面（北より）
　　2　1号掘立7号ピット断面（北より）
　　3　1号掘立8号ピット断面（北より）
　　4　1号掘立柱穴列断面（北より）
　　5　1号掘立完掘状況（北より）
　　6　1号掘立完掘状況（西より）
　　7　2号掘立完掘状況（南より）
図版10　1　3号掘立完掘状況（西より）
　　2　4号掘立完掘状況（東より）
　　3　4号掘立67号ピット断面
　　4　4号掘立66号ピット断面
　　5　4号掘立65号ピット断面
　　6　4号掘立64号ピット断面
　　7　4号掘立63号ピット完掘状況
図版11　1　4号掘立完掘状況（南より）
　　2　4号掘立完掘状況（空中写真　上より）

3　５号掘立完掘状況(空中写真　上より)
4　１・５号掘立周辺状況（空中写真　上より）
5　５号掘立完掘状況（南より）
6　１号土坑
7　１号土坑（馬歯出土状況）
図版12　1　２号土坑
2　３号土坑
3　４号土坑
4　５号土坑
5　６号土坑完掘状況
6　７号土坑断面
7　７号土坑焼骨出土状況
8　７号土坑焼土・焼骨出土状況
9　８号土坑
10　９号土坑完掘状況
11　11・12号土坑完掘状況
12　13号土坑
13　14号土坑完掘状況
14　15号土坑完掘状況
15　16号土坑
16　22号土坑
17　23号土坑
18　24号土坑
図版13　1　25号土坑
2　26号土坑断面
3　26号土坑半截状況
4　26号土坑完掘状況
5　38号土坑完掘状況
6　38号土坑
7～9　39号土坑
10　39号土坑銭貨出土状況
11・12　43号土坑
13　19～21号土坑完掘状況
14　18号土坑覆土断面
15　18号土坑完掘状況
図版14　1　清白寺参道と周辺調査状況
2　参道脇の１号池
3　１号池石垣状況
4　台座地点上層（東より）
5　台座地点下層（東より）
6　台座地点下層（西より）
7　台座群出土状況（南より）
8　台座地点完掘状況
図版15　1　１号溝
2　中区完掘状況（反転後）
3　中区完掘状況（反転前）
4　西区完掘状況（東より）
5　１号竪穴調査風景
6　参道脇石造物群（西側）
7　参道脇石造物群（東側）
8　清白寺参道の現状
図版16　１号竪穴　遺物
図版17　１号竪穴　遺物
図版18　１号竪穴　遺物
図版19　２～４号竪穴　遺物
図版20　土坑・台座地点　溝　遺物
図版21　溝　遺構外　遺物
図版22　炭化材・炭化種実
図版23　焼人骨
図版24　１号土坑馬歯(1)
1　上面（右側頬側面）
2　上部除去後（左側舌側面側）
図版25　１号土坑馬歯(2)
3　左側頬側面
4　馬歯

第１章　経過

第１節　調査の経過

三ケ所遺跡の発掘調査は、JR東山梨駅と山梨市後屋敷間に計画された市道建設を原因とする。この一帯は、今日モモ・ブドウを主とした果樹地帯および住宅地であり、また農道沿いに面して存在する国宝清白寺や県史跡連方屋敷などの史跡・文化財を抱える観光地でもある。現状の農道では進入路の道幅が狭いため、観光バスなどの大型車が通行できないといった懸案に対する道路改良の要望を踏まえて計画されたもので、山梨市都市計画図には「山梨市駅東山梨線」として、山梨駅方面につながる予定路線図が図示されている。

連方屋敷を含む道路予定地周辺は、「三ケ所遺跡」という名称で、古代・中世の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図等で周知されている。そこで工事計画に先立ち、平成20年（2008）、山梨市教育委員会は予定地内各所にて試掘調査を実施した。路線予定地内に任意で１×１m四方の試掘坑を各所に設定、遺構確認面まで人力により掘削、遺構・遺物の検出状況を確認し、本調査の範囲を絞り、工事計画をもとに平成20年度の本調査予定地区を設定し、清白寺参道を中心に東西約140ｍの間とした。

調査については委託事業として本年度現地調査のみ実施、次年度整理作業という予定で、山梨市が（財）山梨文化財研究所に業務委託を行い、平成20年７月25日契約、工期は７月26日～10月31日とし、調査が行われることとなった。事業名は地方道路整備臨時交付金事業、委託業務名は小原東東後屋敷線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査業務である。本調査にあたっては山梨市教育委員会が作成した仕様書に基づき、山梨市建設課、山梨市教育委員会との協議、打ち合わせを随時行いながら、山梨市教育委員会職員の監督のもと、本調査を実施することとなった。山梨県教育員会あて届出は平成20年６月29日付提出、７月29日付で山梨県教育委員会より通知を受けている。

整理事業については、平成21年８月25日契約、工期は８月26日から平成22年１月29日で、山梨市が（財）山梨文化財研究所に業務委託し、報告書刊行に向けての作業が行われることとなった。

第２節　発掘作業の経過

現地での発掘調査は平成20年7月28日より10月31日まで、約３カ月間実施した。調査にあたっては廃土置き場が路線予定地内で確保できなかったことから、調査地区を南と北に細長く２分割し、南側を調査したのち廃土を反転して北側を調査し、遺構図面を合成することとした。

調査は西区より開始し、溝を調査したのち、中区、東区へと移動し、竪穴、ピット、土坑、掘立などを調査した。その過程で１号掘立、２・３号竪穴が調査区と道との境の土手中に続いていることがわかり、調査区を一部拡張した。ほぼ半分が掘りあがった9月17日に１回目のラジヘリ撮影を実施し、その後重機で盛り土を反転、北側を調査した。西区では参道に沿った溝などを調査するとともに、参道脇にかつて存在した池を確認した。また西区南東隅に石造物の台座が並んで検出されたため、道路との境ぎりぎりまで調査区を拡張した。続く中区、東区では土坑、ピット群の調査を進めていくなかで１号竪穴と重複するように５号掘立が存在することがわかり、一旦埋め戻した１号竪穴を急きょ再発掘し、掘立の全体像の把握に努めた。また北壁では４号掘立の柱穴が調査区外にかかっていたため、柱穴１本分のみ調査区境を拡張して調査した。10月23日には、ほぼ完掘した状態で２回目の空撮を実施し、10月27日には現地調査を終え、埋め戻しに入った。

なお調査面積は、西区310㎡、中区1185㎡、東区136㎡ほか、計1640㎡である。

調査日誌、調査参加者は以下の通り。

【調査日誌】

平成20年(2008)７月29日(火)　調査範囲を確認し、表土剥ぎを開始。道幅が狭く、当初予定した重機を入れることができず、小さな重機を使用することとなった。調査事務所などのハウス等を設置。東西方向の溝を確認。

７月30日(水)　表土剥ぎ。機材搬入。基準杭設置。

７月31日(木)　表土剥ぎ。

８月１日(金)　表土剥ぎ。調査区壁の精査。

８月２日(土)　表土剥ぎ。

８月３日(日)　表土剥ぎ。

８月４日(月)　表土剥ぎ及び遺構確認作業。竪穴２軒、焼骨を伴う土坑確認。夕方激しい雷雨。

８月５日(火)　遺構確認。

８月６日(水)　１号溝掘削開始。

８月７日(木)　溝掘り下げ。

８月８日(金)　重機による表土剥ぎ。１号溝掘り下げ。

８月12日(火)　１～３号溝調査。遺物取り上げ。

８月13日(水)　１・２号溝礫出土状況写真撮影。遺物取り上げ。

８月18日(月)　１号溝断面実測。ベルト除去。溝内礫出土状況のポール撮影。

８月19日(火)　遺構外の精査。溝内遺物取り上げ。礫除去。

８月20日(水)　１号溝内再精査。

８月21日(木)　１号土坑確認。馬歯検出。

８月22日(金)　１号土坑完掘。写真撮影。

８月25日(土)　西区調査。

８月26日(火)　西区調査。

８月27日(水)　西区調査。

８月28日(木)　西区調査。

８月29日(金)　西区調査。

９月１日(月)　東区調査。調査区壁面精査。溝２本（４・５号溝）確認。

９月２日(火)　東区調査。撹乱等を掘削し、調査をほぼ終了とする。中区東側より精査開始。

９月３日(水)　中区の精査。細かなシミ状の撹乱掘り下げ。２～４号土坑調査。

９月４日(木)　ピット群の調査。道際に東西に並ぶ柱穴列確認（１号掘立)。

９月５日(金)　鋤簾掛け。掘り下げ。竪穴１軒確認。１号掘立の柱穴半截。５・６号土坑調査。

９月８日(月)　１号掘立の南側を拡張。２・３号竪穴確認、掘り下げ。南壁を拡張。１号竪穴掘り下げ。完形の土師器坏など出土。

９月９日(火)　１号竪穴遺物出土状況写真、遺物取り上げ。礫実測。２・３号竪穴掘り下げ。遺物取り上げ。１号掘立完掘。３号竪穴内より鎌出土。

９月10日(水)　１号竪穴礫取り上げ。断面図作図。２・３号竪穴完掘。１号掘立完掘写真撮影。２号掘立柱穴列半截。１号配石調査。

９月11日(木)　２・３号竪穴竈調査。２号掘立断面図作図、完掘へ。１号竪穴完掘写真、遺物取り上げ。帝京科学大生４名、学芸員実習のため調査参加。

９月12日(金)　中区ピットなど調査。３号竪穴竈内礫実測。７号土坑焼骨調査。

９月16日(火)　１号竪穴竈内調査。支脚転用土器出土。中区西端鋤簾掛け。ピット掘り下げ。中区をほぼ調査終了とする。

９月17日(水)　ピットなど調査。全体の精査。ラジヘリによる空撮。１号竪穴竈調査。

9月19日(金)　全景、各遺構の完掘状況写真撮影。台風接近により周辺整理。
9月22日(月)　中区補足調査。
9月24日(水)　再精査により掘立1軒確認(3号掘立)。1号竪穴竈調査。支脚転用土器内より支脚石出土。
9月25日(木)　3号掘立断面図。1号竪穴掘り方完掘、写真撮影。2・3号竪穴掘り方調査。ポール撮影による追加写真測量。
9月26日(金)　重機による盛り土の反転、北側表土剥ぎを開始。4号竪穴設定。調査。竈部分を拡張。1～3号竪穴掘り方断面図作図。
9月27日(土)　完掘状況写真撮影。
9月29日(月)　表土剥ぎ。
9月30日(火)　表土剥ぎ。東区の長方形土坑群など掘り下げ。中区東側の精査。遺構確認。4号掘立確認。1号竪穴と重複する3間×3間の掘立柱建物確認（5号掘立)。4号竪穴竈半截。
10月1日(水)　表土剥ぎ。中区1号竪穴を再調査（5号掘立重覆が判明したため)。4号竪穴竈調査。ポール撮影。床面掘り方截ち割り。
10月2日(木)　表土剥ぎ。精査。20～25号土坑半截。東区完掘。写真撮影。断面図作図。
10月3日(金)　表土剥ぎ。
10月4日(土)　重機による表土剥ぎは本日で完了。
10月6日(月)　西区精査。石列検出。溝4本確認。
10月7日(火)　西区溝などの掘り下げ。台座地点で台座列確認。西区溝の調査。参道脇の池にトレンチを入れ、池の石積みを確認。
10月8日(水)　1号池調査。西区ほぼ調査終了。
10月9日(木)　1号池完掘。石積みのポール写真撮影。台座地点のポール撮影。
10月10日(金)　中区西側精査。4号掘立の一部を拡張。ピット番号を付けて半截。台座地点の写真撮影。安全対策のため池をコンパネで一旦封鎖する。
10月14日(火)　中区精査。台座列断面図作図。
10月15日(水)　台座地点掘り下げ。寛永通宝など出土。中区精査。4号掘立完掘。土坑掘り下げなど。
10月16日(木)　台座地点掘り下げ。土坑調査。中区精査。
10月17日(金)　台座地点の一部拡張。台座を取り上げ、下層を調査。中区の土坑をほぼ完掘。シートの片付け。4号掘立完掘写真撮影。
10月20日(月)　台座地点精査。ポール撮影。下層掘り下げ。5号掘立柱穴半截。4号竪穴竈調査。
10月21日(火)　台座地点下層精査。土坑3基確認。5号掘立断面図。完掘。空撮準備。
10月22日(水)　40号土坑、ピット群調査。10～12号溝調査。
10月23日(木)　ラジヘリによる空中写真撮影。全体写真、各遺構の完掘状況写真撮影。
10月24日(金)　補足調査。
10月27日(月)　補足調査。
10月28日(火)　重機による埋め戻し開始。
10月29日(水)　埋め戻し。
10月30日(木)　埋め戻し。
10月31日(金)　埋め戻し。室内で図面整理。

【発掘調査作業員】（敬称略）

輿石邦次　角田勇雄　清水征二　名取正司　横内清次　茂内達　鷹野義朗　藤巻敏也　平賀早苗　坂本行臣　原島進　萩原忠　藤原五月　岸本美苗　窪田信一　岩崎誠至　筒井聡　鮫田勝夫　早川栄蔵　長谷川規愛

第３節　整理等作業の経過

遺物整理、報告書作成作業については、平成21年8月26日から平成22年1月29日までの間、山梨文化財研究所内で実施した。遺物水洗ののち、遺物の総量を把握するため、各遺構ごと、種別ごとの出土重量を計測した。その後、注記、接合作業、遺構内同一個体の識別、遺構内接合を行ったのち、遺構間での接合関係を調べ、接合がひととおり終了したのち、実測図化用資料を抽出、図化した。遺物については2倍図で図版を組み、トレースを行った。遺構は空撮写真の図化データをもとに、遺物出土データを合成し、遺構図の修正、遺物分布図、接合図の作成、断面投影を行った。また現場での手取りの断面図等をパソコンに取り込み、パソコン上でトレース、レイアウトした。竈内土壌などのサンプルは、乾燥ののち乾燥重量測定、水洗選別を行い、炭化種実などを抽出し、同定委託した。配石等で出土した焼骨については、洗浄、抽出ののち同定委託し、伴出した炭化物については樹種同定および放射性年代測定をすることとした。以上の同定・年代測定は㈱パリノ・サーヴェイに委託した。また1号土坑出土馬歯に関しては年齢などの同定を山梨県立博物館の植月学氏に依頼した。

【整理作業員】（順不同　敬称略）
竜沢みち子・岩崎満佐子・古郡明・斉藤ひろみ・須田泰美・田中真紀美・広瀬悦子・藤井多恵子
原野ゆかり・小林典子・小林裕子・大村明子・長田由香・伊藤美香・角屋さえ子・三森つる子・藤原五月
渡邊美伸・小林登志恵・佐藤広美

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

三ケ所遺跡は山梨県甲府盆地東側、JR 山梨市駅と塩山駅の中間付近にあたり、山梨市域東端、甲州市寄りに位置する。盆地東部を流れる笛吹川が形成した扇状地地形の台地面、南東向きの緩やかな平坦地に立地し、笛吹川とその支流重川に挟まれた中間付近に位置する。標高は361～362m。JR 中央線、東山梨駅の東方 500 mにあり、現在周辺はブドウ・モモを主とする果樹地帯、住宅地となっている。遺跡分布図における三ケ所遺跡は、東西 520 m、南北 570 mに及ぶ広大な範囲で、古代から中世の集落遺跡とされていて、連方屋敷、清白寺を含む一帯となっている。今回報告する本調査を実施した地点は、東山梨駅と後屋敷地区方面を結ぶ新設道路の予定地内で、南北に直線的にのびた清白寺参道と、従来より存在する東西方向の細い農道とが交差する地点を中心に、農道に沿って東西方向に展開する。このあたりは平坦で日当たりも良く、土壌も肥えているが、大きな河川からは離れていて、調査区東端に南流する五箇村堰開設により水田が開かれる以前は、水に乏しい地域だったようである。今日の果樹地帯となる以前は水田地帯であり、畑の区画に水田面の痕跡をとどめている。

第２節　歴史的環境

三ケ所遺跡周辺には連方屋敷、清白寺の存在が物語るように、東山梨地域でも中世以来の最も重要な地域のひとつであったことは言うまでもない。さらに周辺の条里的な地割の存在も大いに注目される点である。条里地割の成立時期は定かではないものの、本遺跡周辺には随所に認められるもので、連方屋敷、清白寺も地割の一角を占めるように位置する。また連方屋敷の正面南中央には、南北の通りに面して町屋的な地割の発達が認められ、連方屋敷との関連性は明らかである。遺跡分布をみると、周辺には平安時代を主とする古代以降の遺跡が点在するが、中でも本遺跡は格段に大きな遺跡といえる。

清白寺（山号　海涌山）は調査区北側に位置する。正慶２年（1333）あるいは観応２年（1351）の創建で、開基は足利尊氏、開山は夢窓疎石とされ、開創は二世住職、疎石の高弟清渓通徹である。ただし正慶２年説、観応２年説（夢窓の没年）はともに明治になってからの新説とされる。夢窓自身は嘉元３年（1305）10 月～徳治２年（1307）２月、延慶元年（1308）７月～２年春、２年７月～正和２年（1313）春、元徳２年（1330）９月～元弘元年（1331）２月、正慶元年（1332）春～２年３月の間、甲斐在住が確認できるといわれ、永徳２年（1382）には恵林寺住寺絶海中津が来寺するなど夢窓開山説は信憑性が高いものの、尊氏開基は考えにくいという（山梨市 2006）。

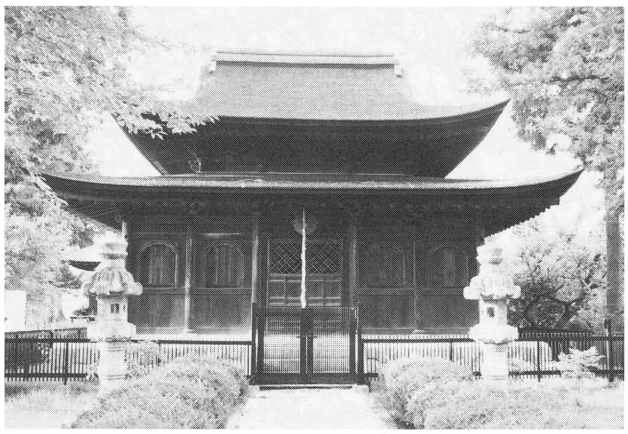


写真１　清白寺仏殿及び庫裏

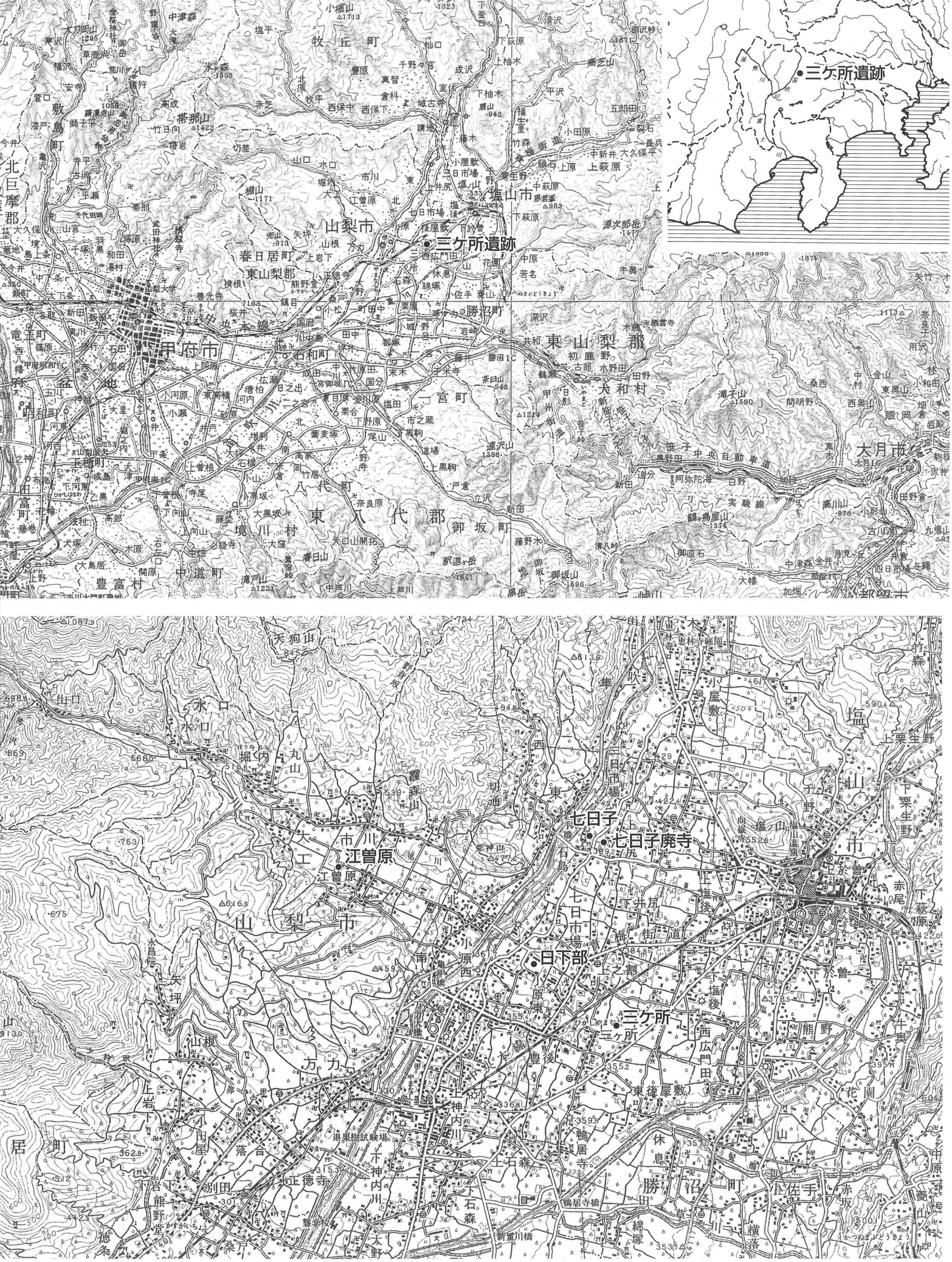


図1　遺跡の位置

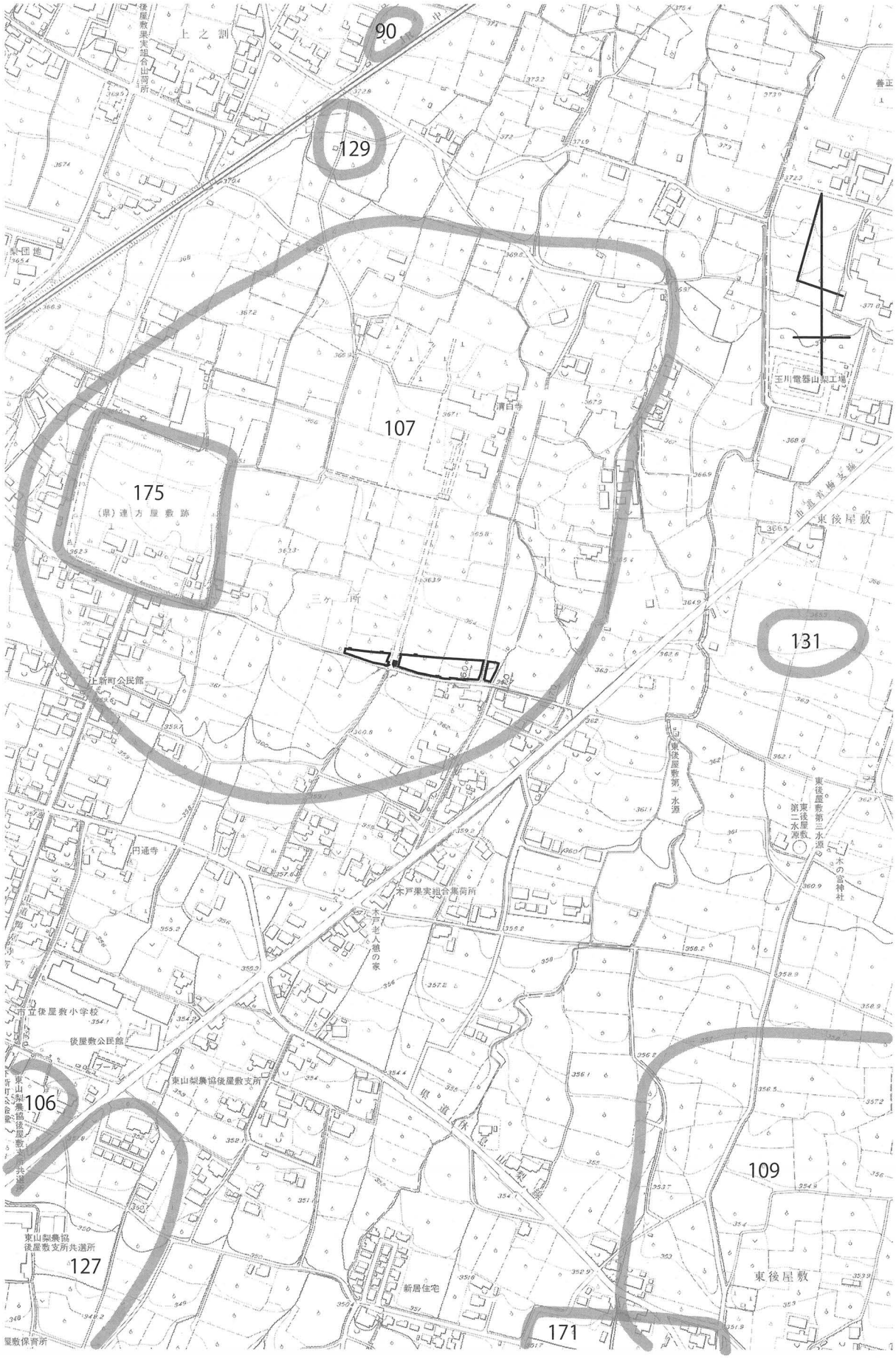

90
129
107
175
131
106
109
127
171
上之割
後屋敷果実組合山荷所
玉川電器山梨工場
東後屋敷
上新町公民館
円通寺
木戸果実組合集荷所
市立後屋敷小学校
後屋敷公民館
東山梨農協後屋敷支所
新居住宅
0
(1/5000)
200m

図２　調査区位置図

本尊釈迦如来。伽藍配置は惣門、山門、仏殿、本堂が南北に一直線の配置を示す禅宗形式をなす。国宝仏殿は檜皮葺きの方三間裳階付入母屋造で、禅宗様式の建築であり、大正6年の修理の際に発見された身舎組物の墨書により応永22年（1415）建立と判明しており、応永年間に大規模な伽藍修復がされたと考えられている。仏殿以外を焼失したのち寛永7年、諸堂再興を発願、同18年工事を終え、正保2年（1645）鎌倉建長寺末から妙心寺末に転派したが、天和2年（1682）12月に火災で諸堂焼失、貞享年間に恵林寺から入寺した蘭室により再建工事が始まり、享保ころまで続き、享保16年（1731）の惣門完成で寺観が整った（山梨市2006）。なお仏殿は寛保3年（1743）屋根替、天明元年（1781）、明治12年（1879）に修理が行われ、明治40年に特別建造物（旧国宝）指定、大正6年解体修理、昭和30年屋根替ののち国宝指定された。また元禄2～6年（1689～1693）再建とみられる庫裏は、昭和60年県指定ののち国重文となった。また本堂は、元禄年間建立で市指定文化財。なお寛永年中から当寺住職は寺子屋を開いており、享和年間（1801～4）には200名もの生徒がおり、学制頒布の明治5年まで開校していたという（山梨市2006）。

仏殿内には一木造りの平安仏（十一面観音立像、平安前期）も安置されていることから、寺院の開設が平安時代に遡る可能性があるとされる。また現在地より北二町の「古寺家」が夢窓開山当初の寺地であったという由緒書があり（山梨市2006）、前身寺院が存在した可能性も指摘されるところである。なお清白寺成立に関しては連方屋敷の館主の菩提寺と推定する説もあるなど、所在する位置関係が近いことから両者を関連付ける見方がある。

調査区の西、東西道路に沿って250m先には、中世の居館跡として知られる県史跡、連方屋敷がある。東西117～130m、南北120mの四周に土塁をもつ単郭方形居館で、一般的な中世居館跡よりひとまわり大きく、土塁の遺存状況が良好な点が特徴的である。館主の伝承については、安田義定の九世安田孫左右衛門尉光泰（連峯入道）がこの屋敷に居住し連峯屋敷と呼ばれたという記録があるとされるほか、『甲斐国志』は「蔵前宗ノ頭四人」のうち2名が古屋氏で、屋敷地内に当時古屋氏2名が居住し、同衆には古屋氏が多いこと、周辺に古屋氏が多く居住していることから、蔵前衆古屋氏一党との関連を推測する。また上野晴朗氏は南側中央に門があり街区がのびていることから、「蔵前の庁所」と推測している。居館跡内には南側に人家があって、南側と西側は土塁を一部欠くが、西側から北側にかけて土塁が良好に遺存している。居館内ではこれまでに平成6年に住宅建て替えに伴い南東隅で調査が行われ、集石遺構に伴い常滑甕（13世紀末～14世紀初頭）、内耳土器（15世紀か）が出土した。平成15年に居館内9138㎡が山梨市に寄付されたのち、史跡整備・学術調査のための試掘調査が平成16年から現在まで、山梨市教育委員会により継続的に実施されていて、2007年までに53か所、62本のトレンチにより1300㎡が調査されている（三澤2007）。その結果、屋敷地中央で南北に細長い礎石を伴う掘立柱建物1棟、南西寄りで東西の礎石建物1棟が確認され、中央の礎石面から高麗青磁梅瓶片（13世紀前半～後半）、龍泉窯青磁蓮弁文の碗片（13世紀中葉）が出土したほか、14世紀中～15世紀前半と考えられるかわらけ集中区などが検出されている。16世紀の遺物はほとんどなく、その後近世陶磁器類が出土することから、14世紀以前築造、衰退期を含みながらも近世以降まで存続したと考えられ（三澤2007）、清白寺の建立、周辺地割や条里との関連性が指摘されている。

市内の条里プランについては山梨市史に詳しい（中山2005）。それによれば笛吹市一宮町・甲州市塩山・山梨市後屋敷をはじめ重川右岸に広く展開する峡東条里と、笛吹川右岸、兄川扇状地の八幡地区を中心に広がる八幡条里の2者の区別が可能で、前者は南北軸が真北から12°東に傾き、後者は24°東に傾く。峡東条里は一宮浅間神社と清白寺東の道（本調査区中区と東区間の農道）付近を直線的に結ぶ南北ラインを軸線とする広がりをもち、熊野神社・菅田天神社（甲州市）、大井俣神社（山梨市）などが条里プランに組み込まれるといわれ、今宮遺跡（笛吹市一宮町）、桜井畑遺跡（甲府市）などでの考古学的調査の事例から9世紀前半代での施工が考えられるという。一方、八幡条里は窪八幡神社と天神社（山梨市）、熊野神社（甲州市）を結ぶ東西ラインを軸線として広がり、その成立時期は窪八幡神社、天神社の成立時期から16世紀初頭またはそれ以前と考えられ、牧庄、安田氏の勢力圏との関わりを伺うことができる中世荘園の条里プランとさ

れる（中山 2005）。本遺跡の調査区域一帯にみられる地割については、峡東条里の中心軸線上に位置するとともに八幡条里が峡東条里に接続する地域にあたり、条里プラン成立を検証するうえで重要な地域といえる。

そのほか、これまでに調査が行われた奈良・平安時代の遺跡をいくつか説明する（図１）。

日下部遺跡は、三ケ所遺跡西方約１kmにある平安時代の集落遺跡である。日下部中学校（現　山梨北中学校）校舎建設に伴い昭和 24 年に調査が行われたもので、全国的にも古代集落の調査例としては先駆的な事例である。5 次調査の結果、9 世紀後半～ 10 世紀前半の竪穴住居 28、掘立柱建物跡 1、溝 4 が検出され、墨書土器（真・王・南・田・饗・鞆井など）、腰帯具（巡方・丸鞆・鉸具）の出土が注目される。

江曽原遺跡は本遺跡の西 3.5kmにあり、日下部遺跡とともに昭和 25 年に調査された。時期は明確ではないが、平安時代の竪穴住居 3、掘立柱建物跡 2、井戸、大溝などがが検出され、溝内からはクルミ･モモ･ウメ･オオムギ・コムギ・イネなどの種実が出土している。

七日子遺跡は本遺跡の北約 2kmに位置する。筒粥神事で有名な七日子神社の裏手にあり、平安時代、10 世紀前半の竪穴住居 4 が検出されているほか、道をはさんで東の畑で布目瓦が採集できる。寺院の規模、伽藍配置などは全く不明ではあるが、古代の堂あるいは寺院があるとされ、七日子廃寺として知られている。

図 2 に三ケ所遺跡の位置および周辺遺跡の分布図を示す（番号・位置は山梨市遺跡分布図に準拠）。

No.	遺跡名	種　別	所在地	時　代
90	唐土遺跡	散布地	三ケ所字唐土	古墳・中世
106	新町東遺跡	散布地	三ケ所字新町東	縄文
107	三ケ所遺跡	散布地	三ケ所字寺平	平安・中世
109	東後屋敷遺跡	集落跡	東後屋敷字小屋敷	縄文・奈良・平安
127	原遺跡	散布地	三ケ所字原	古墳
129	上之割八王子遺跡	散布地	上之割字八王子	平安
131	梨木遺跡	散布地	上之割字梨木	平安
171	武田金吾屋敷跡	城館跡	東後屋敷字小屋敷	中世
175	連方屋敷	城館跡	三ケ所字連方	中世

【参考文献】

上野晴朗　1972『甲斐武田氏』新人物往来社
上野晴朗　1983『武田信玄　城と兵法』新人物往来社
上野晴朗　1987『日下部　日下部遺跡調査報告書　付　七日子遺跡　江曽原遺跡』山梨市教育委員会
山梨市教育委員会　2002『山梨市遺跡分布図』
数野雅彦　2005「連方屋敷」『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』山梨市
中山誠二　2005「条里」『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』山梨市
山梨市 2006「清白寺」『山梨市史　文化財・社寺編』
三澤達也　2007「連方屋敷」『山梨考古』106

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

市教委の試掘データをもとに重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行い、測量のための基準杭を打設、国家座標を付けた。遺構確認面を鋤簾により精査し、竪穴、溝などの掘り込みを確認したのち掘り下げ、出土遺物は光波測量機およびノートパソコンによる図化システム（「遺構くん」 アイシン精機製）により３次元データを記録しながら取り上げた。掘りあがった遺構はカメラ搭載のラジコンヘリにより空撮を行い、平面図化を行った。そのほか個別の遺構や、覆土中での礫出土状況などは、ポール先端にカメラをつけた簡易空撮システム（ポール撮影）により空中写真撮影を行い、空撮データに合成した。そのほか記録写真は、一眼デジカメ、一眼レフカメラ（リバーサル・白黒）により適時撮影を行った。

調査区範囲は細長く、周辺に残土置き場を確保できなかったことから、調査区内を南側、北側の２分割調査することとし、２回に分けて表土剥ぎを実施、空撮も２回実施した。調査区は南北方向の道・参道を境に、便宜的に東区・中区・西区の３地点に区分して呼称した。また参道右側で追加調査した池跡は、池地点、西区南東で拡張した地点は、石造物台座が配列していたことから台座地点と仮称した。

竪穴住居はセクション図、覆土中の礫出土状況の平面図、床面の硬化面範囲を光波またはポール撮影で記録したのち、完掘状況の図化用写真としてポール撮影を行った。掘り方掘削後、掘り方平面図のためのポール撮影を行い、断面図を作図した。柱穴程度の掘り方をもつピットについては直径、深さ、土質の観察をし、断面図作成は行っていない。ピット以上の直径をもつ墓坑的な規模の穴は土坑とし、セクション図を作図した。出土遺物については、微細遺物を除き出土位置を記録、遺物番号を付けて取り上げた。№は遺跡全体で遺構内外に関わらず通し番号とし、図化システムデータから台帳を作成、遺構名等の情報を確認できるようにした。

第２節　層序

基本層序はとくに設定していない。また下層の堆積状況確認のための深掘りは行っていない。ただし、西区の４号竪穴、中区の１号掘立、４号掘立68号ピット、２・３号竪穴等、各所で地表面からの堆積状況を断面実測しているので、参照されたい。基本的にはもと水田面で、南方向の緩やかな傾斜面を平坦に造成していることから、全面的に水田の床土面があり、とくに南側には盛り土痕跡が認められる。遺構確認面は褐色粘質土で、小礫が露出するところがある。

第３節　遺構

調査区は、農道、参道で区切られた東西に細長い３ブロックとなっている。ここでは西側を西区、中央の最も面積が広い部分を中区、東端の農道と堰の間を東区と呼称する。

検出された遺構は以下の通りである。

竪穴住居４　　掘立柱建物５　　土坑42　　溝12　　ピット　　池１

西区では農道に沿って２本の溝が東西方向に平行に走り（１・２号溝）、直交するように清白寺参道に沿って３本重複しながら存在する（６～８号溝）。それらの溝は道の側溝と考えられることから、現在の道の前身とみられる。また１・２号溝に切られるようにして斜め方向に３号溝がある。１号溝の中央、溝と重複して１号土坑があり、馬歯が出土したことから馬の墓と考えられる。また１号溝西端では下層から平安時代の４号竪穴が検出されている。西区南東隅からは石列および石造物の台座３基が並んで検出された。現在、調

表１　ピット一覧表

番号	区	径cm	深さcm	備考
1	中区	34	27	暗褐色土
2	中区	41	27	暗褐色土
3	中区	52	31	黒褐色土
4	中区	66	26	黒褐色土　焼土粒
5	中区	58	32	黒褐色土
6	中区	48	20	黒褐色土　土師器片
7	中区	102	59	1号掘立柱穴
8	中区	81	66	1号掘立柱穴
9	中区	82	49	1号掘立柱穴
10	中区	124	57	1号掘立柱穴
11	中区	78	41	2号掘立柱穴
12	中区	96	61	2号掘立柱穴
13	中区	74	47	2号掘立柱穴
14	中区	88	53	2号掘立柱穴
15	中区	87	45	2号掘立柱穴
16	中区	73	41	2号掘立柱穴
17	中区	91	48	2号掘立柱穴
18	中区	84	41	2号掘立柱穴
19	中区	52	37	黒褐色～暗褐色土　19～21号ピットは直線的に配置
20	中区	102	43	黒褐色土
21	中区	86	58	黒褐色土
22	中区	36	22	暗褐色土
23	中区	60	55	黒褐色土　土師器片　柱穴状
24	中区	74	62	黒褐色粘質土
25	中区	102	25	黒褐色土
26	中区	36	42	黒褐色～暗褐色土
27	中区	65	22	黒褐色～暗褐色土
28	中区	44	65	黒褐色土　29号ピットと連結
29	中区	29	35	黒褐色土
30	中区	40	44	黒褐色土
31	中区	70	49	黒褐色土　柱穴状
32	中区	43.5	75	黒褐色土　柱穴状
33	中区	59	41	暗褐色～黒褐色土　柱穴状
34	中区	44	27	黒褐色土　柱穴状
35	中区	38	33	黒褐色土
36	中区	74	41	黒褐色土
37	中区	36	60	黒褐色～暗褐色土　柱穴状
38	中区	61	21	暗褐色土
39	中区	51	20	
40	中区	89	51	5号掘立柱穴　暗褐色土　土師器片
41	中区	91	40	黒褐色土
42	中区	56	32	3号掘立柱穴　暗褐色土
43	中区	71	63	
44	中区	63	41	撹乱か
45	中区	51	27	
46	中区	49	46	
47	中区	55	37	3号掘立柱穴　暗褐色土　焼土粒
48	中区	31	34	
49	中区	61	28	3号掘立柱穴　暗褐色土　土師器片
50	中区	69	31	3号掘立柱穴　暗褐色土
51	中区	70	26	
52	中区	36	30	
53	東区	67	25	3号掘立柱穴　暗褐色土
54	東区	53	39	黒褐色～暗褐色土
55	中区	25	50	黒褐色土
56	西区	48	31	黒褐色土
57	西区	37	28	黒褐色土
58	西区	35	51	黒褐色土
59	西区	35	30	黒褐色土
60	西区	42	19	黒褐色土
61	西区	65	20	黒褐色土
62	中区	79	55	4号掘立柱穴
63	中区	117	48	4号掘立柱穴
64	中区	91	67	4号掘立柱穴
65	中区	101	53	4号掘立柱穴
66	中区	101	124	4号掘立柱穴
67	中区	95	57	4号掘立柱穴
68	中区	102	124	
69	中区	62	55	
70	中区	41	53	
71	中区	43	22	
72	中区	41	27	
73	中区	40	35	
74	中区	50	65	
75	中区	86	68	5号掘立柱穴
76	中区	81	54	5号掘立柱穴
77	中区	92	62	5号掘立柱穴
78	中区	88	44	5号掘立柱穴
79	中区	70	64	5号掘立柱穴
80	中区	74	52	5号掘立柱穴
81	中区	73	46	5号掘立柱穴
82	中区	39	21	5号掘立柱穴
83	中区	65	28	5号掘立柱穴
84	中区	49	31	黒色土
85	中区	63	47	黒色土　柱穴状
86	中区	44	43	黒褐色土
87	中区	28	36	黒褐色土　柱穴状
88	中区	39	60	黒褐色土　柱穴状
89	中区	40	34	暗褐色土　柱穴状
90	中区	52	46	黒色土　柱穴状
91	中区	54	37	黒褐色粘質土　柱穴状
92	中区	33	44	31号土坑内　柱穴状
93	中区	44	65	31号土坑内　柱穴状
94	中区	33	36	33号土坑内　柱穴状
95	中区	52	37	33号土坑内　柱穴状
96	中区	33	59	33号土坑内　柱穴状
97	中区	55	60	33号土坑内　柱穴状
98	中区	32	41	31号土坑内　柱穴状
99	中区	34	45	柱穴状
100	中区	89	67	黒褐色土　柱穴状
101	中区	69	25	
102	中区	54	27	3号掘立柱穴
103	中区	55	23	3号掘立柱穴
104	中区	44	28	3号掘立柱穴
105	中区	45	24	3号掘立柱穴
106	中区	37	37	3号掘立柱穴

表２　遺跡別遺物出土量（g）

	縄文	土師器坏類	土師器甕類	須恵器	土師質土器	中世陶器	近世陶磁器	灰釉陶器	鉄製品	古銭	その他
1竪穴	54	916	3517								
1竪穴床下		22	92								
1竪穴竈		100	1174								
2竪穴		205	1792	16					26		
2竪穴床下		5	18								
2竪穴竈		28	170								
3竪穴		148	240	38					82		
3竪穴竈		18									
4竪穴		34	62					2			30
4竪穴竈		22	12								
遺構外・一括	712	860	752	232	62	92	90		42	6	104
2土			12								
3土			6								
13土		5	26								
18土							189		108		94
20土		18			27		125		44		
21土			4				39		4		
26土		8									
27土		4	10								
29土		2									
30土		88									
32土		6									
33土									21		184
34土											2
36土			13								
38土		1		4							
39土			4			100				23	
43土	49										
1溝	80	171	25	137	9	166			220		
2溝		25	21	3	65		9	68			
3溝		14									
6溝		170	42	6			17			3	
7溝		20	6								
8溝		2									
9溝		100	39	6			17			3	
10溝			10								
12溝		5			9						
3ピ			3								
4ピ		13									
6ピ		3									
10ピ			23								
21ピ		5	4	38							
23ピ		20									
34ピ			12								
36ピ		9									
38ピ	16										
41ピ		2	6								
43ピ	15	5									
44ピ		1									
45ピ			3								
46ピ		2									
48ピ				26							
51ピ			5								
52ピ		3									
59ピ		40									
60ピ	5										
62ピ		7	2								
69ピ		30									
73ピ		3									
74ピ			17								
84ピ				14							
１掘立7ピ		1									
１掘立8ピ			4								
1掘立9ピ		11	17								
1掘立10ピ			7								
2掘立13ピ			6								
2掘立14ピ			14								
2掘立16ピ			26								
3掘立42ピ		8	7								
3掘立47ピ			17								
3掘立49ピ			3								
3掘立50ピ			2								
3掘立53ピ		2	7								
4掘立62ピ		10	4								
4掘立63ピ		14	8								
4掘立64ピ	17	48	15								
4掘立65ピ		19									
4掘立66ピ		15	11								
4掘立67ピ		23	41								
4掘立68ピ		11									
5掘立40ピ		24									
5掘立76ピ		9									
5掘立5土		11	16								
台座地点	3	178	52	20	182	265			30	10	
1池					16		76		506		150
1配石		7	50		2						4
合計	951	3531	8429	540	372	623	562	70	1083	45	568

総重量　16,774

査地点北側に「海涌山清白禅寺」という標柱をはじめ、石灯籠、石仏等を移動してまとめた地点があるが、それらが元々存在した地点にあたる。台座地点の東側、参道脇には、参道脇の水路近くに池があったという話を調査中に地元の方より知らされた。路線予定地内にあたるため試掘したところ、話のとおり石積みで囲んだ池が見つかった。中区では中央付近に竪穴住居が3軒存在し、その周辺に一部竪穴住居と重複するように掘立柱建物が存在した。中区内は全体的に細かな耕作痕が著しく、その中にピット、土坑などが点在した。東区には南北方向の溝2本が平行して存在し、現農道に先行する旧道路側溝と思われる。また用途は不明ながら大形隅丸長方形の土坑が複数重複して存在した。

1号竪穴（第6・7図）

（位置） 中区中央やや東寄り、5号掘立と重複して存在し、壁には掘立の柱穴やそのほか複数のピットとの切り合いにより、やや複雑な形態を呈する。

（形態） 東西3.5 m、南北3.5 mの隅丸方形で、東壁、南東隅寄りに竈がある。主軸方向はE-12°-S。周溝は不明確であるが、壁際には全周するように掘り方としての落ち込みがある。床面には中央付近に硬化面が明瞭に残り、一部貼り床も存在した。つまり竪穴住居構築にあたり、床面中央を掘り残すようにして四周の壁際を幅広に掘削するというタイプの掘り方をもつ。床面までの深さは38cmである。

（覆土） 南北にベルトを残して土層を観察した。暗褐色土を主体とし、壁際には壁の崩落土と思われる黄褐色土が堆積する。覆土中位～下位にはやや大形の礫がドーナッツ状に分布し、ほとんどが床面から浮上しているのが特徴的である。竈周辺にあるものに関しては竈由来の礫を含むものとみられ、一部被熱した礫もみられたが、天井石に相当するような大形礫はみられなかった。円礫状、楕円形状の礫が多く、それらの礫中には磨り面をもつ38のような使用痕のある礫も含まれる。掘立の柱穴に相当する位置に確認面から掘り込まれた撹乱状のピットが床下まで達するように存在する。断面図によれば竪穴住居よりも掘立柱穴が新しいと判断されるが、たまたま柱穴の位置に重覆した撹乱状の穴と考えられ、また他の柱穴と竪穴の切り合い関係を見ると、掘立が古く、竪穴が新しい。

（竈） 東竈で、壁際に1.1 × 0.7 mの楕円形の掘り方をもち、煙道はわずかに東壁に突出する。袖石には南側に1個の礫を直立させ、北側には一部2重にするように3個の礫を直立する。袖石の高さは25cm、幅8cmである。中央奥壁寄りに直立した石に土師器甕胴下半を逆位に被せた支脚が検出された。甕はやや細身の長胴タイプのハケメ甕で、高さ23cm、最大幅15cmを測り、底部中央には直径4 × 5cmの穿孔がある。通常は礫のみ、あるいは土器のみの支脚を見ることが多いが、礫に土器を差し込んだ事例は管見では知らない。また底部に穿孔があるという点も珍しく、実用面以外の精神性に関わる行為のようにも思われる。

（遺物） 床面直上から完形品の土師器坏・皿が4点出土した。床面中央から北側にかけてみられ、3点は正位で、1点は逆位で出土している。逆位出土の1点には、体部外面に墨書「東大」が書かれている。また床面よりやや浮いて甕がまとまって出土している。そのほか覆土中の遺物は本遺跡内の他の住居に比べると多く出土したが、西・北壁寄りからは少なく、竈周辺、南壁寄りに分布の傾向がある。出土量は、土師器類は5821 g出土し、うち坏類1038 g、甕類4783 gと甕類が非常に多い。

（年代） 甲斐型土師器坏・皿の年代観から口縁部が玉縁化する10世紀前半およびその直前段階の9世紀後半代といえる。

2号竪穴（第7・8図）

（位置） 中区中央南壁寄り、調査区外にかかるようにして検出され、拡張して可能な限り掘り広げた。西隣には3号竪穴が並ぶように存在する。

（形態） 調査区外にかかるため全体像は不明であるが、東西3.8 m、南北は現状で2 mで、隅丸方形あるいは長方形と思われる。主軸方向はN-7°-E。壁の高さは40cm。竈は北壁、わずかに東寄りにある。周溝は西壁にのみ存在し、幅20cm、深さ10cmである。掘り方の有無を確認するため薄く床面を剥いだところ、全面的に礫層露出面となり、竈脇と床面に浅いピットが検出されたのみで、大がかりな掘り方地業は行っていな

い。
（覆土）第７図では北側から見た断面図を反転して図示しているが、３層から上は盛り土で、北側の切り土を平にならしている。竪穴覆土は５層以下で、暗褐色土を主とする。礫が床面より浮上して散在しているが、数は多くない。
（竈）小形礫が竈の奥壁に積み重なるようにして並び、一部直立した礫、煤が付着した礫もみられるが、袖石ではない。また天井石はなく、覆土周囲にもそれらしい礫は見当たらなかった。礫は地山の礫が露出したものとも思われる。竈の掘り方は浅い皿状で一部被熱し、地山の小礫が露出する。南北 1.5 m、東西 1.1 m の楕円形で、煙道は壁から 40cm余り突出し、斜めに北側に立ちあがる。支脚石はないが、燃焼部中央がわずかに深くくぼんでいる。
（遺物）覆土中位から下位にかけて少量分布する。破片化した甕類が多い。土師器類は計 2218 g 出土し、うち坏類は 238 g、甕類は 1980 g と甕類が大半を占める。
（年代）9 世紀末～ 10 世紀第１四半期。
３号竪穴（第７～９図）
（位置）中区中央南壁寄りにあり、一部調査区外にのびていたため、拡張して竪穴の全体を明らかにした。東隣には２号竪穴がある。
（形態）竪穴本体の規模は、東西 3.1 m、南北 3.2 ～ 3.4 mの隅丸方形で、東壁が西壁に比べやや長い。主軸方向は N-5° -E。床面までの深さは 30cmである。竈は北壁ほぼ中央に位置する北竈である。周溝は北西、南西、南東隅に部分的にあり、全周していない。床の硬化面は中央付近に 2 m × 1.6 mの範囲で認められた。床面を剥いで掘り方を探ったところ、南西･南東隅が浅い落ち込みをもち、それ以外ではわずかに全体が下がり、北東を中心に礫層面が露出した。
（覆土）２号竪穴で見られた暗褐色土は上層の１層にあり、下層では壁際を中心に、にぶい黄褐色土が厚く堆積していた。礫は少なく、竈周辺などに小礫を中心に散在する。
（竈）竈は１ × 0.8 mのごく浅い燃焼部に、１mの細長い煙道をもち、全体では南北 1.8 mとなる。確実な袖石はないものの、袖石の一部に用いたと思われる礫が向かって左側にあり、被熱し、煤が付着していた。そのほかにも小礫が袖石付近に数点存在するが、天井石をはじめ、袖石に用いられた礫は竪穴内に存在しない。
（遺物）竈南側、床面中央寄りにごくわずかに散在し、非常に少ないが、北西隅近くから鉄製鎌がほぼ完形に近い状態で出土した点が注目される。出土量は土師器類 406 g、須恵器 38 g である。
（年代）9 世紀第４四半期。
４号竪穴（第９・10 図）
（位置）西区西端、調査区北壁にかかるようにして存在し、竈付近は拡張して完掘したが、竪穴本体は半分未満の調査にとどまった。１号溝が重複したため、覆土のほとんどを失っている。
（形態）東西４m、南北は現状で 2.4 mで、隅丸長方形かと考えられる竪穴住居。東壁に竈をもつ。主軸方向は E-12° -S。周溝は南壁中央付近に部分的に認められるが、そのほかにはない。ただし壁際に幅 40 ～ 80 cmの広い周溝状を呈した掘り方が巡り、その内側には床面の硬化面が広く認められ、焼土分布、被熱面も存在する。竈も周溝状の掘り方内に構築されている。
（覆土）北壁での地表以下の土層断面を示したのが第９図断面である。竪穴覆土は４層以下で、黒褐色土、褐色土、黒褐色土からなり、ローム面を床面とする。
（竈）東壁の全体を明らかにできなかったため、竈の位置が東壁のどのあたりにあたるのか不明であるが、やや南寄りと考えられる。燃焼部の掘り方は明瞭ではないが、周溝状に掘られた掘り方内に収まる。石組竈で、袖石は２個づつの円礫、角礫を 55cmの間隔で立て、中央よりも南寄りに自然石を用いた支脚石を立てている。竈の幅が比較的広く、支脚石が南寄りに立つことから、南北に２口の穴を開けた２連式の竈の可能性が考えられる。天井石はない。また煙道はなく、壁外への突出した掘り方は認められない。

（遺物）遺物はきわめて少ない。
（年代）9世紀第4四半期。

1号掘立（第11図）
中区中央、南壁際に柱穴4本が直線的に並ぶ。壁面にかかるように検出されたため、拡張して柱穴列1列分を明らかにした。柱穴列の延長線上には関連する柱穴がないため、東西方向は4本（3間）で完結することがわかる。おそらく農道にかかるようにして南北に3本（2間）のび、東西に長い2×3間の長方形の配置を示すものと推測される。柱穴は両端の2本（7･10号ピット）の径が約100～125cmと大きく、中2本（8・9号ピット）が約85cmとやや小さい。柱穴の平面形は隅丸方形～円形で、主軸方向はE-7°-Sである。柱穴セクションによれば覆土は黒褐色土、褐色土などで、柱痕は確認できない。柱穴の深さは50～60cm、柱穴間隔は心心1.7～1.85mで、7号ピットと10号ピット間の長さは心心5.2mを測る。
2号掘立（第11図）
中区中央やや西寄りに存在する2間×2間の方形配置を呈す柱穴列。中央に10号土坑が重複し、中央北寄りには中世の火葬骨を伴う1号配石が重複する。個々の柱穴間隔は1.5～1.6m、柱穴平面形は隅丸方形～不整円形で、直径75～95cmである。建物としては東西3.2～3.4m、南北3mで、わずかに東西方向が長い。主軸方向はN-4°-Eと、1号掘立とほぼ同じ方向を示す。柱穴セクションによれば、11・12・13号ピットには中心付近に幅25cm程度の黒褐色土の柱痕が通るほか、12・14・15号ピットには柱の当たりを示す小ピットが底面に認められる。柱穴の深さは35～60cmで、おおむね50cm程度の深さを示す。
3号掘立（第12図）
中区中央、3号竪穴脇に存在する。東西2間、南北3間の方形建物で、主軸方向はN-15°-E。柱穴はやや貧弱で、直径35～60cm。平面形は円形で、西列は3号竪穴に切られ、柱穴1本を欠く。柱穴の深さは20～35cmと浅く、柱痕は確認できなかった。柱穴間隔は東西柱穴間で1～2.1m、南北柱穴間で1.5～1.6m、全体では東西4.3～4.35m、南北4.4～4.5mを測る。
4号掘立（第13図）
中区西寄り、北壁調査区境にかかるようにして検出。東西3本（2間）、南北3本を確認し、さらに北側にのびることが推測されたため、2間×3間の南北に長い長方形建物と考えられ、主軸方向はN-17°-E。南北4.2m以上、東西4.3～4.4mを測る。柱穴間隔は2～2.1m、柱穴の平面形は円形～一部楕円形、深さは50～70cmで、柱穴セクションによれば64～68号ピットには中心部に幅30～50cmの黒褐色土、暗褐色土が入り込んだ柱痕が認められた。また63号ピットには礎板石とみられる30cm大の平石が柱穴底面に据えられていたほか、64号ピットには柱の当たり痕とみられる小ピットが底面中央に確認された。
5号掘立（第14図）
中区中央、1号竪穴と重複して確認された。3間×3間の方形建物で、主軸方向はN-9°-E。東西5～5.3m、南北5.2mを測る。当初、1号竪穴を調査した時点では、掘立との重複について確認できなかったため、いくつかの柱穴を土坑として調査した。その後、盛り土の反転後に北側を調査した結果、柱穴列が連続することがわかり、掘立柱建物と認定、改めて調査した。柱穴は西側南北列が明瞭に検出できたが、それ以外はややわかりにくい。また南側東西列は1号竪穴に切られ、とくに82号ピットは撹乱状の落ち込みと重なり、わずかに柱穴の痕跡が掘り方面に確認できた。柱穴間隔は1.7～2m、柱穴の深さは55～70cmで、柱穴セクションによれば、75号ピットには中心に幅30cmの柱痕が確認できた。また5号土坑、40号ピットでは柱の当たり痕が確認されている。

1号土坑（第15図）
西区中央、1号溝と切り合うようにして存在する。東西2m、南北1.3mの隅丸長方形の土坑で、深さ65

cm。断面は箱状。主軸方向はE-20°-S。覆土は黄褐色土で、直ちに埋め戻しが行われたらしく、確認段階では周囲の土との区別が難しい状況であった。周囲東端、壁に貼りつくようにして馬歯の顎骨が出土した。歯の遺存状況は良好で、埋葬姿勢をそのまま留めるものとみられる。南向きに前歯を向けることから、東頭位南向きに頭を曲げて納めた馬の埋葬墓と考えられる。ただし1頭分を納めるにはやや小さい感がある。また骨は上下歯、下顎のほかには全く遺存していなかった。詳細については第4章第4節植月報告を参照。伴出遺物がなく時期は不明ではあるが、1号溝に切られていることが第29図D-D'の断面観察によりわかる。調査の過程でも、溝の確認後に土坑の存在が判明している。溝とほぼ同一方向に土坑の向きを設定していることから、周辺地割を意識して方向を決めていることが推測でき、清白寺の寺域へ埋葬したものといえる。一応溝よりも前、中世以降の所産と考えておくが、細かい時期は不明である。

2号土坑（第16図）

中区東側に位置し、84号ピットと重複する。直径60cmの円形で、深さは19cm。覆土は黒褐色土で、断面は浅いタライ状。

3号土坑（第16図）

中区東側に位置する。直径1.15 mの円形で、深さ21cm。覆土は黒褐色土を主とし、断面は浅い皿状。

4号土坑（第16図）

中区東側に位置する。直径84 × 78cmの円形で、覆土は暗褐色土を主とする。深さ25cmで、断面形はボール状。

6号土坑（第16図）

中区中央、1号竪穴南東に位置し、7号土坑南側に隣接する。直径78 × 72cmの円形土坑で、深さ24cm。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土を主とする。断面形はボール状。

7号土坑（第16図）

中区中央、17号土坑南東に重複する。重機による表土剥ぎの際に焼骨片の集中箇所が見つかり、周囲に炭化物を多く含む焼土分布範囲が認められた。土坑の存在を想定し、東西にベルトを残して掘り下げたところ、断面に直径80cmの土坑状を呈した焼土層の落ち込みが認められた（2層）。ただ暗褐色土中に存在するため、遺構としては土坑自体の形を捉えることができなかった。焼土範囲は南北1.1 m、東西0.9 mで、中心部分に直径20 × 10cmの範囲で焼骨集中部分がある。焼骨はその後の分析で人骨と判断され、報告については第4章第3節に譲る。

8号土坑（第17図）

中区中央、3号竪穴北東に位置する。1.1 × 0.8 mの楕円形の土坑で、深さ20cm。断面は桶状。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とする。

9号土坑（第17図）

中区中央西寄り、2号掘立北側に位置し、2号掘立23号ピットと重複する。いくつかのピットの集合体で、全体では1.8 × 1.4 mの不整楕円形となっている。覆土は黒褐色土を主とし、深さは18 ～ 32cmを測る。

10号土坑（第17図）

2号掘立内に位置するいくつかのピットの集合体。全体では0.9 × 3 mの東西に長い不整形を呈し、深さは10 ～ 22cmで、覆土は黒褐色土である。

11・12号土坑（第18図）

中区中央東側、南壁寄りに位置する。12号土坑は調査区外にのび、11号土坑が西側に重複する。ともに不整楕円形で、全体形の大きさは2.8 × 1.6 m、深さは64cmと深い。遺構ではなく風倒木痕などの自然の落ち込みか。

13号土坑（第18図）

中区西側、4号掘立南側に位置する。0.9 × 1.4 mの不整楕円形で、深さは45cm。

14 号土坑（第 18 図）

中区西側、4 号掘立南側に位置する。1 × 1.4 mの楕円形で、深さは 20cm。断面は浅い桶状。覆土は暗褐色土を主とする。

15 号土坑（第 19 図）

1.5 × 1.4 m、深さ 0.75 mの不整円形土坑を中心に東西にいくつかの掘り方が連結したピットの集合体で、全体では東西 3.3 mを測る。北側には 36 号土坑が重複する。

17 号土坑（第 16 図）

中区中央、1 号竪穴南東隅に重複し、7 号土坑とした焼骨を含む土坑墓が南側上層に接する。直径 1.2 × 1.6 mの不整円形で、深さ 40cm。断面は皿状。覆土中に礫を多く含む。

18 号土坑（第 20 図）

東区北壁にかかるようにして存在する。東西 5 m、南北は調査区外にのびるため現状 2 mで、隅丸長方形を呈し、主軸方向は E-6° -W。表土下層から掘り込みがあり、鈍い黄褐色土･灰黄褐色土を覆土とし、深さは 0.5 mを測る。壁際に周溝があり、幅 30 ～ 65cm、深さ 10cmの溝が西側の一部を除き全周する。床面は軟質で、硬化面はない。覆土中より戦時中以前に遡るのではないかと思われる鉄製品などが出土している。東区内にある他の類似土坑と関連するものと思われる。

19 号土坑（第 20 図）

東区にあり、20 号土坑と直交するように重複する。南北 2 m、東西 4.3 mの隅丸長方形で、主軸方向は E-20° -W。近接する 18・21 号土坑と同じ向き、ほぼ同じ大きさを示す。深さは 40 ～ 45cmで、底はほぼ平らであるがやや東傾斜を示し、東壁の一部は袋状にえぐれている。覆土は周辺類似土坑と同じで、しまりのない鈍い黄褐色土などを主とする。

20 号土坑（第 20 図）

東区、19 号土坑と直交するように重複し、19 号土坑を切る。東西 2.3 m、南北 5 mで、主軸方向は N-25° -E。ゆがんだ隅丸長方形で、深さは 0.5 ～ 0.6 m。底面はほぼ平らであるが、わずかに中央が高く、壁方向に対して傾斜が見られる。

21 号土坑（第 20 図）

東区、20 号土坑に連結するように接する。東西 4 m、南北 1.7 mの隅丸長方形で、主軸方向は E-17° -W。深さは 70 ～ 90cmで、底面は東に向かって傾斜をもち、東壁は袋状にえぐれている。

22 号土坑（第 21 図）

中区東側、調査区北壁際に存在する。直径 1 × 1.1 m、深さ 20cmの円形土坑で、断面形はたらい状。覆土は暗褐色土。

23 号土坑（第 21 図）

中区東側、調査区北壁際にあり、ほぼ同規模の 23 号ピットと重複する。0.9 × 1.2 mの楕円形で、断面は箱状。深さは 43cm。セクション図を見ると 23 号ピットに切られる。覆土は暗褐色土を主とし、礫を含む。

24 号土坑（第 21 図）

中区東側、調査区北壁寄りにある。0.8 × 1.3 mの楕円形～長方形土坑で、深さ 35cm、断面形は箱状。覆土は暗褐色土である。

25 号土坑（第 21 図）

中区東側、24 号土坑南にある。直径 1.3 mの円形で深さは 50cm。断面はわずかに袋状を呈し、底面は平たい。覆土は暗褐色土・鈍い黄褐色土を主とする。

26 号土坑（第 22 図）

西区東側、調査区北壁にかかるようにして検出。北側を拡張し、おおよその形を把握した。礫を覆土中に多量に含む集石土坑で、1.4 × 1.8 mの楕円形と思われる。深さは 40cmで、断面形はボール状。覆土は暗褐

色土を主とする。焼土・炭化物等はなく、礫も被熱を受けた形跡が認められなかった。遺物がなく、性格については明らかにできなかったが集石炉ではなく、墓に関わる土坑ではないかとみられる。

27 号土坑（第 22 図）

中区西側にある。1.1 × 1.7 mの不整形であるが、2 基の土坑の重複と見られ、北側の土坑は 0.8 × 1.1 mの楕円形土坑で、深さ 28cm。覆土は暗褐色土を主とする。

28 号土坑（第 23 図）

中区西側、4 号掘立東にあり、28 ～ 30 号土坑が南北に連なる。28 号土坑は調査区北壁寄りにあり、0.8 × 1 mの楕円形土坑で、深さ 20cm。底面は凹凸があり平坦ではない。覆土は暗褐色土を主とする。

29 号土坑（第 23 図）

中区西側、4 号掘立東、28 号土坑南に位置する。いくつかのピットが重複し、複雑な形態となっている。2.5 × 1.3 mの不整楕円形で、深さ 35cm、セクションによれば南隣の 30 号土坑を切るらしい。断面皿状を呈する。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主とする。

30 号土坑（第 23 図）

中区西側、4 号掘立東、29 号土坑南に位置する。小ピットが多数重複し、複雑な形態をなす。1.7 × 1.3 mの楕円形で、深さ 30cmを測る。断面形は凹凸があり、平らではない。

31 号土坑（第 24 図）

中区中央、32 ～ 35 号土坑北側にあり、調査区北壁に潜るようにして検出。直径 0.9 mの円形～楕円形土坑と思われる。深さ 5cmと浅く、ピットが重複する。

32 ～ 35 号土坑（第 24 図）

中区西側、4 号掘立東に位置する。大形の不整方形で、竪穴状ではあるが、住居ではない。当初 4 つの土坑のまとまりとして認識し、掘り下げたが、結果的にそれぞれが連結し、ひとつの大きな落ち込みとなった。ここでは当初の土坑番号をそのまま生かすこととする。全体では東西 3.6 m、南北 4 mで、深さ 10 ～ 25cm。覆土は黒褐色土を主とする。遺物は 33 号土坑とした南西隅のあたりから土製粘土塊、鉄製刀子が出土している。

36 号土坑（第 19 図）

中区西端に位置し、15 号土坑と重複する。1.7 × 1.1 mの不整楕円形で、深さは 25cm。

37 号土坑（第 24 図）

西区東南の台座地点で検出。0.5 × 0.9 mの長方形の土坑で、深さ 0.6 m。覆土は黒褐色土・褐色土を主とし、断面形は箱状で、現代の攪乱。

38 号土坑（第 24 図）

西区東南の台座地点にある。1.1 × 0.95 mの楕円形で、上面に配石があり、40cm大の平たい円礫からなる大形礫 4 個を中心とした礫が複数載せられた状況で検出され、覆土は暗褐色土を主とする。断面形は皿状で、深さ 30cm。底面は平らではない。配石墓の一種か。

39 号土坑（第 25 図）

西区東南隅、石列で囲まれた台座地点に位置する。70 × 65cmの隅丸方形～円形土坑で、深さ 52cm。２つ東西に並んだ台座を取り上げて下層を調査したところ、第 39 図 4 の台座にかかるようにして検出された。覆土は礫混じりの鈍い黄褐色土を主とする。底よりやや浮いて古銭が出土した。土坑南壁近くから 12cm浮いて 5 枚のまとまりがあり、その脇に 18cm浮いて 1 枚が出土している。古銭は計 6 枚あり、いわゆる六文銭とみられ、本土坑が墓であったことが推測される。ただし骨は出土していない。

40 号土坑（第 25 図）

中区中央、１号竪穴、5 号掘立の東側にある。0.6 × 1.3 mの長楕円形土坑で、深さ 55cm。断面箱状で、覆土は黒褐色土を主とする。底面には礫層面が露出する。

41 号土坑（第 25 図）

中区中央、5 号掘立北側、調査区北壁寄りにある。1.2 × 1 mの楕円形で、深さ 20cm。断面皿状で、覆土は暗褐色土を主とする。

42 号土坑（第 25 図）

中区中央、5 号掘立北西にある。90 × 70cmの楕円形で、深さ 20cm。断面皿状で、覆土は暗褐色土を主とする。

43 号土坑（第 25 図）

中区東側、調査区北壁にかかるようにして検出された。1.3 × 1.1 m、深さ約 1 m。覆土中より諸磯式期かと思われる同一個体の縄文施文土器片 2 点が出土している。縄文前期の土坑の可能性が高いが、土器片は混入とも考えられる。

台座地点（第 26 図）

西区南東隅にあり、清白寺参道の向かって左側にあたる。調査区南東隅から、参道に平行する大形礫を直線的に並べた南北方向の石列が検出されたため、参道脇ぎりぎりまで拡張したところ、参道と直交する現農道に平行するように東西方向の石列が確認され、先の石列と直角にＬ字状を呈することがわかった。石列はさらに東側、参道下へ続いていることが推測されたが、それ以上の拡張は断念した。石列の長さは東西 2.5 m、南北 3.4 mを測る。東西の石列に平行するように、石造物の台座が 3 点、東西方向に並んで出土した。第 39 図の 3 ～ 5 で、3 と 4 の間隔は 1.3 mあり、検出当初は礎石ではないかとして、参道の山門に関わるものかと考えたが、石造物の台座とわかり、本地点を遺構名としては適当ではないが「台座地点」と呼称することとした。上層からは直径 5 ～ 10cm大の小礫が南側を中心に広がり、下層面にも礫層面が存在するが、断面観察によれば間層をはさむことから、礫による 2 つの整地面があることがわかる。遺物は礫中に混じるようにして土師質土器片、鉄製品、古銭などが出土している。現在、調査地点北側参道にある清白寺標柱の両脇に、石造物が 2007 年秋にまとめられて安置されているが、それらが本来存在したのがこの台座地点であったと思われる。移動にあたっては台座を残したまま石造物のみを移動したらしい。江戸時代の観音像をはじめとする複数の石造物があり、どの石造物と台座が対応するのかわからなくなっている。この台座地点は参道と東西の道が交差する辻にあたり、清白寺への入口に石造物を配置したものと思われる。台座下層からは、台座に直接伴うものではないが土坑墓とみられる 39 号土坑が検出され、そのほか 38 号土坑も存在する。寺域内に墓地が作られたとみられるが、寺の正面入り口にあたるこのような場所も墓地として土地利用されていたことを示す事例である。

なお移設後にまとめられた石造物記年銘は次の通り。

向かって左側　念仏講塔（A）－嘉永元年（1848）
　　六地蔵 2（B ・ C）－ Bは享保 16 年（1731）
　　六地蔵石幢（D）－元禄 3 年（1690）
　　石仏 2（E･F）
向かって右側　「海涌山清白禅寺」標柱
　　六地蔵石幢－元禄 3 年か
　　六地蔵－嘉永 7 年（1854）

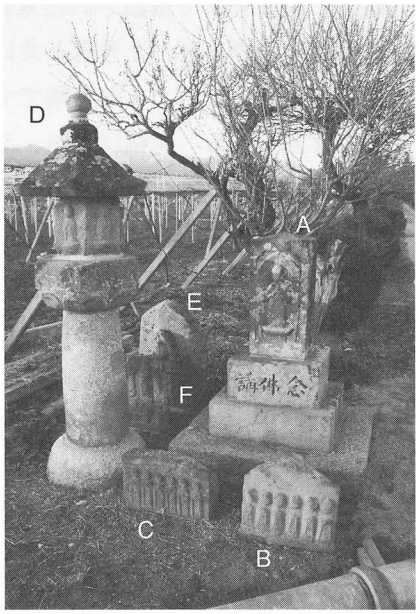


写真 2　参道左脇の石造物群

検出された台座 3 点は、おそらく左側の石仏 2 体（E・F）および六地蔵（B・C）のうちいずれか 3 つのものであろうと思われる。

1 号池（第 27 図）

中区と西区の間、参道の向かって右側にある。もと清白寺標柱があった場所の北側に隣接する。参道脇に沿って流れる側溝の泥を溜めた池が 30 年以上前に存在したという話を地元の方より伺い、試掘溝を入れた

ところ、石積みが検出され、池に伴うものであることがわかった。標柱の台座の直下にあたるため、完掘することはできなかったが、東西2.4 m以上、南北3 mの長方形であることがわかった。西・北の石積みは自然石を落とし積み風に2～3段積み上げたもので、南については石積みの状況は不明稜であった。また東については調査区内に石積みはなく、側溝の側壁にまで広がる可能性がある。深さは0.8 m、底は平らである。覆土は鈍い黄褐色粘土と砂層の互層を主とし、遺物はほとんど伴っていない。

1号配石（第27図）

中区中央やや西側、2号掘立の上層に位置する。重機による表土剥ぎの際、掘立の確認面よりも25cmほど上面に焼骨を伴う炭化層が検出され、周囲には15cm大の自然礫が10個ほどまとまり、配石を形成していた。その中心部分に炭化層があり、周囲には径0.4 × 0.8mの範囲で炭化物・焼土粒・焼骨を伴う層があって、その下層の一部に焼土層がみられた。この配石を中心とした火葬施設と考えられる。焼骨は人骨で、詳細については第4章第2節の分析に譲る。1号配石の35 m東に位置する7号土坑でも、やや多くの焼骨が出土しているが、この一帯が清白寺南側にあたり、寺域内と考えられることから、火葬地として利用されていたことが考えられる。

1号溝（第28図）

西区で検出された東西方向の直線的な溝で、38 mを確認し、東端が台座地点の石列に切られるが台座列付近に1号溝の続きらしい溝があり、さらに中区西端に南壁際に落ち込みがあることから、1号溝が直線的に伸びているものと思われる。主軸方向はE-25°-S。幅0.9～1.9 m、深さ30cmで、覆土中に礫を多く含む。溝中央部と西側で断続的に溝が重複している。南側にある2号溝とほぼ平行し、両者は旧道路の側溝と思われる。溝の間隔は1.3～1.8 mを測る。遺物には土師質土器や中世陶器があり、中世後期、15・16世紀の溝と考えておきたい。溝の方向は、この地域一帯にみられる条里地割の東西方向と合致するものであり、連方屋敷を含めたこの付近の地割およびその成立年代を考える上で参考事例となる。

2号溝（第28図）

西区、南壁ぎわで確認された東西方向の直線的な溝で、27 mを確認した。主軸方向はE-19°-Sで、1号溝とほぼ同じであり、1号溝と共に旧道路側溝をなすと思われる。ただ覆土の状況は1号溝と異なり、礫があまり入っていない。また西端ですぼまる傾向にあることから、両者で一対ではなく、時期差のある溝の重複とも考えられる。溝幅は1 m、深さ0.3 m。

3号溝（第28図）

西区、中央付近にあり、1・2号溝に切られる直線的な溝で、約8 mを確認した。主軸方向はN-12°-W。この溝は他の条里地割の方向の溝とは異なり、斜め方向に南流している。幅1.1～1.5 m、深さ20cm。1・2号溝よりも古いことから、現在、付近に見られる地割の成立以前の土地区画のあり方を探る意味で示唆的である。

4号溝（第31図）

東区、農道脇にあり、南北に10.5 m、直線的に続く。主軸方向はN-19°-Eで、現農道とほぼ同じである。東側に5号溝が平行して走る。両者の間隔は約2.5 mで、2本平行することから道の側溝と見られる。溝は幅30～50 m、深さ8cmで、北側では20号土坑付近で消失する。土坑群の存在によって、その先の状況がわからない。2つの溝をつなぐように直交方向の細い溝が溝間に2本存在する。溝間には硬化した面はない。

5号溝（第31図）

東区、4号溝東にあり、南北方向に9.5 m、直線的に続く。主軸方向はN-15°-Eで4号溝とほぼ同じである。溝は幅70～80 m、深さ12cm。21号土坑手前で消失している。

6号溝（第28図）

西区、参道西側の3本の南北溝のうち、東側の溝。長さ10.5 m、幅0.6～1.5 m、深さ20cm。南端を1号溝に切られる。主軸方向はN-27°-E。1号溝とは直角方向に交わる。

7号溝（第28図）

西区、参道西側の3本の南北溝のうち、中央の溝。長さ9.5 m、幅0.5 ～ 0.8 m、深さ10cm。1・8号溝に南端を切られる。主軸方向はN-20°-E。

8号溝（第28図）

西区、参道西側の3本平行した南北溝のうちの最も西側にある直線溝。長さ9.5 m以上、幅0.4 ～ 0.7 m、深さ5cmと浅い。隣接する7号溝と南端が重複し、掘り方としては7号溝を切る。また南端が1号溝に切られる。主軸方向はN-20°-E。

9号溝（第30図）

中区西端の東西方向の直線溝で、調査区西壁にもぐるようにして6.5 m検出された。幅1.3 m以上、深さはセクションによれば70cm、主軸方向はN-20°-E。西区東端で検出された6 ～ 8号溝と、清白寺参道をはさんで対になると思われ、参道に関わる側溝と見られる。

10号溝（第30図）

中区中央、5号掘立北側にあり、11号溝と平行するように南北方向に4 m検出した。主軸方向はN-17°-Eで、条里に関わる南北方向の他の溝とも方向が類似する。11号溝との間隔は0.3 m。5号掘立の北辺柱穴列あたりで消失する。溝幅は0.3 m、深さは11cmで、溝内には小ピットが重複する。

11号溝（第30図）

中区中央、5号掘立北側にあり、10号溝と平行するように南北方向に4.5 m検出した。10号溝と同じく5号掘立北辺柱穴列あたりで消失する。主軸方向はN-17°-E。溝幅は0.3 ～ 0.5 m、深さ10cmで、溝内には小ピットが重複する。10・11号溝は2本平行することから道の側溝とみなしておく。

12号溝（第31図）

中区東端、調査区東壁にかかるようにして検出。17 mを確認した。農道下へ潜るため、溝幅は不明。幅1.2 m以上、深さ16cm。主軸方向はN-17°-E。東区西端にも同様の落ち込みが存在し、本溝と合わせて、現農道に先行する旧道路側溝と考えておきたい。

第4節　遺物

1号竪穴（第32 ～ 35図）

1 ～ 11は甲斐型坏。12 ～ 20は甲斐型皿。21は仏鉢形土器。22･23は小形ハケメ甕。24 ～ 33はハケメ甕。34はハケメ鉢。35はロクロ甕か。36は須恵器蓋。37は須恵器甕。38 ～ 40は石器で、38は磨り面をもつ礫、39は凹み石、40は支脚石。

1・2・12・13は床面に正位あるいは逆位で出土した土器類で、いずれも完形である。1は完形の坏で、玉縁口縁が発達しつつあり、体部は丸い。2は玉縁の発達が弱く、体部は直線的である。体部外面正位で1ヶ所、「東大」という墨書が見られる。県内では大原遺跡をはじめ、いくつかの遺跡で同名の墨書土器が出土しており、時期的にも同じ頃の所産といえる。意味合いについては不明といわざるを得ないが、達筆な筆運びという印象を受ける。第5章3節にて再検討したい。3は玉縁化がほとんど見られない坏。4は玉縁化が発達した段階の坏。7は甲斐型黒色土器で、口径は通常よりもやや大きい。8は口縁部が外反屈折する甲斐型坏。蓋受であろうか。12は内面にらせん渦巻暗文をもつ皿で、体部外面には坏と同じく斜位の手持ちヘラ削りをもつ。手持ちヘラ削り例は本竪穴ではこの1点のみである。13・14も12とほぼ同形の皿であるが、体部外面下半は回転ヘラ削りとする。ともに内面にはらせん渦巻暗文がある。15・16にもかすかではあるがらせん渦巻暗文の一部が見え、皿はほぼ同一時期の資料でのまとまりをもっている。18はやや新しい、後出的な皿。21は内面黒色の仏鉢形鉢で、口縁部は内湾し、口径約20cmと大形で、底部は丸底かと思われる。底部がないため高さは不明ではあるが、約11cm程度と推測される。外面には回転ナデ上に横位のヘラナデ

を丹念に行い、内面は横位ヘラナデののち体部下半をヘラ削り（ヘラナデ）する。同一個体がやや多く出土している。ハケメ甕の特徴としては、口縁部が肥厚化しつつある段階といえ、24では口縁部が胴部とほぼ同じ厚みなのに対し、26～29では段面に図示したように、外面から粘土板を貼りつけて2重とした肥厚口縁である。ただしまだ極端な肥厚口縁に至ってはいない。32は竈内、支脚石に被さっていたハケメ甕胴下半で、胴径は15cm。通常の甕に比べると細身である。内面の輪積み痕が顕著なのも特徴的で、幅約3cmの粘土帯を8段積み上げ、横位のハケメののち指頭で整形している。底部には直径4×5cmの大きな孔が開けられている。34は鉢形甕で、この器種は普遍的に出土するものではなく、古代山梨郡を主とした盆地東側を中心として分布が限定的である。用途も定かではなく、特殊ではなかったかと考えられる。35は小破片のため全体像を推測することが難しいが、甕ではなく鉢形になるかとも思われる。38は何らかの研磨作業に用いたと思われる台石で、表裏面にはかすかに同一方向の使用痕が複数認められる。39は図面にすると縄文時代の凹み石のようであるが、縄文のそれとは凹みの状況が異なり、この竪穴に伴う平安時代の叩き石的な用途に用いた石器と考えておく。中世にかけてこうした石器はときどき散見される。40は自然石であるが、竈支脚石として用いられた棒状の礫で、被熱により赤変し、割れが入っている。

2号竪穴（第36図）

1～3は土師器甲斐型坏。4～11はハケメ甕。12・13は鉄製品。

1～3の坏は口縁部が玉縁化する直前の形態である。4～9のハケメ甕はいずれも口縁部が薄く、2重貼り付けをしていない。1号竪穴よりも古い甕の様相を示している。12は不明鉄製品であるが、鉄鏃あるいは刀子かと思われる。13は刀子で、使用、研磨の繰り返しで刃部が短くなってしまったものと思われる。先端をわずかに欠くものの、ほぼ完存する。

3号竪穴（第37図）

1・2は甲斐型土師器坏。3は小形ハケメ甕。4はハケメ甕底部。5は須恵器甕。6は鉄製鎌。

1・2は口縁部が直線的で、内面に放射状暗文をもつ。1・2号竪穴よりもより古い様相を呈す。6は長さ15.5cm、幅1.8～3.4cmの鎌で、先端をわずかに欠く。基部に折り返しがあり、約1cmの垂直な立ち上がりとなる。鎌の出土事例は、そう多いものではない。。

4号竪穴（第37図）

1・2は甲斐型土師器坏。3はハケメ甕。4は支脚石。

1は3号竪穴の土師器坏と同じく、内面に放射状暗文をもつもので、時期も同じであろう。4は竈支脚石に用いられた円礫で、側縁に敲打痕が残る。高さ15cm、幅11cmとやや小形である。

4号掘立（第37図）

1～3は土師器坏。1は63号ピット出土。口縁部が直線的で薄い。2は62号ピット出土。底径が大きく、回転糸切痕をもつ。ともに体部下半の削り痕が不明瞭で、甲斐型坏ではなく、須恵器系の坏かもしれない。3は64号ピット出土で、内面に放射状暗文をもつ甲斐型坏である。

5号掘立（第37図）

1・2は土師器甲斐型坏。ともに内面に放射状暗文があり、口縁部形態は類似する。1は76号ピット出土。2は40号ピット出土。底径がやや大きく、体部が直線的に開くもので、本遺跡の土師器の中ではより古手である。

土坑（第38図）

18号土坑1は染付碗。18世紀代か。20号土坑1は直径6～7cmの環状鉄製品。用途は不明。21号土坑1は長さ3cmの角釘。30号土坑1は甲斐型土師器坏で、内面にかすかな放射状暗文がある。33号土坑1・2は焼成粘土塊。3は長さ7.6cmの鉄製刀子。39号土坑1は土師質鉢で、すり鉢（こね鉢）か。2～7は古銭で、2～6が錆ついてひとまとまりになっていた一群であり、7は1枚のみ離れて出土している。2～6の重なり方は写真2のとおりで、2の皇宋通寶を最上とすると、2→6の順に下に向かって重なる。銭銘は上、下、下、

下、下と、文字側を揃えたかのように重なっていた。計6枚あることから墓坑に埋納された六文銭であろう。出土位置が2つに分かれていたのは、右手、左手にそれぞれ握らせたものであろうか。ちなみに2の皇宋通寶は北宋(1038年)、3の洪武通寶(背福)は福州(1368年)、4の洪武通寶(背一銭)は明の洪武元年(1368年)、5の元豊通寶は北宋(1078年)、6は銭名不明、7の永楽通寶は中世末～近世初頭である。いわゆる渡来銭を主とし、寛永通寶以降の銭種を含まないことから、中世末の資料とみてよい。台座地点出土の1・2は銘が読み取りにくくなっているが、ともに寛永通寶。6・7は不明鉄製品。

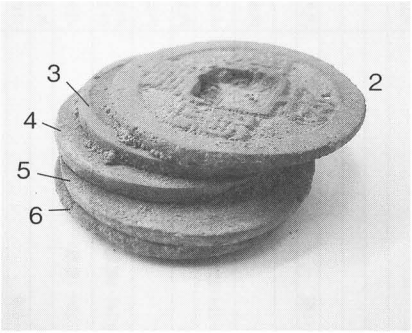


写真3　39号土坑古銭

表３　土器類観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調（外/内）	胎土(量A多～C少，鉱物・岩石名)	残存率	焼成	注記（カッコ内は同一個体）	備　考
32	1竪	1	土師	坏	平安	12.0/4.7/4.0	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/糸切り・削り	橙/鈍い黄橙	C　赤・白	完形	良	339	床面直上
32	1竪	2	土師	坏	平安	12.2/4.6/4.2	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/削り	明赤褐	C　赤・長・石	完形	良	338	胴部外面墨書「東大」　口縁一部内外黒変（黒斑）
32	1竪	3	土師	坏	平安	(11.7)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	橙	C　赤・雲微	30	良	193・219	内面使用痕的な傷
32	1竪	4	土師	坏	平安	(11.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐	C　赤・長	10	良	190	内面縁辺部磨耗（破片を篦状に使用か）
32	1竪	5	土師	坏	平安	(12.0)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	橙	C　赤・長	5	良	1竪	小破片
32	1竪	6	土師	坏	平安	(13.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐/赤褐	C　赤・雲微	5	良	1竪	小破片
32	1竪	7	土師	黒色坏	平安	(16.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	橙/黒	C　長・赤	10	良	306(209・301)	内面黒色処理
32	1竪	8	土師	鉢状坏	平安	(16.2)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	橙	C　赤・白	5	良	200	小破片
32	1竪	9	土師	坏	平安	-/5.4/-	削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/糸切り・削り	明赤褐	C　赤	50	良	1竪竈437	体部内面に使用痕状傷
32	1竪	10	土師	坏	平安	-/(5.0)/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/削り	橙	C　赤・白	20	良	183・1竪	
32	1竪	11	土師	坏	平安	-/(5.2)/-	削り/ﾅﾃﾞ/糸切り・削り	明赤褐	C　赤大・白	20	ﾔﾔ良	216・1竪	見込み部に使用痕状傷
32	1竪	12	土師	皿	平安	12.6/4.6/2.8	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・渦巻暗文/削り	明赤褐	B　赤・白・長	完形	良	1竪・340	床直から正位で出土　底部磨耗　内面傷
32	1竪	13	土師	皿	平安	12.6/5.1/2.5	ﾅﾃﾞ・回転削り/ﾅﾃﾞ・渦巻暗文/(回転削り？	橙	C　赤大・白	完形	良	337	床面直上より正位出土　底部磨耗　内面荒れ（細かな剥離）
32	1竪	14	土師	皿	平安	(13.0)/(5.0)/2.4	ﾅﾃﾞ・回転削り/ﾅﾃﾞ・渦巻暗文/回転削り	橙	C　赤・雲微・長	25	良	156	見込み部弱い磨耗
32	1竪	15	土師	皿	平安	(13.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・回転削り？/ﾅﾃﾞ・渦巻暗文/-	橙	C　長・赤	5	良	1竪	
32	1竪	16	土師	皿	平安	(14.7)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・渦巻暗文/-	橙	C　赤・雲微	5	良	1竪	
32	1竪	17	土師	皿	平安	(13.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・回転削り/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐/橙	C　赤・長	5	良	211	
32	1竪	18	土師	皿	平安	(13.0)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	灰褐	C　赤・角	5	良	225・1竪	内外面薄く黒色
32	1竪	19	土師	皿	平安	(17.4)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	明橙/橙	C　赤・長・雲微	5	良	204	
32	1竪	20	土師	皿	平安	-/(6.0)/-	ﾅﾃﾞ・回転削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/回転削り	赤褐/明赤褐	C　赤・白	15	良	1竪	内面線状傷多数　割れ口磨耗
32	1竪	21	土師	黒色鉄鉢形	平安	(20.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・回転削り・横磨き（暗文）/ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ/-	鈍い黄橙	C　赤・雲微	40	良	218・221(222・1竪竈)	内面～外面口縁一部黒色
32	1竪	22	土師	小形甕	平安	(13.4)/-/-	縦ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ/-	暗褐/黒褐	B　長・雲多・角	2	良	192	内面黒変
32	1竪	23	土師	小形甕	平安	(14.7)/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ/-	明赤褐～黒褐/黒褐	B　長多・雲・角	5	ﾔﾔ良	202	内面黒変（コゲ）
33	1竪	24	土師	甕	平安	(27.6)/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ・指頭痕/-	暗褐/明赤褐～黒褐	A　雲多・角・長	30	良	163・341・1竪竈・一括	内面一部黒変　外面一部スス　外面口縁部粘土付着
33	1竪	26	土師	甕	平安	(28.8)/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ/-	明赤褐～鈍い赤褐/褐～黒褐	B　雲・長・角	3	良	178・180・1竪竈・一括	内面薄く黒変
33	1竪	27	土師	甕	平安	(29.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ/-	黄褐/明赤褐	B　長・雲・角	3	良	500	外面薄く変色
33	1竪	28	土師	甕	平安	(30.6)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ/-	赤褐/明赤褐	B　長・角・雲	3	良	215・499	口縁部内外面粘土付着
33	1竪	29	土師	甕	平安	(31.2)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ/-	赤褐/明赤褐	B　長・石・角・雲	3	良	195	
33	1竪	30	土師	甕	平安	(9.0)/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ/木葉痕	鈍い褐/暗褐	B　長・角・雲	3	良	1竪竈	
33	1竪	31	土師	甕	平安	-/8.8/-	縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/木葉痕	赤褐/黒褐	B　長・角・雲	3	良	1竪竈	内面黒変顕著　体部・底部外面一部黒変
33	1竪	32	土師	甕	平安	-/8.0/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ・指頭痕/?	赤褐	B　長・角・雲	50	良	1竪竈474	竈内支脚石に被さって逆位で出土　底部穿孔　底部外面磨耗　体部中央焼土（粘土）付着
34	1竪	33	土師	甕	平安	(28.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ・指頭痕/-	暗褐/赤褐	B　長・角・雲ﾔﾔ多	4	良	153・182	体部外面黒変
34	1竪	34	土師	鉢形甕	平安	(41.0)/9.0/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ・指頭痕/木葉痕・ﾅﾃﾞ	暗褐～赤褐/明赤褐	B　長・雲・角	20	良	145・206・201・2961竪竈425・竈427・1竪竈	煮沸痕はない
34	1竪	35	土師	ﾛｸﾛ甕	平安	(24.3)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	橙	C　赤・白	1	良	197	小破片　鉢の可能性
34	1竪	36	須恵	蓋	平安	-/-/-	ﾅﾃﾞ・回転削り/ﾅﾃﾞ/-	鈍い黄灰	C　白・赤	10	良	151(188)	
34	1竪	37	須恵	甕	平安	-/-/-	平行叩き/ﾅﾃﾞ/-	灰	C　長・赤	5	良	175	外面繊維状圧痕　線刻状沈線　焼け膨らみあり
36	2竪	1	土師	坏	平安	(11.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	鈍い褐	C　雲?微	5	良	2竪	内外面薄く変色　黒色土器か
36	2竪	2	土師	坏	平安	(13.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐	C　赤・白	5	良	2竪259	内面剥離
36	2竪	3	土師	坏	平安	(16.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ/-	橙	C　赤・角微	20	ﾔﾔ不良	2竪竈	
36	2竪	4	土師	甕	平安	(22.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ/-	鈍い赤褐/暗褐	C　雲・長	5	良	2竪266	内面薄く変色
36	2竪	5	土師	甕	平安	(23.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/-	鈍い褐	B　長・角・雲	3	良	2竪227	
36	2竪	6	土師	甕	平安	(27.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/-	赤褐	B　雲・長・角	5	良	2竪255	
36	2竪	7	土師	甕	平安	(27.2)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/ﾅﾃﾞ・横ﾊｹ/-	褐/鈍い褐	B　雲・長・角	5	良	2竪229	内面薄く変色
36	2竪	8	土師	甕	平安	(28.4)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/-	鈍い赤褐/明赤褐	B　雲・長・角	5	良	2竪245	

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調（外/内）	胎土(量A多～C少，鉱物・岩石名)	残存率	焼成	注記（カッコ内は同一個体）	備　考
36	2竪	9	土師	甕	平安	(29.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ・指頭痕/-	明赤褐	B　雲・長・石・角	30	良	2竪230・237・246・248	口縁部薄く変色
36	2竪	10	土師	甕	平安	(10.0)/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ・指頭痕/木葉痕	褐/暗褐	B　長・雲・角	5	良	2竪241	内面黒変　底部外面灰付着　外面付着物
36	2竪	11	土師	甕	平安	9.0/-/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ・指頭痕/木葉痕	明赤褐・黒褐/暗褐	B　長・雲・角・石	20	良	2竪232・234・235・242・243・247・267・竈一括	
37	3竪	1	土師	坏	平安	(10.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	橙	C　赤・白・雲微	5	良	3竪273	
37	3竪	2	土師	坏	平安	(11.0)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	橙～鈍い橙	C　赤・雲微	5	良	3竪276・一括	
37	3竪	3	土師	小形甕	平安	(18.4)/-/-	縦ﾊｹ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/-	赤褐～暗褐/黒褐	B　長・雲ﾔﾔ多・花	5	良	3竪278	内面黒変
37	3竪	4	土師	甕	平安	-/(9.0)/-	縦ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/横ﾊｹ・ﾅﾃﾞ/木葉痕	鈍い赤褐	B　雲ﾔﾔ多・長・角	5	良	3竪280	内面一部黒変
37	3竪	5	須恵	甕	平安	-/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	暗青灰/青灰	C　長	2	良	3竪274	
37	4竪	1	土師	坏	平安	(13.6)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	明赤褐	C　雲微	5	良	521	
37	4竪	2	灰釉	坏	平安	(14.0)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	鈍い灰黄	C	2	良	522	内外面灰釉
37	4竪	3	土師	甕	平安	(23.4)/-/-	ﾅﾃﾞ・縦ﾊｹ/横ﾊｹ/-	暗赤褐/暗褐	B　長・雲・角	3	良	520・524	
37	4掘63ﾋﾞ	1	土師	坏	平安	(11.4)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	橙	C　雲・赤・白	15	ﾔﾔ良	63ﾋﾞ	器面磨耗
37	4掘62ﾋﾞ	2	土師	坏	平安	-/(5.8)/-	ﾅﾃﾞ・削り?/ﾅﾃﾞ/糸切り・削り	橙	C　赤・白微	10	良	666	
37	4掘64ﾋﾞ	3	土師	坏	平安	-/(5.0)/-	削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/糸切り・削り	橙	C　赤・白・雲	20	良	630	
37	5掘76ﾋﾞ	1	土師	坏	平安	(11.8)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	明赤褐	C　雲・赤	10	良	706	外面に線刻状の沈線
37	5掘40ﾋﾞ	2	土師	坏	平安	(11.2)/5.4/3.5	ﾅﾃﾞ・削り/放射暗文・ﾅﾃﾞ/削り	橙	C　赤	25	良	40ﾋﾞ	
38	18土	1	磁器	碗	江戸	-/4.0/-	染付/染付/-	灰白	C	40	良	18土	表裏とも貫入
38	30土	1	土師	坏	平安	11.2/5.6/4.2	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/糸切り・削り	明赤褐	C　赤・雲	70	ﾔﾔ良	668・669	底部外面に2～3本の線刻?　内面見込み部に線刻?
38	39土	1	瓦器	甕	中世	-/(12.0)/-	指頭痕・ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/?	灰黄	C　長・石	5	良	714	内面茶褐色の付着あり
40	1溝	1	土師	坏	平安	(10.6)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	橙	C　赤・雲微	10	良	23・24	
40	1溝	2	土師	坏	平安	(12.1)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐	C　赤微	10	良	26	
40	1溝	3	土師	坏	平安	(12.2)/-/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/-	橙	C　赤・雲微	20	良	22	
40	1溝	4	土師	坏	平安	―/4.4/-	削り/ﾅﾃﾞ/削り	赤褐	C　赤	10	良	1溝575	
40	1溝	5	灰釉	鉢	中世	-/(12.4)/-	沈線文・灰釉/一部灰釉/削り・一部灰釉	浅黄～黄灰/ｵﾘｰﾌﾞ黄	C　長	?	良	39	胎土は黄白色
40	1溝	6	常滑	甕?	中世	-/(18.2)/-	ﾅﾃﾞ/釉/砂底	鈍い黄橙～鈍い黄褐/浅黄暗ｵﾘｰﾌﾞ	C　長・石	?	良	36	底部は薄い
40	1溝	8	須恵	長頸壺	平安	(10.4)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ・自然釉/-	黒褐/灰・ｵﾘｰﾌﾞ黒	C　長・石	?	良	60	外面黒色?
40	2溝	1	土師質	皿	中世	(6.0)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/糸切り	鈍い橙	C　長・赤・雲	5	良	44	
40	2溝	2	土師質	鉢	中世	(33.0)/-/-	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/-	橙/灰橙	C　長・赤	5	良	47	火鉢か　内面変色
40	3溝	1	土師	坏	平安	-/(5.0)/-	ﾅﾃﾞ・削り/ﾅﾃﾞ・放射暗文/削り	橙	C　赤・雲微	10	良	52	底部線刻（箆削りのさいの砂粒痕か）
40	遺構外	1	土師質	皿	中世	(3.8)/(5.0)/1.7	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ/糸切り	鈍い黄橙	C　雲・砂粒	20	良	遺構外	口唇の一部にタール付着　灯明皿か
40	遺構外	4	縄文	深鉢	?	-/-/-	折返し口縁・条痕文/ﾅﾃﾞ/-	鈍い黄褐/灰黄褐	B　長・雲・角	?	良	450	
40	遺構外	5	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管文・刻み隆線/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐	A　長多大・石	?	良	405	
40	遺構外	6	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管文・隆線/ﾅﾃﾞ/-	鈍い褐/褐	B　石ﾔﾔ多・角	?	良	452	
40	遺構外	7	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	口唇刻み・竹管文/ﾅﾃﾞ/-	黄褐/明褐	B　長・角・石・雲	?	良	588	
40	遺構外	8	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管文・刻み/ﾅﾃﾞ/-	鈍い赤褐	B　長・雲・石・角	?	良	510	
40	遺構外	9	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管沈線/ﾅﾃﾞ・削り/-	明赤褐	A　長大・石・雲	?	良	415	16と同一
40	遺構外	10	縄文	深鉢?	諸磯ｂ	-/-/-	刻み・竹管文・隆線文/ﾅﾃﾞ/-	褐	B　長・角・石・雲	?	良	361	
40	遺構外	11	縄文	浅鉢?	諸磯ｂ	-/-/-	刻み・竹管沈線文/ﾅﾃﾞ/-	暗褐/褐	B　雲・長・石	?	良	367	
40	遺構外	12	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管沈線文/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐/黄褐	A　長・角・雲	?	良	449	
40	遺構外	13	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	縄文・浮線文・刻み/ﾅﾃﾞ/-	明褐	B　長・角・雲・赤	?	良	401	
40	遺構外	14	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管文・刻み/ﾅﾃﾞ/-	明赤褐	B　長・石・角・雲	?	良	444	
40	遺構外	15	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	縄文・竹管文/ﾅﾃﾞ/-	鈍い赤褐	B　石・長・角・雲	?	良	404	
40	遺構外	16	縄文	深鉢	諸磯ｂ	-/-/-	竹管沈線/ﾅﾃﾞ/-	褐	A　長大・石・雲・角	?	良	353	9と同一

表４　土製品観察表

図	地点	No.	種別	時期	長/幅/厚cm	整形技法 外/内/底	色調	胎土(A多～C無)	焼成	残存率	重さg	注記	備　　考
38	33土	1	粘土塊	?	4.6/3.6/2.4	?	明黄褐～橙	C　雲・長	ﾔﾔ不良	?	31	672	
38	33土	2	粘土塊		7.0/6.1/4.5	?	橙	C　長・雲・小礫	ﾔﾔ不良	?	130	674	鋳型関連か　一部黒変

表５　石器類観察表

図	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	g	石材	色調	注記	備　　考
35	1竪	38	台石	23.2/18.8/9.4		花崗閃縁岩	白褐	312	表面のみ磨耗
35	1竪	39	凹み石	12.0/8.5/		花崗閃縁岩	白緑	311	表面に敲打痕　裏面に弱い磨り面
35	1竪	40	支脚石	25.2/9.0/7.9		花崗岩類	赤褐	517	側面磨耗　被熱により赤変　破損　粘土付着　甕が逆位に被る
37	4竪	4	支脚石	15.0/11.3/8.6		安山岩	赤灰褐	4竪竈	自然礫　赤変　磨り面?あり
39	台座地点	3	台座	45.0/29.5/12.0		安山岩	灰	659	上面に浅い凹み
39	台座地点	4	台座	50.0/40.0/26.0		花崗閃縁岩	灰褐	660	正面側面と上面に楕円凹み
39	台座地点	5	台座	47.0/40.0/13.0		安山岩	灰	661	石祠か　上面隅近くに円形穴あり
40	遺構外	17	打斧	7.3/5.4/1.1	69	ホルンフェルス	灰オリーブ	457	両端欠損
40	遺構外	18	打斧	10.85/5.9/0.8	58	粘板岩	灰	106	分銅形か
40	遺構外	19	打斧	12.8/4.8/2.5	135	砂岩	灰	419	短冊形
40	遺構外	20	打斧	15.3/4.8/1.95	169	粘板岩	灰	456	短冊形
40	遺構外	21	石鏃	2.57/1.59/0.36	1.3	水晶	透明	637	ほぼ完存
40	遺構外	22	石鏃	2.59/1.63/0.37	0.9	黒曜石	黒～灰	597	完存

表６　金属製品類観察表

図	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚cm	重さg	注記	備　　考
36	2竪	12	鏃?	鉄	3.7	1.16	0.65	3.85	2竪240	鉄鏃か?
36	2竪	13	刀子	鉄	8.59	1.46	0.81	9.2	2竪床直332	ほぼ完存
37	3竪	6	鎌	鉄	15.5	3.4	0.95	63.54	3竪281	ほぼ完存
38	20土	1	環状	鉄	5.75	9.5	10.1	26.49	20土一括	
38	21土	1	角?釘	鉄	3.07	0.7	0.38	0.89	21土一括	
38	33土	3	刀子	鉄	7.6	1.3	0.73	7.81	33土675	
38	39土	2	銭貨	銅	2.45	2.47	0.13	2.68	39土門736	A　皇宋通宝　北宋(1038)
38	39土	3	銭貨	銅	2.3	2.29	0.18	3.57	39土門736	B　洪武通宝　背面「福」(背福)(1368)　福州(漸江省)
38	39土	4	銭貨	銅	2.31	2.32	0.2	4.61	39土門736	C　洪武通宝　背面右「一銭」(背一銭)　明　洪武元(1368)
38	39土	5	銭貨	銅	2.43	2.39	0.12	3.38	39土門736	D　元豊通宝?　篆書　北宋(1078)
38	39土	6	銭貨	銅	2.33	2.32	0.11	2.61	39土門736	E　不明
38	39土	7	銭貨	銅	2.45	2.48	0.14	2.7	39土門735	永楽通宝　中世末～近世初(15C～17C前)
38	台座地点	1	銭貨	銅	2.39	2.44	1	1.65	門652	寛永通宝
38	台座地点	2	銭貨	銅	2.36	2.36	0.11	2.6	門653	寛永通宝
38	台座地点	6	不明	鉄	13.27	0.54	0.66	6.43	1門	針金状
38	台座地点	7	不明	鉄	9.5	1	0.47	8.39	門657	
38	1溝	7	煙管吸口?	鉄	3.81	1.28/0.30		3.7	1溝18	
40	遺構外	2	銭貨	銅	2.52	(2.08)	0.11	1.48	遺構外447	永楽通宝
40	遺構外	3	銭貨	銅	2.48	2.46	0.12	3.01	遺構外543	景徳元宝　北宋(1004)

第４章　自然科学分析

第１節　７号土坑炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．試　料

試料は、山梨市三ケ所遺跡の土坑覆土の水洗選別によって回収された炭化材（７号土坑 炭）である。水洗選別は、覆土 7.4kgを対象に実施されており、今回分析に供した炭化材のほか、多量の焼骨片や礫などが回収されている。炭化材は、多量の細片より最も大きい約 2cm角程度を抽出し、観察範囲内で最も外側の年輪部分（2 年分）を試料として採取している。今回の分析調査では、試料の由来（樹種）に関わる資料を得るため、同一試料より分割した炭化材について樹種同定も行っている。

２．分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、本報告では 1 年単位で表示する。暦年較正結果は、測定誤差 σ、2 σ（σ は統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95%の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比（確率分布）は、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表７　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代（cal）		相対比	測定機関 Code.
7号土坑 炭 炭化材（クリ）	430±30	-25.47±0.32	432±28	σ	cal AD 1,436 - cal AD 1,464	1.000	IAAA-91143
				2σ	cal AD 1,422 - cal AD 1,492	0.981	
					cal AD 1,603 - cal AD 1,610	0.019	

3．結果および考察

炭化材（7号土坑 炭）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は430 ± 30yrBP、暦年較正結果（測定誤差σ）はcalAD1,436-calAD1,464である（表7）。発掘調査所見によれば、7号土坑は中世の遺構と推定されており、今回得られた較正暦年代はこの所見を支持する結果と言える。

また、放射性炭素年代測定試料に供した炭化材は、落葉広葉樹のクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）であった。この他に7号土坑から回収された炭化材2点についても同様に確認を行ったが、いずれもクリであった。山梨県内における中世の火葬墓あるいは火葬跡とされる遺構から出土した炭化材の調査事例では、横森赤台（東下）遺跡（高根町）の中世の遺構から出土した炭化材は、クリが多く、フサザクラ、リョウブ、ツツジ科、トネリコ属、カキノキ属が混じる組成が確認されており（植田,2000）、本遺構と同様にクリが多いという共通点が指摘される。

第2節　種実遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試　料

試料は、山梨市三ケ所遺跡の平安時代の竪穴住居跡（1～4竪）の竈覆土（1竪竈;6.5kg、2竪竈;7.6kg、3竪竈;4.7kg、4竪竈;7.2kg）の水洗選別により回収された炭化物などを含む微細植物片6試料である。試料の詳細は、結果とともに表8に示す。

2．分析方法

試料を粒径別に篩別後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4mm以上）を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

3．結　果

結果を表8に示す。竪穴住居跡のカマドからは、木本4分類群（オニグルミ、クワ属?、モモ、トチノキ?）6個、草本12分類群（イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、イネ科、テンツキ近似種、カヤツリグサ科、アサ、スベリヒユ科、アカザ科、マメ類、マメ科?）129個の計135個の種実遺体と、木の芽、炭化材、木材組織が確認されない部位・種類不明の炭化物、昆虫などが検出された。

検出された種実遺体群は、本来の色調とは明らかに異なる黒色を呈し、膨張、発泡など状態が悪く、火を受け炭化したものと思われる個体（栽培種のモモ、イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、アサ、マメ類と、木本のオニグルミ、クワ属?、トチノキ?、草本のイネ科の胚乳、マメ科?）と、炭化が認められず（または、元々黒く硬い種皮や果皮を持つため、炭化の有無の厳密な判別が困難なものを含む）、保存状態が良好な個体（草本のイネ科の果実、テンツキ近似種、カヤツリグサ科、スベリヒユ科、アカザ科）に分けられる。

このうち、後者は、いわゆる人里植物に属する草本類で、付近の明るく開けた場所に生育していた草本群落に由来すると考えられる。遺跡の立地などを考慮すると、炭化していない種実が長期間残るとは考え難く、後代より混入した可能性が高い（吉崎,1992など）。このことから、炭化種実以外の種実については、その由来を慎重に検討する必要があるため、結果表示にとどめている。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

＜木本＞

・オニグルミ（*Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura）クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色、完形ならば、長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の頂部が尖る広卵体。

表８　種実遺体同定結果

分類群	部位	状態		1竪竈		2竪竈	3竪竈		4竪竈	備考（計測値mm）
			土壌量[kg]	6.5		7.6	4.7		7.2	
					*			*		
木本										
オニグルミ	核	破片	炭化				3			
クワ属?	種子	完形	炭化			1				
モモ	核	破片	炭化	1						
トチノキ?	種子	破片	炭化	1						
木の芽	芽	完形	炭化					1		
炭化材			炭化	2.86		0.37	0.76	<0.01	61.54	重量[g]
				12.77		9.96	12.61	4.01	22.29	最大径[mm]
草本										
イネ	穎	破片	炭化			2			2	基部
	胚乳	完形	炭化	1		2	2	7	10	
		破片	炭化			1	8		17	
オオムギ	胚乳	完形	炭化	3	2			1		
		破片	炭化					2		
コムギ	胚乳	完形	炭化						1	
		破片	炭化	1						
アワ近似種	果実	完形	炭化				1		1	
イネ科	果実	完形				12			2	
		破片				23			4	
	胚乳	完形	炭化				2			
テンツキ近似種	果実	完形		1						
		破片				1				
カヤツリグサ科	果実	完形		1						
アサ	果実	破片	炭化				2			
スベリヒユ科	種子	完形				8				
アカザ科	種子	完形		2						
マメ類	種子	完形	炭化			1				長さ5.63, 幅5.09, 厚さ3.68
		破片	炭化						4	長さ4.33, 幅2.81・長さ3.96, 幅3.04
マメ科?	種子	完形	炭化			2				長さ2.05, 幅1.45, 厚さ1.30・長さ1.50, 幅1.08, 厚さ0.71
不明炭化物				0.06		0.04	0.05	0.03	<0.01	重量[g]
昆虫						2			2	
分析残渣	炭化材主体(2mm以上)								41.74	重量[g]
	炭化材主体(2mm以下)			3.79		2.66	1.41		14.82	重量[g]
	炭化していない植物片			0.03		0.20	0.22		1.20	重量[g]
	土粒・礫			0.53		0.47	0.12	0.04	2.93	重量[g]

*プラスチックケースに抽出された炭化種実

破片は、縦に１周する縫合線に沿って割れた半分未満で、大きさは最大5mm程度。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・クワ属（*Morus*）？　クワ科

種子と考えられる完形個体が検出された。炭化しており黒色、長さ1.7mm、幅1.3mm、厚さ1.0mm程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一辺が鋭利で、基部は欠損し孔がある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・モモ（*Prunus persica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならばやや偏平な広楕円体で頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は大きさ1cm程度。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）？　トチノキ科トチノキ属

種子と思われる破片が検出された。炭化しており黒色、完形ならば径2-4cm程度の偏球体で、表面にはほ

ぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。破片は大きさ6㎜程度。種皮は薄く硬く、3層が確認され、割れ方は不規則。

＜草本＞

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と穎の破片、胚乳表面に穎が付着する個体が検出された。炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4-5.5㎜、幅2-3㎜、厚さ1-1.5㎜程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。胚乳を包む穎（果）は、完形ならば長さ6-7.5㎜、幅3-4㎜、厚さ2㎜程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄部で、最大1.6㎜程度。

・オオムギ（*Hordeum valgare* L.）　イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ5㎜、径2.9㎜程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ3.9㎜、径2.5㎜程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。

・アワ近似種（*Setaria cf. italica* (L.) P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

胚乳・穎が検出された。炭化しており黒色、胚乳は長さ1.3-1.7㎜、幅1.0-1.5㎜、厚さ0.8-1.0㎜程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5㎜程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面は粗面で、穎（果）が付着する。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。

・イネ科（Gramineae）

果実と胚乳が検出された。果実は淡灰褐色、長さ2.6㎜、径0.8㎜程度の半狭卵体で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。胚乳は炭化しており黒色、長さ1.5㎜、径0.4㎜程度のやや偏平な長楕円体。背面は丸みがあり、基部正中線上には胚の痕跡が径0.2㎜程度の楕円状に窪む。腹面は偏平。胚乳表面は粗面で、微細な縦筋がある。

・テンツキ属（*Fimbristylis*）　カヤツリグサ科

果実が検出された。淡褐色、径0.7㎜、厚さ0.5㎜程度の両凸レンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。左右の縁は稜をなし、果皮表面には隆起する格子状の網目模様が配列する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。灰褐色、径1.2㎜程度のレンズ状広倒卵体、頂部の柱頭部分はやや伸び、基部を欠損する。果皮表面はやや粗面。

・アサ（*Cannabis sativa* L.）　クワ科アサ属

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。長さ3㎜、径2㎜程度の歪な広倒卵体。縦方向に一周する稜がある。頂部は切形、基部に淡灰褐色、径1㎜程度の楕円形の臍点を欠損する。果皮表面は葉脈状網目模様があり、断面は柵状。

・スベリヒユ科（Portulacaceae）

種子が検出された。黒色、径0.6㎜程度のやや偏平な腎状円形。基部は凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色、径0.9㎜程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を

取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・マメ類（Leguminosae）　マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、やや偏平な楕円体で焼き膨れている。2竪カマドの完形個体は、長さ5.63㎜、幅5.09㎜、厚さ3.68㎜を測る。4竪カマドの破片個体のうち計測可能な2個は、子葉の合わせ目から半割しており、それぞれ長さ4.33㎜、幅2.81㎜、長さ3.96㎜、幅3.04㎜を測る。腹面子葉の合わせ目上にある細長い臍を欠損する。種皮は薄く表面はやや平滑だが、焼き崩れており、状態は悪い。

・マメ科（Leguminosae）

種子が検出された。炭化しており黒色、長さ2.05㎜、幅1.45㎜、厚さ1.30㎜と長さ1.50㎜、幅1.08㎜、厚さ0.71㎜のやや偏平な長楕円体。腹面の子葉合わせ目上に細長い長楕円形の臍がある。種皮は薄く表面はやや平滑だが、焼き崩れており、状態は悪い。上記した栽培植物のマメ類と比べ小粒であることから、マメ類とは区別している。

4．考　察

平安時代の竪穴住居跡（1～4竪）の竈覆土からは、炭化した栽培種のモモの核、イネの穎と胚乳、オオムギの胚乳、コムギの胚乳、アワ近似種の果実、アサの果実、マメ類の種子が確認された。これらの種実の由来や状態などを考慮すると、当該期におけるこれらの栽培植物の利用が推定される。

山梨県内における弥生時代～中世の住居跡から検出された炭化種実遺体の調査事例の集成（櫛原,1999）によれば、甲府盆地では弥生時代後期および古墳時代はイネの比率が圧倒的に高く、8～10世紀は時期や遺跡によってイネとムギ類の比率が異なるが両者が混在する状況にあり、10世紀第2四半期を境にムギ類（オオムギ・コムギ）を中心とする雑穀類が増加することが示唆されている。今回の分析調査では、イネ・ムギおよび雑穀類が検出されたものの有意の数量は得られず、比率の比較検討には至らないが、少なくとも複数の栽培種の利用が指摘できる。

栽培種以外の分類群は、木本のオニグルミ、クワ属?、トチノキ?、草本のイネ科が確認された。オニグルミ、トチノキは、渓流沿いの肥沃地などに渓畔林を形成する落葉高木で、クワ属は伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する落葉高木である。おそらく、これらは遺跡周辺の森林の林縁部や河川沿い等に生育していたものに由来すると考えられる。オニグルミとトチノキは、堅果が可食できることから、植物質食糧として採取・利用された可能性がある。イネ科は、人里植物に属する草本類で、周辺の明るく開けた場所に生育していた草本群落に由来すると考えられる。

第3節　骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試　料

試料は、中世とされる7号土坑および1号配石覆土の水洗選別によって回収された骨片類である。

2．分析方法

各遺構の土壌試料は、篩分け（篩目径2㎜）を行い、2㎜以上の残渣を肉眼で観察し、骨片の有無を確認する。水洗選別後に選別・抽出された骨片類は、肉眼で観察し、その形態的特徴から種と部位の同定を行う。

3．結　果

結果を表9に示す。検出された骨は、1号配石および7号土坑から検出された骨は、いずれもヒト（*Homo sapiens*）であった。骨片は、白色・細片化し、表面に細かなひび割れが生じるなど、いずれも焼骨の特徴を

示す。馬場ほか（1986）によれば、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。以下に、各遺構における骨片類の検出状況を記す。

表９　骨同定結果

遺構名	部位	左右	部分	数量	備考
7号土坑	前頭骨	左	眼窩上縁片	1	
	頬骨	左	破片	1	
	側頭骨		錐体部	1	
	下顎骨	左	下顎頭	1	
	頭蓋骨		破片	51	
	肋骨		破片	5	
	中手骨/中足骨/指骨		破片	1	
	肋骨/四肢骨		破片	11	
	四肢骨		破片	20	
	不明		破片	－	115.0g
	残渣			－	1419.6g
1号配石	前頭骨?		破片	1	
	歯牙		破片	5	
	大腿骨		近位端片	1	
	不明		破片	－	18.0g
	残渣			－	1047.9g

(1) 7号土坑

7号土坑からは、前頭骨眼窩上縁左側破片、左頬骨片、側頭骨錐体部片、下顎骨左下顎頭、頭蓋骨片、肋骨片、中手骨／中足骨片、肋骨／四肢骨片、四肢骨片などが検出された。当試料では、脳頭蓋の矢状縫合あるいは環状縫合の可能性がある縫合について内側が閉じており、外側が開いている状態が観察された。この点を考慮すると、本人骨は熟年（40～59歳程度）と推定されるが、性別に関しては不明である。

(2) 1号配石

1号配石からは、前頭骨の可能性がある破片、歯牙片、大腿骨近位端片などが検出された。被熱によって骨自体が収縮していることが推定されるが、大腿骨骨頭の大きさなどから、少なくとも成人（16歳程度）以上には達していたと考えられる。性別については不明である。

【引用文献】

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤　盛治 ,1986, 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨 . 霊山根古屋遺跡の研究　―福島県霊山町根古屋における再葬墓群― , 福島県霊山町教育委員会 ,93-113.

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

櫛原功一 ,1999, 炭化種実から探る食生活―古代～中世を中心に― , 櫛原功一 (編著), 帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集 2　食の復元　遺跡・遺物から何をよみとるか , 株式会社岩田書院 ,81-98.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

植田弥生 ,2000, 横森赤台（東下）遺跡出土炭化材の樹種同定 .「高根町　横森赤台（東下）遺跡　―国道 141 号（箕輪バイパス）建設に伴う発掘調査報告書―」, 山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 171 集 , 山梨県教育委員会・山梨県土木部 ,65-71.

吉崎昌一 ,1992, 古代雑穀の検出 . 考古学ジャーナル ,355,2-14.

第４節　１号土坑のウマ遺体

植月　学（山梨県立博物館）

山梨市三ケ所遺跡の１号土坑より出土したウマ一体分の頭部について分析結果を報告する。１号土坑は東西方向に長軸を持つ長方形の土坑である。15～16 世紀の溝と切り合い、土坑の方が古いとされる。周辺の状況から中世頃に属すると想定されているものの、確実ではない。

検出されたのは上下顎歯と骨の一部のみで、土坑東部寄りで検出された。臼歯と切歯はほぼ解剖学的な位置を留めた状態で、頭頂側を上にして、左側面が壁面に沿うような形で土坑中位に埋存していた。土坑は長軸約２m、短軸約 1.3 mを測り、形状、規模からみてウマの墓壙と推察される。

下顎骨や上顎骨の一部が残存していたにも関わらず、他の部位の骨がまったく遺存していなかった点が問題となるが、明らかに頭部が丸ごと埋存していたと推定される歯の出土状況にも関わらず、頭部の骨でも臼歯周辺以外の骨は消失していたので、その他の部位も分解、消失してしまったと推測される。全身が埋葬されたとすれば、首から頭を上部に捻った状態であっただろう。

歯には重複はなく、一個体分である。下顎左 M3（第３後臼歯）を除くすべての臼歯が揃っている。切歯も 10 本含まれており、同定が未了だが、ほぼ一個体分が揃っている（本来は 12 本）。

図版 24-1 は筆者の元に届いた段階の上面観で、右側面を上にした状況であった。切歯部分は土が崩れており、原位置からずれていたが、図面によれば本来はほぼ原位置で埋まっていたようである。臼歯部分は一部動いているものの、比較的原位置を保っていた。上顎の骨は頬側がほとんど消滅し、舌側は残っていたが、非常にもろい。右下顎骨も一部残っていたが、取り上げの際に崩れてしまった。

図版 24-2 は遊離している切歯と、臼歯部分のかたまりを取り上げ、余分な土を取り除いた状況である。左上顎臼歯はこの際に外れてしまった。№13、14 は下部に切歯がなかったので、それぞれ下顎Ｉ３、上顎Ｉ３であろう。

図版 25-1 は取り上げた臼歯部分の下面（左側面）である。上顎骨は舌側が一部残るが、遺存状況は悪い。下顎の臼歯はすべて植立した状態である。下顎骨も下顎体や切歯骨の一部が残っているが、やはり遺存状況は悪い。これら植立した歯については破壊の恐れがあり、計測も右側臼歯で可能であったため、あえて取り出すことはしなかった。

出土した歯の計測値を表に示した。歯根を留める標本については西中川・松元（1991）の推定式により年齢推定をおこなった。その結果、おおむね３歳代と推定され、その平均は 3.51 歳であった。また、やはり西中川・松元（1991）の骨長推定式と林田・山内（1957）の体高推定式を用いて、植立している左下顎臼歯列長より復元された体高は 131.9cm であり、中型馬であったと推測される。ただ、頭蓋骨長による推定は誤差が大きく、幅をもってとらえる必要がある。

なお、犬歯は相当する位置の土を崩して調べたが検出できなかった。しかし、ウマの犬歯の崩出は４歳以降とされるので（Schmid 1972）、本個体では雌雄の区別は不明である。

【引用文献】

西中川駿・松元光春　1991「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』 pp.164-188

林田重幸・山内忠平　1957「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』６　pp.146-156

Schmid, E. 1972 Atlas of animal bones for prehistorians, archaeologists, and Quaternary geologists. London. Elsevier

表 10　馬歯同定結果

No.	上下	歯種	左右
1	上	M3	右
2	上	M2	右
3	下	P2	右
4	上	M3	左
5	上	M2	左
6	?	I	?
7	?	I	?
8	?	I	?
9	?	I	?
10	?	I	?
11	上	I3	右
12	?	I	?
13	下	I3	左
14	上	I3	左

No.	上下	歯種	左右
15	上	P2	左
16	上	P3	左
17	上	P4	左
18	上	M1	左
19	?	?	?
20	下	切歯骨	—
21	?	I	?
22	上	M1	右
23	上	P4	右
24	下	P3	右
25	下	P4	右
26	下	M1	右
27	下	M2	右

No.は分析に際して任意にふったもの。
Ｉ＝切歯、Ｐ＝前臼歯、Ｍ＝後臼歯

表 11　馬歯計測結果

	歯種	左						右					
		歯冠長	歯冠幅	歯高	備考	推定年齢	No.	歯冠長	歯冠幅	歯高	備考	推定年齢	No.
上	P2	35.52	24.68	52.0		3.28	15	–	–	–		–	■
	P3	29.50	24.15	67.0		3.72	16	–	–	–		–	■
	P4	27.60	22.77	75.5	歯根破損	–	17	26.60	22.27	76.0	歯根形成中	–	23
	M1	26.73	26.70	69.0		3.71	18	26.44	26.49	67.0		3.97	22
	M2	26.45	23.50	78.0		3.40	5	26.35	23.45	77.0		3.49	2
	M3	22.29	17.78	–	歯根形成中	–	4	22.27	17.27	–		–	1
下	P2	臼歯列長 167.8	–	–		–	■	32.37	13.43	52.0		3.67	3
	P3		–	–		–	■	29.84	14.90	67.0		3.60	24
	P4		–	–		–	■	26.15	12.35	73.0	歯根破損	–	25
	M1		–	–		–	■	28.66	14.38	73.0		2.72	26
	M2		–	–		–	■	28.53	12.08	–	歯根形成中	–	27
	M3		–	–		–	■	–	–	–		–	–

左下顎臼歯列長による推定下顎骨長：40.9cm　下顎骨長による推定体高：131.9cm
平均年齢：3.51才
■：顎骨に植立している歯（計測不可能）

第5章　総括

第1節　土師器類の年代と仏鉢形土器

4軒の竪穴および掘立柱建物からは、甲斐型土師器を主とする土器群が出土した。ここでは改めて年代、時期について整理を行い、いくつかの特徴的な器種について、考察を加える。ここでは韮崎市宮ノ前編年の時期区分と年代観を用いる。

1号竪穴　坏　宮Ⅷ期（9世紀末～10世紀1/4）～宮Ⅸ期（10世紀2/4）　Ⅲ　宮Ⅶ（9世紀3/4）～Ⅷ期
　ハケメ甕　宮Ⅷ期
2号竪穴　坏　宮Ⅷ期　ハケメ甕　宮Ⅶ～Ⅷ期
3号竪穴　坏　宮Ⅶ期
4号竪穴　坏　宮Ⅶ期
4号掘立　坏　宮Ⅶ期
5号掘立　坏　宮Ⅶ期

以上を時期的に整理すると次のようになる。

宮Ⅶ期　3・4号竪穴　　4・5号掘立
宮Ⅷ期　1・2号竪穴
宮Ⅸ期　1号竪穴

1号竪穴の土器組成のなかで、仏鉢形土器の存在は注目すべきである。これは僧尼が所持したといわれる仏鉢で、「少なくとも僧尼がその集落に出入りしていたことを示す遺物」（平野2002）とされ、出土した遺跡及び周辺には何らかの寺、堂などの仏教施設の存在が推測されている。2002年までの平野修氏の集成によれば、山梨県内では以下の遺跡から仏鉢形土器の出土が見られる。

所帯Ⅰ遺跡（北杜市白州町）土師器1
所帯Ⅱ遺跡　（北杜市白州町）7住　土師器1
薬師堂遺跡（北杜市明野町）1住　須恵器1
宮ノ前遺跡（韮崎市）須恵器2　土師器1
宮ノ前第2遺跡（韮崎市）須恵器1
宮ノ前第5遺跡（韮崎市）須恵器1
堂の前遺跡（韮崎市）　須恵器2
大坪遺跡（甲府市）　土師器3
武田氏館跡第21次（甲府市）　須恵器1
松原遺跡（笛吹市一宮町）　土師器1
竜ノ木遺跡（笛吹市一宮町）　土師器1

これらのうち、宮ノ前第2遺跡では8世紀後半から9世紀前半の四面廂掘立柱建物が検出され、瓦、瓦塔、須恵器壺G類が出土し、仏堂と考えられている。宮ノ前、宮ノ前第5、堂の前遺跡はいずれも宮ノ前第2遺跡南側に集中する遺跡群で、宮ノ前遺跡では8世紀前半の「寺」刻書土器が出土するなど、宮ノ前第2遺跡関連の遺跡群として理解される。大坪遺跡は土師器生産遺跡とされるが、瓦塔、円面硯が出土したことから仏教施設の存在が推定されているほか、近くにある東畑・道々芽木遺跡からは小金銅仏像、壺G類が出土している。松原・竜ノ木遺跡は国分尼寺に近いことから、国分二寺関連集落といえる。

山梨県関連の仏鉢形土器としては、2003年に長野県佐久市聖原遺跡H380住から出土した、内面にヘラ書き文字のある土器が注目された（図3）。この土器には8世紀末～9世紀代の甲斐型土器で、「甲斐国山梨郡大野郷戸□／乙作八千／此後□佛□為／八千体□」「佛」と記され、おそらく大野郷某の注文品として大坪

遺跡周辺で作られ、宗教活動に伴い、遠く東信地方で使用、遺棄されたものと考えられる。大野郷は、現山梨市大野を故地とするならば、笛吹川と重川の間に挟まれた一帯とみられ、本遺跡あたりも大野郷に含まれるものとみられる。あながち、今回の出土資料と無縁と思われない。

さて、三ケ所遺跡では仏教施設の可能性のある建物として掘立柱建物があるが、仏堂そのものと考えられる柱穴配置を示すものはない。ただし3間×3間の5号掘立は、一般集落には少ない建物構造で、仏堂の可能性のある建物といえる。仏鉢形土器が出土したのが1号竪穴竈南側からで、1号竪穴は5号掘立と重複するものの竪穴の方が新しいことが明らかである。したがって時間差を考えると、土器は掘立には伴わないとみるのが自然ではあるが、5号掘立に伴ったのち1号竪穴段階まで保持され廃棄されたとみることもできる。

調査区内で仏教関連遺構を見出そうとする視点とは別に、本遺跡北側に所在する清白寺との関連づけも考えねばならない。つまり仏殿内に平安仏が安置されていることから、平安時代にさかのぼる前身寺院があったという説である。その平安仏は高さ130cm余の十一面観音菩薩立像で、木造一木造りであり、「両腕まで一材から彫出し、内刳りを施し背板をあてる構造は古様である」とされ、平安時代前期の作と考えられている（山梨市2006）。ただし清白寺自体、かつて北二町にあるという「古寺家」と称す地から移転したものという伝えがあり、現在地に前身寺院が存在したという保証はない。

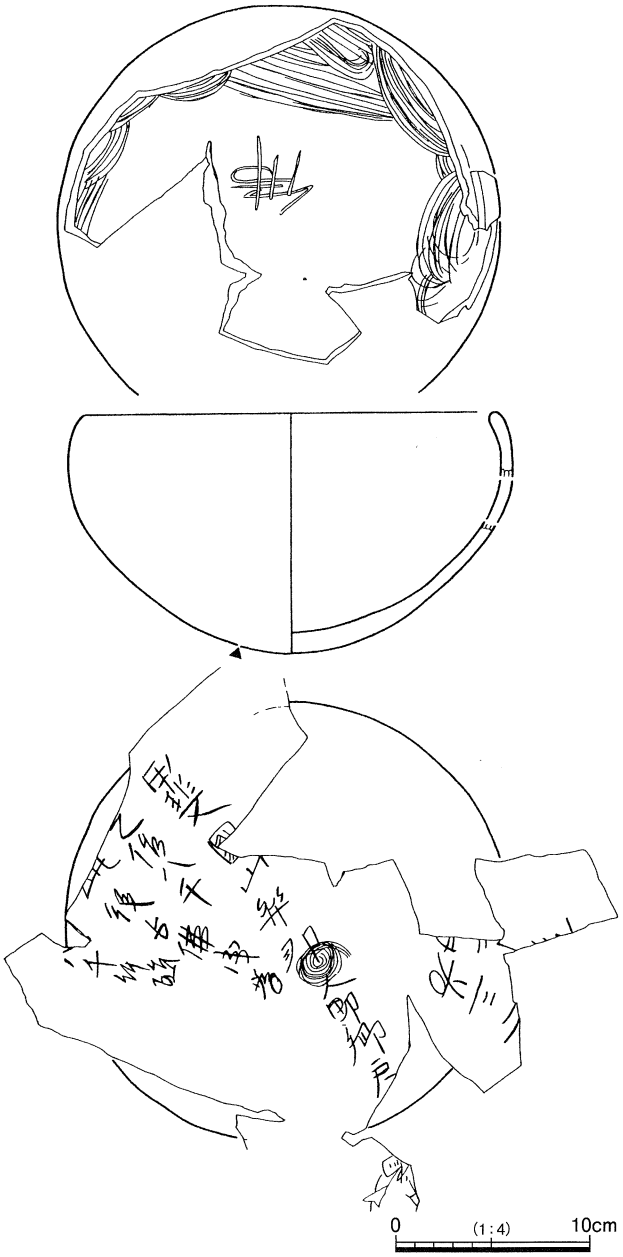


図3　聖原遺跡 H380 住出土仏鉢形土器（1/4）

【参考文献】

山梨市　2006「清白寺」『山梨市史　文化財・社寺編』

佐久市教育委員会ほか　2003『聖原』佐久市埋蔵文化財調査報告書第107集

第2節　遺構群の時期的変遷

遺構外の遺物を含め、今日までの遺構群の時期的な変遷、遺構・遺物のあり方について整理しておく。

1：縄文時代前期　諸磯b式期を主とする縄文前期土器片が中区西側を中心に散在する。それに伴う打製石器、石鏃がある。第40図20･21はともに前期的な形態を示し、土器と同時期とみておくが、21は水晶製石鏃で、前期後半における水晶利用を示すものとして興味深い。調査区内に居住痕跡はなく、遺物の組み合せから短期的な居住地としての利用が想定される。縄文土器は諸磯式以外にはなく、そのほかの時期には土地利用がなされなかったらしい。

2：平安時代（宮Ⅶ期）　3・4号竪穴および掘立柱建物群のうち、4・5号掘立の柱穴覆土出土の土器が本期

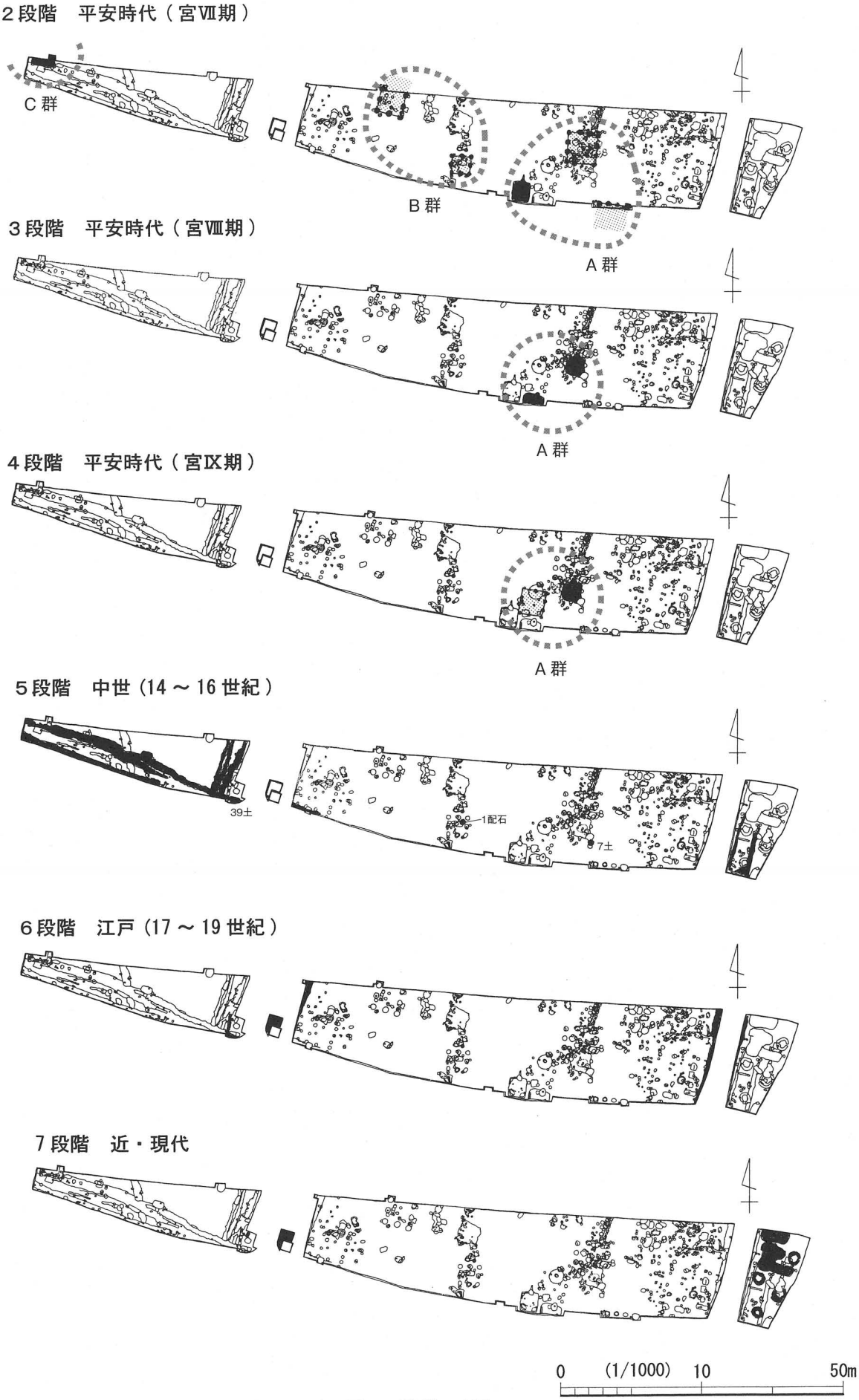

2段階　平安時代（宮Ⅶ期）
C群
B群
A群
3段階　平安時代（宮Ⅷ期）
A群
4段階　平安時代（宮Ⅸ期）
A群
5段階　中世（14～16世紀）
39土
1配石
7土
6段階　江戸（17～19世紀）
7段階　近・現代
0　(1/1000)　10　50m

図4　遺構の変遷

を示す。また第4節で室伏氏が報告するように1・2号掘立も同じ尺度で構築され、ほぼ同じ方向性を示すことから、掘立群のほとんどは同時期に計画、建築されたものとみておく。ただし室伏氏の分析では掘立群は8世紀後半に位置づけられる可能性が指摘されていて、本期以前に掘立群が先行する可能性がある。ここでは竪穴と掘立が伴うとし、掘立群と3・4号竪穴の同時存在を想定しておく。掘立群は最も規模が大きく3間×3間の柱配置をもつ5号掘立を中心的な母屋と考え、2間×3間と考えられる1・4号掘立を付属屋、2間×2間の2号掘立を倉庫とみておく。距離関係から1・5号掘立・3号竪穴と、2・4号掘立は別世帯の可能性があり、同時期における2群とみておきたい（前者をA群、後者をB群と仮称）。また1・5号掘立・3号竪穴のあり方から、掘立群に竪穴が1棟程度伴う可能性があり、同時期と見られる4号竪穴が西端に離れて存在することから別の一群があるとみておきたい（C群）。掘立群について、室伏氏は国司主導の計画性が伺われるとするが、掘立群から集落が出発するあり方は一般集落とは性格的に異なるものとみられる。遺跡周辺では本期以前において、土地利用がきわめて低調であったとみられることから、何らかの公権力、あるいは富豪層により土地開発への着手が行われたという見方は十分可能である。その目的はなにか、わからないといわざるを得ないが、空閑地に対する耕作地の開発などを想定するにとどめる。

3：平安時代（宮Ⅷ期） 1・2号竪穴のみで、1号竪穴は5号掘立と比べると主軸方向がやや南に振れている。それらは位置的に前段階のA群を継承するものと見られ、ほかのB・C群については調査範囲内では継続性が認められず、集落規模としては縮小、衰退したと考えられる。

4：平安時代（宮Ⅸ期） 1号竪穴のみであるが、隣接する3号掘立は主軸方向が同じで、同時期とみておく。A群を継承する建物群とみたい。なお、1号竪穴からは仏器とみられる仏鉢形土器が出土している。付近に寺が存在した証といえるが、清白寺の前身が本段階あるいは前段階あたりで成立したことが考えられる。

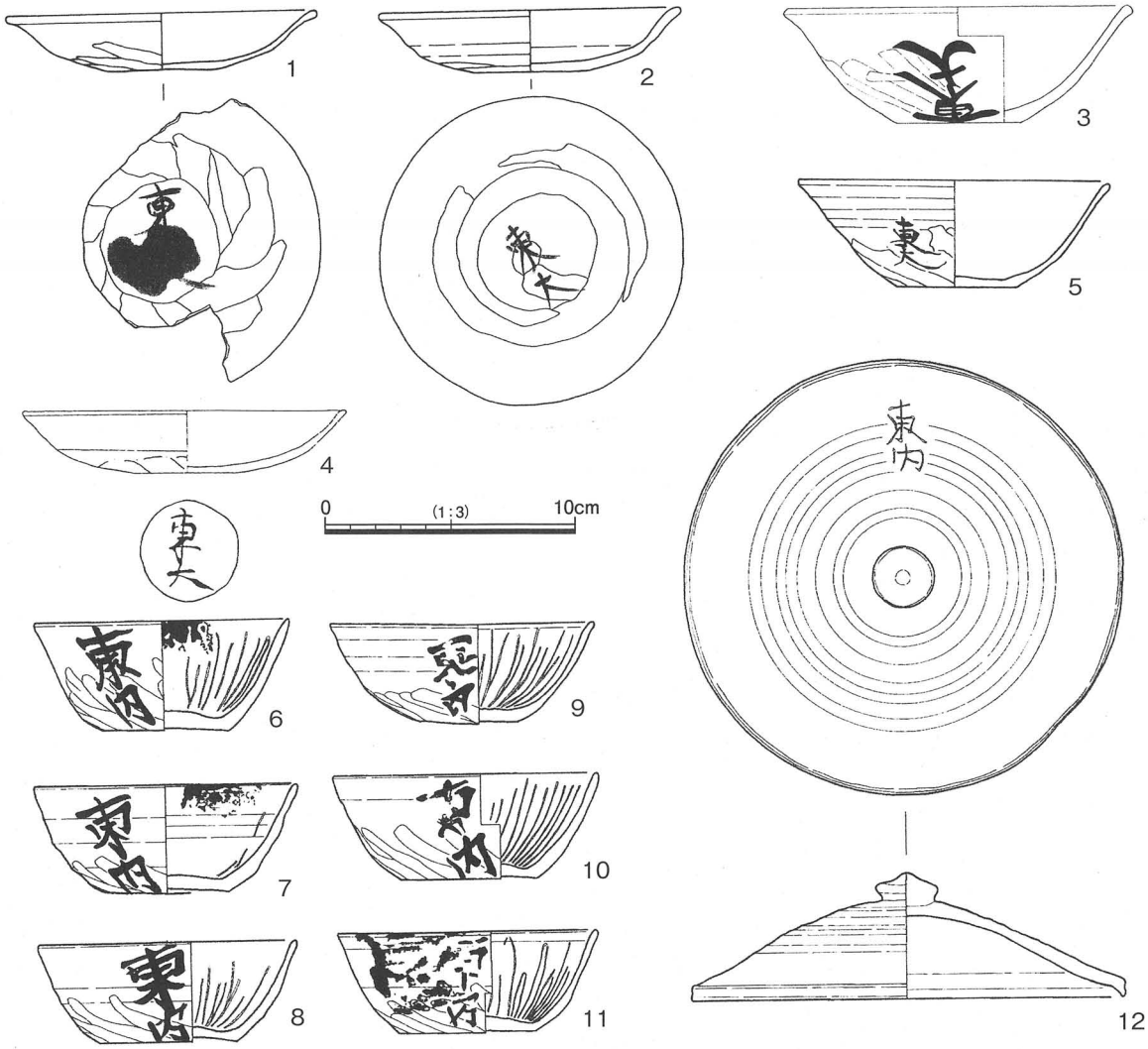
5：中世（14～16世紀） 溝の多くは本段階とみられ、道の側溝と理解されるものを含む。現道路に先行するものであり、周辺に広く認められる条里地割の一部を構成するもので、本地域での条里地割成立は中世とみておきたい。焼人骨が出土した1号配石、7号土坑も火葬墓に関わる遺構として、本段階の範疇で捉えておく。そのほか溝と重複する馬の埋葬墓である1号土坑は、時期は不詳ながら本段階とみたい。台座地点にある39号土坑も、六文銭の構成から中世段階の墓坑とみておく。現清白寺参道と重なる南北溝群が条里地割と関連することが明白ではあるが、条里地割施工ののち清白寺が開設されたのか、それ以前から存在した寺院の主軸方向を基準として周辺地割が設定されたのか、その前後関係は不明である。ただ、焼人骨土坑、土坑墓の分布が示すように、墓関連遺構が集中するのが特徴で、清白寺寺域として埋葬関連の遺構が周辺に構築されたのであろう。

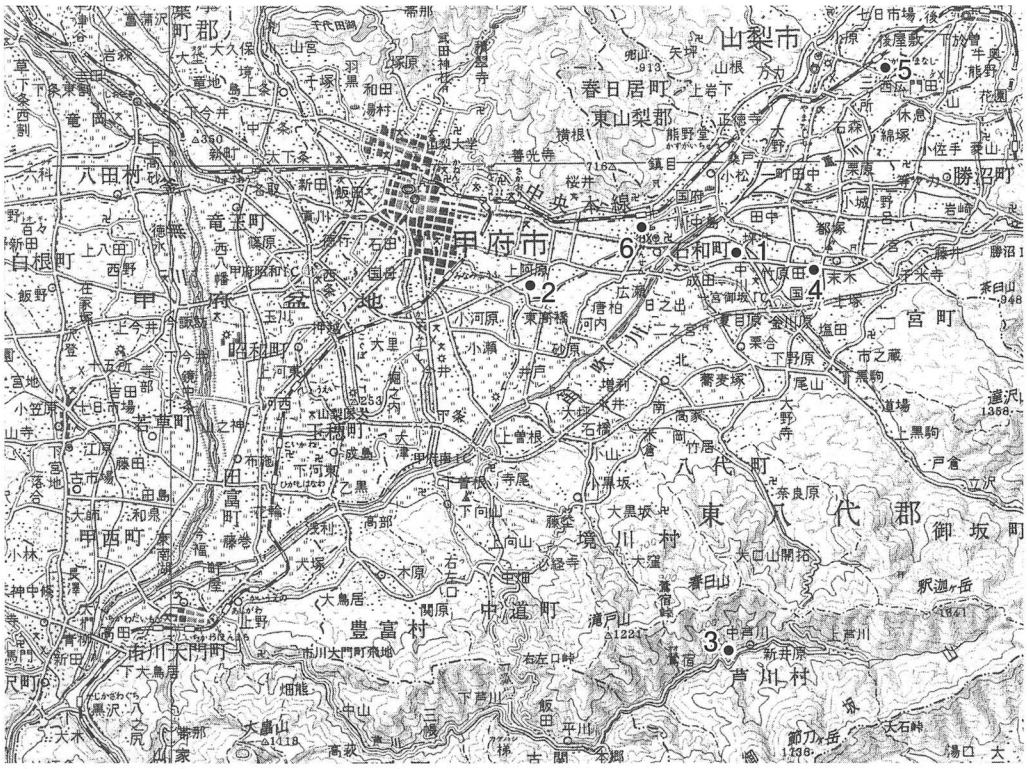
6：江戸（17～19世紀） 清白寺の南面入口として台座地点が整備される。石列、礫敷きがなされ、石仏台座が道に沿って配置される。現在標柱周辺にある石造物群が本来台座地点に存在したものと考えられるが、それらの年代から、対になる六地蔵石幢、六地蔵、念仏講塔の順に、元禄3年以降、江戸末にかけて順次整備、増加していったもので、参道は今日と同じ位置に固定されたものと見られる。

7：近・現代 東区内に戦時中、あるいはその後と考えられる長方形土坑が集中する。穴倉的なものかあるいは防空壕的なものと想像される。そのほかドーナツ状の溝が各所にみられたが、いずれも現代のモモ畑の果樹周囲の施肥用の溝とみられる。また細かな耕作痕が中区を中心に広く認められたが、それらは水田化される以前のやや古い時期の畑地痕跡である。

第3節 「東大」墨書について

三ケ所遺跡1号竪穴からは、甲斐型土師器坏（9世紀末～10世紀初頭）体部外面に正位で記された墨書文字「東大」が1点のみ出土した。山梨県内では、これまでに甲府盆地東部を中心に数遺跡で「東大」墨書土器が出土し、さらに文字を逆転させた「大東」の出土も知られているので、それらに関し若干の考察と集





1　大原遺跡
2　ヂクヤ遺跡(1・2)
3　堂所遺跡(3)
4　車地蔵遺跡(4)
5　三ケ所遺跡
6　松本塚ノ越遺跡(6～12)

図5　「東大」関連墨書土器と出土遺跡

成をしておきたい。

山梨県内の墨書・刻書土器については、2004年までの資料について、明治大学古代学研究所データベース（山梨県を平野修が集成・編集）で検索が可能となっており、類例を探すには大変便利である。ここでは「東大」「大東」が出土した遺跡をあげておく。

① 大原遺跡（笛吹市一宮町）「東大」9、「大東」3、「東大ヵ」3、「大東ヵ」1

② ヂクヤ遺跡（甲府市蓬沢町）「東大」3、「東大ヵ」3、「東□」1、「□大」1、「大ヵ東」1

③ 堂所遺跡（笛吹市芦川町中芦川）「東大」1

④ 車地蔵遺跡（笛吹市一宮町）「東大」1

⑤ 三ケ所遺跡（山梨市）「東大」1

現在のところ、三ケ所遺跡を含めて5遺跡あり、いずれも甲府盆地東部に分布が見られる。古代の郡域でいえば、山梨郡内に限定的といえるが、大原遺跡の概報（猪股ほか1990）にあるように「郷を越えて使用された文字」という指摘のとおりである。特徴としては大原、ヂクヤ遺跡のように複数の同名墨書をもつ遺跡、堂所、車地蔵、三ケ所遺跡のように1個体のみの事例をもつ遺跡がある。大原遺跡については、玉井郷の中心的な集落遺跡で竪穴数が数百軒に及ぶ大集落であり、ヂクヤ遺跡については、笛吹川支流に面し、物流の拠点である津の可能性が高いとされている。それに対し、三ケ所や堂所遺跡は竪穴数が少なく、集落規模としては極めて小規模といえる。さらにいえば、大原・ヂクヤ・車地蔵・三ケ所遺跡が盆地内の遺跡であるのに対し、堂所遺跡は芦川沿いの山中という立地上の違いがある。書かれた土器はいずれも甲斐型土師器で、坏、皿の2器種のみである。すべて墨書で、書かれた部位は底部外面が多いようであるが、体部外面もみられ、その場合正、倒の別がある。文字は書き慣れた感じを受けるものが多いが、同一人物の手によるものとは言いがたく、それぞれ書き手が異なると見たほうがよいだろう。時期的には甲斐型土師器が玉縁化する10世紀初頭前後～玉縁化が発達した時期といえ、暗文をもつ9世紀後半代にはなく、おおむね同一時期である。これらの遺跡分布をつなぐ共通項は見いだせないが、甲斐国の中心地であった笛吹市旧一宮町内に多い傾向があるといえそうである。

「東大」の意味について、森本圭一氏は「東大は、人名の一部なのか、平域木簡のように殿舎等の一部に関係あるものなのか興味をさそう」と記している（森本・竹内1975）。また堂所遺跡の報告の中で岡野秀典氏は、東大寺を総本山として建立された国分寺との関連を推測する。10世紀前半代には国分二寺修理に関する記事がみられることから、各地の国分二寺の荒廃状況が推測されるが、その材料調達のために芦川山中に集落が営まれたと考え、芦川山中が国分寺寺領ではなかったかと推測する。また官道、準官道との関連も指摘していて、上芦川を通過する若彦路から一宮方面への運送の利便性を考慮したためとみている。

なお、全国での有無を同データベースで検索したところ、「東大」はないが、「大東」については静岡県磐田市中泉の大宝院廃寺遺跡にて出土していることがわかった。また、以上の他に近年調査された富士河口湖町滝沢遺跡にて、「太東」が2・3例あることを調査担当の古川明日香氏（山梨県埋蔵文化財センター）よりご教示いただいた。滝沢遺跡例のありかたから、「大」が「太」に変換された事例があることがわかる。

そこで、ここではさらに広げて山梨県での「大」「東」「太」を含む墨書例を集成しておく。なお、「－ヵ」とする可能性の高い事例もあげておく（表12）。

「東」と関連性のある墨書としては「東大」「大東」のほか、「石禾東」「東石禾」（松原遺跡）、「東内」（松本塚ノ越遺跡）、「東山」（地耕面遺跡）がある。「石禾」は「石和」であり、郷名であることは明らかで、東を前後に付ける事例がある点は、「東大」と同じである。禾と大を字形の類似という点で関連付けが許されるならば、東大、大東は東石禾、石禾東と同義と推測することもでき、「東大」は「東石禾」の略といえよう。時期的に先行出現する松本塚ノ越遺跡の「東内」については内と大が発音的に同じであり、また内と大は文字としても類似するものである。したがって東大との類似度はより高いといえる。ただ「東大」のすべてを「東石和」と解釈することは、土器の分布状況から難しい。つまり位置的に石和郷東にあてはまらない遺跡にヂ

表12　山梨県内出土「東大」関連墨書一覧表（明治大学古代学研究所データベースを改変）

遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	記銘方向	時期	墨・刻	出典	発行年
朝気	甲府市		大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	『山梨県史』	2001
大坪	甲府市	2溝	大	土師	坏	体部内面	倒位	10c	線刻	大坪遺跡発掘調査報告書Ⅲ（『山梨県史』）	1996
		90ピット	大	土師	坏	体部内面	正位	10c	線刻		
大坪（第4次）		東区	大	土師	坏	底部外面	―	8c	墨書	大坪遺跡発掘調査会他『大坪遺跡－平成12年度調査地点の報告－』	2002
秋山氏館跡	甲府市	15号溝	大親	土師	坏	底部外面	―	9c	墨書	甲府市教育委員会『秋山氏館跡』甲府市文化財調査報告16	2001
		22号溝	太・太	土師	坏	体部外面	正位	9～10c	墨書・墨書		
ヂクヤ	甲府市	1号竪穴	東大ヵ	土師	坏	底部外面	―	10c	墨書	甲府市教育委員会『ヂクヤ遺跡』甲府市文化財調査報告22	2003
		2・3号竪穴	東大	土師	皿	底部外面	―	9～10c	墨書		
		2・3号竪穴	東大	土師	皿	底部外面	―	9～10c	墨書		
		2・3号竪穴	東大	土師	皿	底部外面	―	9～10c	墨書		
		2・3号竪穴	東口	土師	皿	底部外面	―	9～10c	墨書		
		2・3号竪穴	東大ヵ	土師	坏	体部外面	倒位	9～10c	墨書		
		遺構外	口大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		遺構外	油大	土師	坏	底部外面	―	10c	墨書		
		遺構外	東大ヵ	土師	坏	底部外面	―	9～10c	墨書		
		遺構外	大ヵ東	土師	坏	体部外面	倒位	9～10c	墨書		
		試掘T-4	東大	土師	坏	底部外面	―	9～10c	墨書		
鷹の巣	都留市	B地区	太	土師	坏	体部外面	横位	10～11c	墨書	都留市史　資料編　地史・考古（『山梨県史』）	1986
日下部	山梨市	2住居	口（大ヵ）	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書	〈山梨市文化財調査報告書第1集〉　日下部　日下部遺跡調査報告書　付　七日子遺跡・江曽原遺跡（『山梨県史』）	1987
上本田	韮崎市	11住居	大	土師	皿	底部外面		9c	線刻	上本田遺跡（『山梨県史』）	1992
宮ノ前	韮崎市	111住居	東／口（縦線5本）	土師	坏	体部外面	正位	9c	線刻	宮ノ前遺跡（『山梨県史』）	1992
		146住居	大	須恵	坏	体部外面	正位		線刻		
		239住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	9～10c	線刻		
		337住居	大	須恵	坏	体部外面	倒位	9c	線刻		
川上道下	南アルプス市（旧櫛形町）	7住居	口（大ヵ）	土師	坏	底部外面		10c	墨書	『山梨県史』	2001
		10住居	大／口（大ヵ）	土師	坏	体部外面／底部外面	倒位／―	9c	墨書		
		10住居	口（大ヵ）	土師	坏	体部外面	倒位ヵ	9c	墨書		
		12住居	口（大ヵ）	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		12住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	9c	墨書		
		12住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		12住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		12住居	口（大ヵ）	土師	坏	体部外面	正位ヵ	9c	墨書		
		12住居	大	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
		12住居	口（大ヵ）	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
		12住居	口（ﾌｶ大ヵ）	土師	皿	体部外面	正位	9c	墨書		
溝呂木道上第5	南アルプス市（旧若草町）	SK08	大ヵ前家	須恵	坏	底部外面	―	8c	墨書	若草町教育委員会『溝呂木道上第7遺跡（第Ⅱ地点）』若草町埋蔵文化財調査報告書第4集	2003
城下	北杜市（旧大泉村）	グリッド	大	土師	坏	体部外面	横位		墨書	〈山梨県埋蔵文化財センター調査報告第58集〉　城下・原田遺跡（『山梨県史』）	1990
		表採	口（太ヵ）	土師	皿	体部外面	正位		墨書		
寺所	北杜市（旧大泉村）	2掘立柱建物	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	〈山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集〉　寺所遺跡（『山梨県史』）	1987
寺所（第2次）		35号住居跡	東	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	大泉村教育委員会『寺所遺跡（第2次発掘調査報告書）』大泉村埋蔵文化財調査報告第14集	2000
		39号住居跡	大	土師（黒色）	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
原田	北杜市（旧大泉村）	2住居	大	土師	皿	底部外面			墨書	〈山梨県埋蔵文化財センター調査報告第58集〉　城下・原田遺跡（『山梨県史』	1990
		2住居	口（大ヵ火ヵ）	土師	坏	体部外面	正位		墨書		
		4住居	大	土師	坏	体部外面	正位		墨書		
		8トレンチ	大	土師	坏	体部外面	正位		墨書		
豆生田第3	北杜市（旧大泉村）	1住居	大	土師	皿	体部外面	倒位	10c	線刻	〈大泉村埋蔵文化財調査報告第4集〉　豆生田第3遺跡（『山梨県史』）	1986
旧菅原小学校	北杜市（旧白州町）	2住居	東	土師	坏	体部外面	正位		墨書	『山梨県史』	2001
		2住居	東	土師	坏	体部外面	正位		墨書		
		4住居	東／―	土師	坏	底部外面			墨書		
		4住居	口（東ヵ）	土師	坏	体部外面	倒位		墨書		
所帯Ⅰ	北杜市（旧白州町）	5住居	大	須恵	坏	体部外面	倒位	9c	墨書	所帯Ⅰ遺跡・所帯Ⅱ遺跡（『山梨県史』）	1989
藤林寺跡	北杜市（旧高根町）	1住居	口（大ヵ）	土師	坏	体部外面	倒位ヵ		墨書	『山梨県史』	2001

遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	記銘方向	時期	墨・刻	出典	発行年
湯沢	北杜市(旧高根町)		□(大ヵ)	土師	坏				線刻	『山梨県史』	2001
			□(太ヵ)	土師	坏	体部外面	正位		墨書		
			□(大ヵ)	土師	坏	体部外面～底部外面			墨書		
		表採	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面			墨書		
塩川	北杜市(旧須玉町)	9住居	□(大ヵ)	土師	坏	体部外面	正位ヵ	9～10c	墨書	〈山梨県埋蔵文化財センター調査報告第70集〉 塩川遺跡(『山梨県史』)	1992
西川	北杜市(旧須玉町)	1住居	大	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書	〈山梨県埋蔵文化財センター調査報告第37集〉 西川遺跡(『山梨県史』)	1988
大豆生田	北杜市(旧須玉町)	C地区B3	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面ヵ 底部内面ヵ			線刻	山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡須玉町内－(『山梨県史』)	1976
村之内Ⅲ	北杜市(旧明野村)	1住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書	〈明野村文化財調査報告第9集〉 村之内Ⅱ・Ⅲ 高台・中谷井	1995
		1住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
境原	北杜市(旧長坂町)	5号住〈A区〉	太	土師(黒色)	坏	体部外面	正位	9～10c	墨書	長坂町教育委員会他『柳坪南遺跡・境原遺跡』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集	1997
上ノ原	北杜市(旧須玉町)	A-7住	大	土師	坏	体部外面	倒位	9c	線刻	上ノ原遺跡発掘調査団『上ノ原遺跡【本文・写真図版編】』	1999
		C-4住	大	土師	坏	底部外面	―	9c	線刻		
		C-21住	大	土師	坏	体部外面	倒位	9c	墨書		
		C-72住	大	土師	皿	底部外面	―	9c	墨書		
		C-93住	大	土師	坏?	体部外面	正位	9c	墨書		
		C-93住	大・口	土師	皿	底部外面・底部内面	―・―	9c	墨書・線刻		
腰巻北	北杜市(旧須玉町)	―	大徳	土師	坏	底部外面	―	9c	墨書	須玉町『須玉町史第1巻 考古・古代・中世』	1999
		―	大徳	土師	坏	底部外面	―	9c	墨書		
紺屋(第2次)	北杜市(旧長坂町)	1号住居	東	土師	皿	底部外面	―	9c	墨書	長坂町他『紺屋遺跡－第2次発掘調査報告書－』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第19集	2000
		7号土坑	東ヵ	土師	皿	底部外面	―	9c	墨書		
梅之木(第1次)	北杜市(旧明野村)	21号住	東口	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書	山梨県明野村教育委員会他『梅之木遺跡Ⅰ』明野村文化財調査報告14	2002
		72号住	大	土師	坏	体部外面	倒位	9～10c	墨書		
寺本廃寺	笛吹市(旧春日居町)	僧房址	□(東ヵ)	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書	寺本廃寺 第1・2・3次発掘調査報告書(『山梨県史』)	1988
御幸道	笛吹市(旧石和町)	1住居	太	土師	皿	底部外面		10c	墨書	〈石和町埋蔵文化財調査報告第7集〉 御幸道遺跡 平成企画調査地点(『山梨県史』	1992
		1住居	川大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
大原	笛吹市(旧一宮町)	E6住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	『山梨県史』	2001
		E6住居	□(大ヵ)	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		E6住居	東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E6住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		E7住居	□(日ヵ)下	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		E7住居	□(東ヵ)大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		E7住居	東大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		E26住居	大田	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		E26住居	大田	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E26住居	大田	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		E32住居	□(東ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		E37住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E41住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E49住居	大	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
		E49住居	□(東ヵ)	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
		E50住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		E50住居	東	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		E64住居	東大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		E64住居	□(東ヵ)	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		E92住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E97住居	東	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		E100住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E100住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		E100住居	大	土師	高台坏	底部外面		9c	墨書		
		E103住居	□(大東ヵ)	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		W4住居	東大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		W16住居	太	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W16住居	東大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		W16住居	太	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W16住居	東大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		

遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	記銘方向	時期	墨・刻	出典	発行年
		W16住居	東大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		W16住居	太	土師	皿	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W19住居	□(太ヵ)	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		W19住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		W20住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W96住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W99住居	□(大ヵ)	土師	皿ヵ	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	□(大ヵ)	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	皿	体部外面	横位	10c	墨書		
		W103住居	大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		W103住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W103住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W105住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		W105住居	太□	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W105住居	太	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W110住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面			墨書		
		W127住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W127住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W134住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W159住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		W159住居	大	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		W162住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W162住居	大／×	土師	坏	体部外面／底部外面	倒位／—	10c	墨書／線刻		
		W162住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		W162住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W162住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W162住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W162住居	大	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
		W162住居	大	土師	鉢	体部外面	正位	10c	ヘラ書		
		W166住居	□(大ヵ)	土師	皿	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W171住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W174住居	東	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		W176住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		W176住居	大柴	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W176住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W176住居	□□(東大ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W176住居	□□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W177住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W186住居	大	土師	坏			9c	線刻		
		W194住居	□(大ヵ)／□	土師	坏	体部外面／底部外面		9c	線刻		
		W210住居	太	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W210住居	大	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		W210住居	太	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W211住居	□(大ヵ)	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		W211住居	太	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		W225住居	東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		W229住居	□(太ヵ)	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		W229住居	太	土師	皿	底部外面		10c	墨書		

遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	記銘方向	時期	墨・刻	出典	発行年
		W248住居	□／大	土師	坏	体部外面／底部外面	正位／—	10c	墨書		
		遺構外	大山	土師	坏	底部外面		8c	線刻		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	体部外面	倒位	9c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大田	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大□	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	東大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	東大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		遺構外	□（大ヵ）	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		遺構外	□（東ヵ）	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		遺構外	太	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		遺構外	太	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	東大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	大東	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	大	土師		底部外面		9c	墨書		
		遺構外	東	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□（大ヵ）	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□（東ヵ）	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大東	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	□（東ヵ）	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		W1溝	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□□（東大ヵ）	土師	坏	体部外面	倒位	10c	墨書		
		遺構外	大	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	太	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□（東ヵ）	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□□（東大ヵ）	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	□東	土師	皿	体部外面	正位	10c	墨書		
甲斐国分寺跡	笛吹市（旧一宮町）	84－5住居	□大	土師	坏	体部外面～底部外面	正位ヵ	10c	墨書	『山梨県史』	2001
甲斐国分尼寺跡	笛吹市（旧一宮町）	3－11住居	大／大	土師	蓋	体部外面	正位	9c	線刻／墨書	『山梨県史』	2001
		2－4住居	大	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		2－4住居	□（大ヵ）	土師	皿	底部外面		9c	墨書		
		遺構外	大	土師	皿ヵ坏ヵ	底部外面		10c	墨書		
		3－14住居	大	土師	坏	底部外面		10c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		2－8住居	大井	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		2－11住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書		
		2－12住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書		
		2－14住居	東□	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		2－25住居	大伴	土師	坏	体部外面	横位	8c	墨書		
		2－6溝	大	土師	坏	底部外面		8c	墨書		
		遺構外	大	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
		遺構外	大井	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		
金山	笛吹市（旧一宮町）	30－4住居	大	土師	皿	底部外面		10c	墨書	『山梨県史』	2001
北中原	笛吹市（旧一宮町）	40住居	大	土師	坏	底部外面		9c	墨書	『山梨県史』	2001
北堀	笛吹市（旧一宮町）	遺構外	大□	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	『山梨県史』	2001
狐原	笛吹市（旧一宮町）	10住居	□（大ヵ）	土師	皿	底部外面		9c	墨書	〈県埋蔵文化財センター調査報告第120集〉 狐原遺跡（『山梨県史』）	1996
		遺構外	大／レ	土師	坏	底部外面		9c	墨書／線刻		

遺跡名	所在地	出土遺構	釈文	器質	器種	記銘部位	記銘方向	時期	墨・刻	出典	発行年
車地蔵	笛吹市（旧一宮町）	1住居	東大	土師	皿	底部外面		10c	墨書	勝沼バイパス道路建設に伴う古代甲斐国の考古学調査続編（『山梨県史』）	1975
		遺構外	口（東ヵ）	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
松原	笛吹市（旧一宮町）	23－1住居	大万	土師	坏	体部外面～底部外面	正位	10c	墨書	松原遺跡（『山梨県史』）	1992
		13住居	大房	土師	堝	体部外面	正位	9c	墨書	『山梨県史』	2001
		13住居	石禾東	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
		13住居	東石禾〔東と石禾は別筆〕	土師	坏	底部外面		9c	墨書		
地耕免	笛吹市（旧御坂町）	1溝	東山	土師	坏	底部外面		8c	墨書	〈県埋蔵文化財センター調査報告第73集〉 地耕免遺跡（『山梨県史』）	1992
二之宮	笛吹市（旧御坂町）	172住居	大	土師	坏	体部外面	正位	10c	墨書	〈県埋蔵文化財センター調査報告第23集〉 二之宮遺跡（『山梨県史』）	1987
下長崎	笛吹市（旧八代町）	7列石	大	土師	坏	底部内面		10c	ヘラ書	〈県埋蔵文化財センター調査報告第44集〉 下長崎遺跡・両の木神社遺跡（『山梨県史』）	1989
		包含層	口（口に「大」ヵ）	土師	坏	底部外面		9～10c	墨書		
堂所	笛吹市（旧芦川村）	1号住	東大	土師	坏	体部外面	倒位	9～10c	墨書	芦川村教育委員会『堂所遺跡発掘調査報告書』芦川村埋蔵文化財調査報告書第1集	1999
横町	笛吹市（旧春日居町）	遺構外	大	土師	坏	底部内面	―	10c	ヘラ	山梨県教育委員会他『横町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第200集	2002
松本塚ノ越（ホテルやまなみ地点）	笛吹市（旧石和町）	8号住	大	土師	坏	底部外面	―	9c	線刻	石和町教育委員会他『松本塚ノ越遺跡〔ホテルやまなみ地点〕』石和町埋蔵文化財調査報告第8集	2003
		20号住	東内	土師	蓋	体部外面	倒位	9c	線刻		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		20号住	東内	土師	坏	体部外面	正位	9c	墨書		2003
		東区遺構外	大ヵ	土製	紡錘車	側面	横位	―	線刻		2003
狐原Ⅰ	上野原市（旧上野原町）	住居	大	土師	坏	体部外面	横位	10c	墨書	『山梨県史』	2001
五反田	甲州市（旧塩山市）	遺構外	大内	土師	坏	底部外面	―	9c	墨書	山梨県教育委員会他『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第194集	2002
下西畑	甲州市（旧塩山市）	遺構外	大	土師	坏	―	―	―	線刻	山梨県教育委員会他『下西畑遺跡・西畑遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第196集	2002

クヤ、堂所遺跡があり、石和の西、南西に所在する。

「大」と関連する墨書には、ほかに「大親」（秋山氏館跡）、「油大」（ヂクヤ遺跡）、「大前家」（溝呂木道上遺跡）、「大徳」（腰巻北遺跡）、「川大」（御幸道遺跡）、「大田」「大柴」「大山」（大原遺跡）、「大伴」「大井」（甲斐国分尼寺跡）、「大万」「大房」（松原遺跡）、「大内」（五反田遺跡）がある。人名・姓とみられる事例（大徳、大万、大柴、大伴、大井）が多いなかで、「油大」「川大」のように後ろに「大」を付けた事例は「東大」と同じ用い方といえ、関連性が伺われる。

各遺跡の墨書例を見た場合、「東」と「大」が同じ遺跡で出土する傾向があることがわかる。ともに出土している遺跡としてはヂクヤ、宮ノ前、寺所、梅ノ木、大原遺跡、国分尼寺跡があり、単なる偶然とは考えにくい。また「大」と「太」も秋山氏館跡、御幸道、大原遺跡のように同一遺跡で出土する傾向があり、混同して用いられた、あるいは同義文字として変換されることがあったと思われる。したがって滝沢遺跡の「太東」も「東大」「大東」と同じ文字とみてよいだろう。

「東大」の意味を国分寺修復と関連させる岡野氏の説について、一宮町周辺に多い傾向は支持を強めるものである。しかし墨書土器が10世紀初頭に限定的で、国司、国衙の勢いが衰退する時期に国分二寺の大規模な修復があったのかどうか、実態として不明であり、調査状況や瓦の様相から検証する必要があろう。「東大」は全国的に見ればかなり特殊な文字で、「東大寺」と関係するのであれば全国的にもっと出土してもよいかと思われるが、甲斐以外での類例がないことから、国分寺との関連性を指摘することは難しい。また先にあげたように、「石和東」と同義として地名とみるのは、分布状況から全ての事例に当てはめることはできないと思われる。別の考え方として、氏族名とみる見方がある。「大東」は苗字として今日でも存在するほか、古川明日香氏のご教示によれば、山梨郡散事小長部と同族とされる太氏があるという。

この点について原秀三郎氏は、『古事記』神武段によると小長谷部は神武天皇の皇子神八井耳命を始祖とする19氏族のひとつで、その同族には意富（飫富・多・太とも）臣を筆頭とする小子部連、科野国造、常道の仲国造らがいたことを指摘する（原2002）。さらに小長谷部集団が分布する駿河国磐田郡飫宝郷を意富（多・太・大郷）と考え、意富（太）氏の姓と郷名が一致する例として注目する。三ケ所遺跡が山梨郡大野郷内に位置すると考えられること、山梨郡散事としての小長谷部の存在が明らかなことから、大野郷は太（意富・飫富・多）郷であって、太氏との関連があるという見方も可能となってくる。

なお補足するならば、山梨郡散事小長谷部に関する史料は2点ある（山下2009）。天平10年（738）の正倉院文書「駿河国正税帳」記載の部領使小長谷部麻佐（甲斐国より御馬献上のため駿河国を通過した際に同国6郡から食糧を支給された）と、天平10年（738）正倉院文書「駿河国正税帳」記載の小長谷部練麻呂（甲斐国へ帰国する防人39名が駿河国通過の際に同国6郡より食糧を支給された）の2名に関するものである。ここでは小長谷部が山梨郡内に役人として居住していたことを確認し、大野郷との関連を示唆するものとみておきたい。このように姓としての可能性も、ひとつの有力説として浮上する。

ここでは関連墨書の検討、一遺跡内での文字の組み合わせを中心に「東大」墨書の意味について検討した。今後の事例増加を待つとともに、各地の事例を「太氏」との関連で注目する必要性を感じる。

【参考文献】

猪股喜彦ほか　1990『大原遺跡発掘調査概報』一宮町遺跡調査会・一宮町教育委員会
原秀三郎　2002「第三章第一節　王領の設置と壬生部」『地域と王権の古代史学』塙書房
山下孝司　2009「古代甲斐国の人名」『山梨考古学論集Ⅵ』山梨県考古学協会30周年記念論文集
森本圭一・竹内清志　1975「杭No.280地点　第1号住居址」『勝沼バイパス建設に伴う古代甲斐国の考古学調査（続編）』山梨県教育委員会
岡野秀典　1999「まとめ」『堂所遺跡発掘調査報告書』芦川村埋蔵文化財調査報告書　第1集　芦川村教育委員会
志村憲一ほか　2003『ヂクヤ遺跡――一般廃棄物最終処分場建設に伴う発掘調査報告書―』甲府市文化財調査報告書22　甲府市教育委員会ほか
小渕忠秋・阿部勲　2003『松本塚ノ越遺跡（ホテルやまなみ地点）』石和町埋蔵文化財調査報告書　第8集　石和町教育委員会ほか

第４節　三ケ所遺跡の掘立柱建築について

室伏　　徹

三ケ所遺跡からは５棟の古代の掘立柱建築が検出されている。各建物の建築単位で分析すると、

１号掘立柱建物　側柱（3.50 尺：1.06 m）5/3 × 4/2 ？

２号掘立柱建物　側柱（3.50 尺：1.06 m）3/2 × 3/2

３号掘立柱建物　側柱（3.50 尺：1.06 m）4/3 × 4/2

４号掘立柱建物　側柱（3.50 尺：1.06 m）6/3 ？× 4/2

５号掘立柱建物　側柱（3.40 尺：1.03 m）4/3 × 4/3

となる。いずれも桁行３間から２間、梁行３間から２間の小規模側柱構造建築で、山梨県内の集落遺跡で一般的に見出されるものであるが、

１）建築単位がほぼ同じであること

２）建物の方位が一致し、ある程度の距離を置いて配置されていること

３）規模構造が建物ごとに異なっていること

などの、特色を見出すことができる。

以上から掘立柱建築群は、構造の違いから異なる役割を持つ建物として、殆ど同時に計画的に配置された一群を成す建物群であると考えられる。ところが、このことは逆に、この一群を成す建物以外が無いこと、つまり建替えなどの行為が行われなかったことを意味している。

建物の建築年代は、柱穴内の出土遺物から９世紀後半代が想定されるが、平城宮内裏北官衙遺構の建築単位は（3.25 尺：0.985 m）から（3.90 尺：1.182 m）で、８世紀後半の正倉院の建築単位は（3.88 尺 1.176 m）、８世紀末から９世紀前葉の平安京右京六条一坊の邸宅遺構は（3.90 尺：1.182 m）～(4.50 尺：1.364 m）を図り、山梨県でも８世紀後半に整備されたと考えられる甲斐国分寺塔遺構が (3.52 尺：1.067 m) を測ることから、これらと比較しても８世紀後半で９世紀には降らない年代と考えられる。この遺跡から検出され、掘立柱建築に重複する竪穴住居は、９世紀後半から 10 世紀前葉の小型住居が４軒だけであり、これらの竪穴住居の関係者が設置した掘立柱建物とは考えにくいことも、時代を遡らせる理由の一つである。

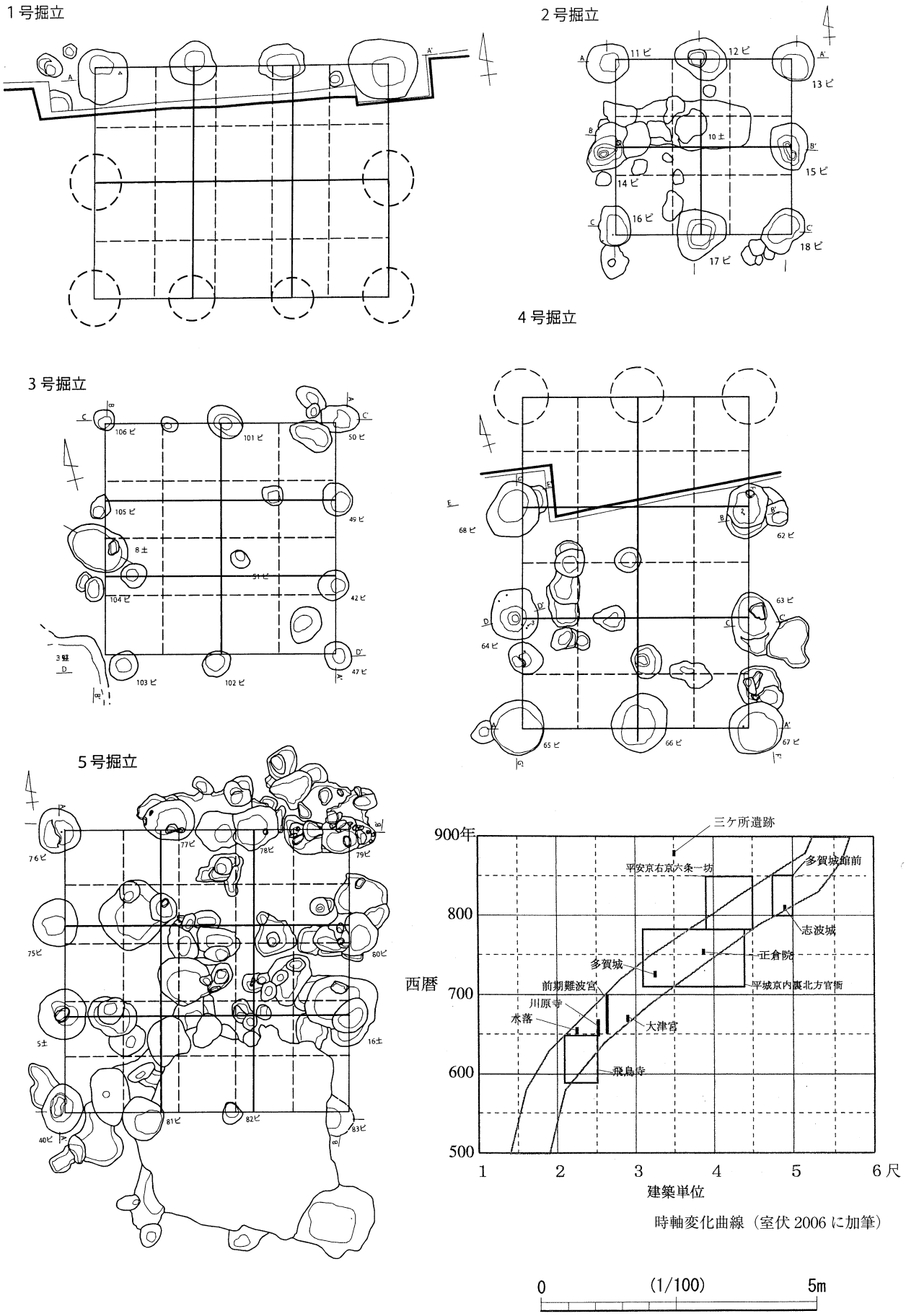
三ケ所遺跡付近は、磯貝正義の甲斐国の郡郷配置の復元によれば、和名類聚抄の山梨西郡の大野郷の北側で、山梨東郡の於曽郷と山梨西郡の加美郷の間に挟まれた空白地帯に当たっている。

８世紀後半は、甲斐国分寺の造営が始まる時期で、各国の国府もこの時期から造営が始まり、郡司にかわり国司の指揮権が強化される時期に当たり、この時期に掘立柱建築を計画的に配置する集落が設けられたとするなら、国司の影響を無視できない。下って９世紀前葉は、巨麻郡に穂坂、柏前、真衣野３ヶ所の御牧が設置された時期に当たり、その開発のため、山梨郡から等々力郷や栗原郷の関係者が移住し、同名郷が新設された可能性が指摘されている。牧を統括する牧監が甲斐に設置されたのは天長４年（827）であるから、設置の初期段階では国司がその指揮権を発動したと考えられる。８世紀後半に設置された計画的な集落が９世紀前半には営まれなくなったことが、山梨郡関係者による巨摩郡の御牧開発に連動したものとするなら、三ケ所遺跡の調査成果は興味深いものといえる。

平安時代末以降、三ケ所遺跡から北側の甲府盆地北東部の一帯は牧荘と呼ばれるようになる。しかし、その語源となった牧については、成立年代、名称を含め何ら記録が無く、実態が把握されていない。このことから三ケ所遺跡とともに、さらに北側にあたる鍛冶遺構を伴う日下部遺跡なども含め、この地域の奈良・平安時代の遺跡は注視する必要があると考えられる。

【註】

ここでいう建物表記法（建築単位表記）について補足しておく（室伏　2006）。



時軸変化曲線（室伏 2006 に加筆）

図6　掘立柱建物の建築単位と年代

例えば、桁行３間、梁行２間の側柱建物で、建築単位が3.25尺で桁行４単位、梁行が３単位の掘立柱建物の場合、

側柱（3.25）4/3 × 3/2

｛側柱・総柱｝（建築単位）｛桁行単位数／桁行柱間数｝× ｛梁行単位数／梁行柱間数｝ ＋ ｛廂の方位｝ ｛廂幅の単位数｝

と表記する。基準値、物差しとなる長さを建築単位とし、その方眼上に四隅の柱位置を決め、間の柱の位置を柱間数で均等に割った位置とする建築設計の仕方があるという考え方によるもので、建築単位は時代によって変化し、新しくなるほど建築単位が大きいという傾向（時軸変化曲線）が指摘されている。また建物の性格によっては建築単位を２～５倍にして、柱間を大きくする倍尺運用基準があることが判明しており、そうした捉え方で遺構の性格、年代を解明できる可能性があるという。

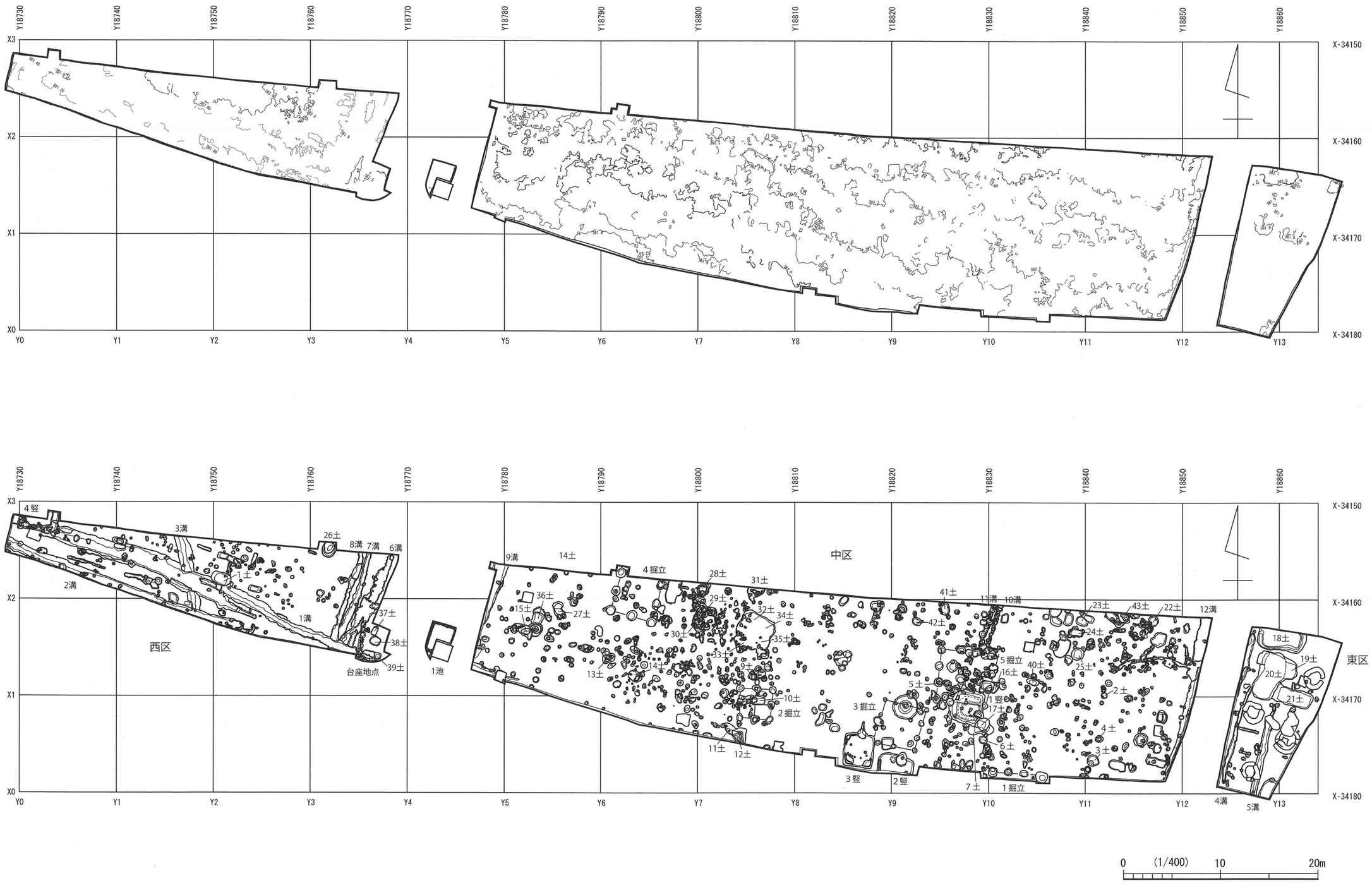
ただ、本遺跡で柱穴から出土している土師器は９世紀後半であり、それらが建物撤去後に伴う廃絶時期以降の年代を示す可能性もあるものの、室伏氏の時期推定とは大きく食い違いをみせる結果となっている。時軸変化曲線を見直す必要、あるいは地方への波及といった時間差を考慮すべきなのか、地域的に保守的な様相も考えられ、必ずしも一律に進化論的発展が展開しなかったことも念頭に置くべきであろう。　（櫛原）

【参考文献】

室伏徹　2006「奈良・平安時代建築解析法としての建築単位の提言」『掘立柱・礎石建物建築の考古学－都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法－』帝京大学山梨文化財研究所

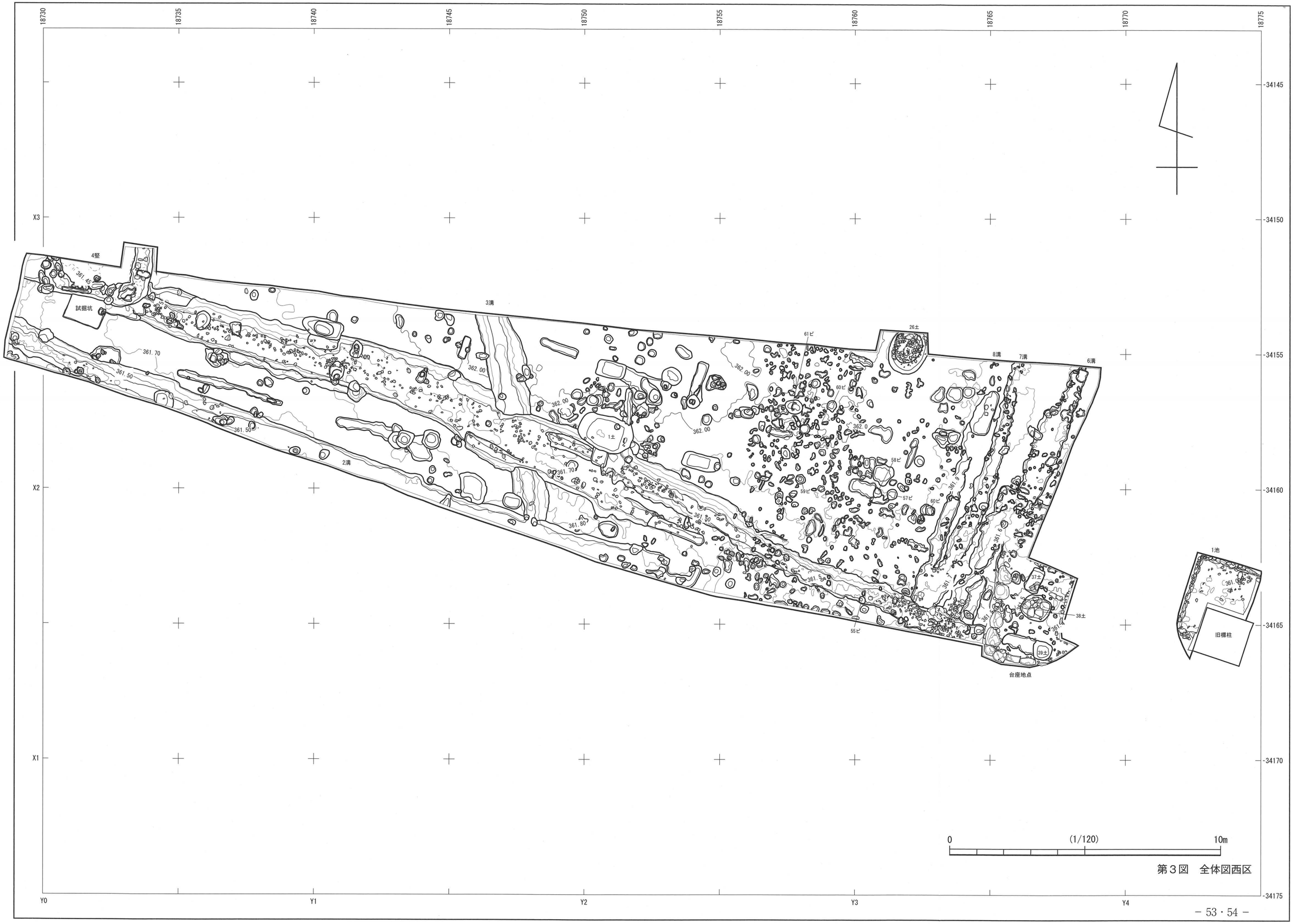
最後ではあるが、本調査から報告書刊行に至るまでの間、多くの方々にお世話になった。調査にご理解を示された山梨市、御指導いただいた山梨市教育委員会、参道近くでの調査でご迷惑をおかけした清白寺様、ご教示いただいた地元の方、調査および整理作業に従事された調査スタッフの方々、特別寄稿をいただいた植月学氏、室伏徹氏、そのほか多くの方々のご理解、ご協力、ご尽力にあらためて感謝しつつ、報告の結語としたい。

第１図　調査区及び周辺

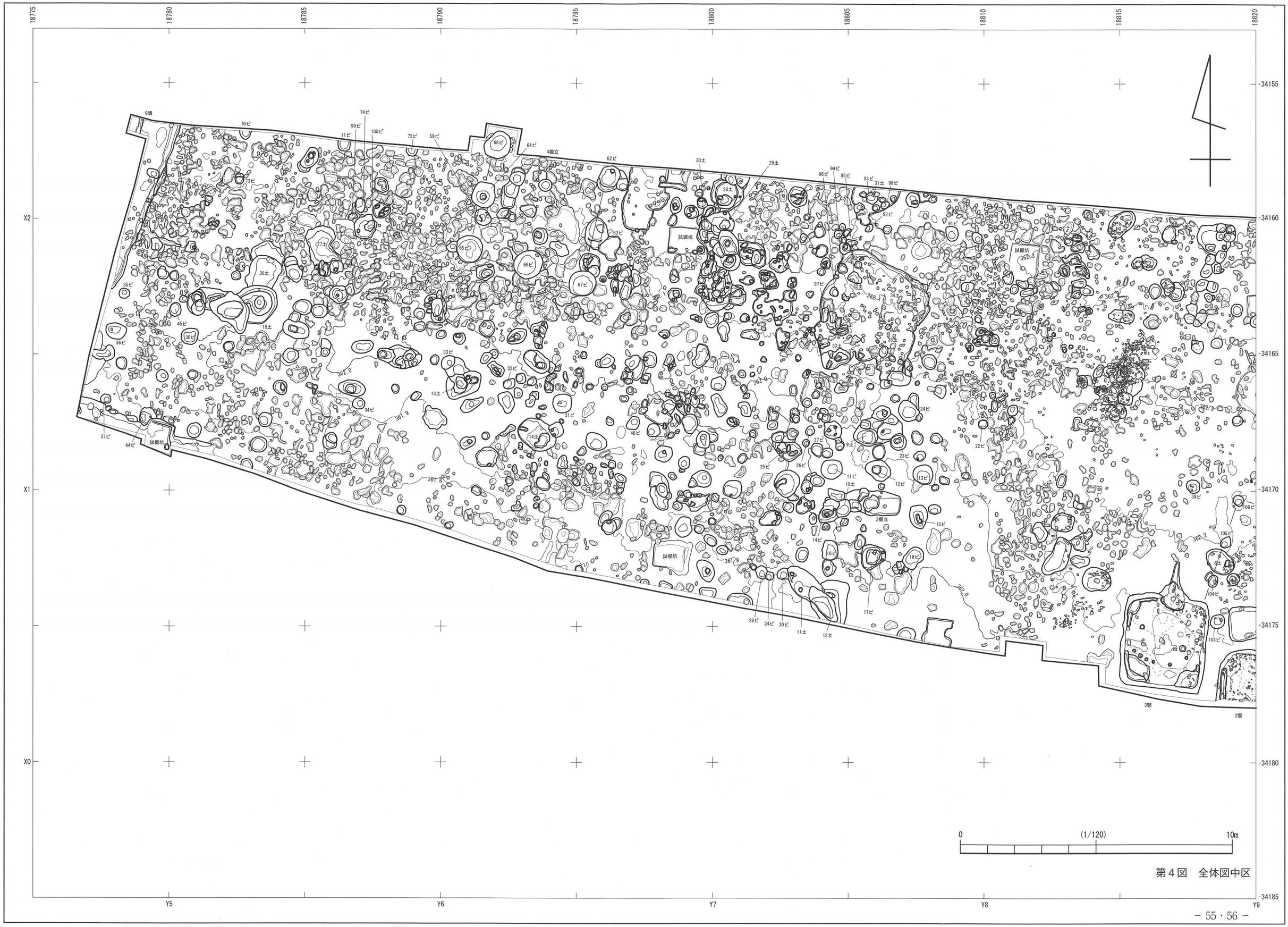


0 (1/400) 10 20m

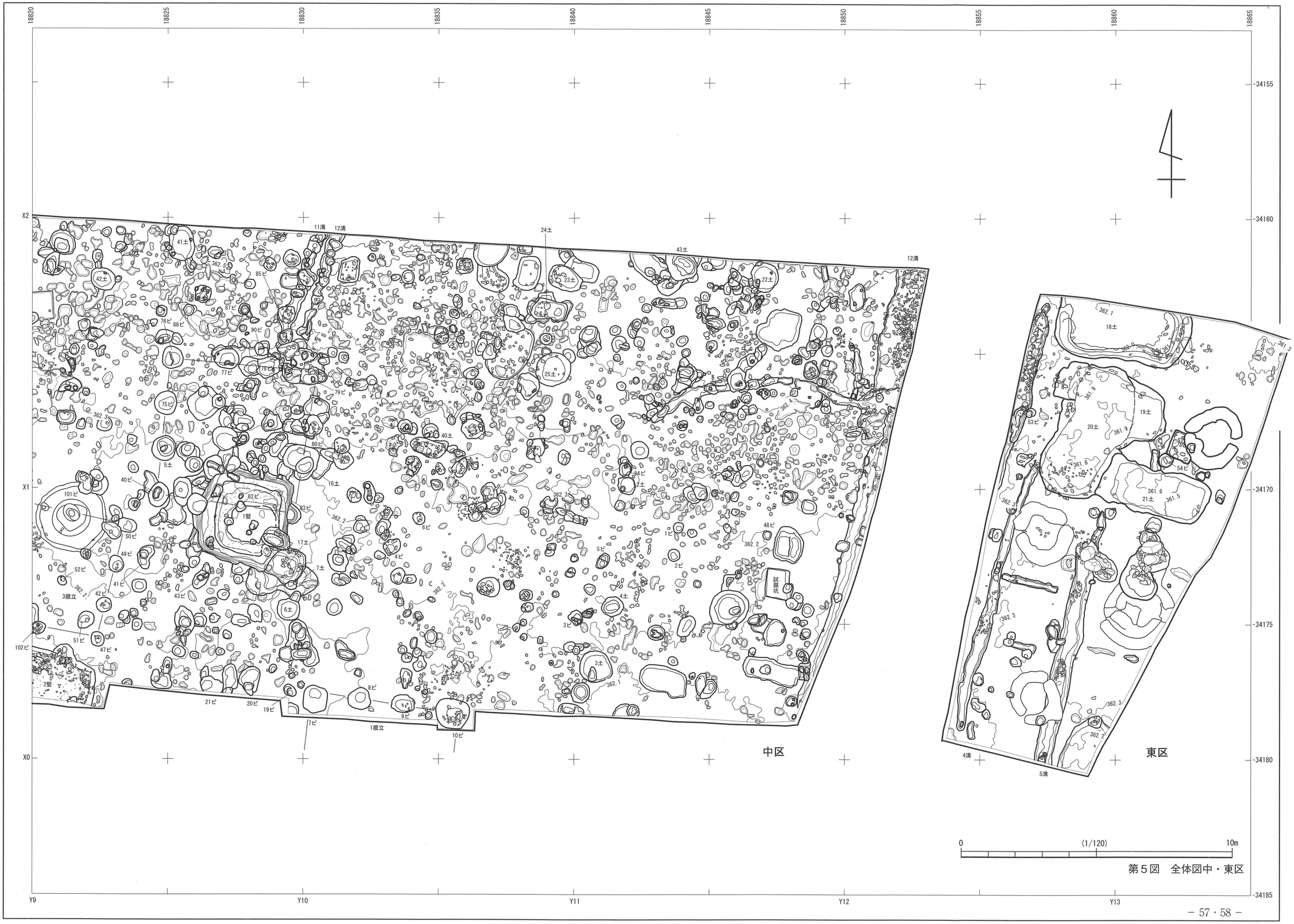
第２図　全体図


18730
18735
18740
18745
18750
18755
18760
18765
18770
18775
X3
X2
X1
34145
34150
34155
34160
34165
34170
34175
Y0
Y1
Y2
Y3
Y4
4竪
試掘坑
361.45
361.70
361.50
361.80
3溝
2溝
1土
26土
61ピ
60ピ
59ピ
58ピ
57ピ
55ピ
362.00
8溝
7溝
6溝
37土
38土
39土
台座地点
1池
旧標柱
0
(1/120)
10m

第３図　全体図西区

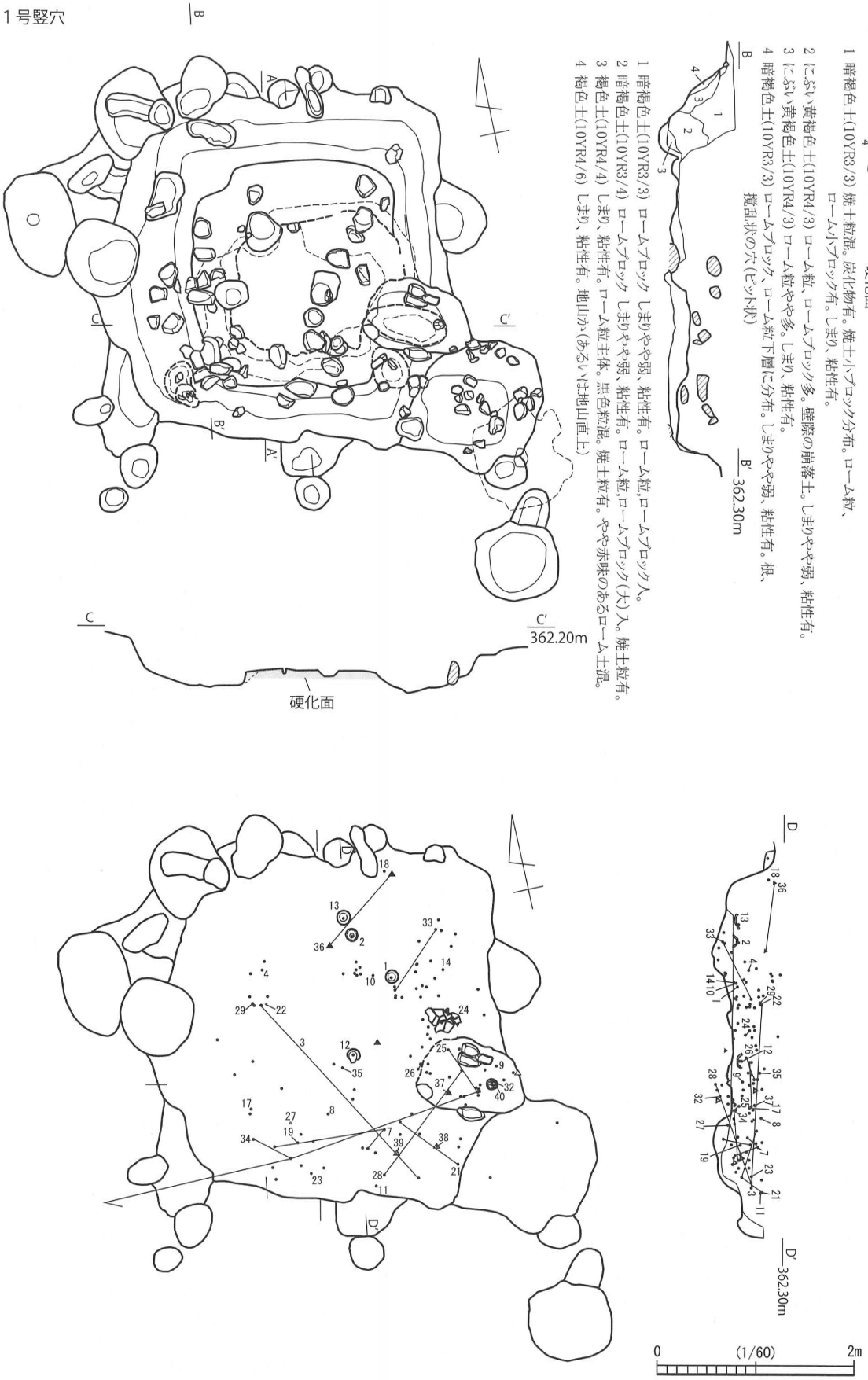

18775
18780
18785
18790
18795
18800
18805
18810
18815
18820
-34155
-34160
-34165
-34170
-34175
-34180
-34185
X2
X1
X0
Y5
Y6
Y7
Y8
Y9
9溝
74ピ
70ピ
99ピ
71ピ
100ピ
72ピ
59ピ
68ピ
64ピ
4掘立
62ピ
30土
29土
96ピ
94ピ
95ピ
93ピ
31土
98ピ
28土
92ピ
91ピ
73ピ
63ピ
試掘坑
65ピ
66ピ
67ピ
97ピ
32土
34土
35土
33土
36土
35ピ
45ピ
15土
36ピ
38ピ
33ピ
32ピ
13土
34ピ
31ピ
14土
46ピ
37ピ
44ピ
27ピ
9土
24ピ
22ピ
23ピ
25ピ
26ピ
11ピ
10土
12ピ
13ピ
39ピ
106ピ
2掘立
15ピ
14ピ
16ピ
18ピ
105ピ
8土
104ピ
17ピ
28ピ
24ピ
30ピ
11土
12土
103ピ
3竪
2竪
362.5
362.3
362.0
361.9
361.8
362.1
362.2
0
(1/120)
10m

第４図　全体図中区



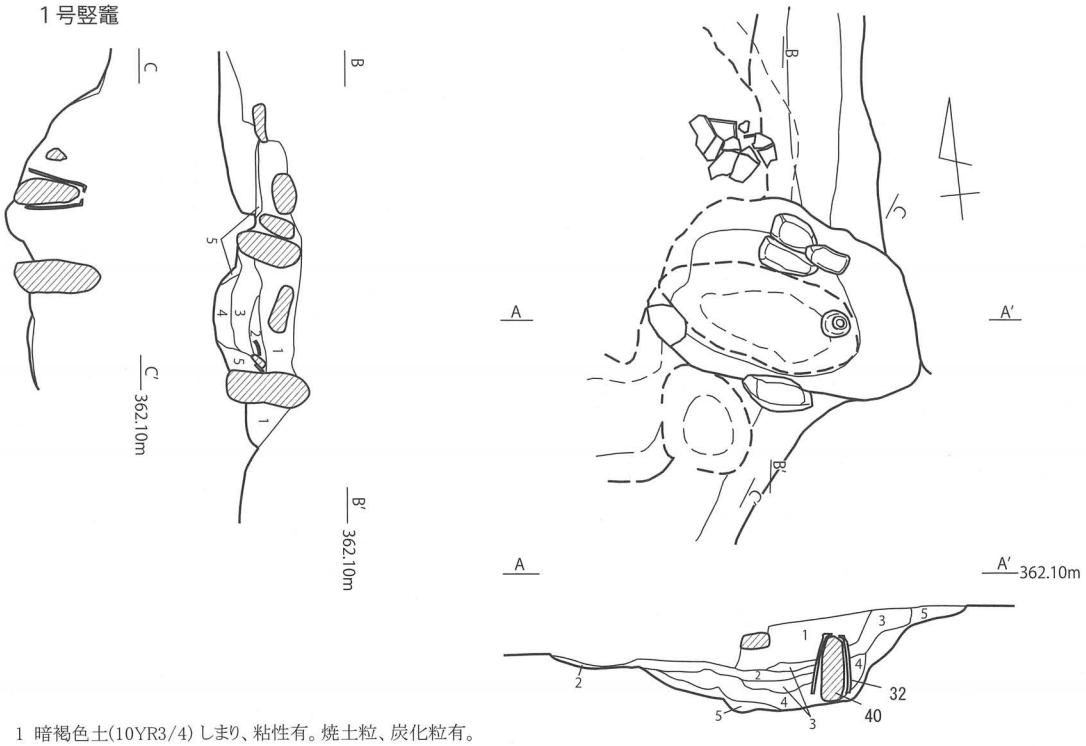
第５図　全体図中・東区

1号竪穴



第6図　1号竪穴(1)

1号竪竈

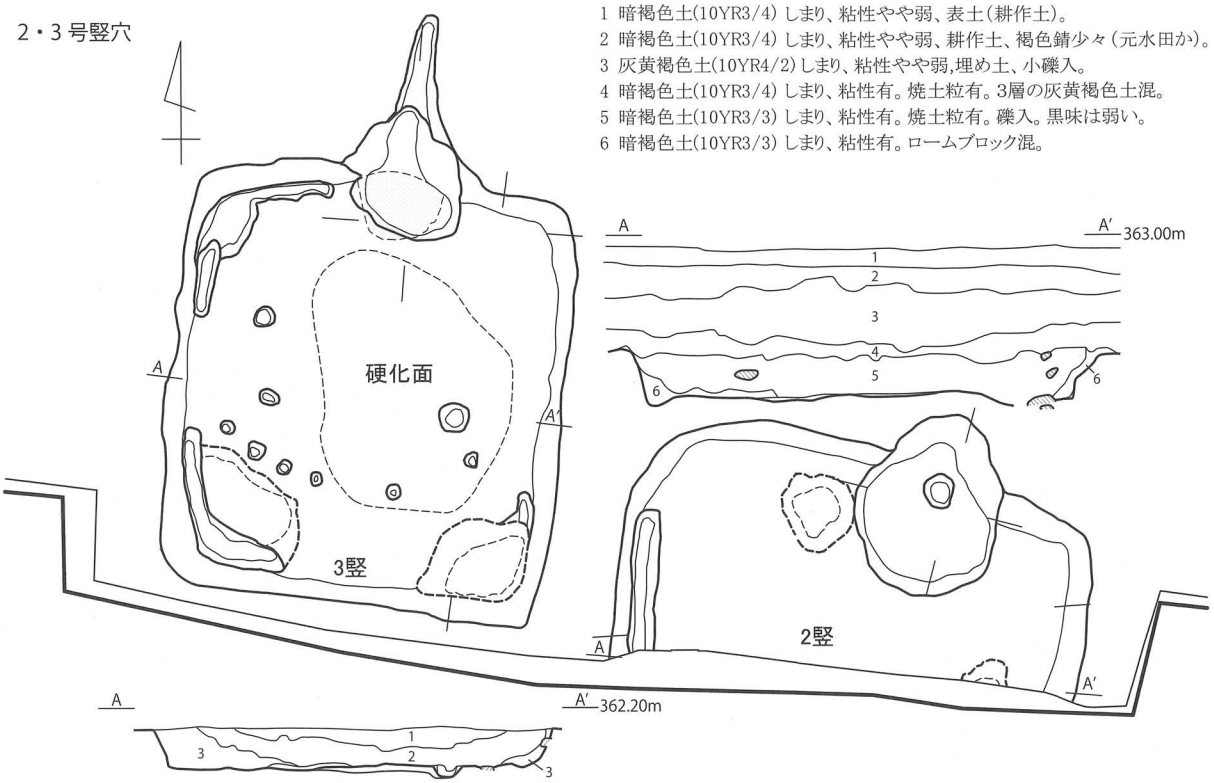


1 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。焼土粒、炭化粒有。
2 黒褐色土(10YR2/3)～灰褐色土　しまり、粘性有。竈焚口では黒味の強い炭化層。
3 黒褐色土・焼土混合層 しまりやや弱、粘性有。焼土層。焼土粒、小ブロック多。
4 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。焼土粒、炭化粒有。
5 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ローム主。焼土小ブロックやや多。

0 (1/30) 1m

2・3号竪穴

1 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性やや弱、表土(耕作土)。
2 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性やや弱、耕作土、褐色錆少々(元水田か)。
3 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり、粘性やや弱,埋め土、小礫入。
4 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。焼土粒有。3層の灰黄褐色土混。
5 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。焼土粒有。礫入。黒味は弱い。
6 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ロームブロック混。

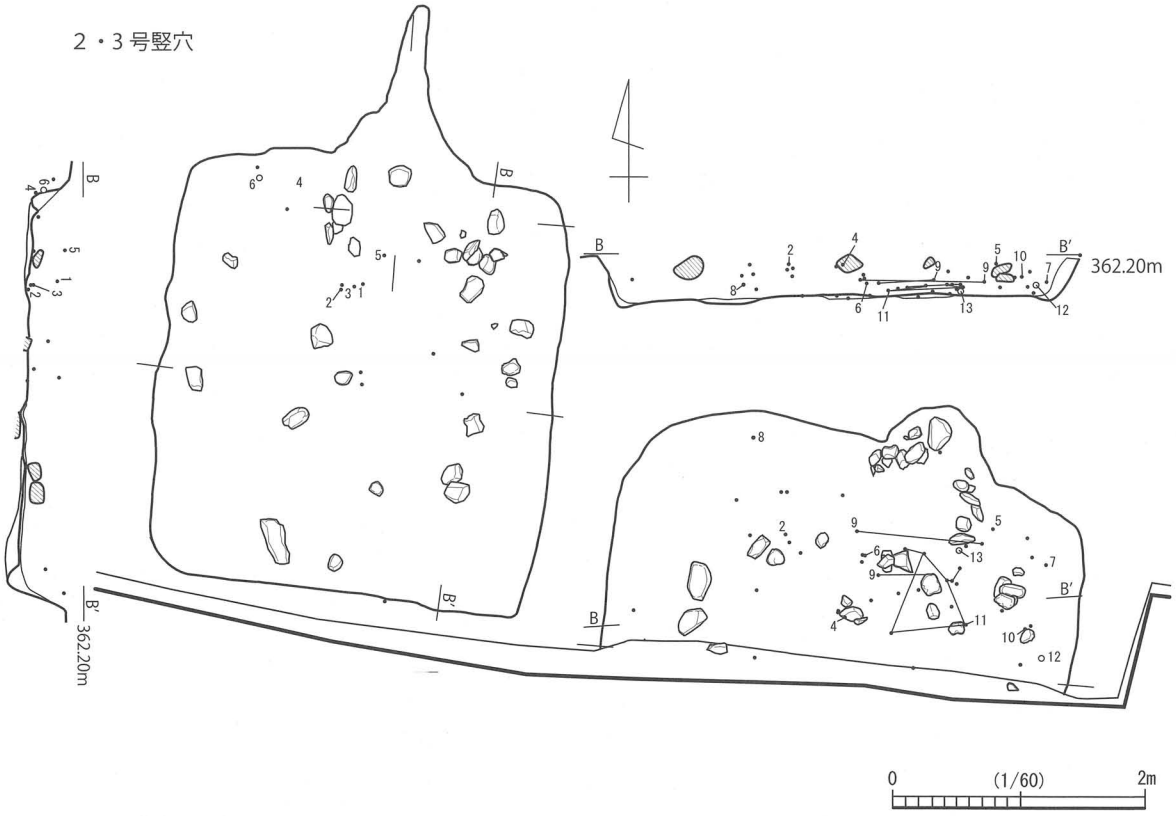


1 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒子、ローム小ブロック有。
2 暗褐色土(10YR3/3)褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ロームブロックやや多。炭化物有。焼土粒有。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。炭化粒、焼土粒有。

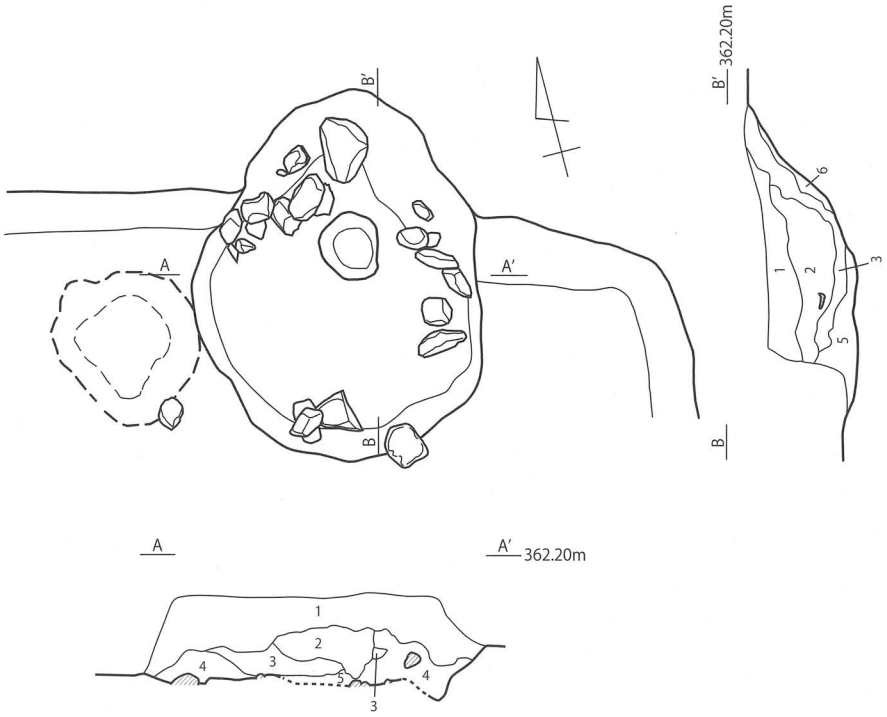
0 (1/60) 2m

第7図　1号竪穴(2)、2・3号竪穴(1)

2・3号竪穴



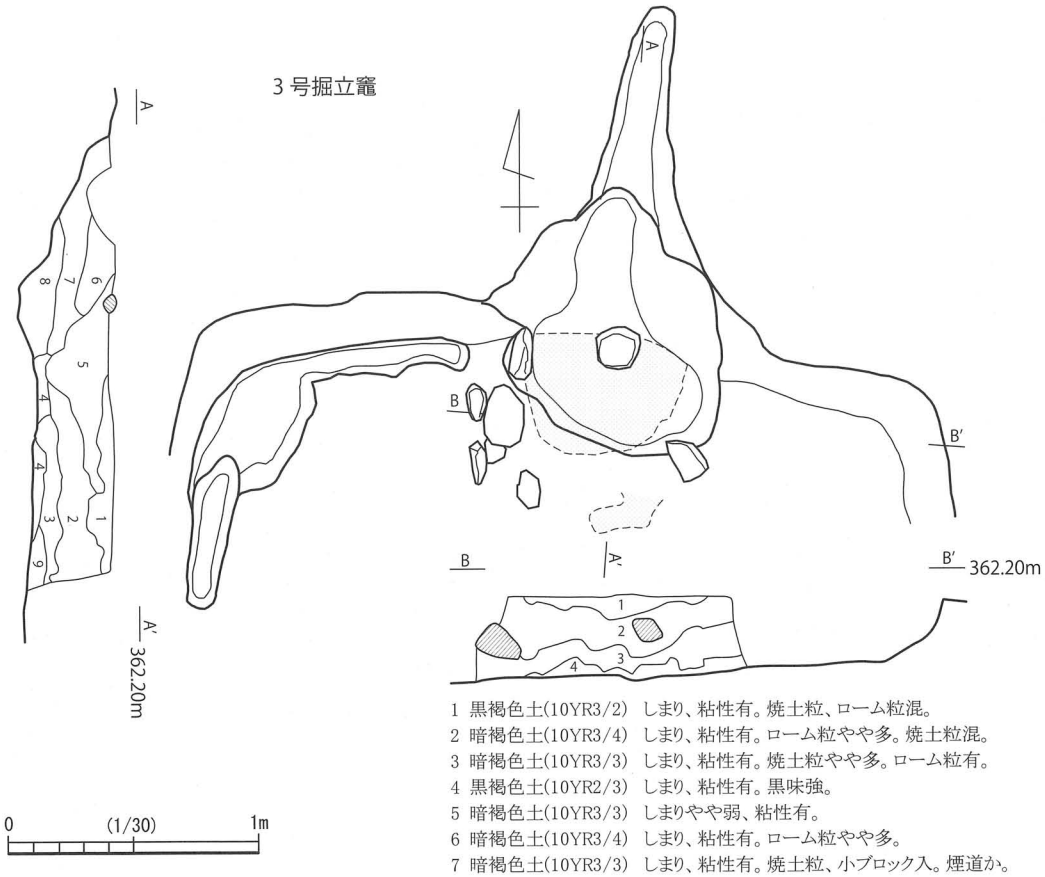
2号竪穴竈



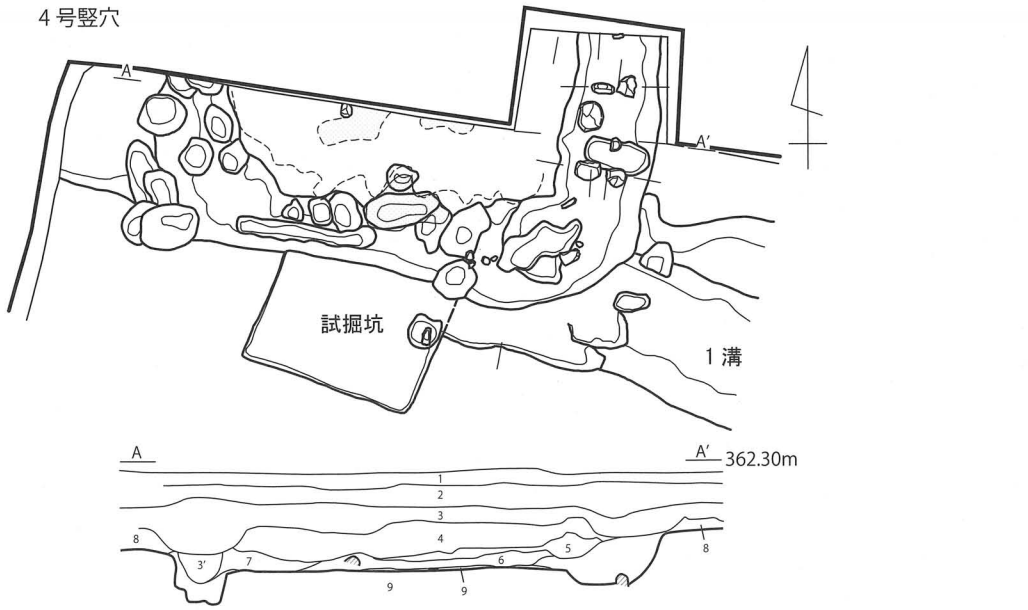
1 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。焼土粒、ローム粒有。ローム小ブロック有。
2 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや弱、粘性有。焼土粒、焼土小ブロック有。
3 焼土層　暗褐色土混じり しまり、粘性有。焼土粒多(小ブロック有)。
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。黄味有。竈の袖か。
5 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。焼土粒、焼土小ブロック有。ローム粒やや多。
6 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム粒多。地山直上か。

0 (1/30) 1m

第8図　2・3号竪穴(2)



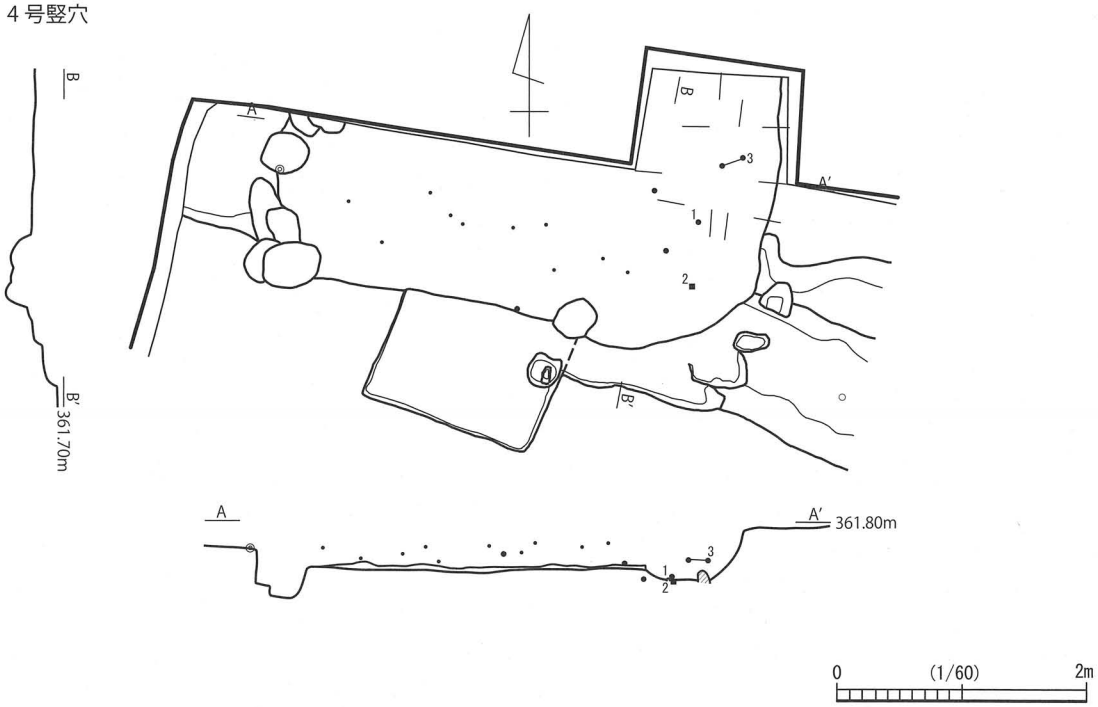
1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。焼土粒、ローム粒混。
2 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム粒やや多。焼土粒混。
3 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。焼土粒やや多。ローム粒有。
4 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性有。黒味強。
5 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや弱、粘性有。
6 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム粒やや多。
7 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。焼土粒、小ブロック入。煙道か。
8 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。やや黒味有。焼土粒有。
9 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。焼土粒有。ローム粒やや多。



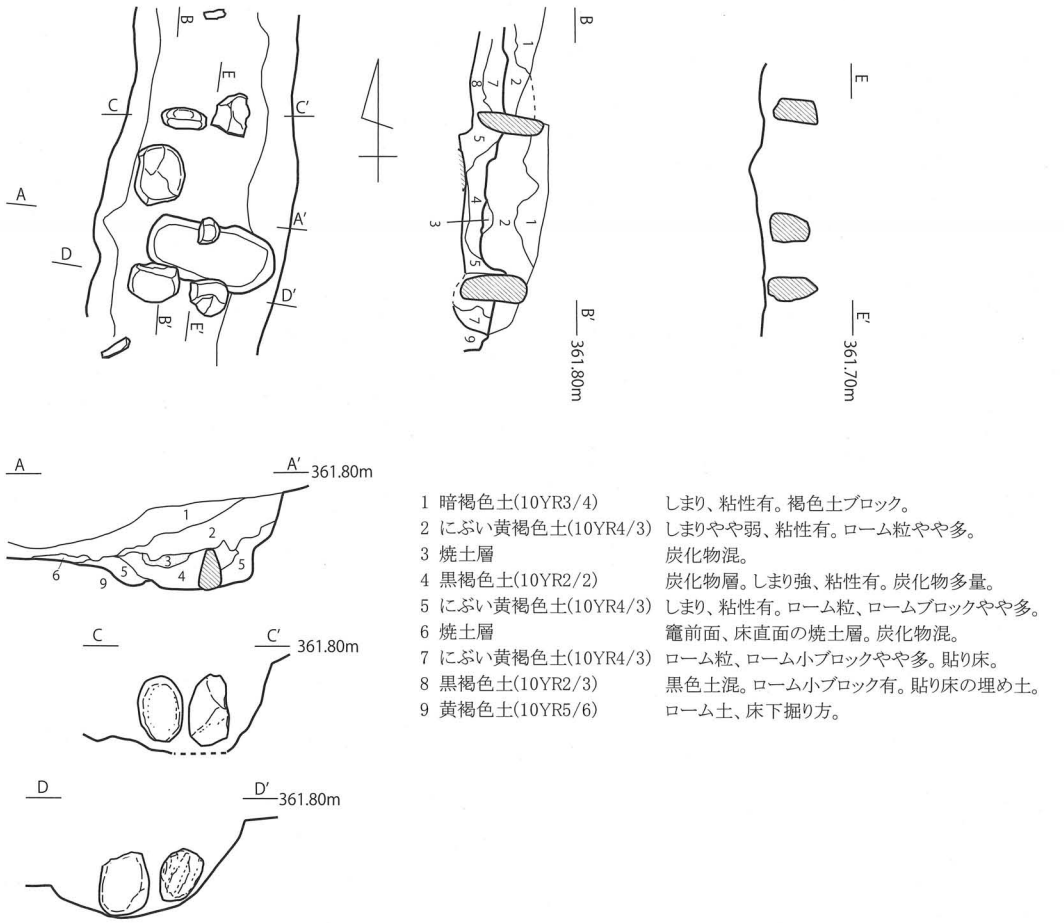
1 灰黄褐色土(10YR4/2) 表土。しまり、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/4) 表土。しまり、粘性有。
3 暗褐色土(10YR3/4) しまりやや弱、粘性有。。
3' 暗褐色土(10YR3/4) ローム小ブロック、ローム粒有。
4 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム小ブロック、焼土粒有。
5 褐色土(7.5YR4/3) しまり、粘性有。7層に類似。ローム粒やや多。
6 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性有。黒味強。
7 褐色土(10YR4/4) 5層に類似。しまり、粘性有。ロームブロック入。
8 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ロームブロック多。地山直上。
9 焼土層 しまり、粘性有。炭化物、焼土小ブロック、ロームブロック多。床直の焼土(元々全体的に分布)。

第9図 2・3号竪穴(3)、4号竪穴(1)

4号竪穴

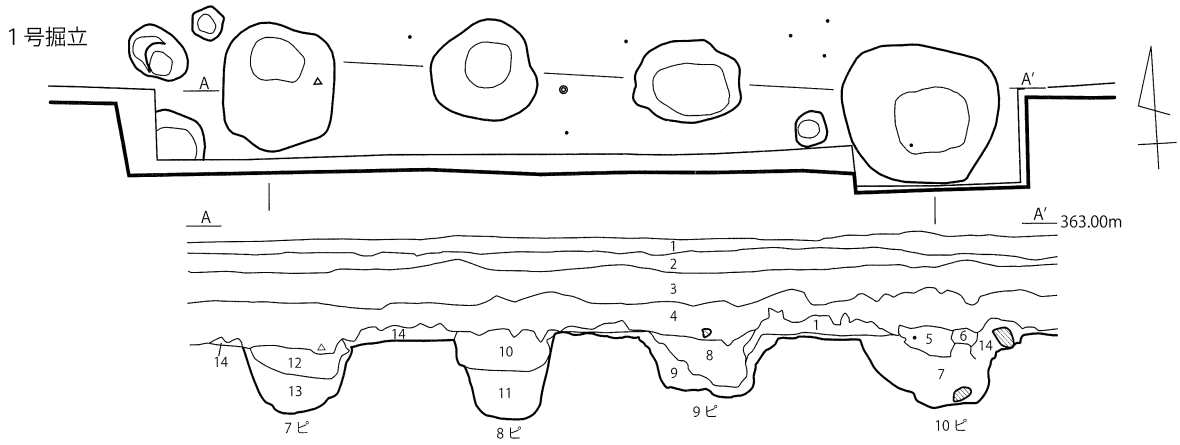


4号竪穴竈

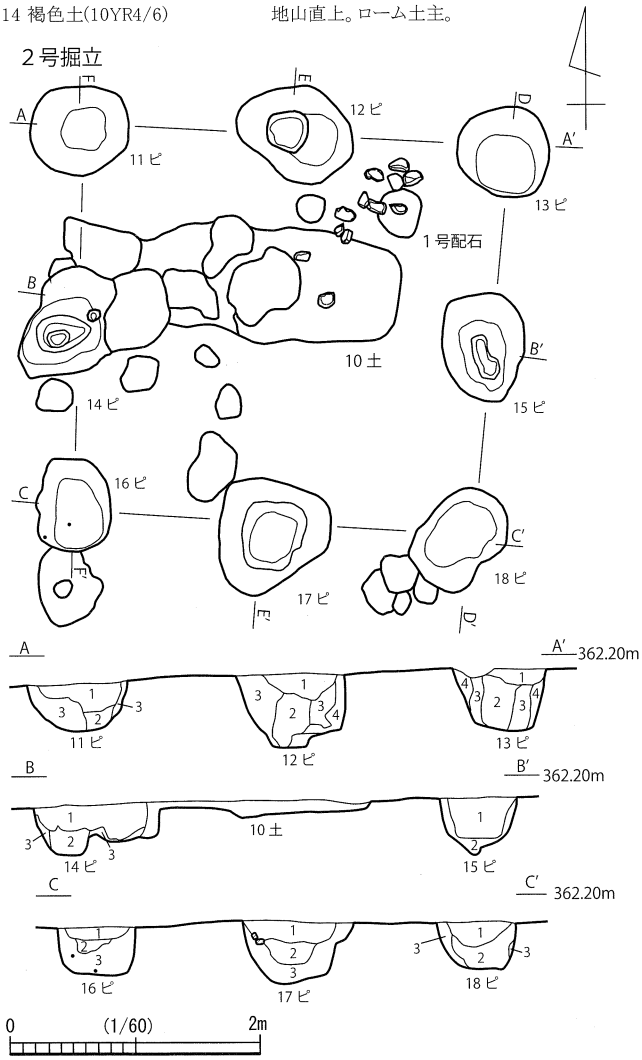


1 暗褐色土(10YR3/4)　しまり、粘性有。褐色土ブロック。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりやや弱、粘性有。ローム粒やや多。
3 焼土層　炭化物混。
4 黒褐色土(10YR2/2)　炭化物層。しまり強、粘性有。炭化物多量。
5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり、粘性有。ローム粒、ロームブロックやや多。
6 焼土層　竈前面、床直面の焼土層。炭化物混。
7 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒、ローム小ブロックやや多。貼り床。
8 黒褐色土(10YR2/3)　黒色土混。ローム小ブロック有。貼り床の埋め土。
9 黄褐色土(10YR5/6)　ローム土、床下掘り方。

第10図　4号竪穴(2)



1 灰黄褐色土(10YR4/2)　表土。しまり、粘性やや弱。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　錆粒含。元水田の床土か。
3 灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり、粘性やや弱。少礫有。1～3層までは埋め土(盛土か)。
4 暗褐色土(10YR3/4)　旧表土か。やや粗。しまり、粘性有。
5 暗褐色土(10YR3/3)　やや粗。ローム小ブロック有。
6 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒有。しまり、粘性有。
7 黒褐色土(10YR2/3)　やや黒味有。焼土(赤色粒)有。しまり、粘性やや強。
8 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒有。やや黒味有。しまり、粘性有。
9 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム粒やや多。
10 褐色土(10YR4/4)　ローム粒、ローム小ブロック主。しまり、粘性有。
11 黒褐色土(10YR2/3)　やや黒味有。
12 黒褐色土(10YR3/2)　黒味有。ローム小ブロック有。しまり、粘性有。
13 にぶい黄褐色土(10YR4/2)　ローム小ブロック、ローム粒やや多。黒色土ブロック(12層のブロック)入。しまり、粘性有。
14 褐色土(10YR4/6)　地山直上。ローム土主。



11ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　ローム小ブロック混。しまり、粘性強。密。
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロック入。密。
3 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ロームブロック(大)有。ローム粒、やや黄味強。密。

12ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロック混。全体に粘土質。
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロック混。1層に類似。柱痕。全体に粘土質。
3 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性強。ローム小ブロックやや多。黄味強。全体に粘質土
4 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性強。ローム土、壁崩落土か。全体に粘土質。

13ピット
1 黒褐色土(10YR3/2)　ローム小ブロック、ローム粒混。2層に類似。
2 黒褐色土(10YR3/2)　ローム小ブロック、粒子混。
3 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒やや多。ローム小ブロックやや多。赤色粒(焼土粒)有。
4 褐色土(10YR4/6)　地山直上。ローム土。

14ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒、ローム小ブロック混。
2 黒褐色土(10YR2/3)　ローム小ブロックやや多。1層類似。柱痕。
3 褐色土(10YR4/6)　地山直上～地山。

15ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム粒混。
2 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒やや多。しまり、粘性強。

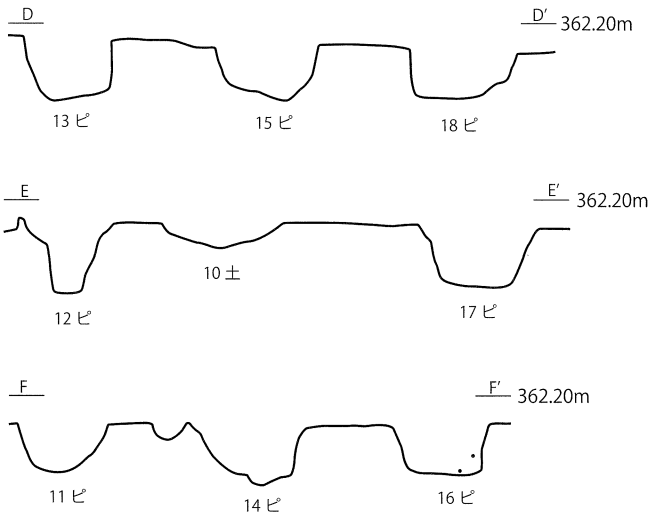
16ピット
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性強。ローム小ブロック、粒子混。
2 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性強。ロームブロック。
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性有。柱痕。焼土粒有。

17ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性有。焼土粒有。
2 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒やや多。
3 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒やや多。

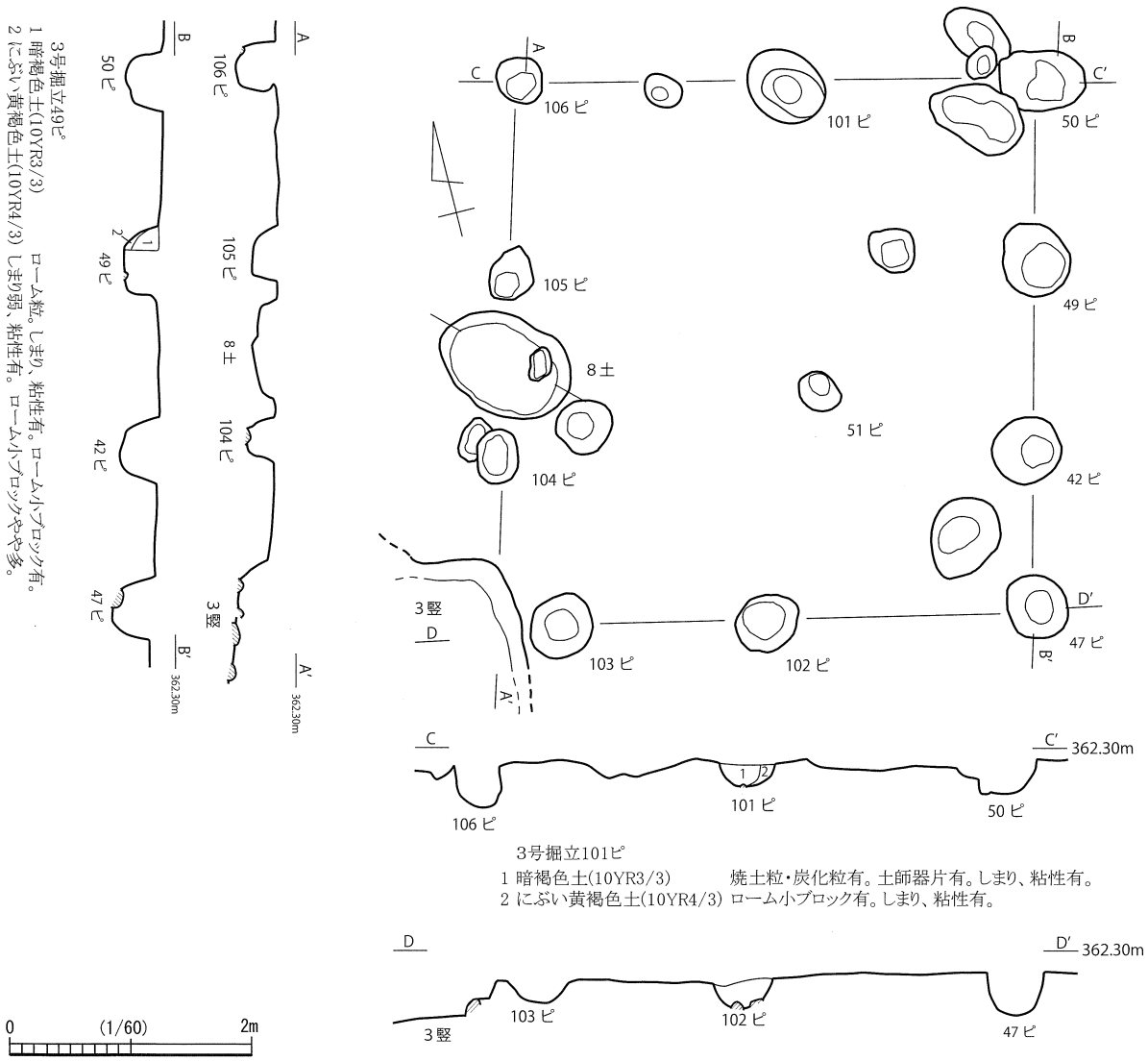
18ピット
1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。黒味強。
2 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性強。ローム粒混。
3 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性強。地山に近い。

第11図　1号掘立柱建物、2号掘立柱建物(1)

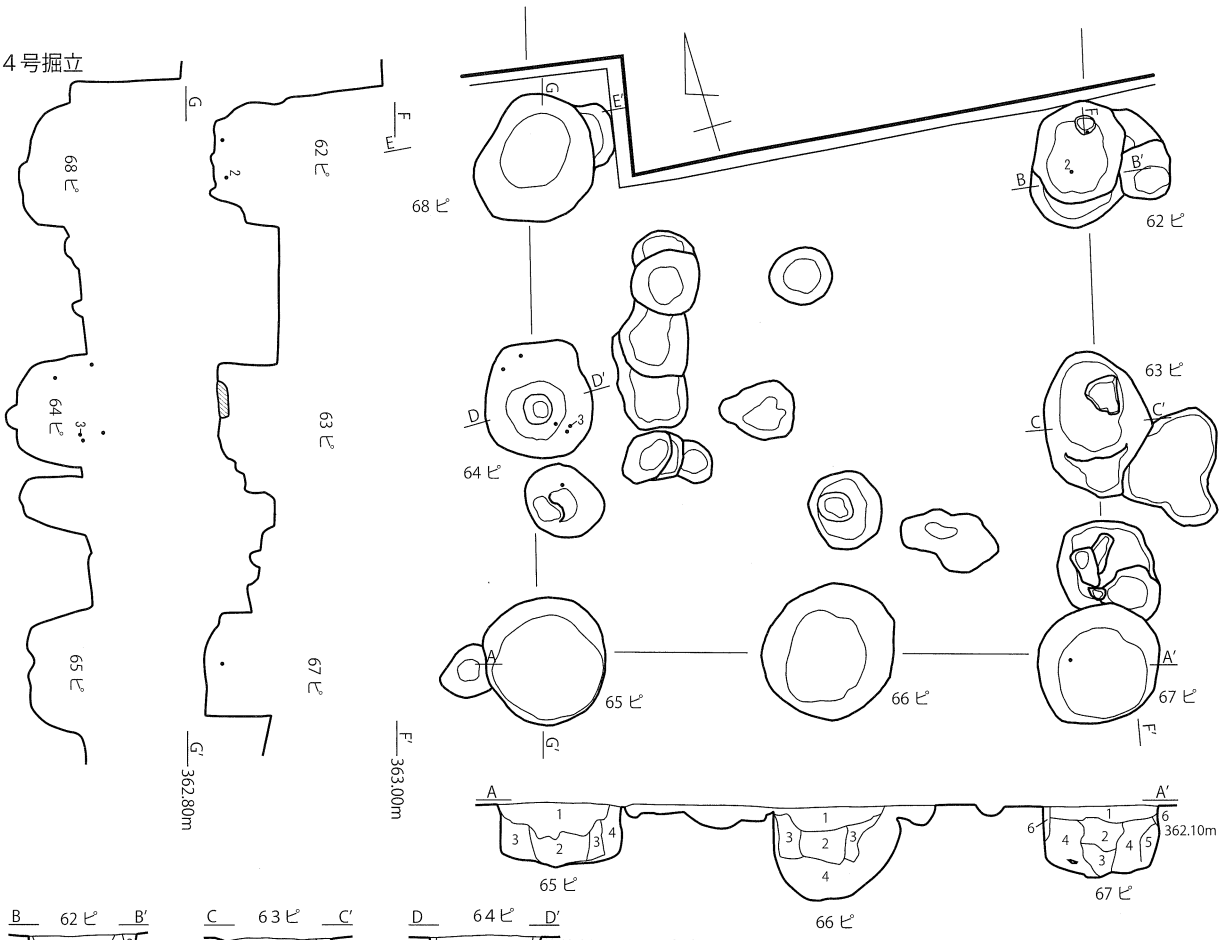
2号掘立

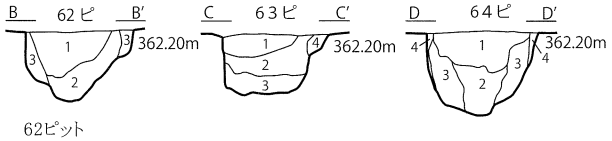


3号掘立



第12図　2号掘立柱建物(2)、3号掘立柱建物





62ピット

1 暗褐色土(10YR3/4)　しまり、粘性強。ローム小ブロック多。炭化物有。
2 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロック少々有。炭化物焼土粒有。
3 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ローム粒有。2層に類似。

63ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロックやや多。炭化物焼土粒少々有。
2 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ロームブロック多。、焼土粒有。
褐色土(10YR4/4)
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム粒・ローム小ブロック有。炭化物、焼土粒有。
4 暗褐色粘質土(10YR3/3) しまり、粘性強。地山直上。

64ピット

1 黒褐色土(10YR2/3)　しまり強、粘性強。ローム土ブロック状に入る。
褐色土(10YR4/6)　炭化粒、焼土粒少々。
2 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム粒有。
3 暗褐色粘質土(10YR3/3) しまり、粘性強。ローム粒、ローム小ブロック有。焼土粒少々。
4 褐色粘質土(10YR4/6)　しまり、粘性強。地山、掘りすぎか。

65ピット

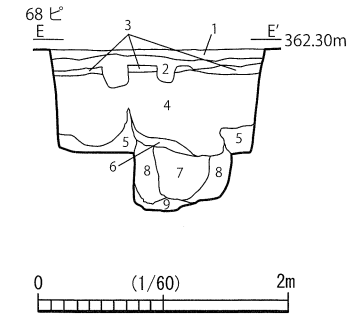
1 暗褐色粘質土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ロームブロック多。ローム粒やや多。焼土粒有。
2 黒褐色粘質土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ローム小ブロック、ローム粒有。焼土粒少々。
3 暗褐色粘質土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ロームブロック有。
4 褐色土(10YR4/6)　しまり、粘性強。ローム主。地山に近い。

66ピット

1 暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック多。しまり、粘性強。
褐色土(10YR4//4)
2 暗褐色土(10YR3/3)　ロームブロック、ローム粒有。しまり、粘性強。
3 黒褐色粘質土(10YR2/3)　ロームブロック、ローム粒やや多。焼土粒有。しまり、粘性強。
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ロームブロック、ローム粒多。黄味強。しまり、粘性強。

67ピット

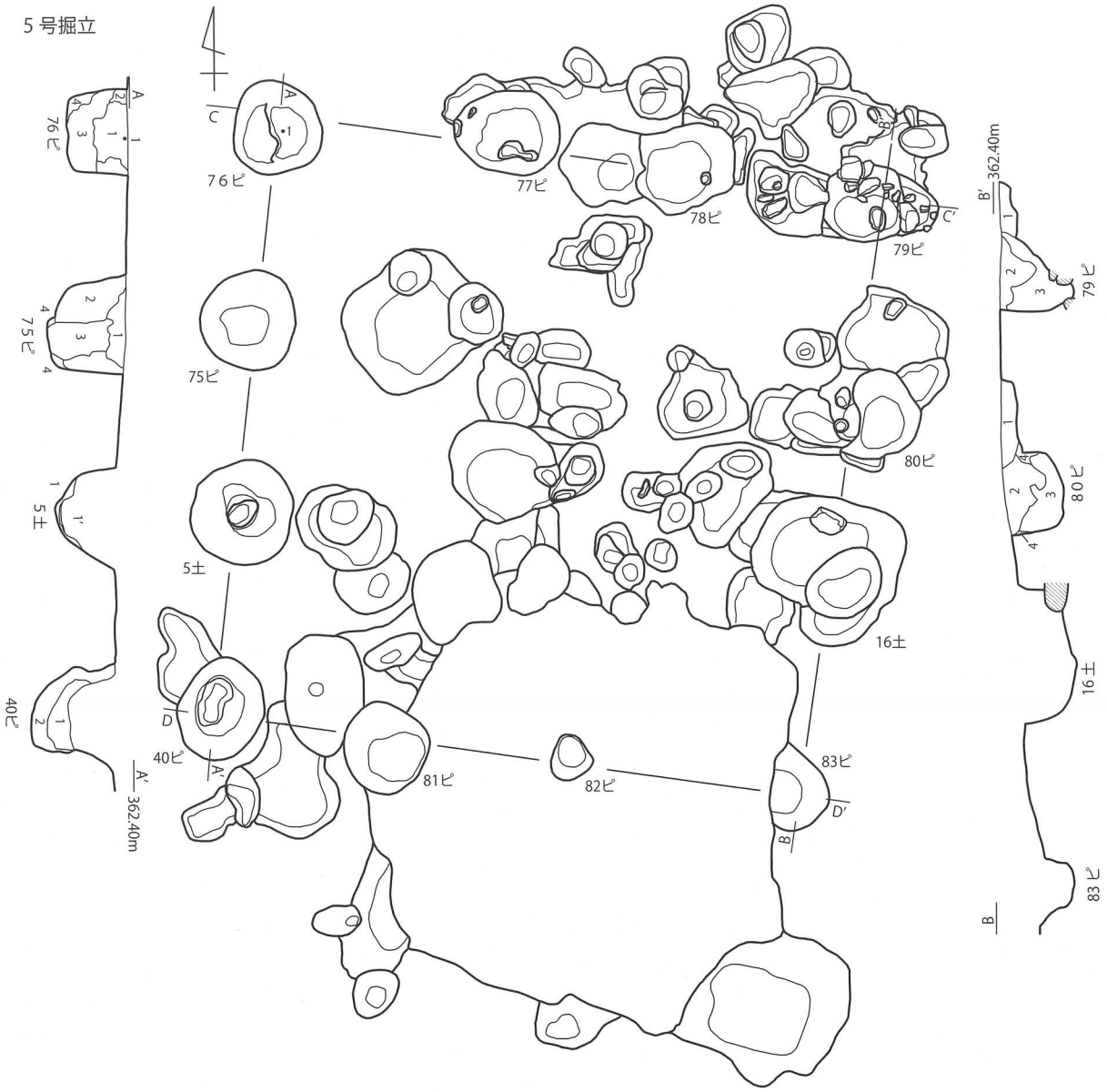
1 黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロックやや多。しまり、粘性強。
2 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性強。ロームブロック主体。
褐色土(10YR4/4)　ローム粒多。
3 黒褐色土(10YR2/3)　しまり、粘性強。ロームブロック、ローム粒有。4層とほぼ同質。
4 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性強。ロームブロックやや多。ローム粒。土師器片。
5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性強。ローム粒多。
6 褐色土(10YR4/4)　地山。ローム、掘りすぎか。



68ピット

1 褐灰色土(10YR4/1)　しまり、粘性やや弱。表土。
2 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり、粘性有。炭化粒、焼土粒有。旧水田層か。
3 褐色土(10YR4/4)　錆土、水田床土らしい。しまり、粘性有。
4 黒褐色土(10YR2/3)　粘質土。焼土粒、炭化粒有。ローム粒有。
5 褐色粘質土(10YR4/4) ローム粒多。地山への漸移層。
6 黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック。しまり、粘性有。ロームブロック多。
7 黒褐色土(10YR3/2)　4層よりもやや黒。柱痕。しまり、粘性有。やや粘質土。
8 黒褐色土(10YR3/2)　ローム小ブロック混。焼土粒有。炭化粒有。しまり、粘性有。やや粘質。
9 褐色土(10YR4/4)　ローム土多。地山直上。しまり、粘性有。

第13図　4号掘立柱建物



75ピット

1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム小ブロック混。黒色粒、褐色粒混。
2 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム小ブロック有。黒味は1層よりもやや弱。
3 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム小ブロックが横方向に層状に堆積。黒色土とローム土の混土。
4 黄褐色土(10YR5/6) しまり、粘性有。地山直上～地山上。

5土坑

1 褐色土(10YR4/6) ローム土。しまり、粘性有。褐色土混。
1' 褐色粘質土(10YR4/6) やや白っぽい。柱痕の当たり痕らしい。

40ピット

1 褐色土(7.5YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。掘りすぎの可能性有。
2 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。やや暗い(地山は黄褐色ローム土)。

80ピット

1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック混。
2 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒混。ローム小ブロック有。
3 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒やや多。
4 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。地山に近いローム土。

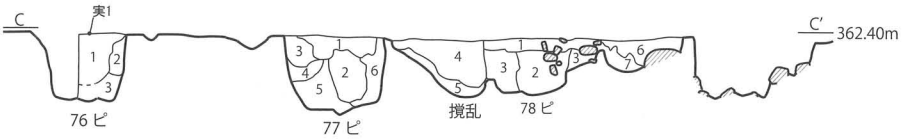
79ピット

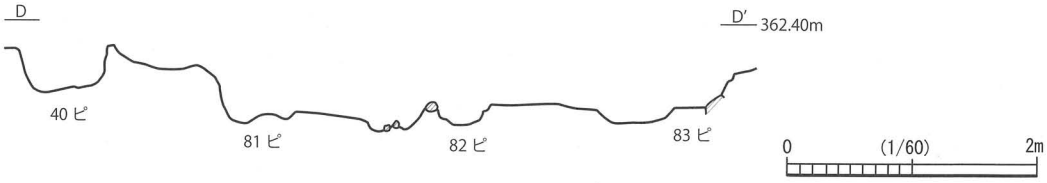
1 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック有。
2 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。黒味有。ローム小ブロック有。
3 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性有。ローム粒有。

0 (1/60) 2m

第14図 5号掘立柱建物(1)

5号掘立



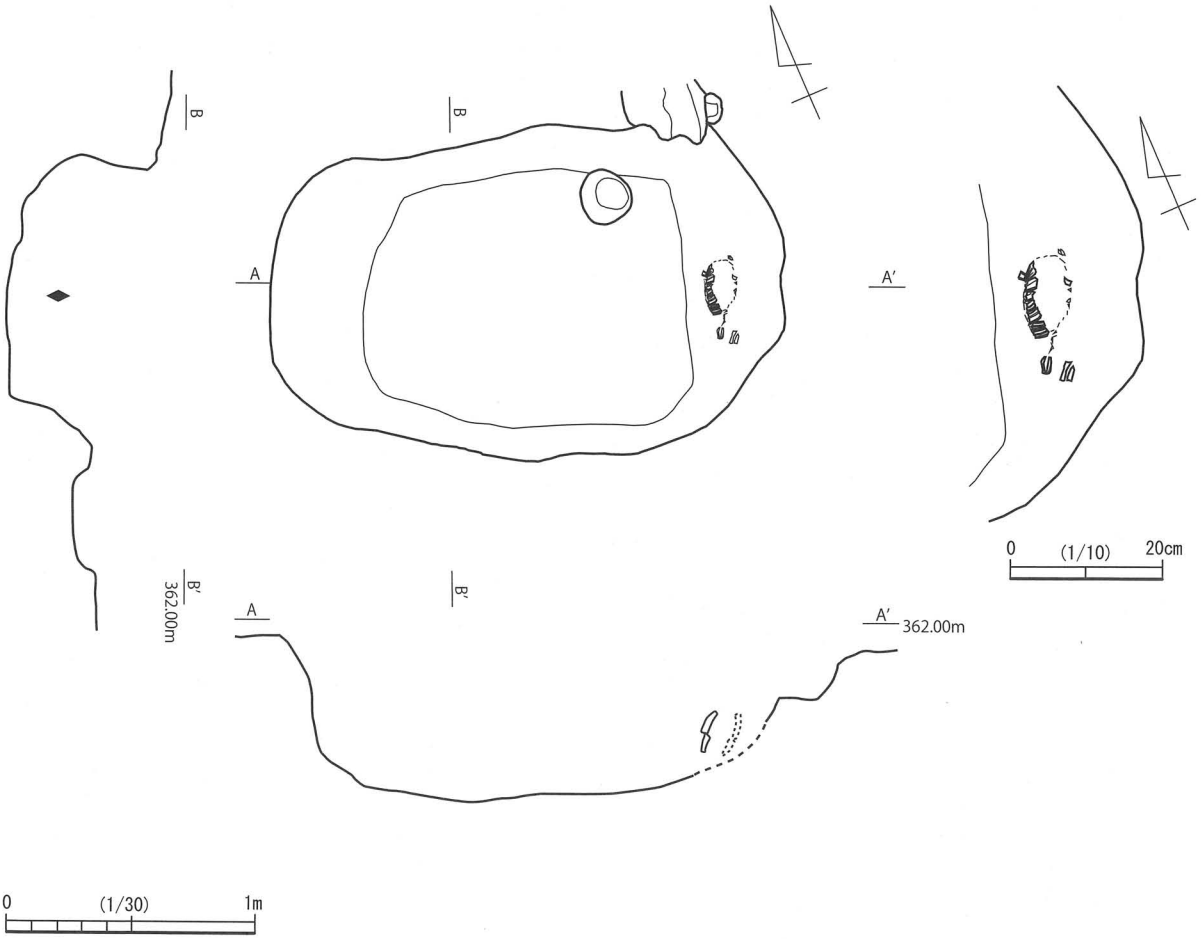


76ピット
1 暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。ロームブロック有。
ローム小ブロック有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ローム粒やや多。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ロームブロック多く混。
黒色土との混合。
4 黄褐色土(10YR5/6)しまり、粘性有。地山に近いローム土。黒色土混。

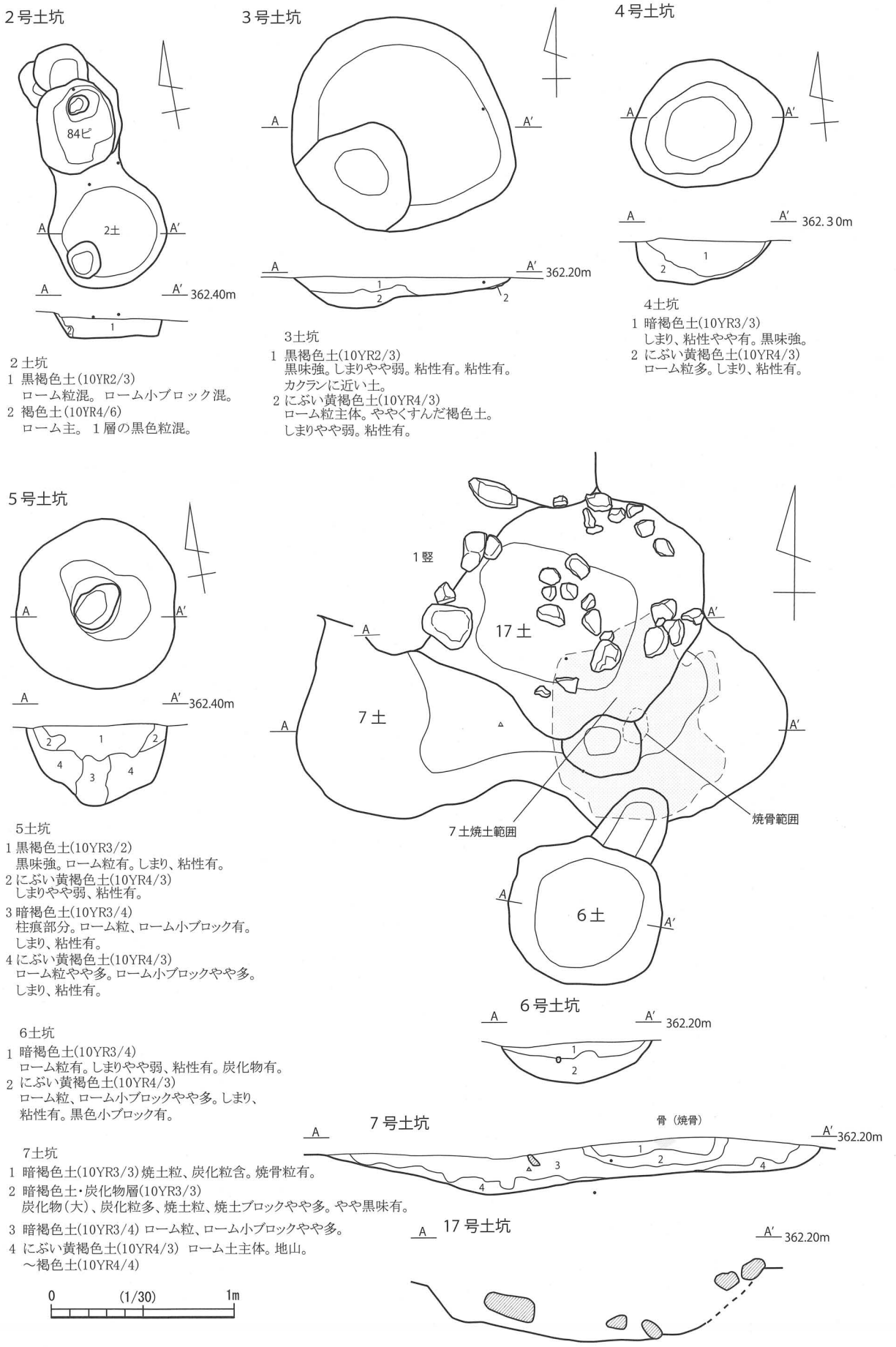
77ピット
1 黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒混。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ローム粒やや多。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒多く混。
4 褐色土(10YR4/6)しまり、粘性有。ローム粒多。ローム土に近い。
5 黒褐色土(10YR2/3)しまり、粘性有。黒味やや強。
6 褐色土(10YR4/4)しまり、粘性有。地山直上～やや掘りすぎか。

78ピット
1 黒褐色土(10YR3/2)しまり、粘性有。ローム小ブロック有。
2 暗褐色土(10YR3/3)しまりやや弱、粘性有。礫入。ローム粒有。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。ローム粒、
ローム小ブロック層状にやや多く堆積。
4 暗灰黄褐色土(2.5YR4/2)ローム土、暗褐色土との互層。
5 褐色土(10YR4/4)地山。ローム土。
6 暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。黒色土混。溝複土。
7 褐色土(10YR4/6)しまり、粘性有。ローム土主体。やや掘りすぎか。
地山に近い。

1号土坑



第15図　5号掘立柱建物(2)、1号土坑



2土坑
1 黒褐色土(10YR2/3)
ローム粒混。ローム小ブロック混。
2 褐色土(10YR4/6)
ローム主。1層の黒色粒混。

3土坑
1 黒褐色土(10YR2/3)
黒味強。しまりやや弱。粘性有。粘性有。
カクランに近い土。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒主体。ややくすんだ褐色土。
しまりやや弱。粘性有。

4土坑
1 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性やや有。黒味強。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒多。しまり、粘性有。

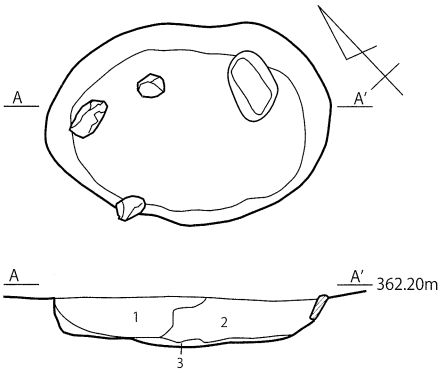
5土坑
1 黒褐色土(10YR3/2)
黒味強。ローム粒有。しまり、粘性有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまりやや弱、粘性有。
3 暗褐色土(10YR3/4)
柱痕部分。ローム粒、ローム小ブロック有。
しまり、粘性有。
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒やや多。ローム小ブロックやや多。
しまり、粘性有。

6土坑
1 暗褐色土(10YR3/4)
ローム粒有。しまりやや弱、粘性有。炭化物有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒、ローム小ブロックやや多。しまり、
粘性有。黒色小ブロック有。

7土坑
1 暗褐色土(10YR3/3)焼土粒、炭化粒含。焼骨粒有。
2 暗褐色土・炭化物層(10YR3/3)
炭化物(大)、炭化粒多、焼土粒、焼土ブロックやや多。やや黒味有。
3 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒、ローム小ブロックやや多。
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム土主体。地山。
～褐色土(10YR4/4)

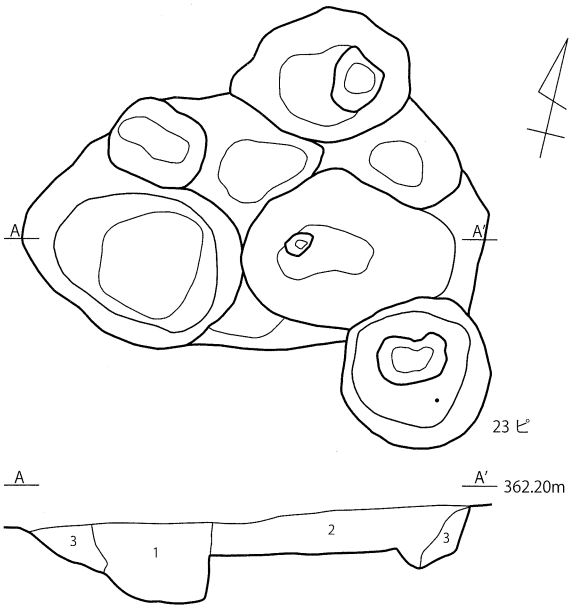
第16図　2～7・17号土坑

8号土坑



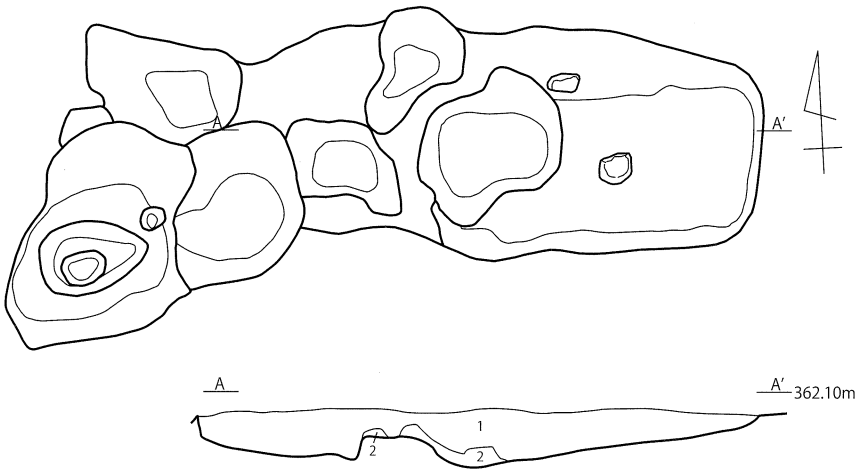
8土
1 黒褐色土(10YR3/2) しまりやや弱、粘性有(撹乱状)。
2 暗褐色土(10YR3/3) しまりやや弱、粘性有。ローム粒やや多。
3 褐色土(10YR4/6)　ローム土。地山。しまり、粘性有。

9号土坑

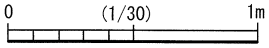


9号土坑
1 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性強。やや黒味強。
2 黒褐色土(10YR3/2) ほぼ2層と同質。しまり、粘性強。
3 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性有。ローム粒主。地山直上。

10号土坑

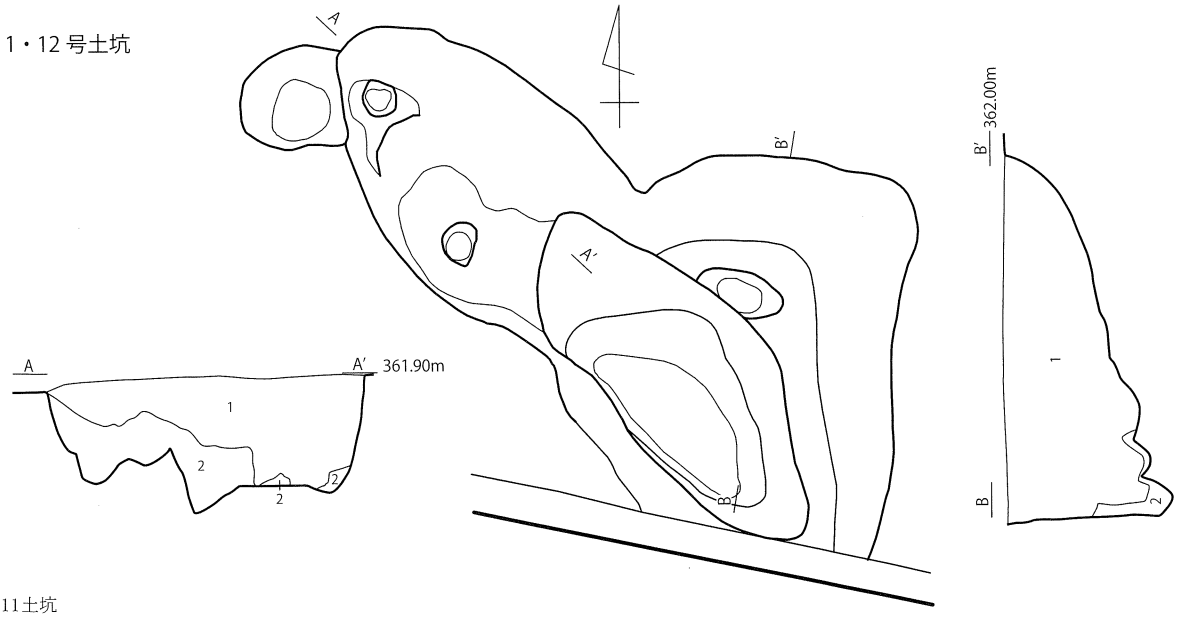


10号土坑
1 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性強。焼土粒有。
2 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性有。ローム粒主。地山～地山直上。



第17図　8～10号土坑

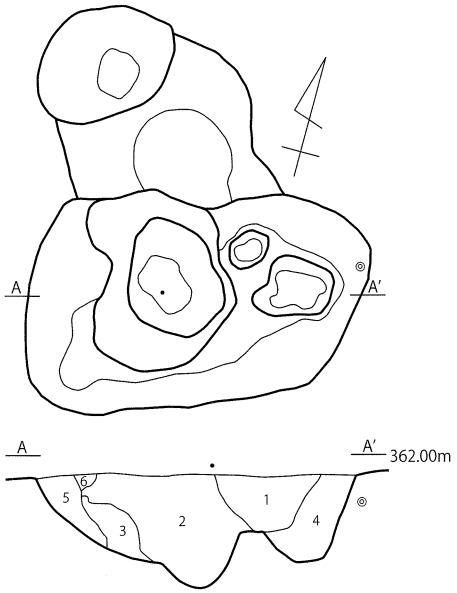
11・12号土坑



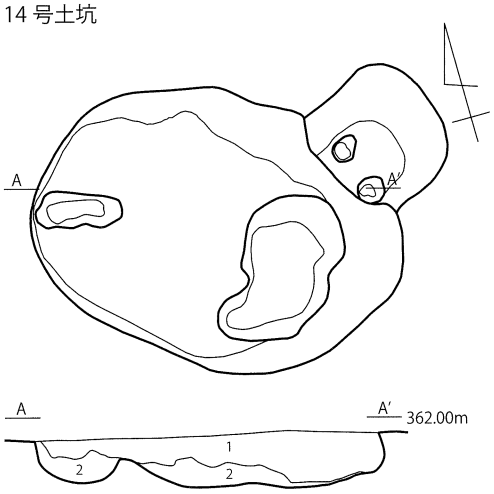
11土坑
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性有。焼土粒、炭化粒有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり、粘性有。ローム粒やや多。地山直上。

12土坑
1 黒褐色土(10YR3/2)　しまり、粘性強。ローム小ブロック有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり、粘性有。ローム粒やや多。

13号土坑



14号土坑



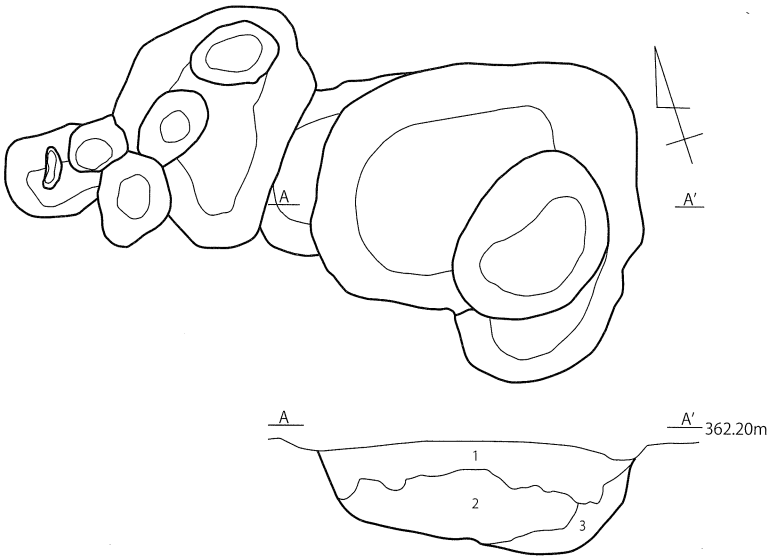
14土坑
1 暗褐色土(10YR3/4) 粘質、しまり、粘性強。ローム粒、ロームブロック多。
2 褐色土(10YR4/6)　しまり、粘性有。ローム主。1層の小ブロック混。

13土坑
1 黒褐色土(10YR2/2)しまり、粘性強。ローム小ブロック少々混(2層よりは少なく、黒味強)。
2 黒褐色土(10YR2/2)褐色土小ブロック しまり、粘性強。褐色土小ブロック多。
3 黒褐色土(10YR2/2)しまり、粘性強。1層に類似。
4 黒褐色土(10YR2/2)黒色土小ブロック しまり、粘性強。2層に類似。
5 暗褐色土(10YR3/3) 地山に近い。ローム主。
6 褐色土(10YR4/4)　褐色土ブロック。

0　(1/30)　1m

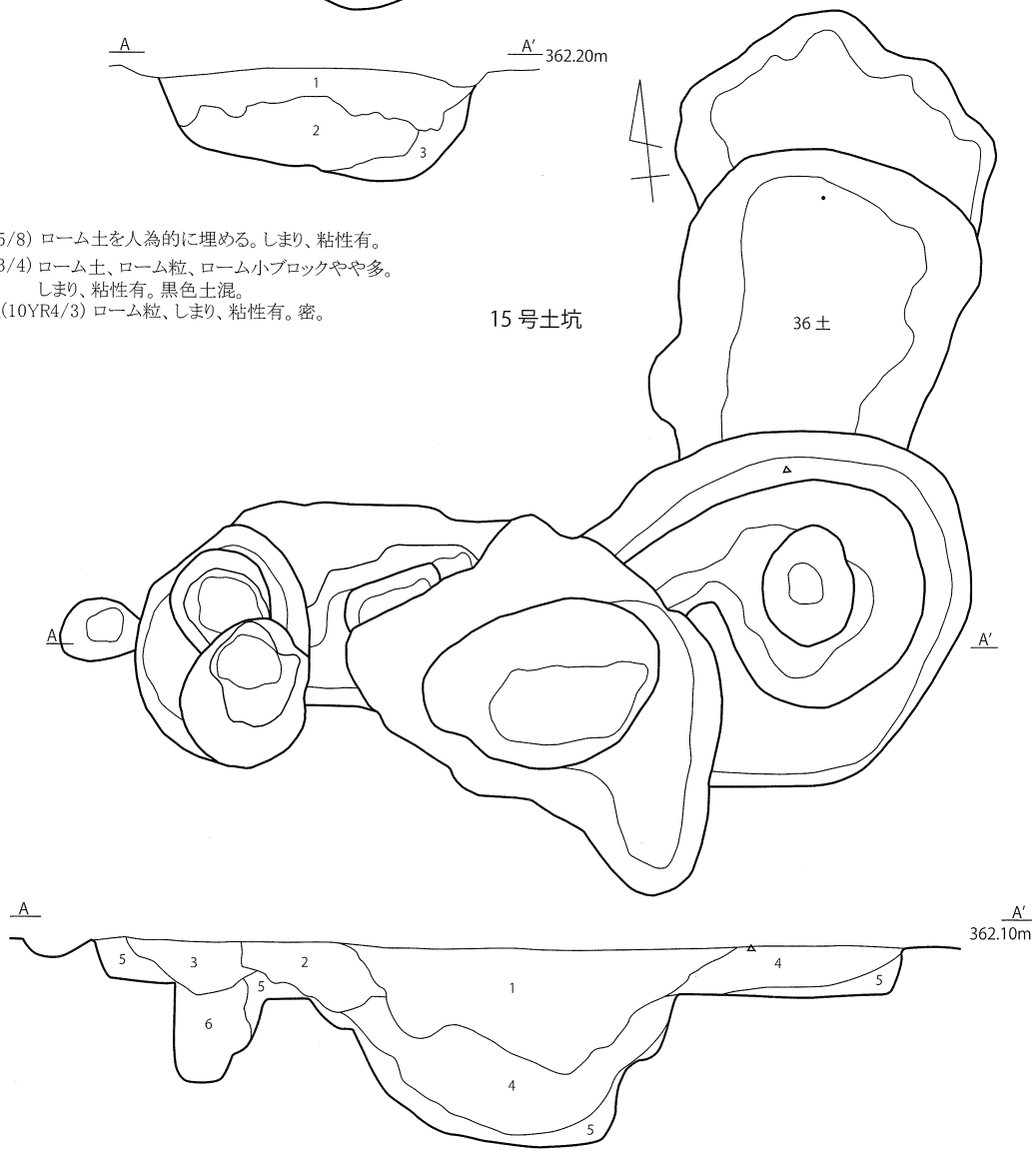
第18図　11～14号土坑

16 号土坑（5 号掘立柱穴）



16土坑
1 黄褐色土(10YR5/8) ローム土を人為的に埋める。しまり、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/4) ローム土、ローム粒、ローム小ブロックやや多。
しまり、粘性有。黒色土混。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒、しまり、粘性有。密。

15 号土坑

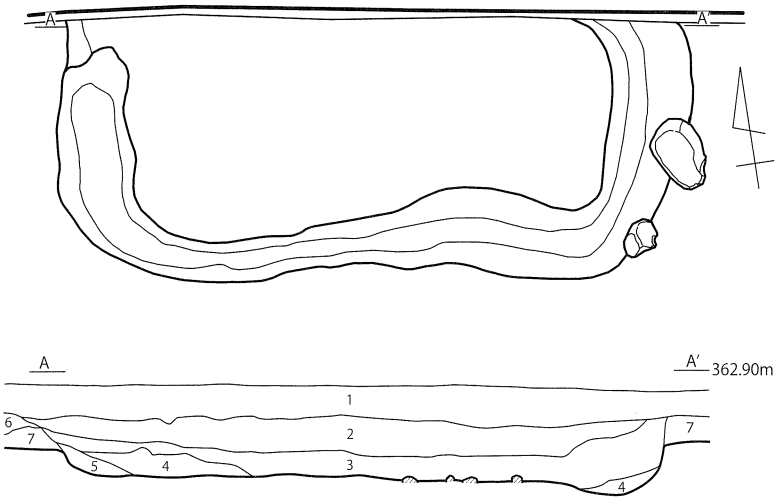


15土坑
1 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック含。
2 黒褐色土(10YR2/2/)しまり、粘性有。、ロームブロックやや多。ローム粒含。
・褐色土(10YR4/4/)
3 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性有。1層に類似。ローム小ブロック含。
4 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性有。ロームブロック、ローム粒やや多。
5 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ローム粒主。地山直上。
6 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性有。黄褐色土と黒色土の互層。ロームブロック多。
・黄褐色土

0 (1/30) 1m

第19図 15・16号土坑

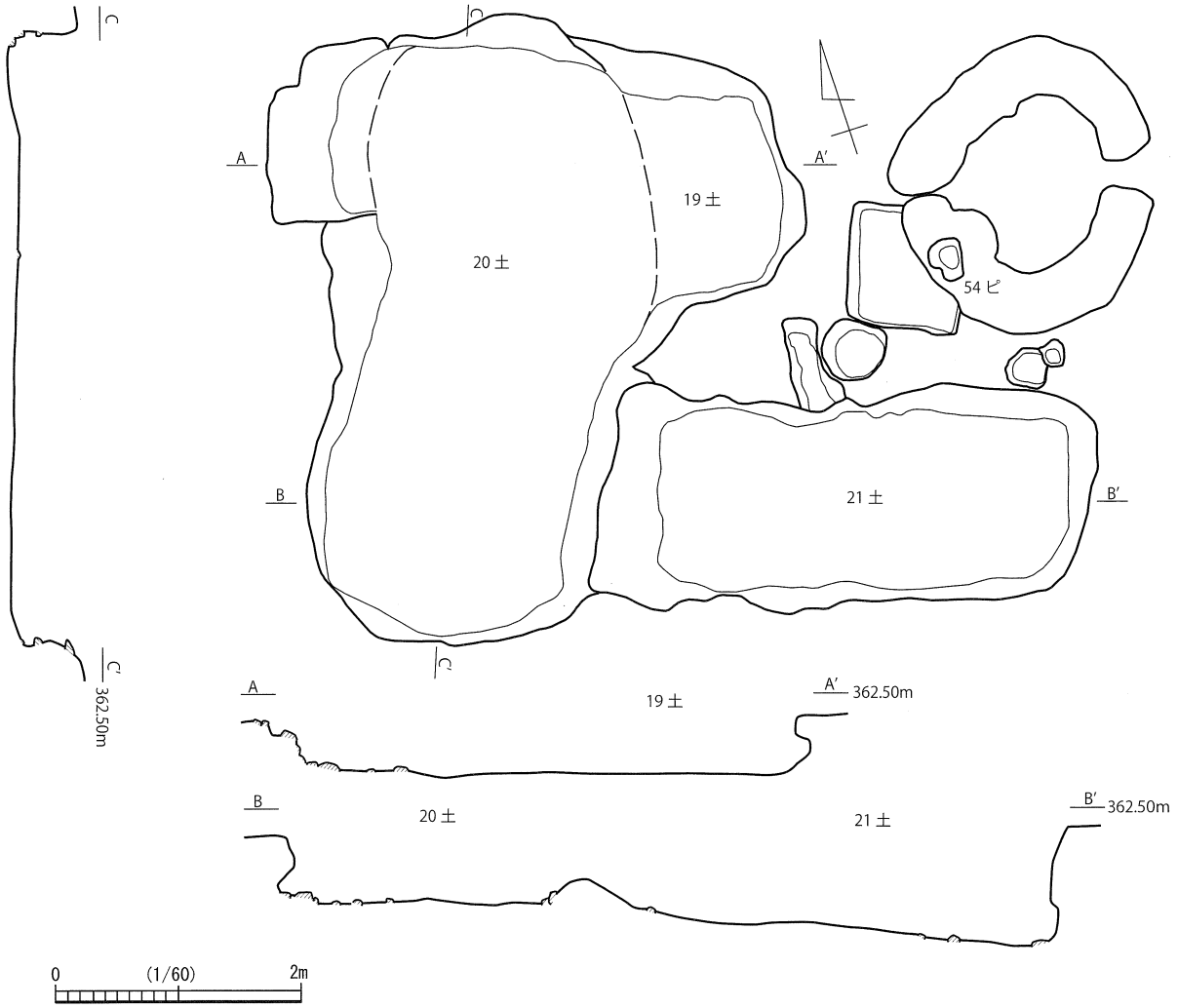
18 号土坑



18土坑

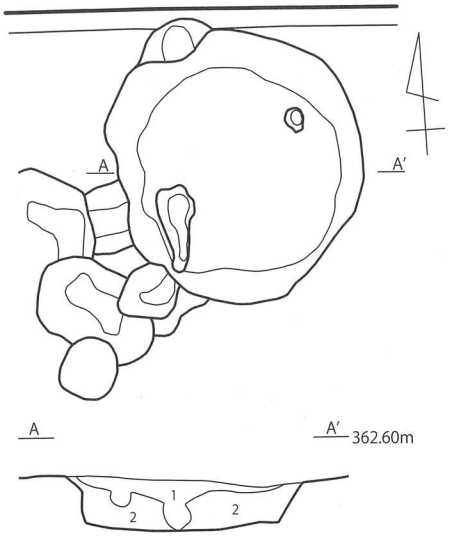
1 灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや弱、粘性有。表土(耕作土)
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。ローム小ブロック多。灰色土(1層)多。6層に類似。
3 灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや弱、粘性有。灰色味強。ローム小ブロックやや多。
4 褐色土(10YR4/6)　しまりやや弱、粘性有。褐色土小ブロック多。ローム粒やや多。黄味強。
5 褐色砂礫層(10YR4/6)　しまり、粘性なし。壁崩落か。礫多。
6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。灰色味強。
7 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性有。ローム粒主。褐色味強。

19・20・21 号土坑



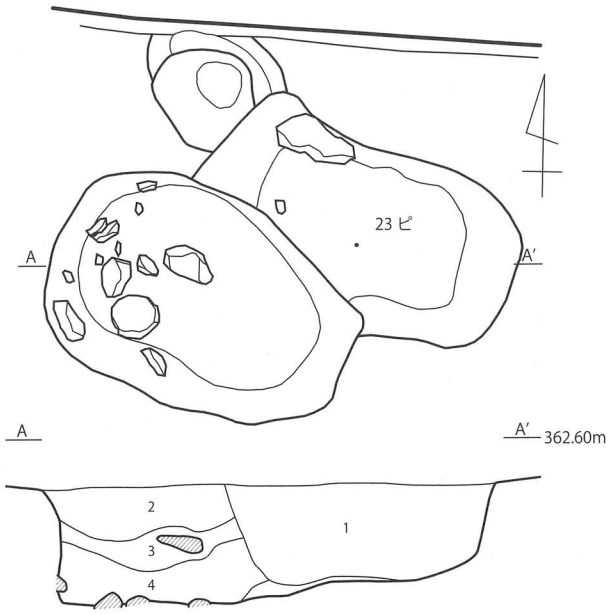
第20図　18～21号土坑

22 号土坑



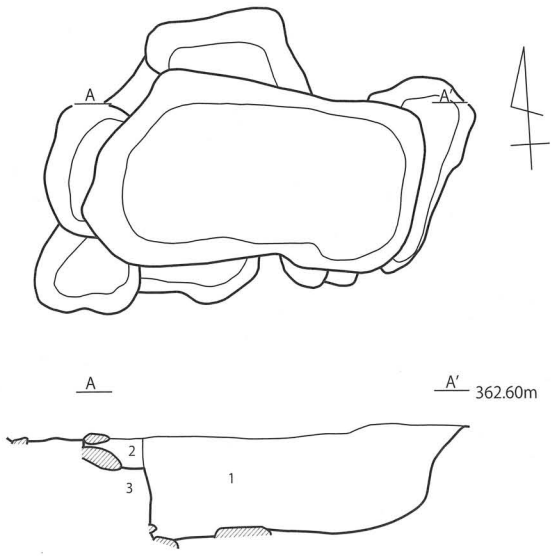
22土坑
1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや弱、粘性有。ローム小ブロック入。ローム粒入。
2 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性有。ロームが帯状に堆積。ロームブロックやや多。
1層よりも黒味強。

23 号土坑



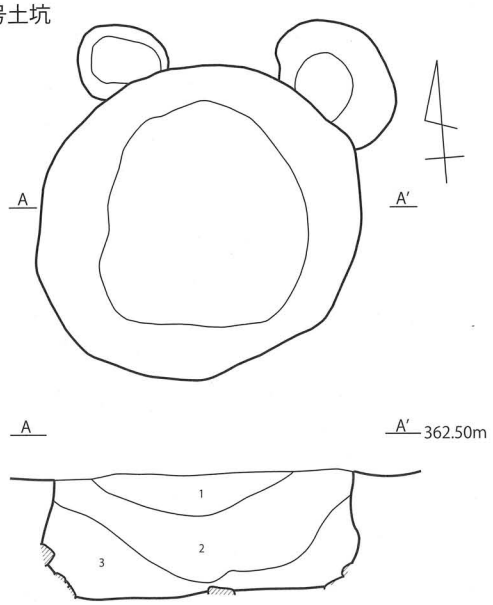
23土坑
1 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロック、ローム粒を全体に含。しまりやや弱、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロックやや多。ローム粒。しまり、粘性有。
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム小ブロック多。しまり、粘性有。礫入。黒色小ブロック入。
4 暗褐色土(10YR3/3) 2層に類似。しまり、粘性有。

24 号土坑



24土坑
1 暗褐色土(10YR3/3) ローム小ブロック、ローム粒やや多。
しまりやや弱、粘性有。
2 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒やや多。しまり、粘性有。
3 褐色土(10YR4/4) ローム土、地山。しまり、粘性有。

25 号土坑

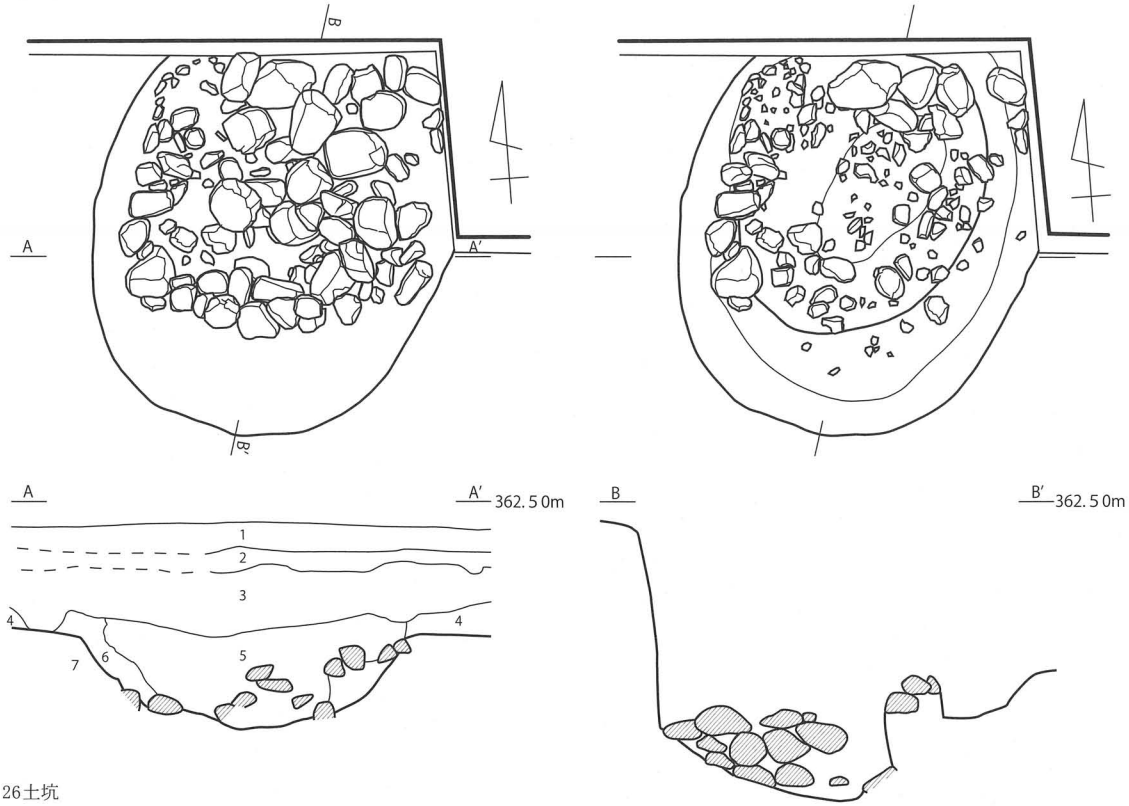


25土坑
1 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。ローム小ブロック有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱、粘性有。ローム粒、
ローム小ブロックやや多。礫入。
3 暗褐色土(10YR3/3) 1層よりも黒味有。しまりやや弱、粘性有。
ローム粒有。

0 (1/30) 1m

第21図 22～25号土坑

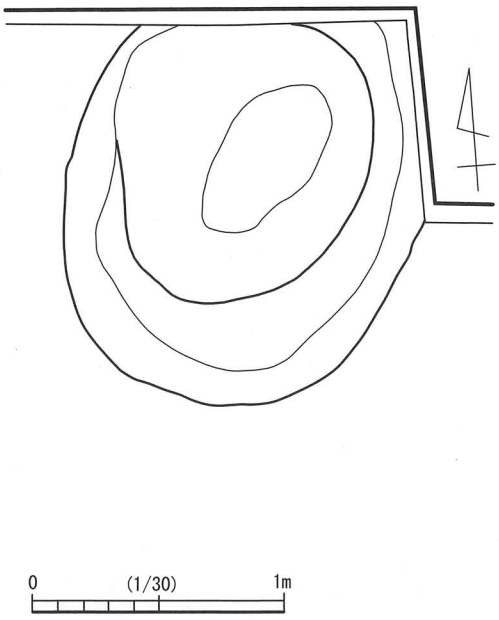
26号土坑

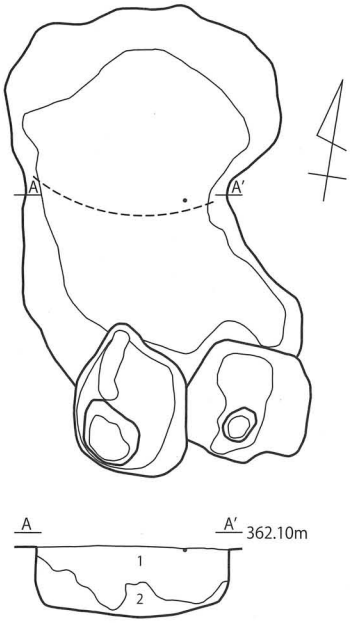


26土坑

1	灰黄褐色土(10YR4/2)	表土。しまり、粘性有。耕作土。
2	褐灰土(10YR4/1)	表土(埋め土か)。しまり、粘性有。
3	暗褐色土(10YR3/4)	しまり、粘性有。
4	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまり、粘性有。ロームブロック多。地山直上層。
5	暗褐色土(10YR3/3)	しまり、粘性有。
6	褐色土(10YR4/4) ～にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまり、粘性有。
7	褐色土(10YR4/4)	地山。ローム土。

27号土坑





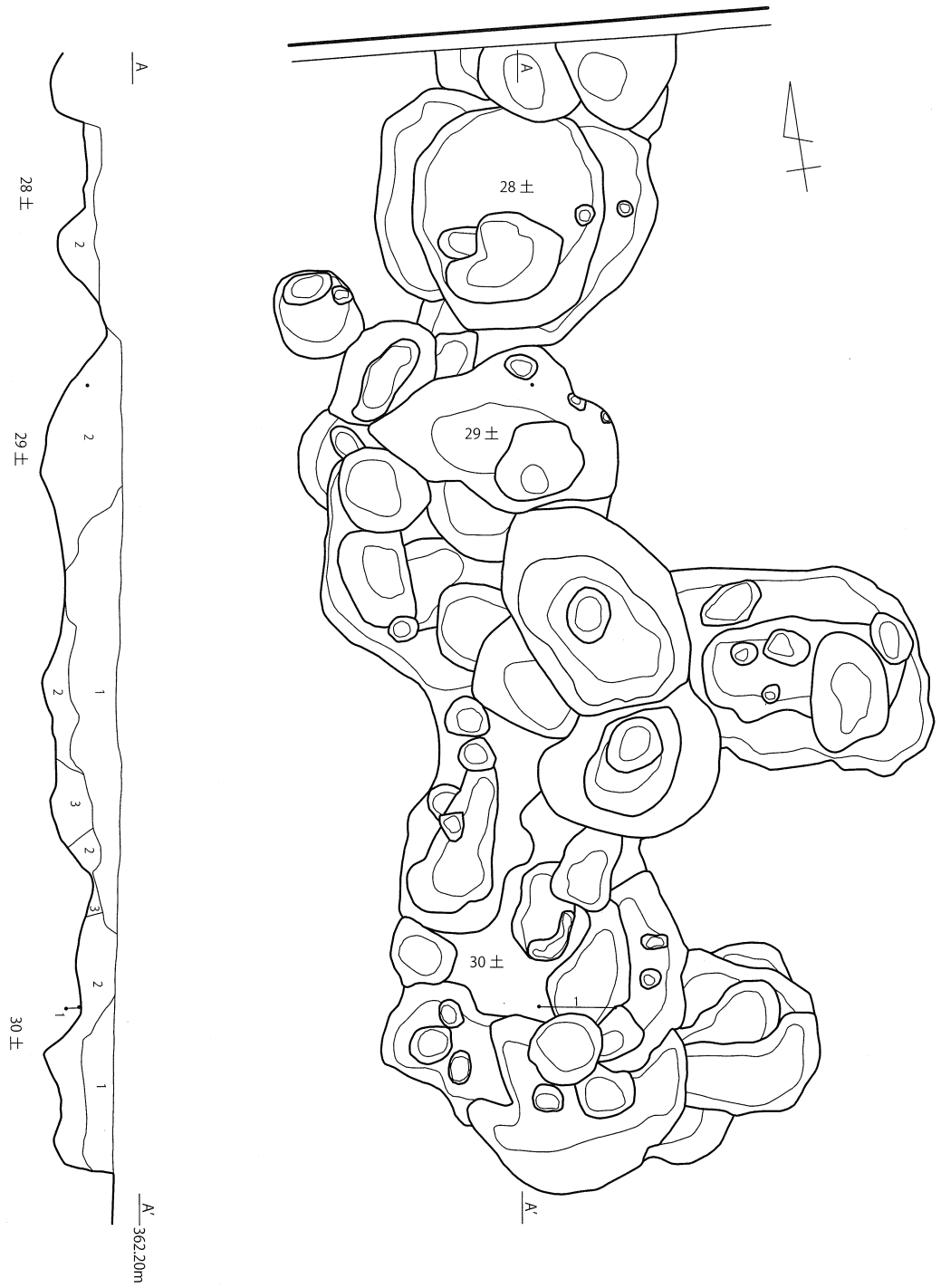
27土坑

1 黒褐色土(10YR2/3)
ローム粒、焼土粒有。しまり、粘性有。

2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒やや多。。しまり、粘性有。

第22図　26・27号土坑

28・29・30号土坑

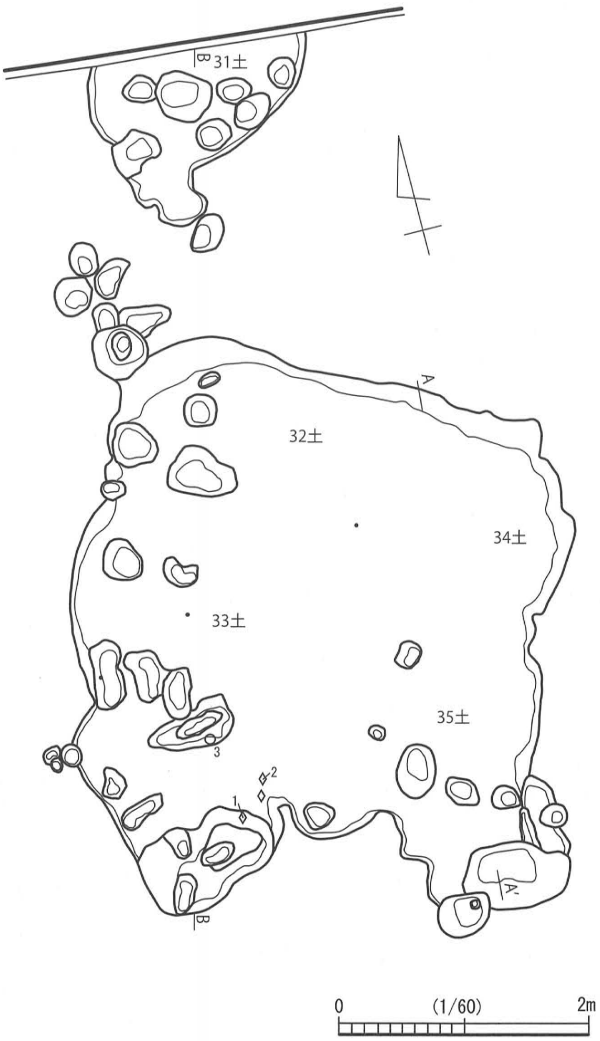


28・29・30土坑
1 黒褐色土(10YR2/3)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒混。粘質土。
2 暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒やや多。。粘質土。
3 褐色土(10YR4/4)　しまり、粘性有。ローム土主体。地山直上。

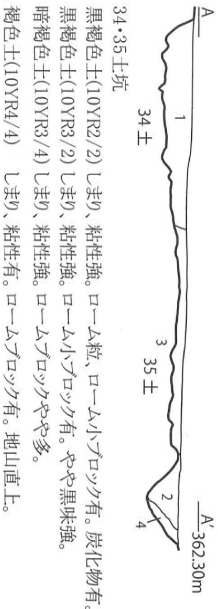
0　(1/30)　1m

第23図　28～30号土坑

31 ～ 35 号土坑

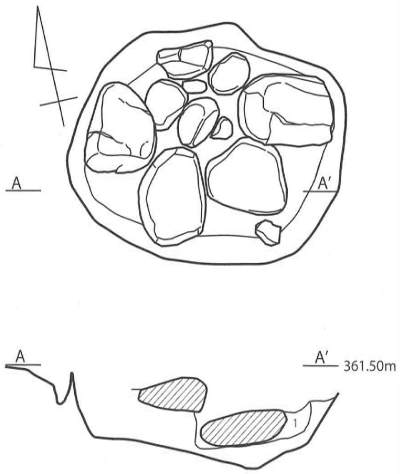


31・32・33土坑
1 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性やや強。炭化粒有。ローム粒有。
2 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性やや強。ローム粒有。
3 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性やや強。礫入。ローム粒、ロームブロック有。
4 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ロームブロック有。地山直上。



34・35土坑
1 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性強。ローム粒、ローム小ブロック有。炭化物有。黒味強。
2 黒褐色土(10YR3/2) しまり、粘性強。ローム小ブロック有。やや黒味強。
3 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性強。ロームブロックやや多。
4 褐色土(10YR4/4) しまり、粘性有。ロームブロック有。地山直上。

38 号土坑

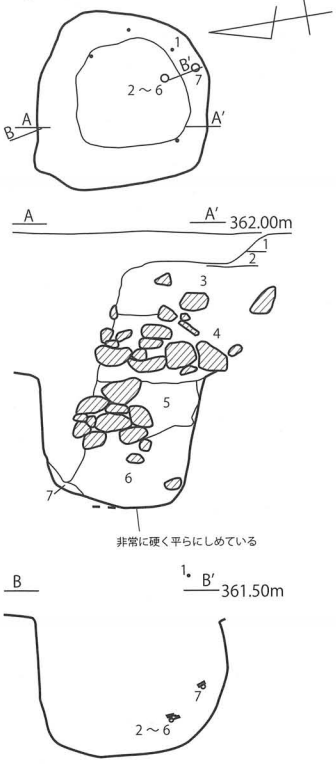


38土坑
1 暗褐色土(10YR3/4)
ローム粒混。しまり、粘性有。礫入。

0 (1/30) 1m

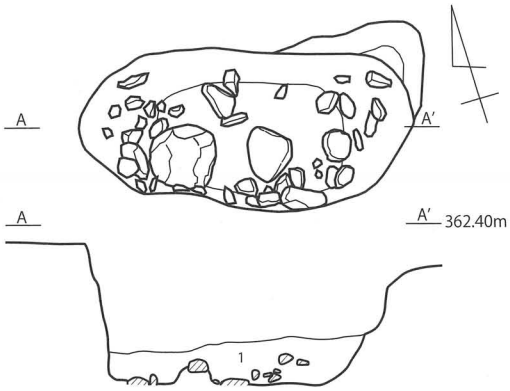
第24図　31～35・38号土坑

39 号土坑



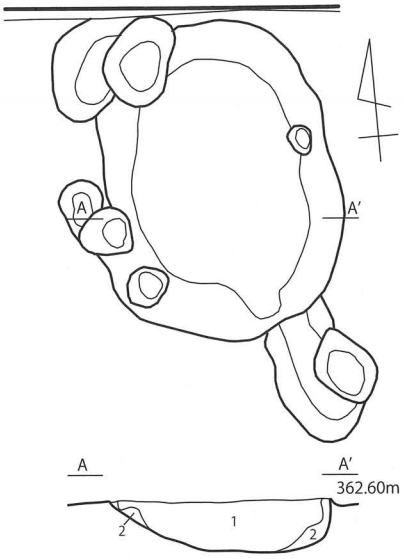
39土坑
1 灰黄褐色土(10YR4/2)
地表を下。バラス混。
2 褐色土(10YR4/6)・1層の混合土
しまり、粘性強。ローム小ブロックやや多。
3 暗褐色土(10YR4/6)
しまり、粘性強。炭化物混。礫混。
4 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性有。礫多。
5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
礫混。ローム粒やや多。
6 暗褐色土(10YR3/4)
しまり、粘性有。ローム粒やや多。
細かいローム小ブロックやや多。
7 褐色土(10YR4/6)
ローム地山に近い。しまり、粘性有。

40 号土坑



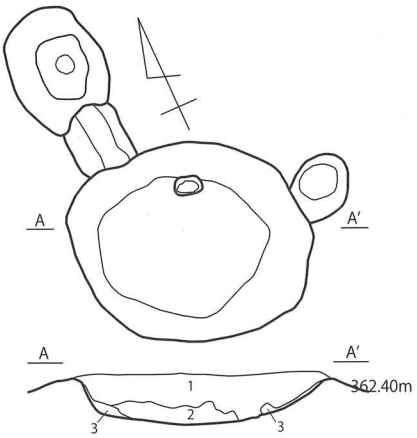
40土坑
1 黒褐色土(10YR2/3)しまり、粘性有。ローム粒有。やや粗。

41 号土坑



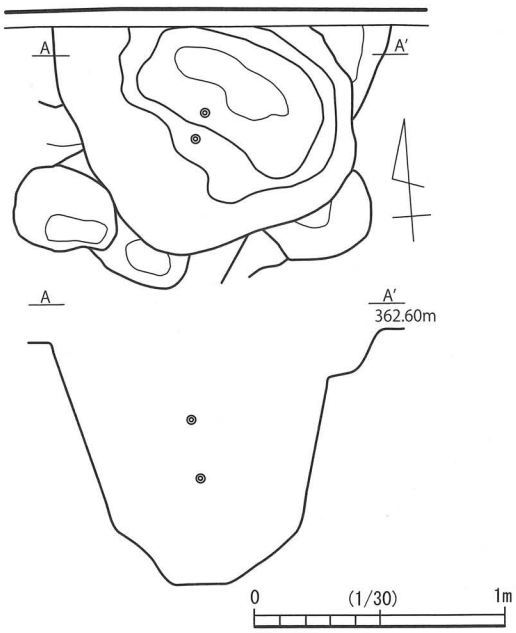
41土坑
1 暗褐色土(10YR3/4)
しまりやや弱、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック混。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまり、粘性有。ローム小ブロックやや多。

42 号土坑



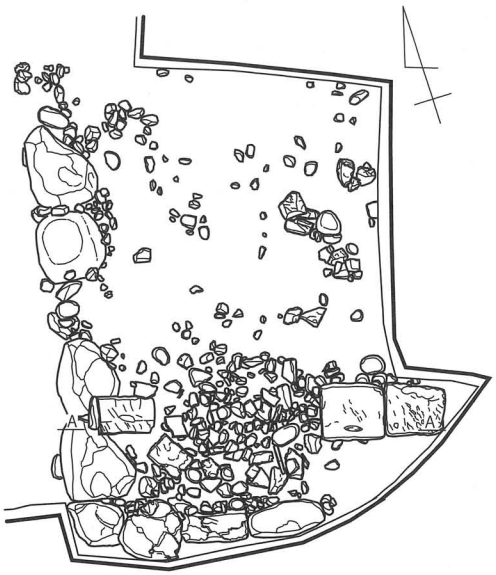
42土坑
1 暗褐色土(10YR3/4)
ローム粒、ローム小ブロック混。しまり、粘性有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒、ローム小ブロックやや多。
3 褐色土(10YR4/6)
地山直上。しまり、粘性有。

43 号土坑

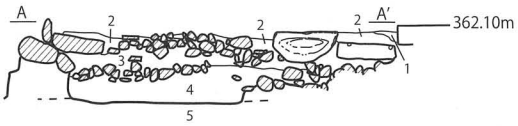


第25図　39～43号土坑

1層目



2層目



台座地点

1 黄褐色砂層(10YR5/6)
参道工事に伴う砂層。

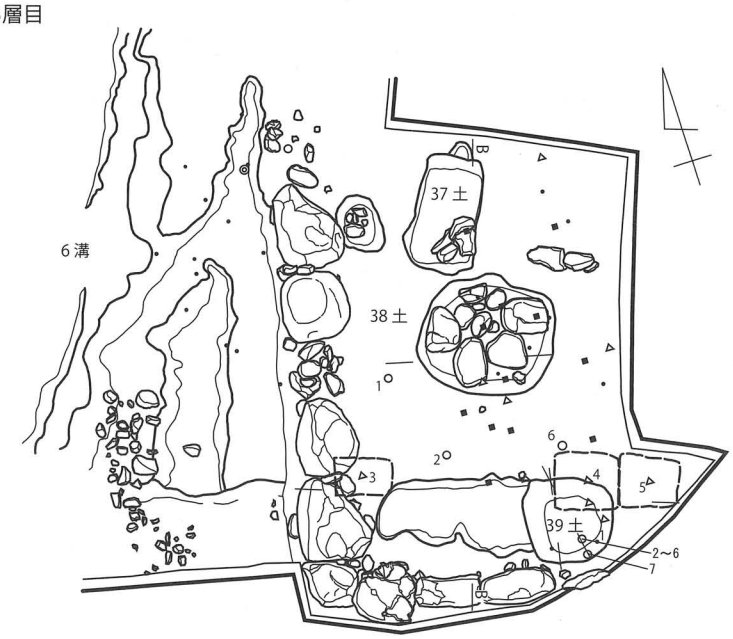
2 灰黄褐色土(10YR4/2)
1層の砂を含む。

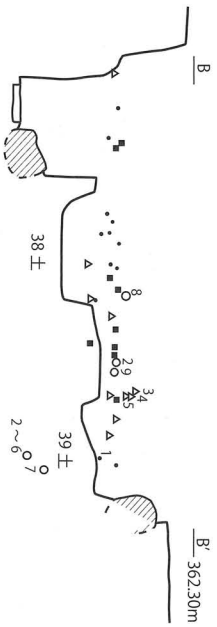
3 灰黄褐色土(10YR4/2)
非常に硬く締まった層粘性有。現代の石材も混入。

4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまり、粘性有。古い地表面か。礫を敷いて(？)整地したようだ。
ロームブロック有。

5 褐色土(10YR4/6)
地山。ローム土。

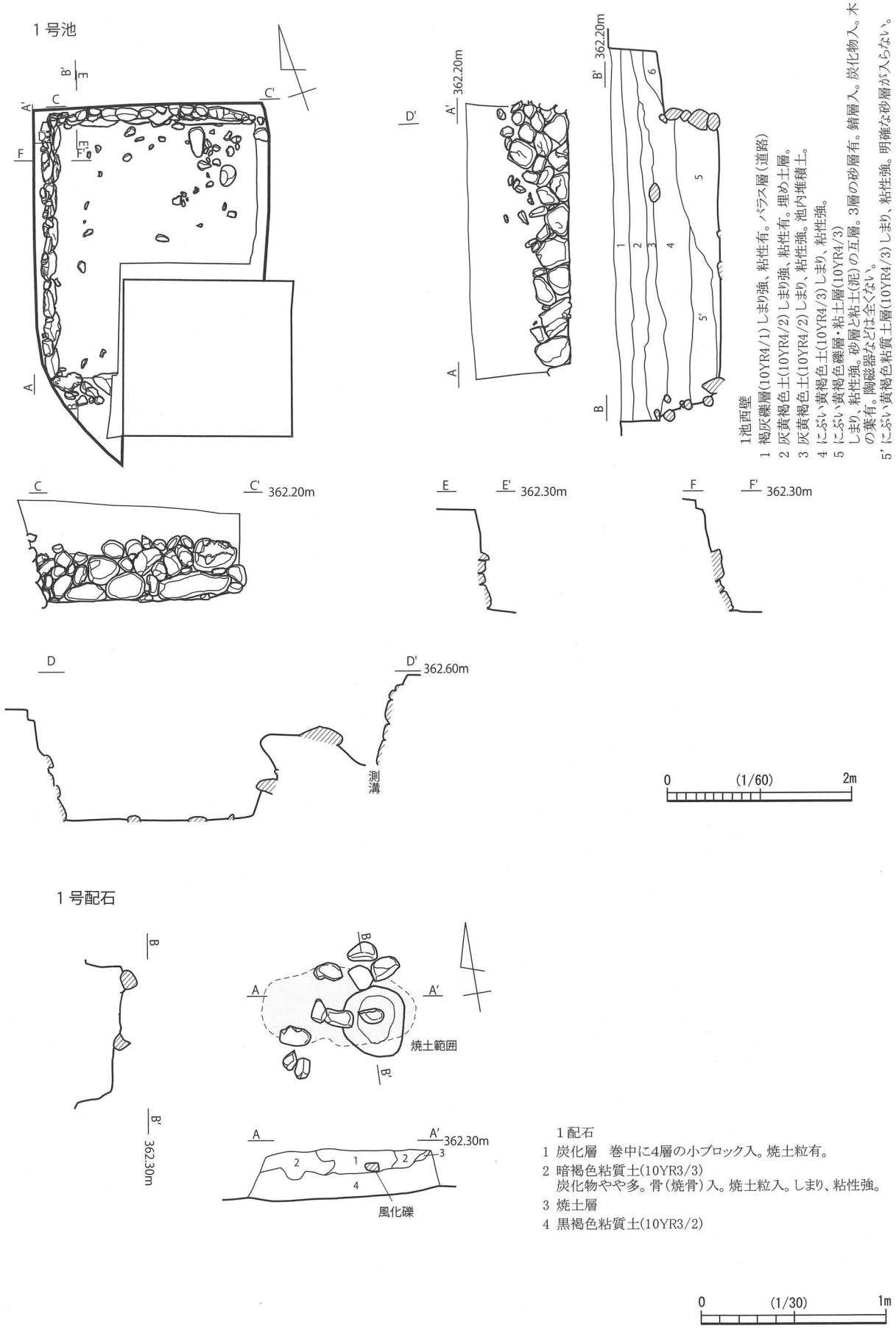
3層目



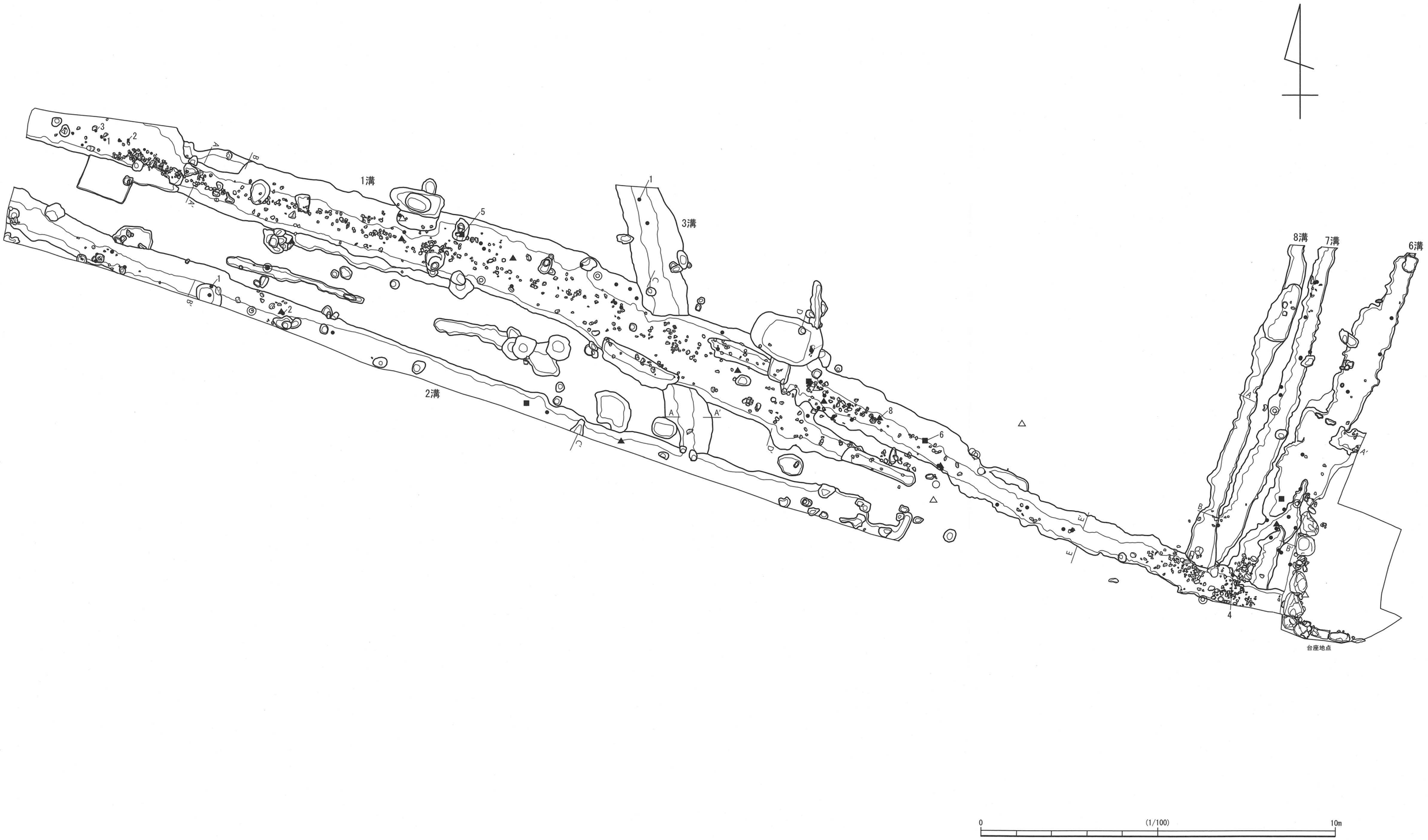


0 (1/60) 2m

第26図　台座地点

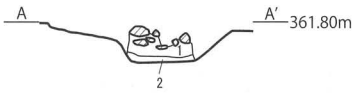


第27図　1号池、1号配石



第28図　1～3・6～8号溝(1)

1号溝



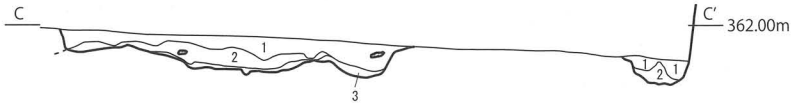
1溝A

1 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性やや弱、ローム粒少々。
ローム粒、ローム小ブロックやや多。径3cm～4cmの礫入り。焼土小粒子、黒色

2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
土小粒子有。しまり、粘性やや弱。土師器片少々有。

1溝・2溝B

1 暗褐色土(10YR3/3)　しまり、粘性弱。
2 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒、焼土粒少々含。しまり、粘性弱。
3 にぶい黄褐色土(10YR3/4)　ローム粒やや多。地山直上。しまり、粘性やや弱。
4 黄褐色土(10YR5/6)　根に入った黄色ローム土。



1溝C

1 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性やや弱、ローム粒少々。
ローム粒、ローム小ブロックやや多。径3cm～4cmの礫入り。焼土小粒子、黒色

2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
土小粒子有。しまり、粘性やや弱。土師器片少々有。

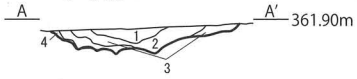
3 褐色土(10YR4/4)
地山の褐色土(ローム土)を主とする、直上の層、一部掘りすぎ有り。
しまり、粘性有。

2溝C

1 暗褐色土(10YR3/4)
しまり、粘性弱。

2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム粒主。カクラン状(ピット状)。
しまり、粘性やや弱。

3号溝



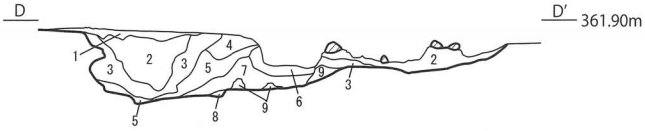
3溝

1 黒褐色土(10YR3/2)
やや黒味強。しまり、粘性有。

2 暗褐色土(10YR3/3)
しまり、粘性やや弱。ローム粒有。

3 暗褐色土(10YR3/4)
ロームブロック有。

4 褐色土(10YR4/6)
地山。ローム土。



1溝D

1 暗褐色土(10YR3/3)　やや黒味有。しまりやや弱、粘性やや有。

2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム小ブロック、黒色小ブロック、暗褐色土の混合土、5層と同じ
ロームブロッ ク多。黄色味強。しまりやや弱。粘性有。

3 暗褐色土(10YR3/4)
ローム小ブロック、黒色小ブロック少。しまり、粘性有。

4 褐色土(10YR4/6)
ローム主体、黒色小ブロックなどわずかに混含。しまりやや弱。粘性弱。

5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
ローム小ブロック、黒色小ブロック、暗褐色土の混合土。
ロームブロッ ク多。黄色味強。しまりやや弱。粘性有。

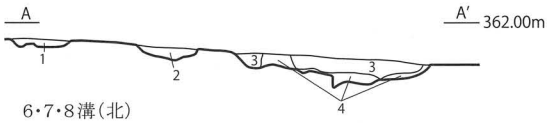
6 暗褐色土(10YR3/4)
1溝下層。

7 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
5層に類似。5層よりも黄色味強。ローム小ブロック、黒色小ブロック有。
しまり、粘性有。

8 暗褐色土(10YR3/4) 3層に類似。

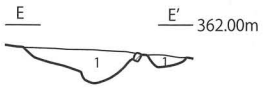
9 褐色土(10YR4/6) ローム土。地山。

6・7・8号溝北



6・7・8溝(北)

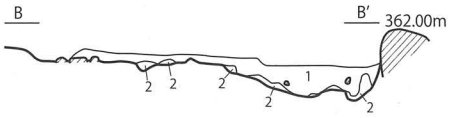
1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック入。
2 黒褐色土(10YR2/3) しまり、粘性有。黒味有。ローム小ブロック入。
3 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性有。小礫入。
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり、粘性有。ローム小ブロック、ローム粒混。



1溝E

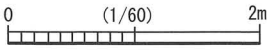
1 黒褐色土(10YR2/3)
しまり、粘性有。赤色粒、焼土粒微量。

6・7・8号溝南

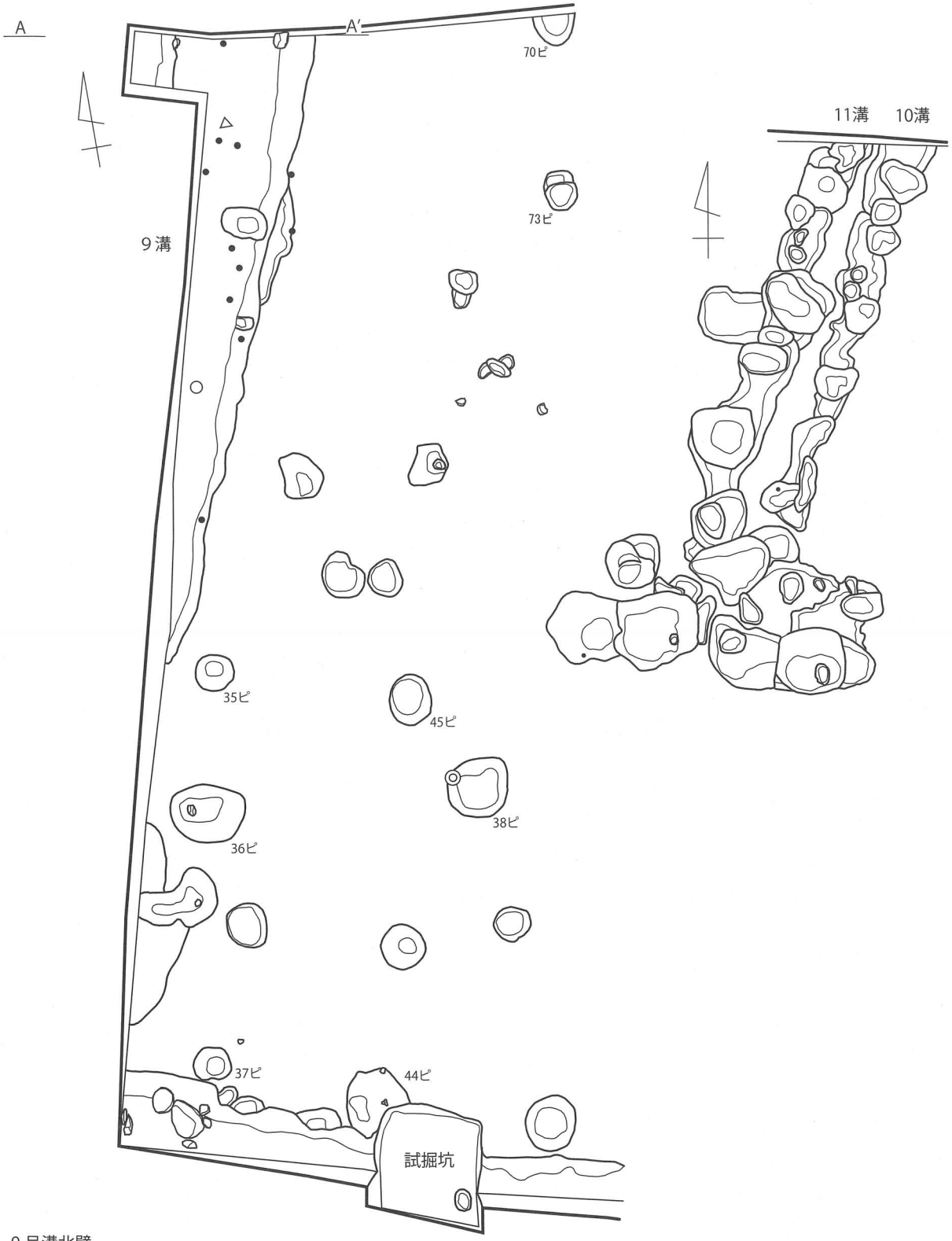


6・7・8溝(南)

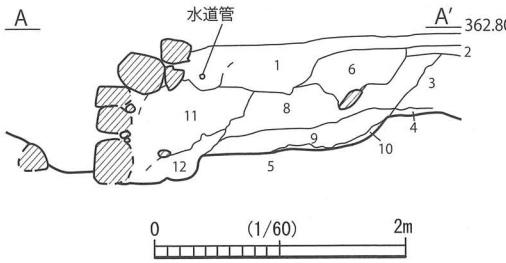
1 暗褐色土(10YR3/4) 礫入。土器片入。しまり、粘性有。
2 褐色土(10YR4/6) 地山に近いローム土。しまり、粘性有。



第29図　1～3・6～8号溝(2)



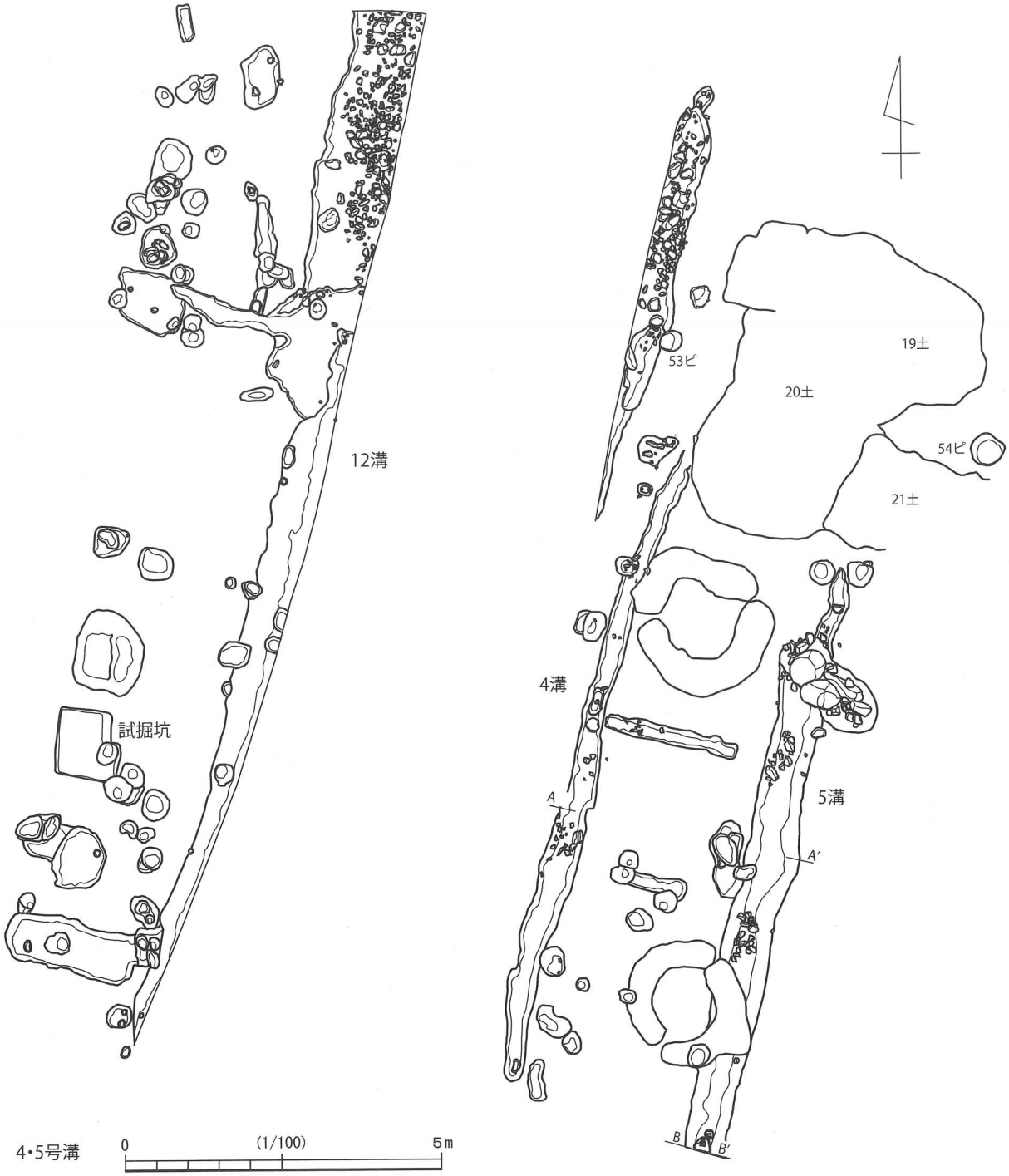
9号溝北壁



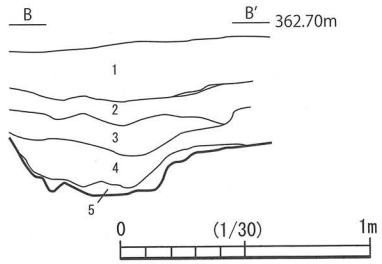
9溝

1 褐灰色土(10YR4/1)しまり、粘性有。表土。地表。
2 灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性有。錆をわずかに含む層。旧水田床土か。
3 暗褐色土(10YR3/4)しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック有。
4 暗褐色土(10YR3/4)・ローム土 しまり、粘性有。混合土(漸移層)
5 褐色土(10YR4/6)しまり、粘性有。地山ローム土(上層はオレンジ色、下層は黄色土)
6 灰黄褐色土(10YR4/2)しまり、粘性有。やや粗。上層からの撹乱(現代)ゴミ穴か。
8 暗褐色土(10YR3/4)しまり、粘性有。3層に類似。赤色粒(焼土粒)混。炭化物有。
9 暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。ローム粒、ローム小ブロック、焼土粒有。
10 褐色土(10YR4/6)しまり、粘性有。ローム主体。
11 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり、粘性有。石垣造成時の形成か。
12 暗褐色土(10YR3/3)しまり、粘性有。石垣造成時の形成か。

第30図　9～11号溝



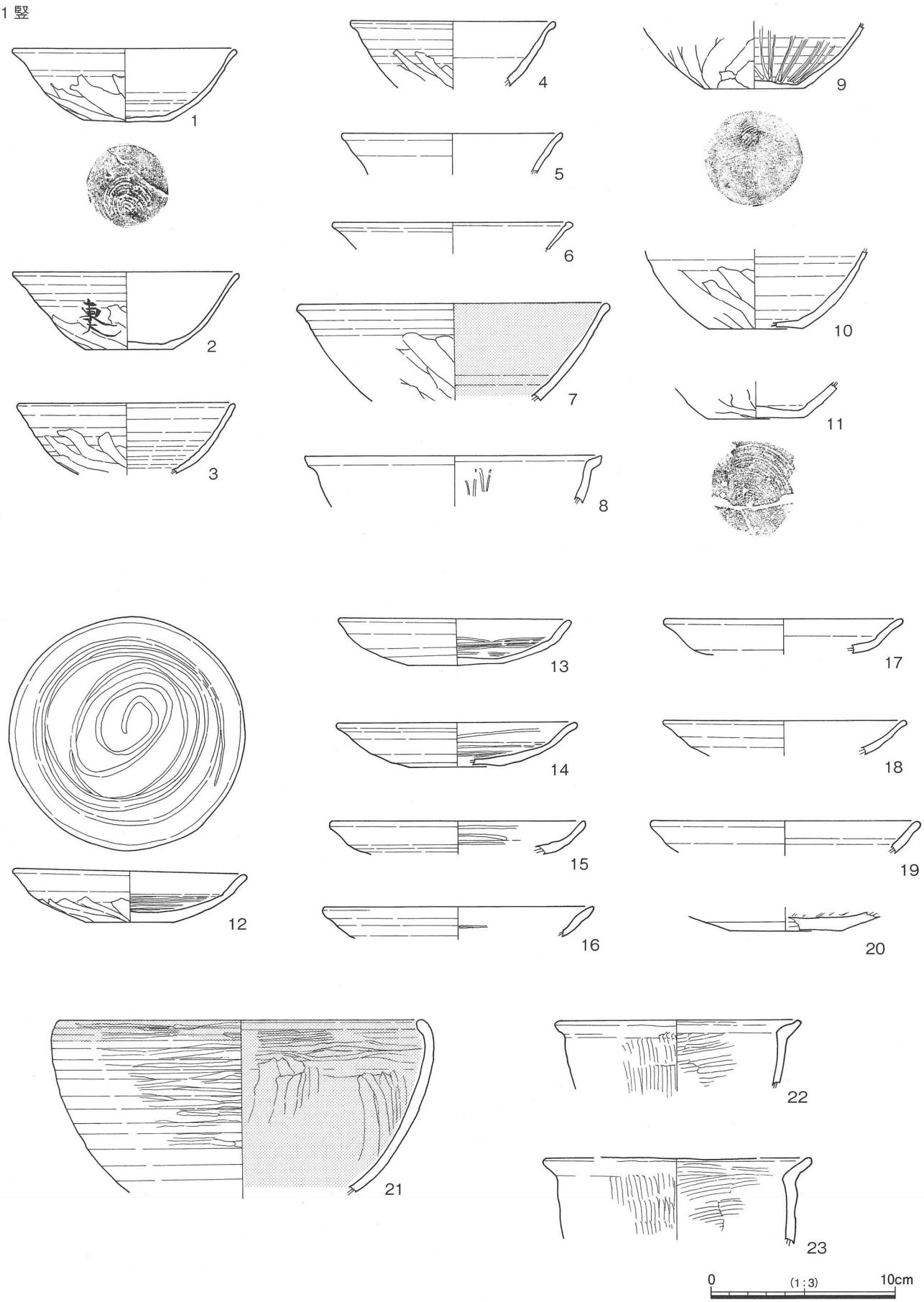
5号溝



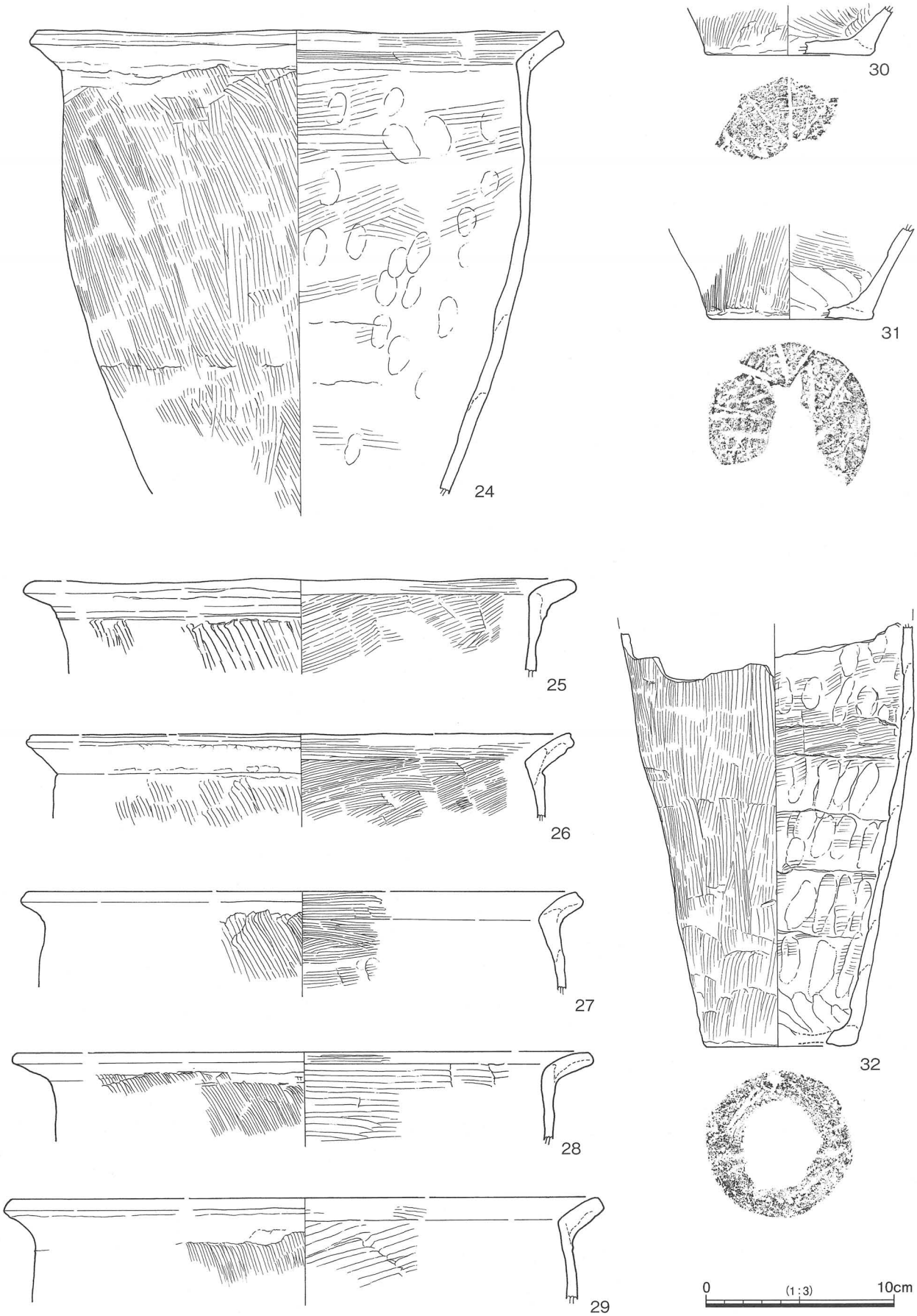
4溝・5溝
4 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性やや有。礫入。ローム粒有。
5 褐色土(10YR4/6) 地山の一部～直上。ローム土。5溝中の5層はローム土中に褐色土を混。

5溝
1 褐灰色土(10YR4/1) 表土。しまり、粘性やや有。
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
錆分有。1層との間に炭化物層がうすく間層として入る。ローム粒多。しまり、粘性有。
3 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒有。しまり、粘性有。
4 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物有。ローム粒有。しまりやや有。粘性有。
5 褐色土(10YR4/4) ローム地山の直上。しまり、粘性有。

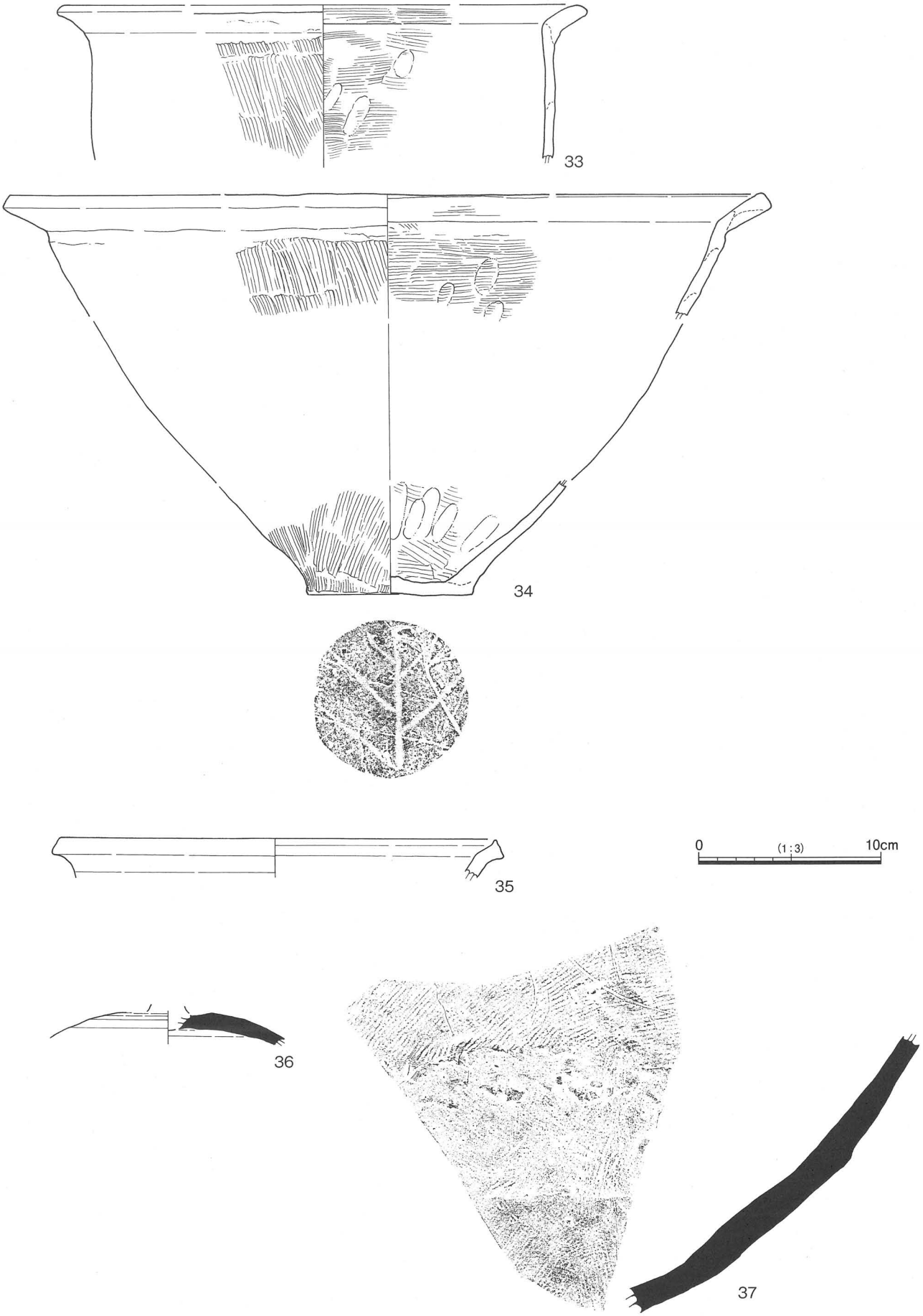
第31図　4・5・12号溝



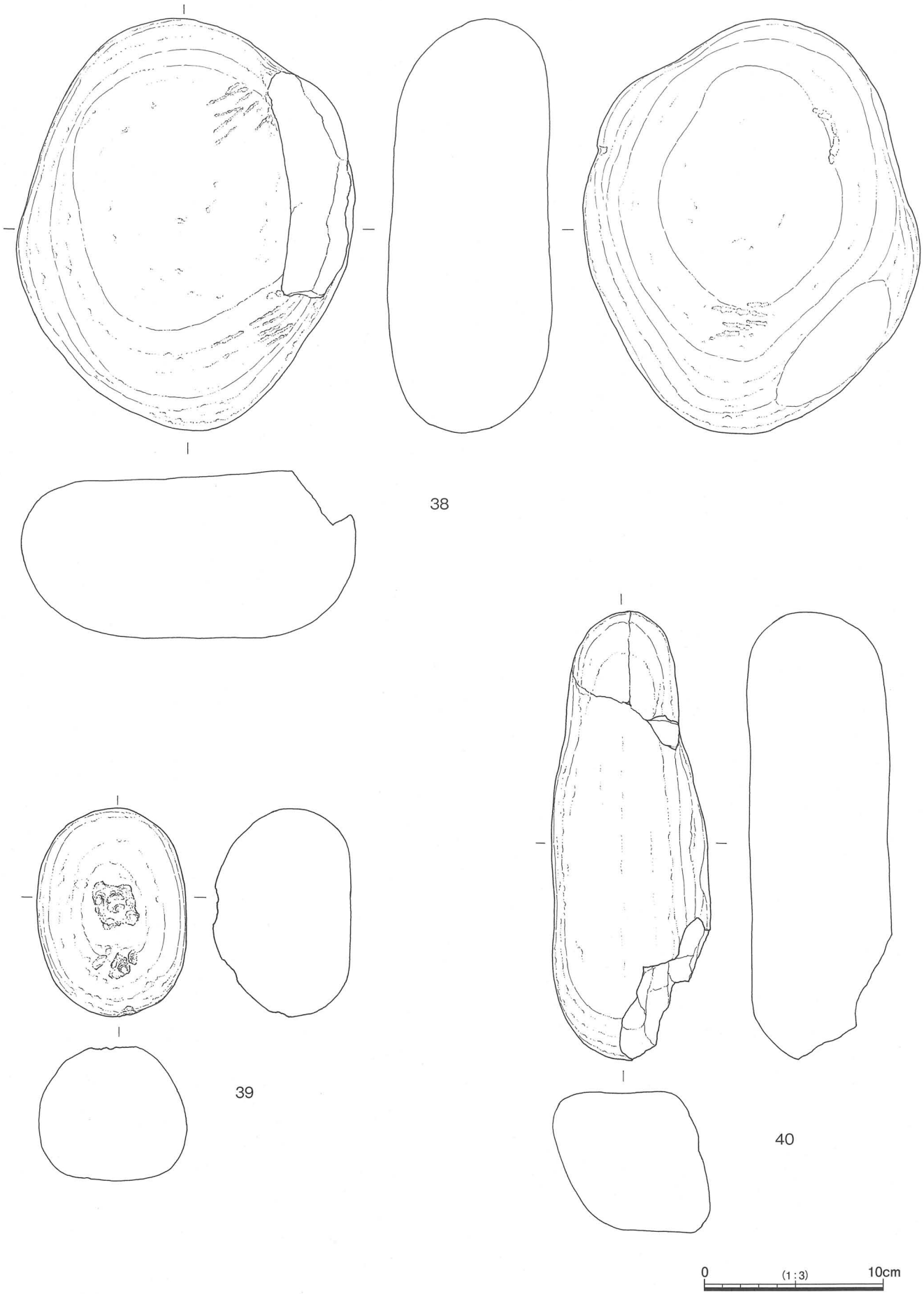
第32図　出土遺物(1)



第33図　出土遺物(2)

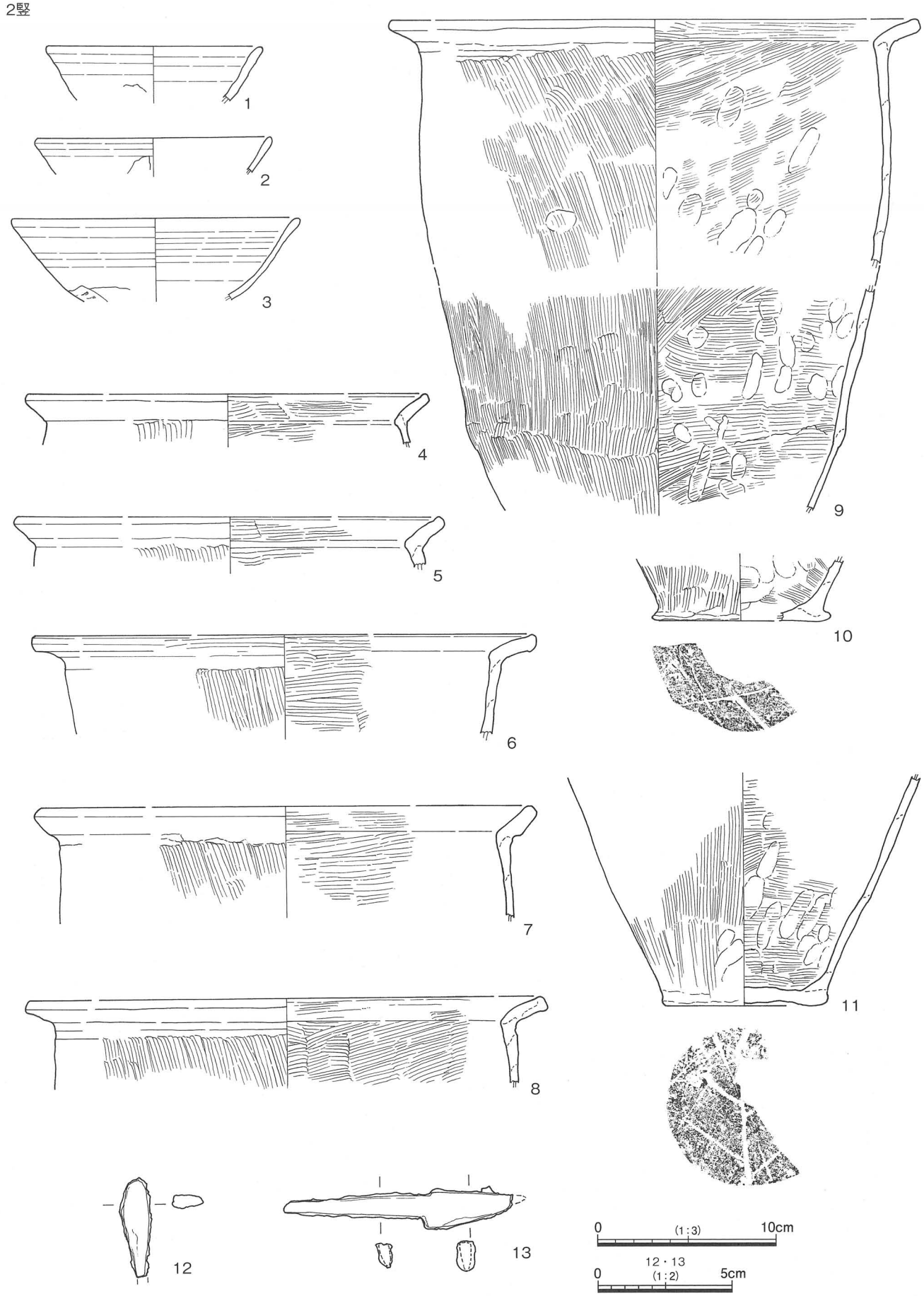


第34図　出土遺物(3)

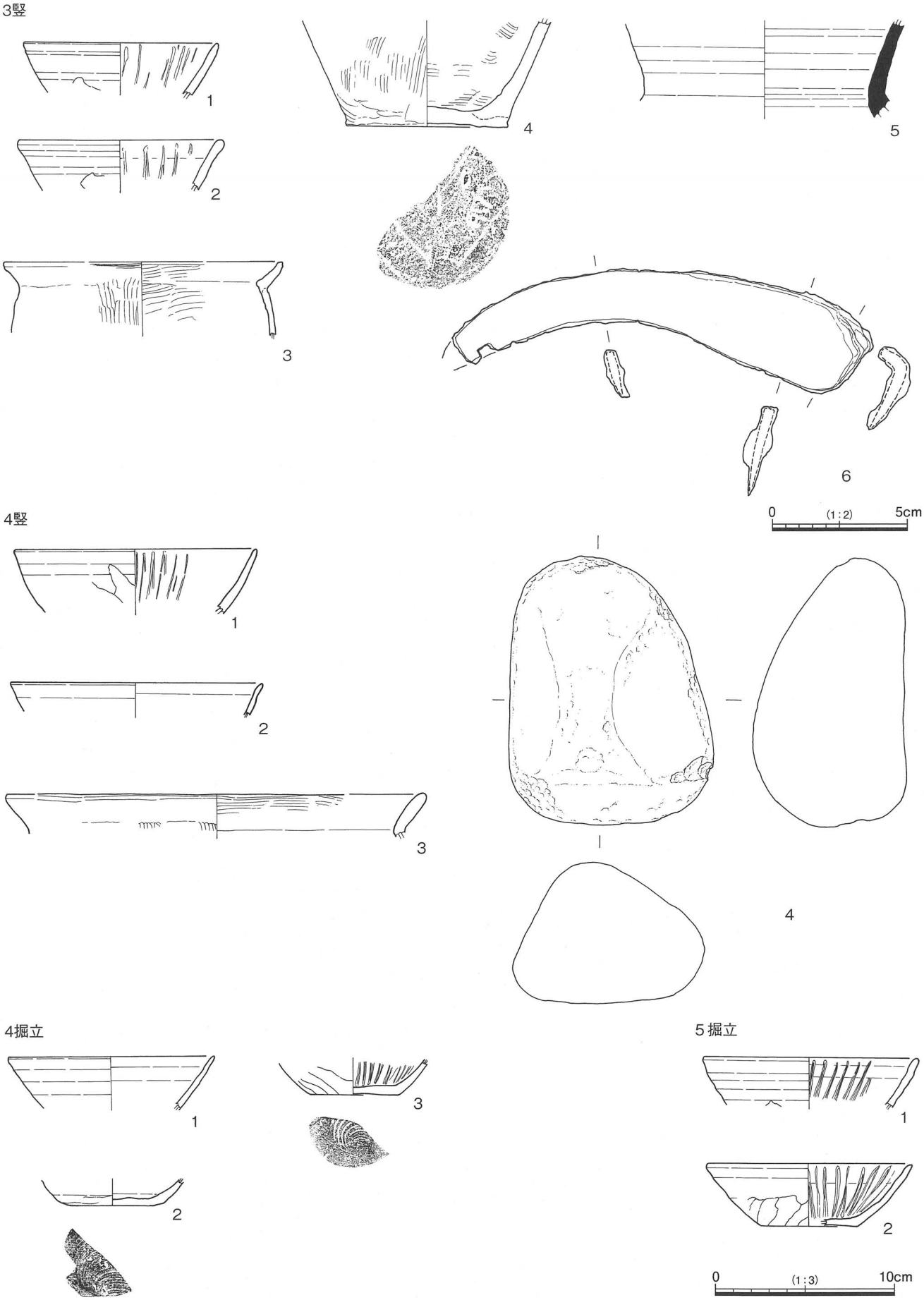


第35図　出土遺物(4)

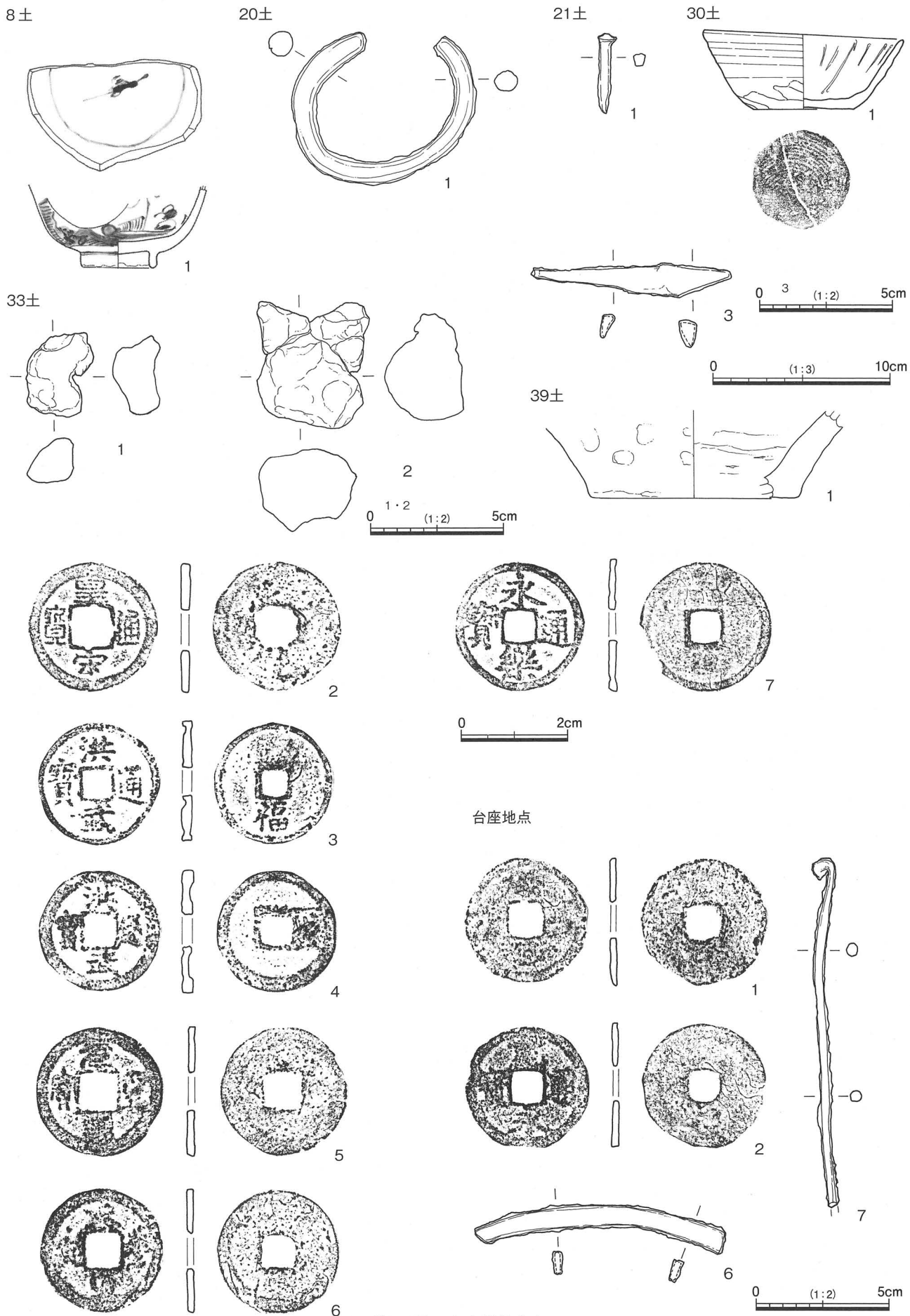
2竪



第36図　出土遺物(5)

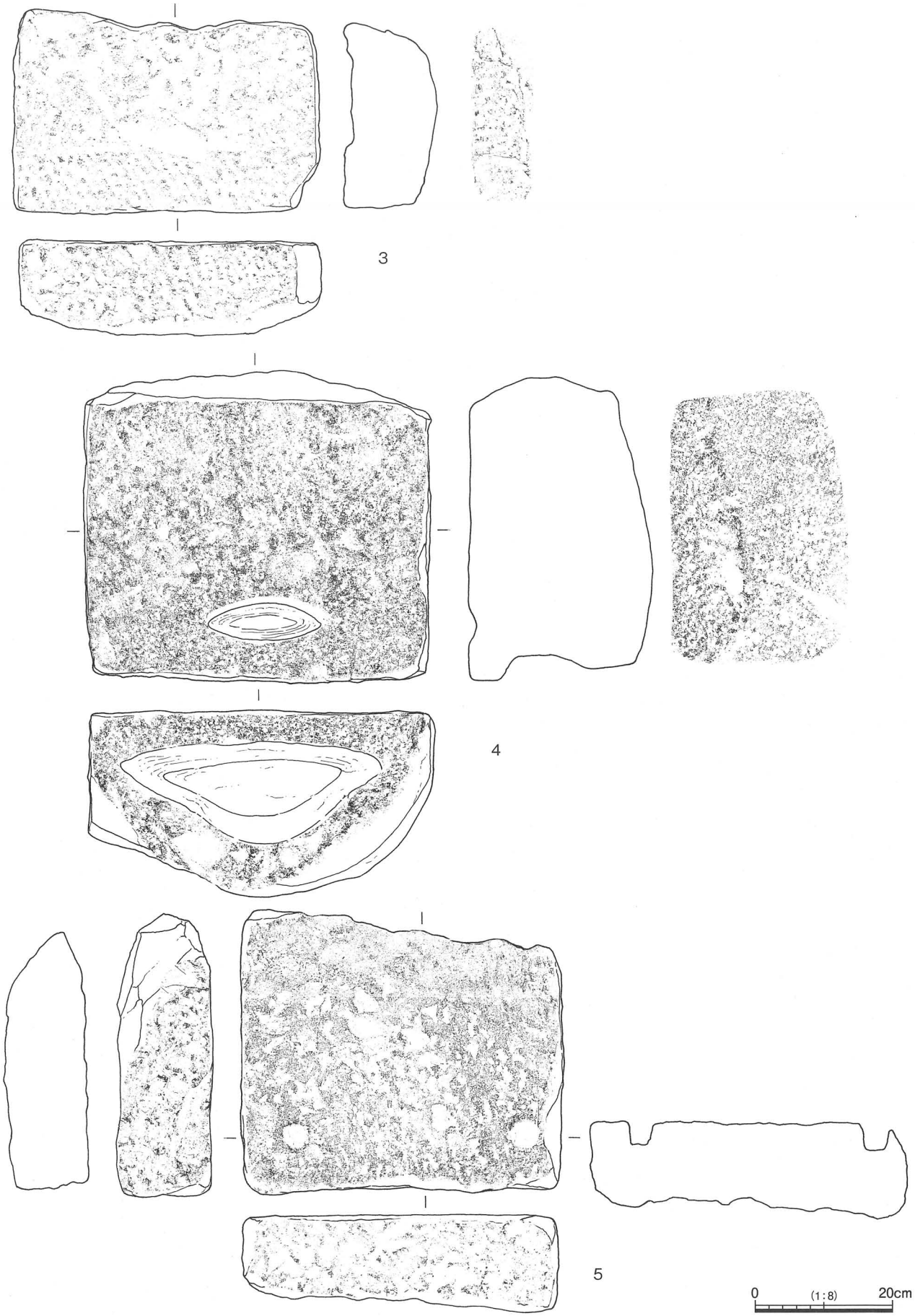


第37図　出土遺物(6)

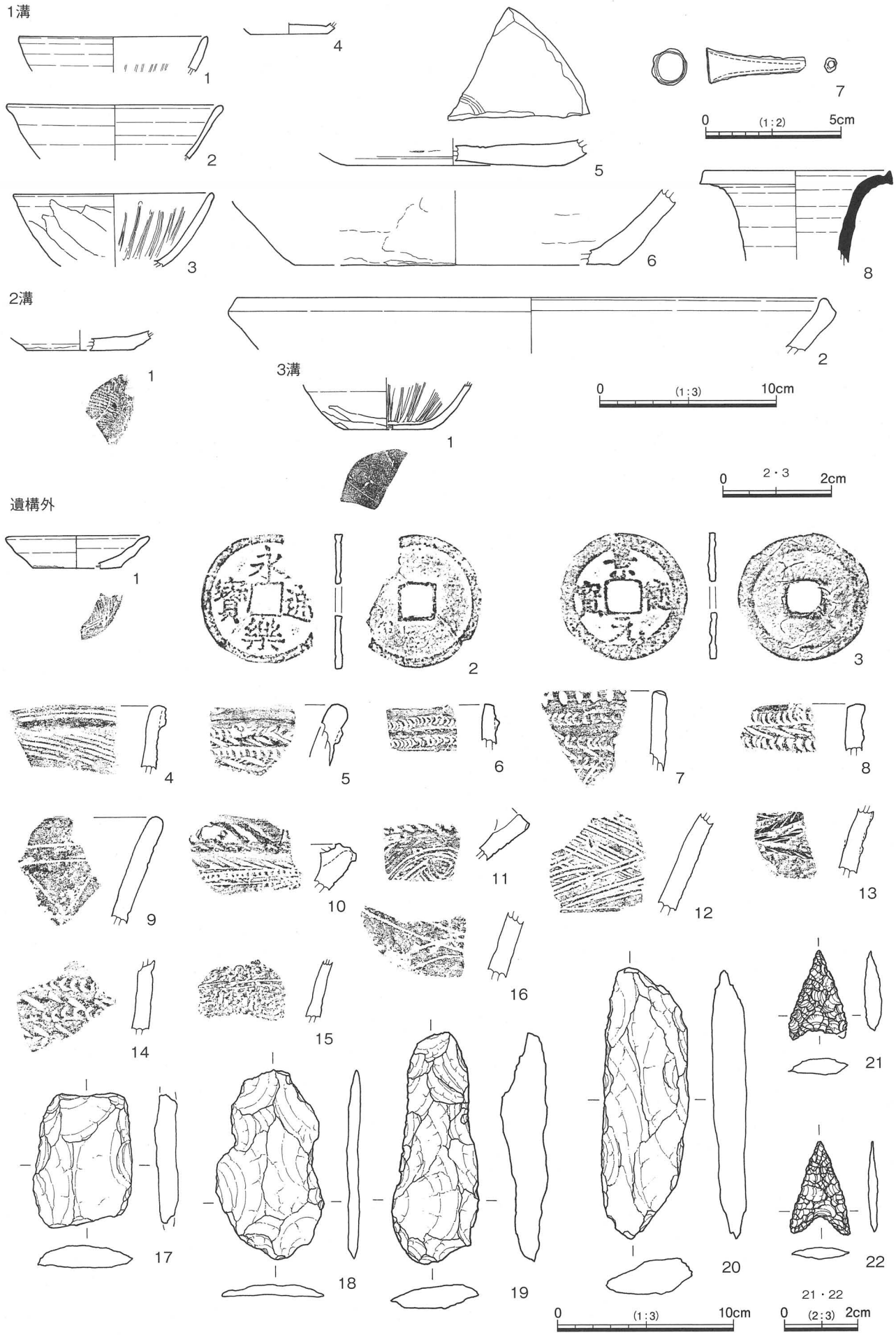


第38図　出土遺物(7)

台座地点



第39図　出土遺物(8)

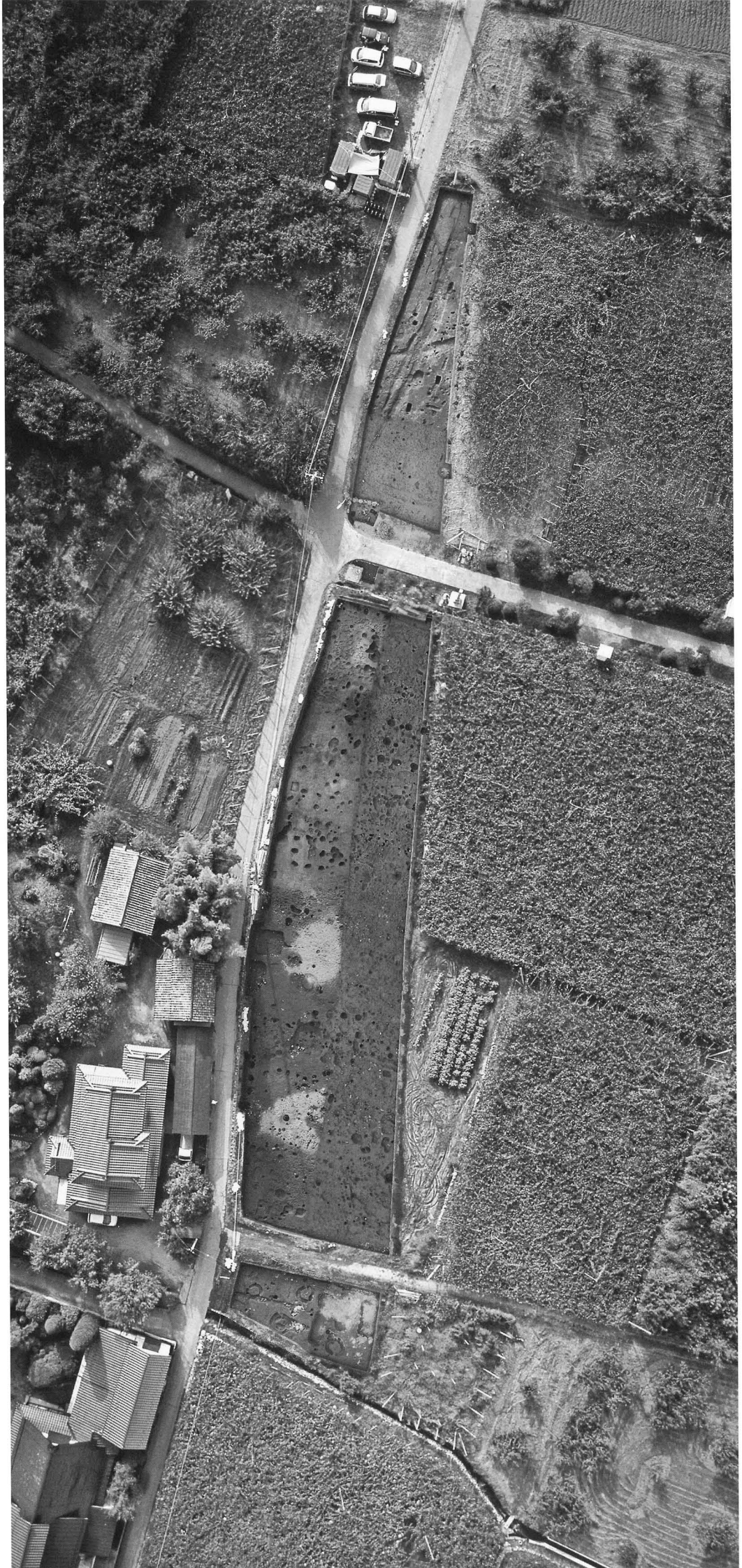


第40図　出土遺物(9)

写　真　図　版

図版 1

調査区全景
（合成写真）

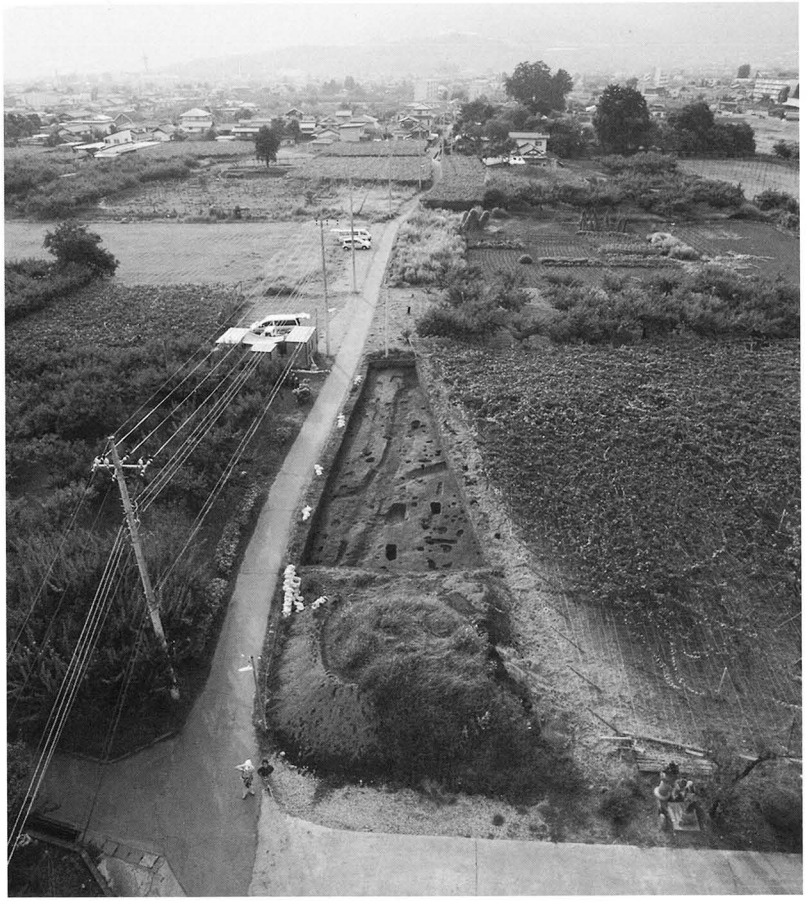


1．調査区周辺空中写真（南より　中央は清白寺及び清白寺参道）

2．調査区空中写真（西より）

図版３

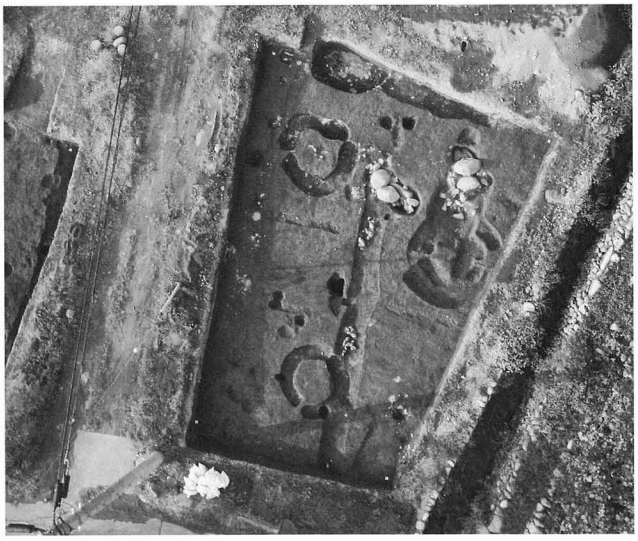
１．調査区空中写真（上より　盛り土反転後）



２．調査区空中写真（東より　中央は連方屋敷に通じる道）

３．西区１号溝ほか空中写真（上より）

４．中区空中写真（上より　１号竪穴ほか）



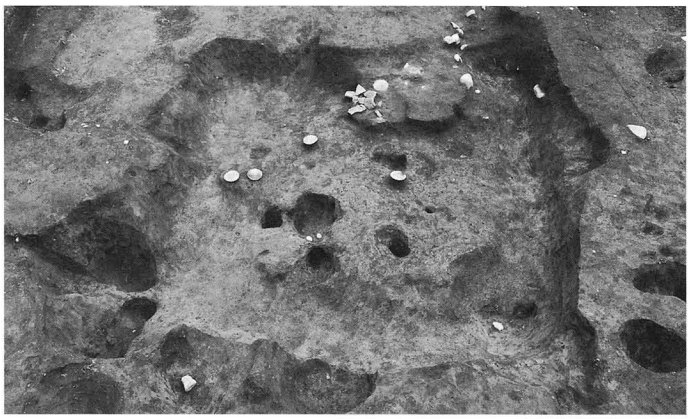
５．東区空中写真（上より）

1．1号竪穴遺物出土状況（西より）

2．1号竪穴遺物出土状況（東より）

3．1号竪穴遺物出土状況

4．1号竪穴遺物出土状況



5．1号竪穴床直遺物出土状況

6．土師器坏・皿出土状況

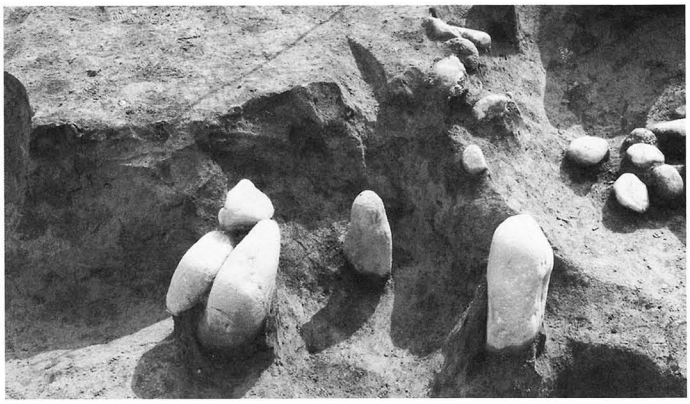
7．「東大」銘墨書土器出土状況

図版５

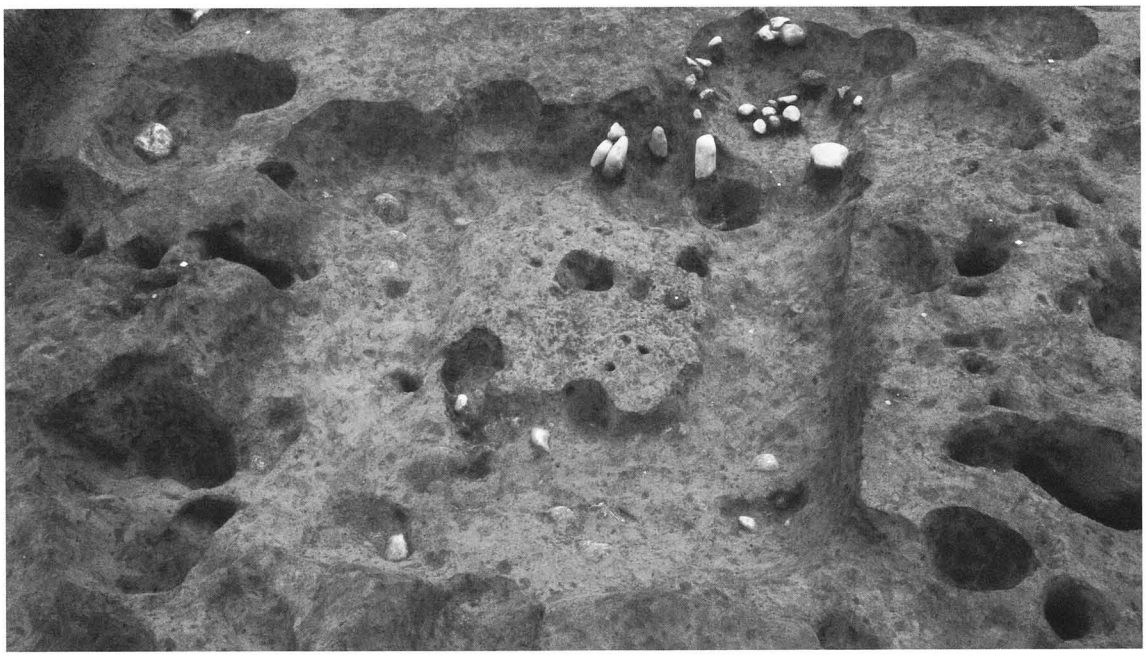
１．土師器出土状況

２．竈内支脚転用甕出土状況

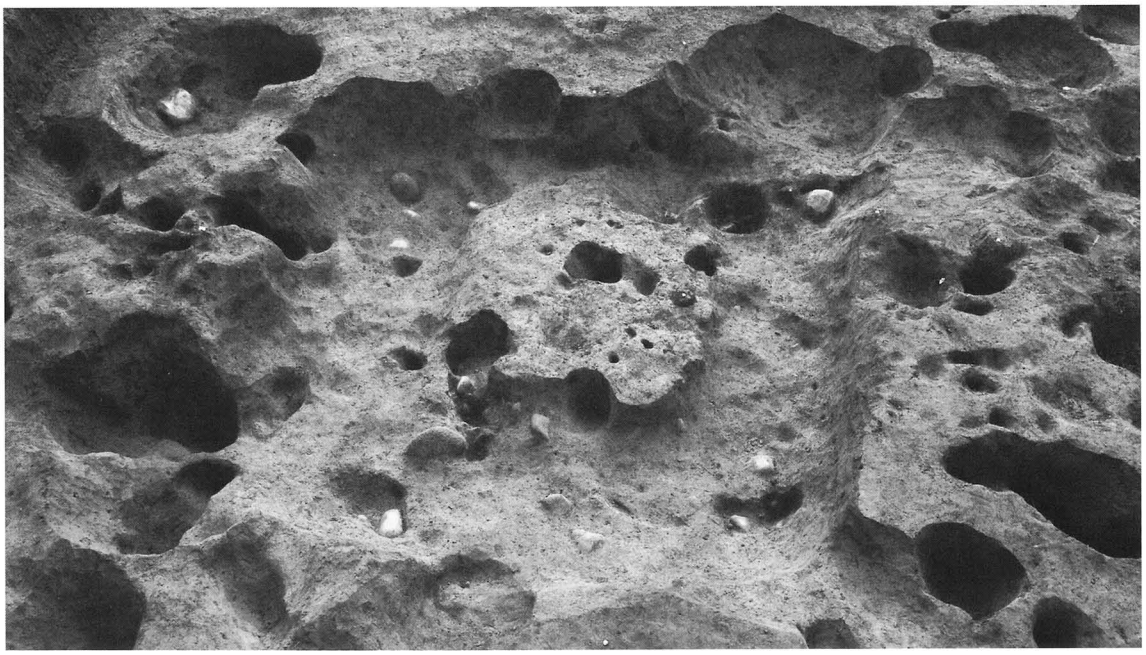
３．１号竪穴竈（西より）



４．１号竪穴竈（支脚転用土器を外した状況）



５．１号竪穴完掘状況
（西より）



６．１号竪穴掘り方状況
（西より）

１．2号竪穴遺物出土状況（北より）

２．２号竪穴竈周辺遺物出土状況（南より）

３．２号竪穴竈截ち割り状況

４．２号竪穴竈礫出土状況（竈正面より）

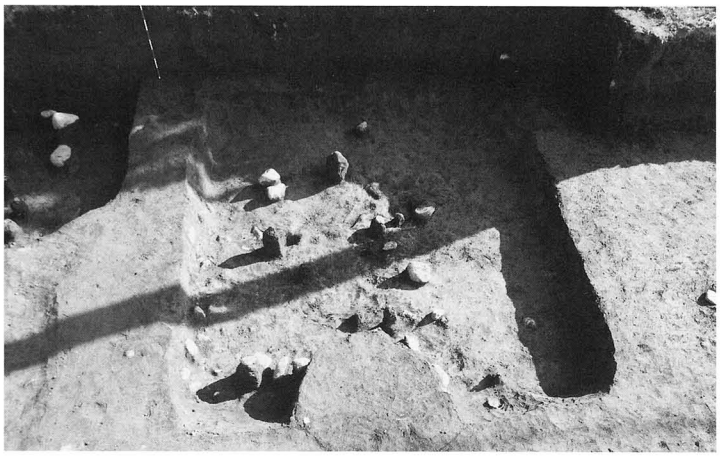
５．竈礫出土状況（竈上より）

６．２号竪穴完掘状況（南より）

７．２号竪穴掘り方状況（北より）

図版７

１．３号竪穴ベルト（南より）



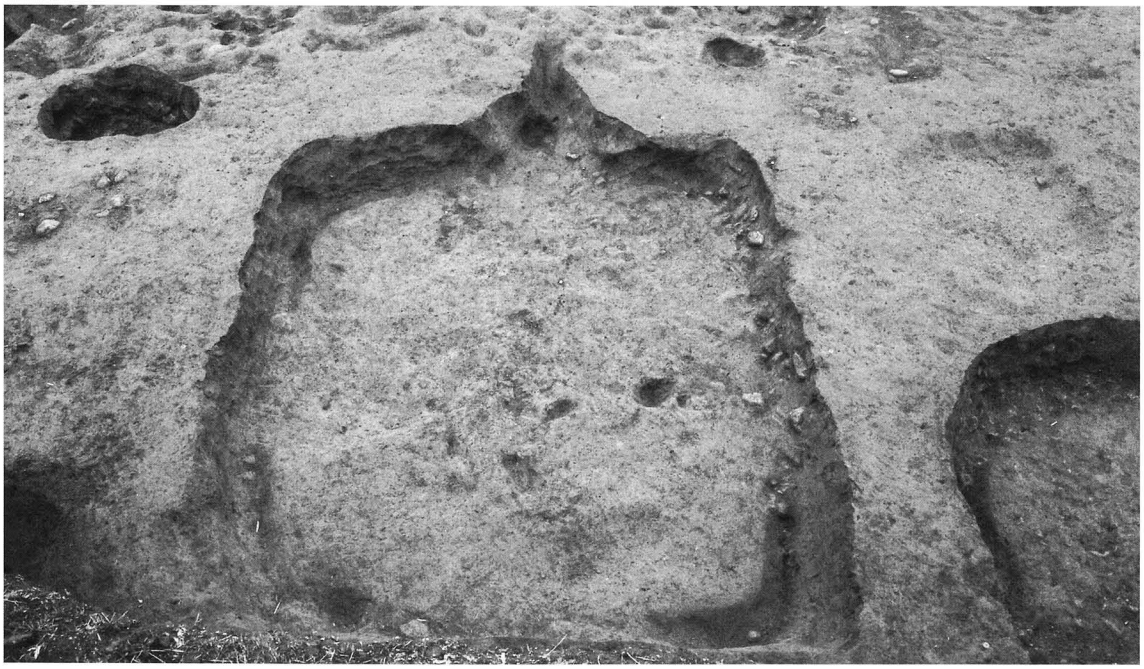
２．３号竪穴遺物出土状況（北より）

３．３号竪穴内鎌出土状況

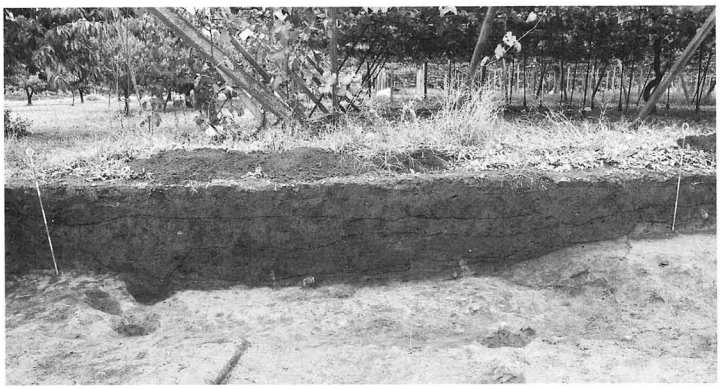
４．３号竪穴竈周辺礫出土状況

５．３号竪穴竈完掘状況

６．３号竪穴掘り方状況



７．３号竪穴完掘状況
（南より）



１．４号竪穴覆土断面（南より）

２．４号竪穴遺物出土状況

３．４号竪穴竈截ち割り状況（正面西より）

４．４号竪穴竈截ち割り状況（南より）

５．４号竪穴竈袖石・支脚石出土状況（西より）

６．４号竪穴竈袖石・支脚石出土状況（南より）

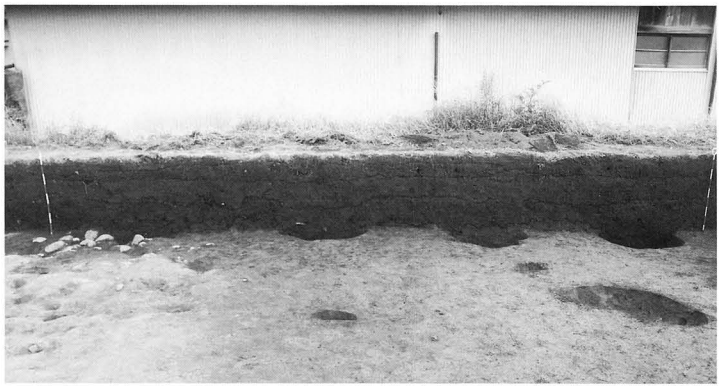
７．４号竪穴完掘状況（南より）

図版９

１．１号掘立10号ピット断面（北より）

２．１号掘立７号ピット断面（北より）

３．１号掘立８号ピット断面（北より）



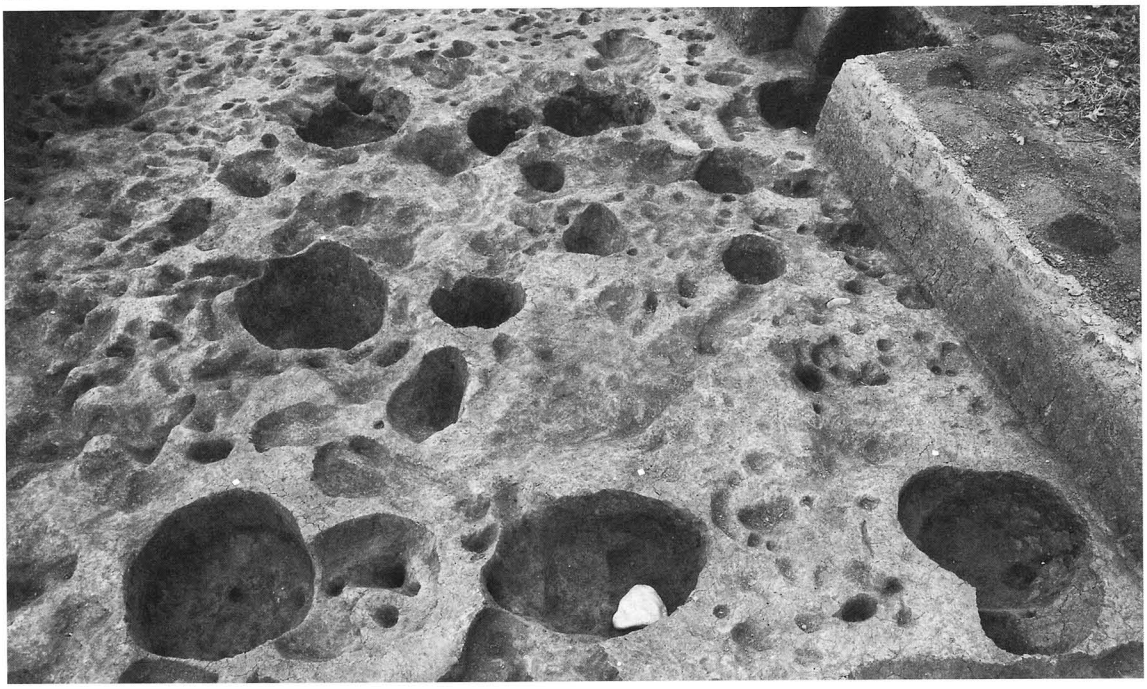
４．１号掘立柱穴列断面（北より）

５．１号掘立完掘状況（北より）

６．１号掘立完掘状況（西より）

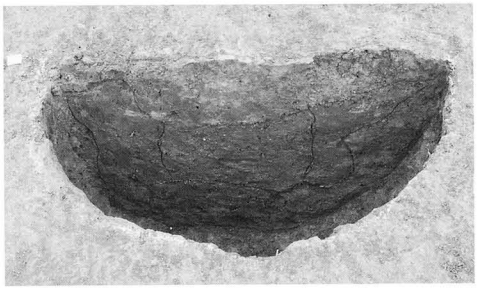
７．２号掘立完掘状況（南より）

1．３号掘立完掘状況
（西より）

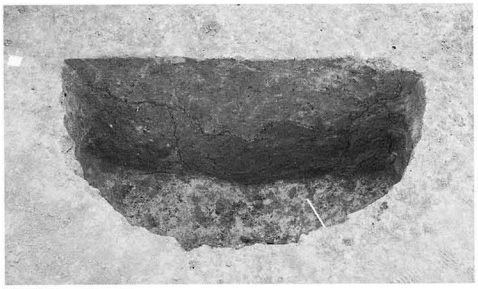


2．４号掘立完掘状況
（東より）

3．４号掘立 67 号ピット断面



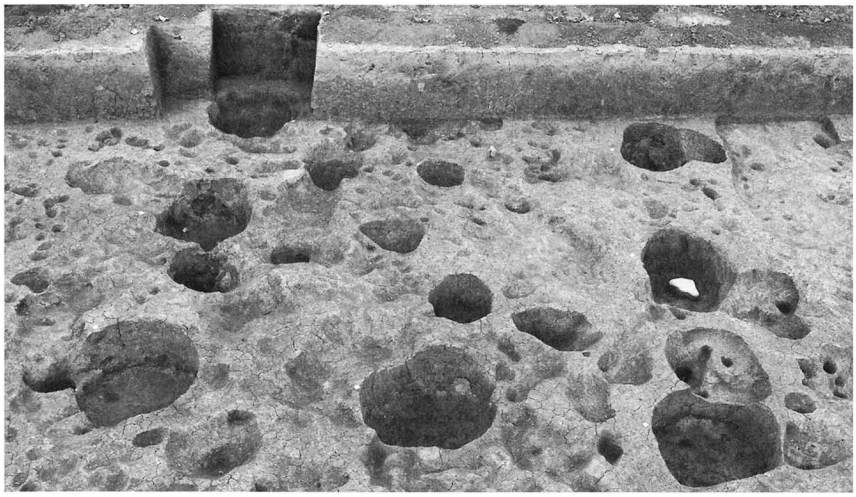
4．４号掘立 66 号ピット断面



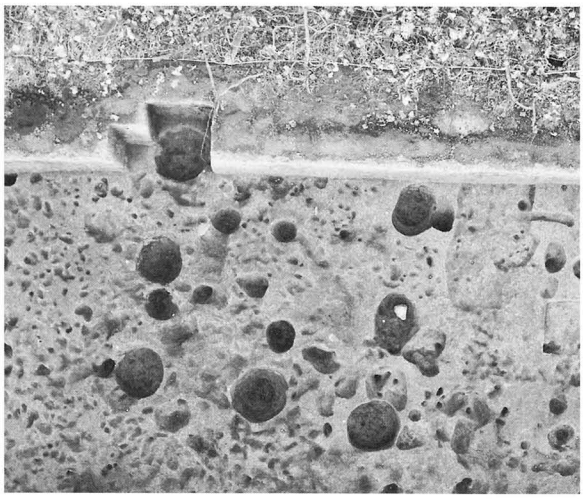
5．４号掘立 65 号ピット断面

6．４号掘立 64 号ピット断面

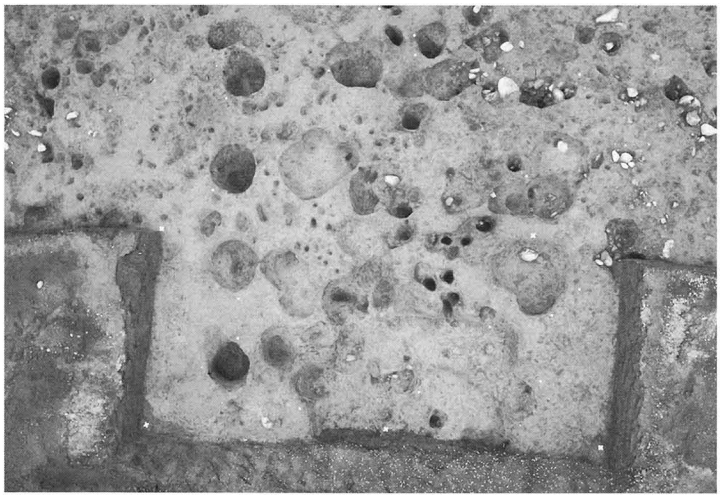
7．４号掘立 63 号ピット完掘状況



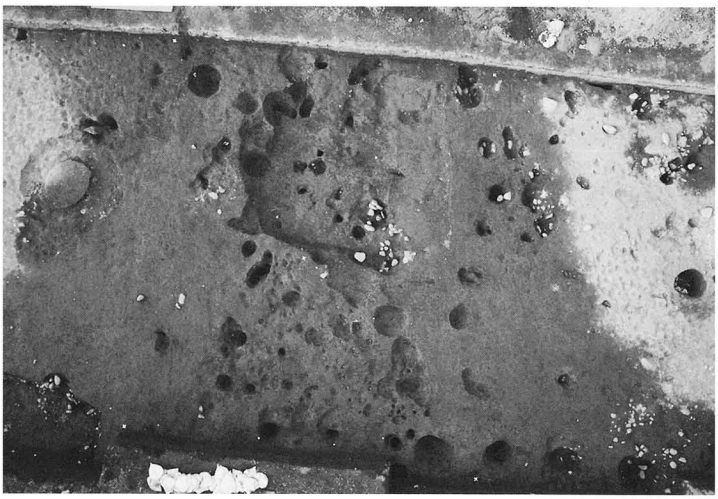
1．４号掘立完掘状況（南より）



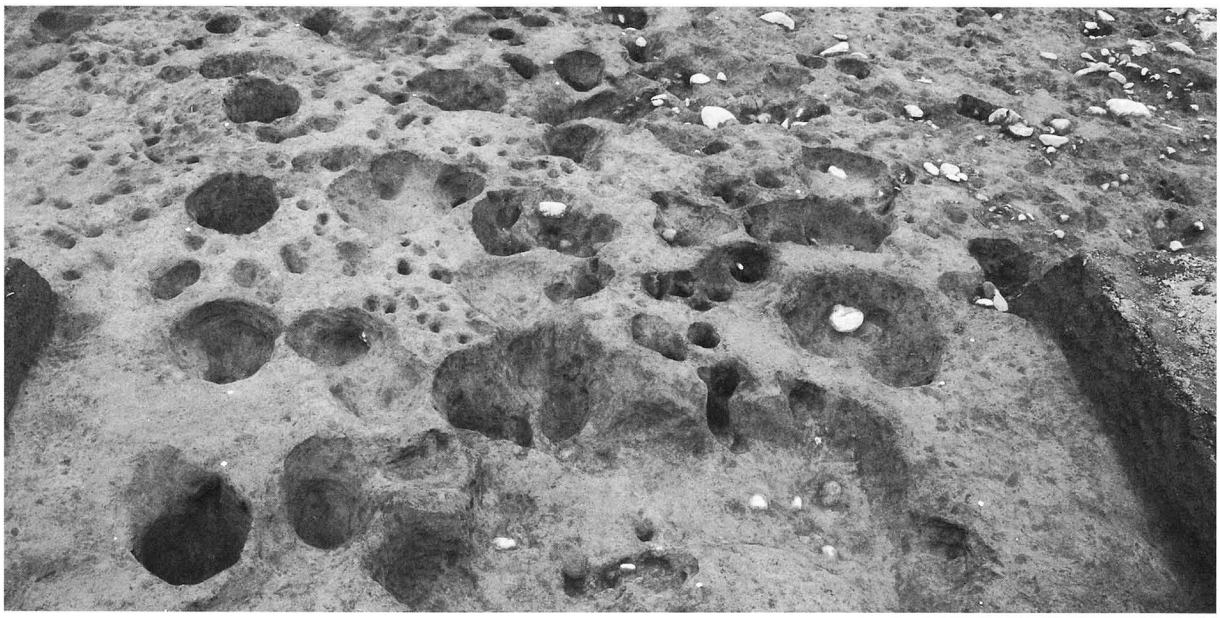
2．４号掘立完掘状況（空中写真　上より）



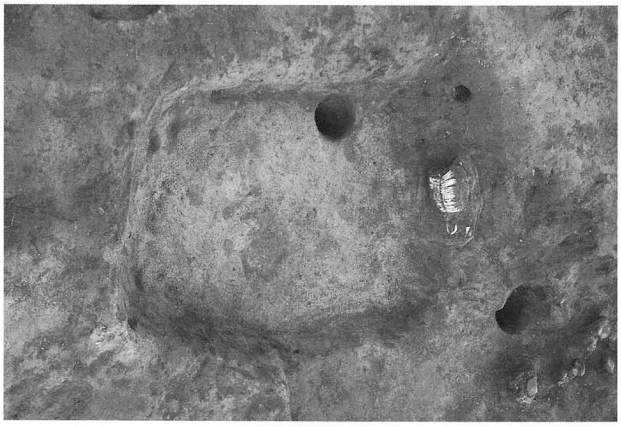
3．５号掘立完掘状況（空中写真　上より）



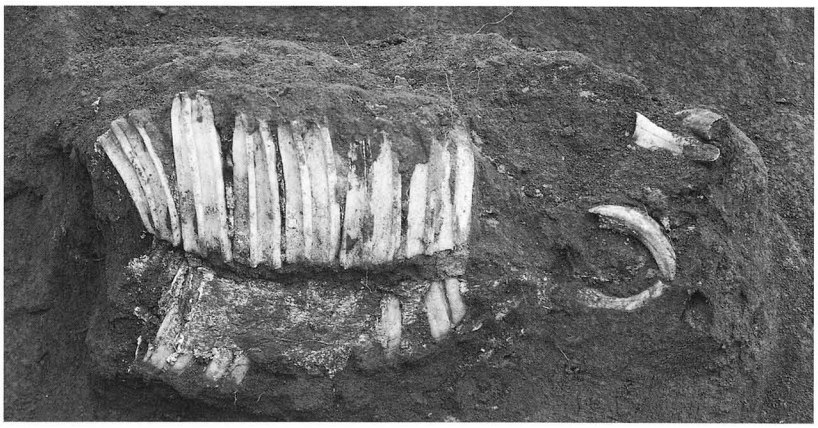
4．１・５号掘立周辺状況（空中写真　上より）



5．５号掘立完掘状況（南より）



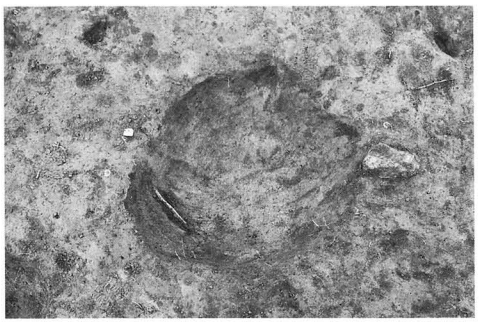
6．１号土坑

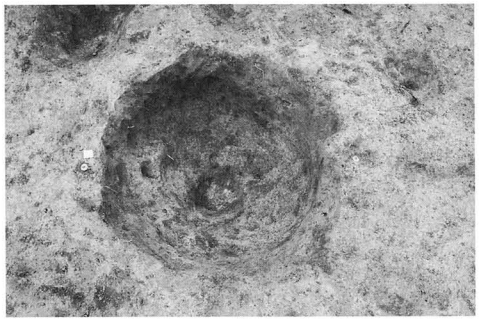


7．１号土坑（馬歯出土状況）

1．2号土坑

2．3号土坑

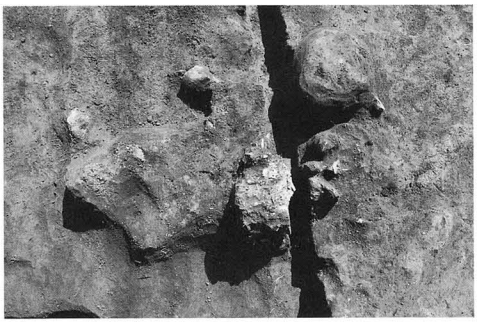

3．4号土坑


4．5号土坑

5．6号土坑完掘状況

6．7号土坑断面

7．7号土坑焼骨出土状況


8．7号土坑焼土・焼骨出土状況

9．8号土坑

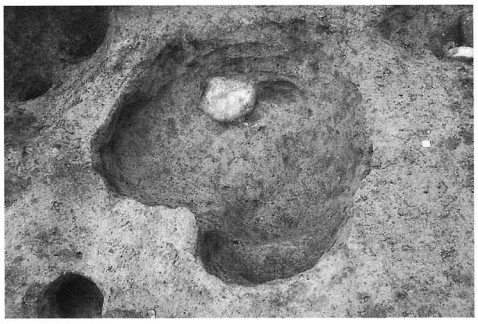
10．9号土坑完掘状況

11．11・12号土坑完掘状況

12．13号土坑

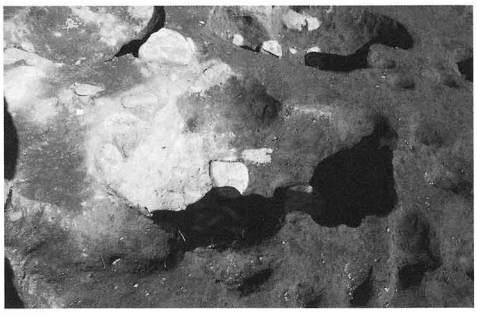
13．14号土坑完掘状況

14．15号土坑完掘状況

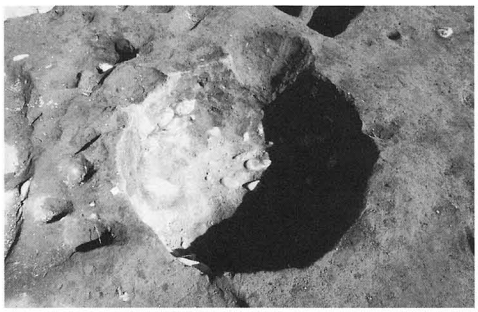

15．16号土坑

16．22号土坑

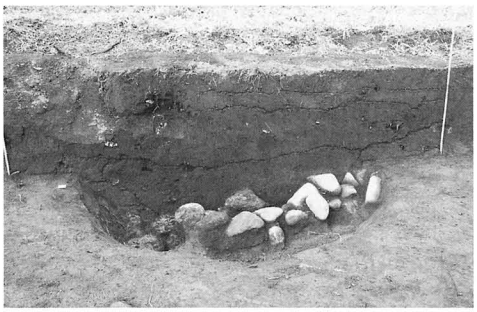
17．23号土坑


18．24号土坑

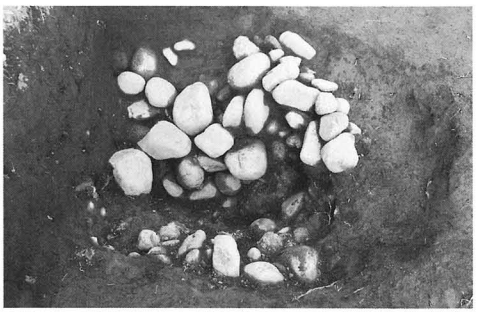
図版 13



1．25 号土坑



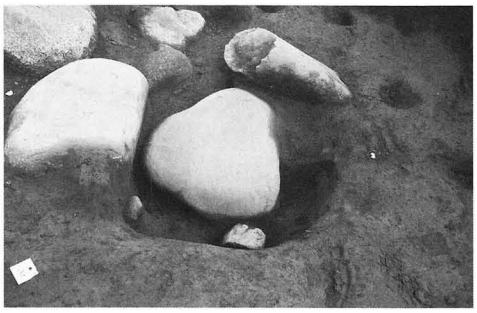
2．26 号土坑断面



3．26 号土坑半截状況

4．26 号土坑完掘状況

5．38 号土坑完掘状況



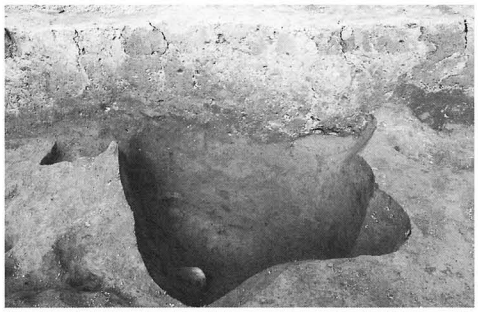
6．38 号土坑

7．39 号土坑

8．39 号土坑

9．39 号土坑

10．39 号土坑銭貨出土状況



11．43 号土坑

12．43 号土坑

13．19・20・21 号土坑完掘状況

14．18 号土坑覆土断面

15．18 号土坑完掘状況

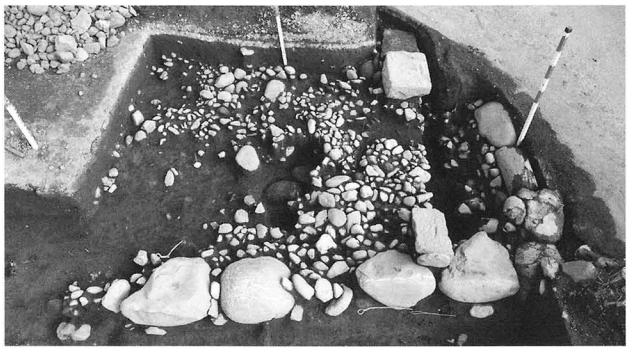
1．清白寺参道と周辺調査状況

2．参道脇の１号池

3．１号池石垣状況

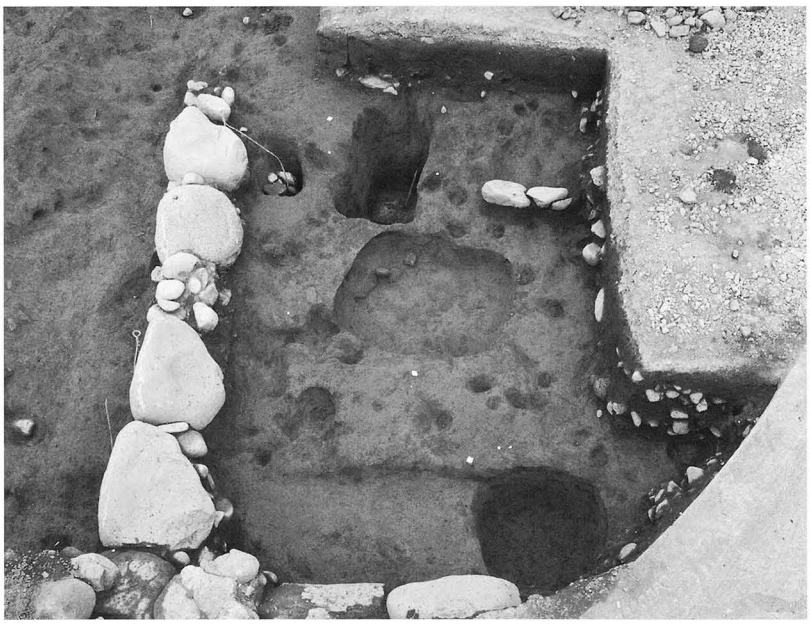
4．台座地点上層（東より）

5．台座地点下層（東より）



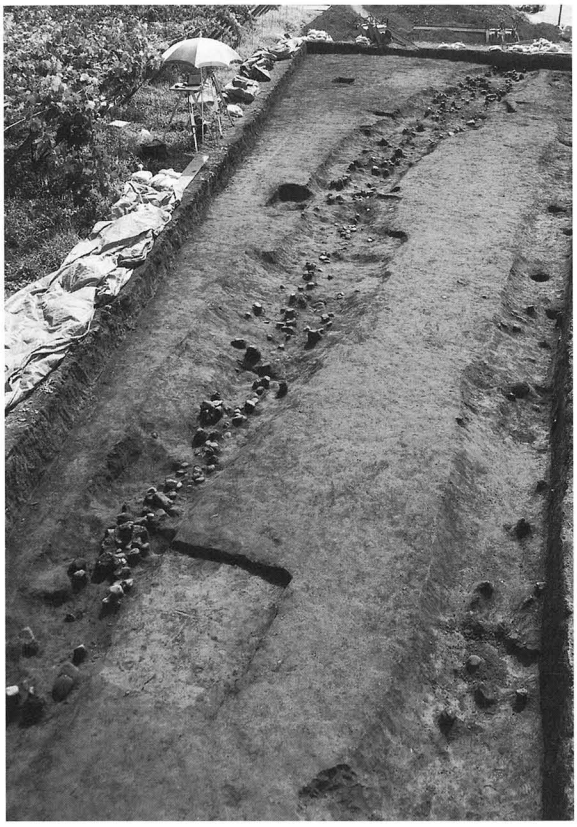
6．台座地点下層（西より）

7．台座群出土状況（南より）



8．台座地点完掘状況

図版 15



1．1 号溝

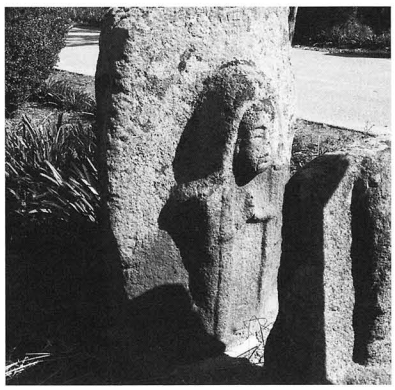
2．中区完掘状況（反転後）

3．中区完掘状況（反転前）

4．西区完掘状況（東より）

5．1 号竪穴調査風景

6．参道脇石造物群（西側）



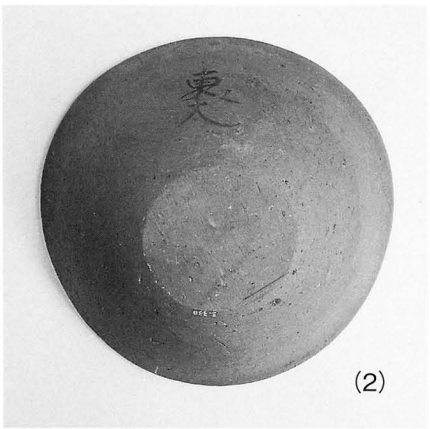
7．参道脇石造物群（東側）

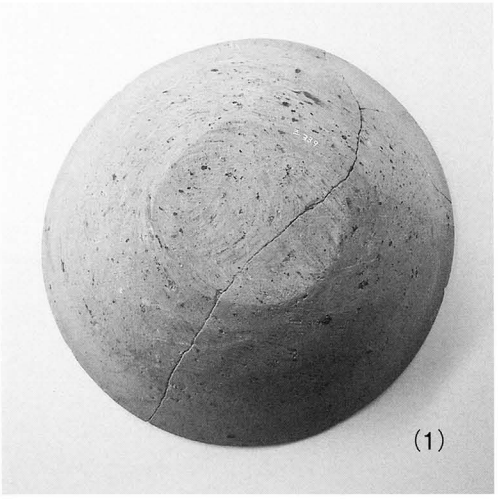
8．清白寺参道の現状

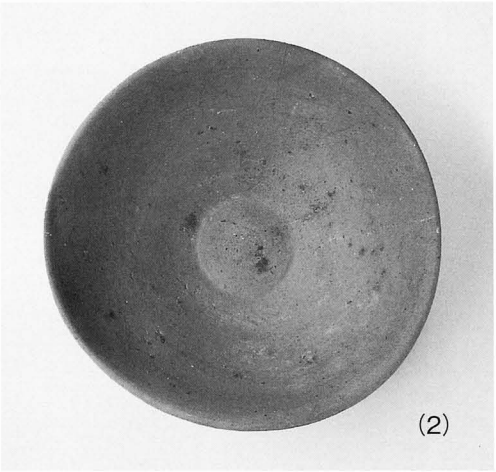
1 竪遺物

1

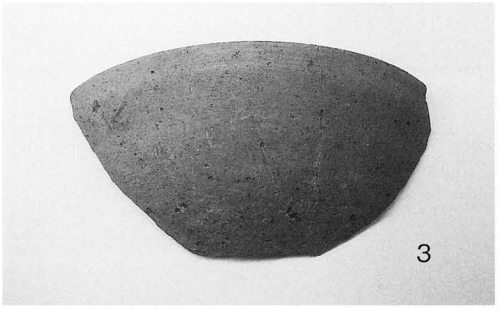
2

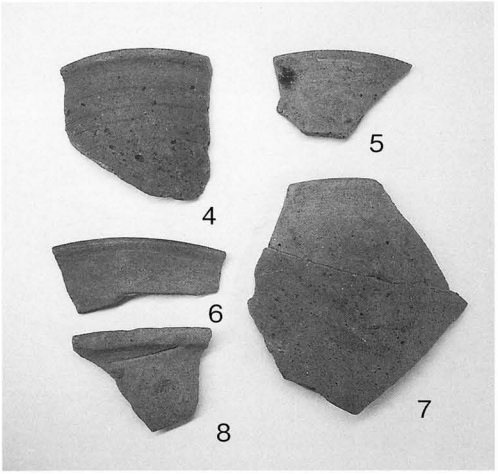

(2)

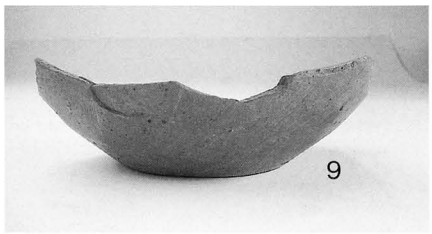

(1)

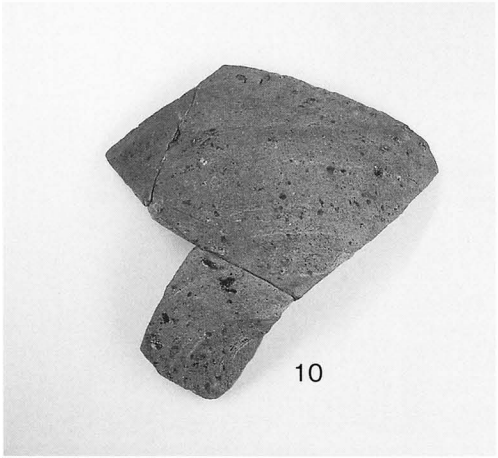

(2)

(2)

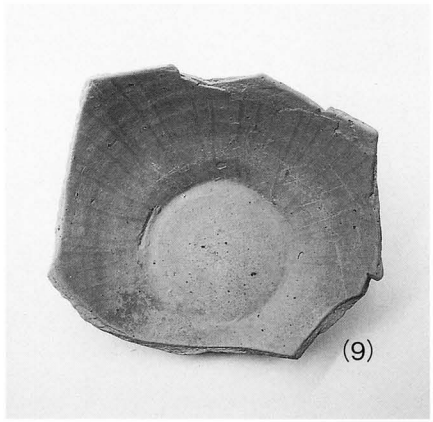

3

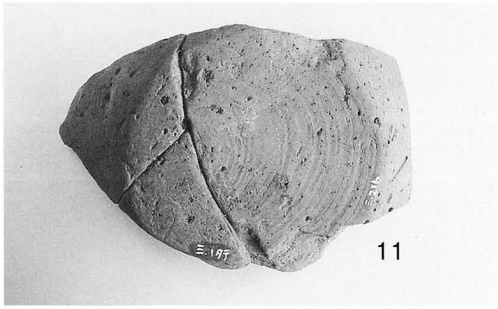


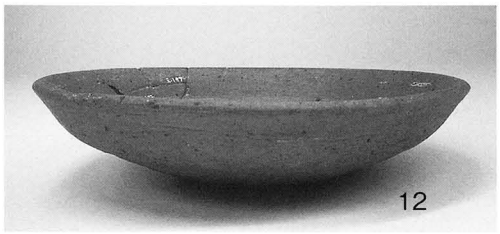

9

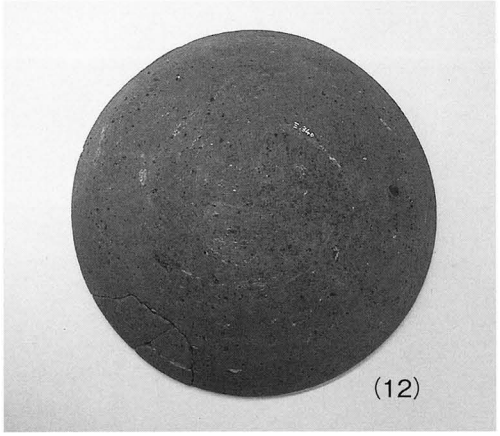

10

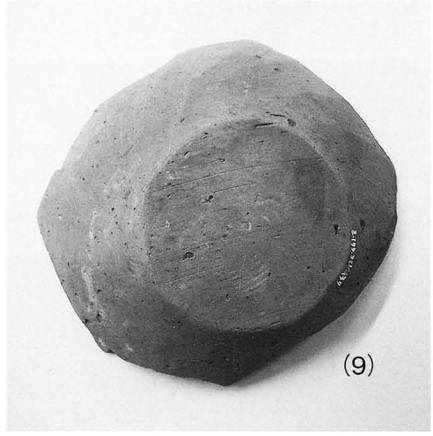
(12)


(9)

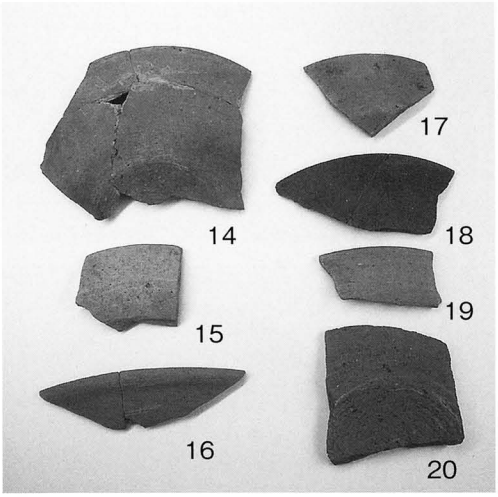

11

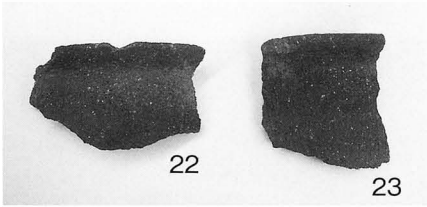

12

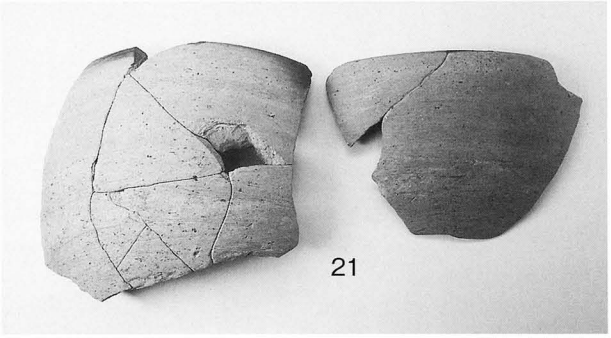

(12)

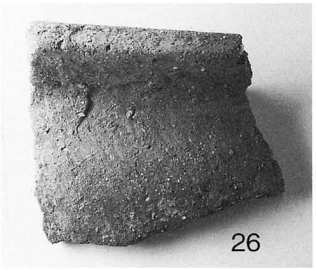

(9)

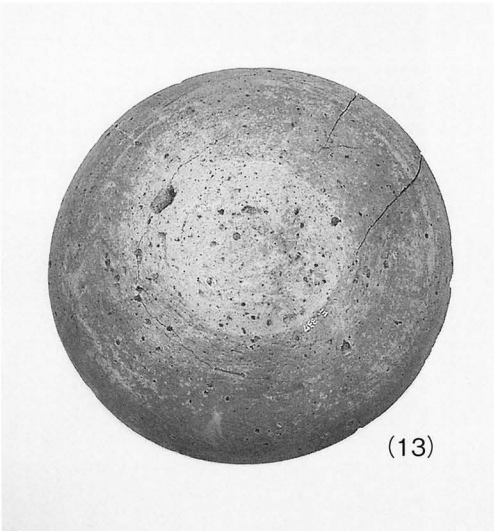
図版 17

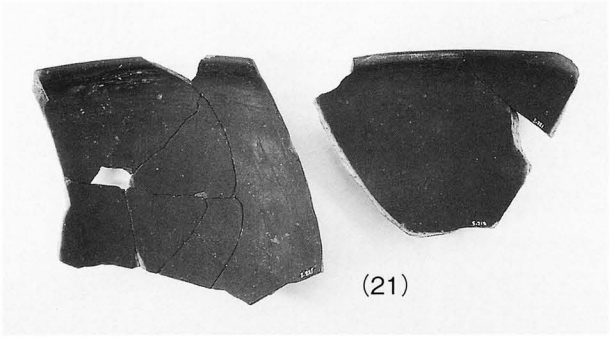


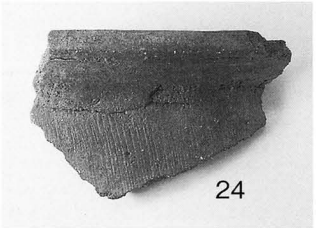


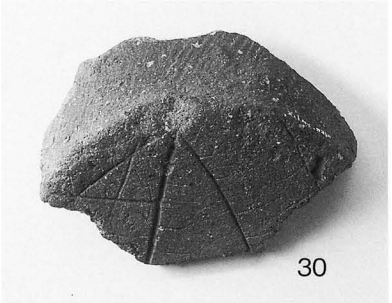


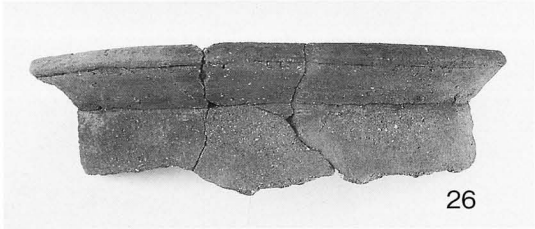


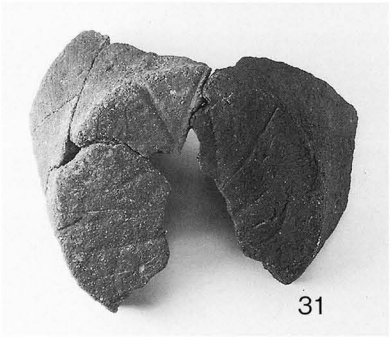


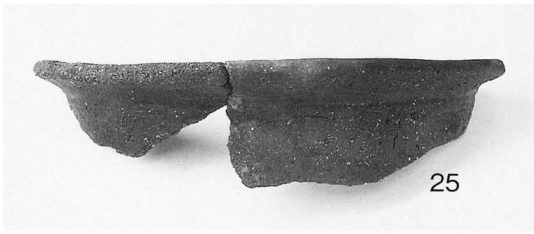


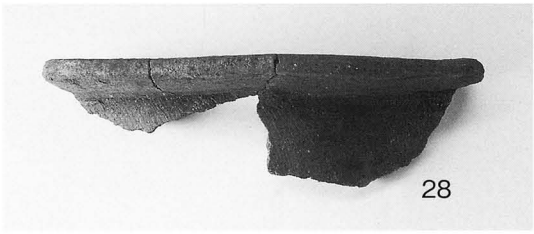




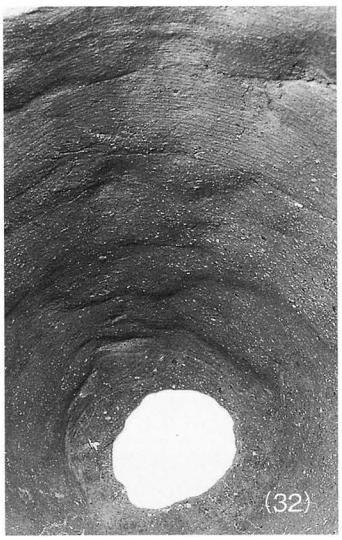


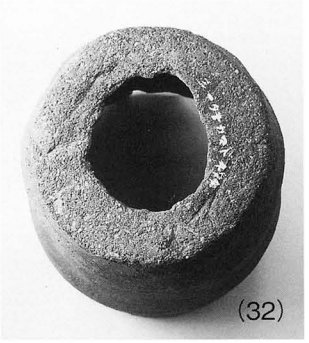




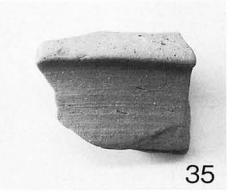


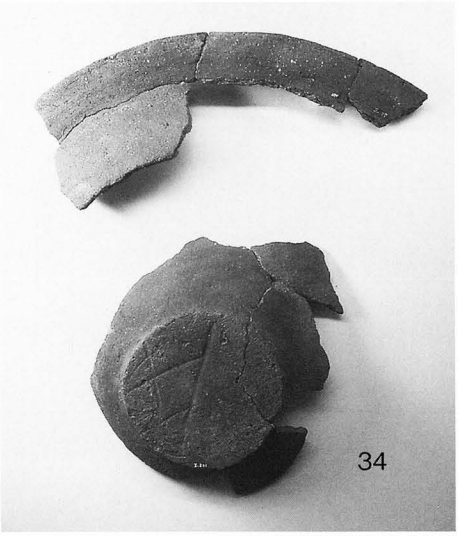
32

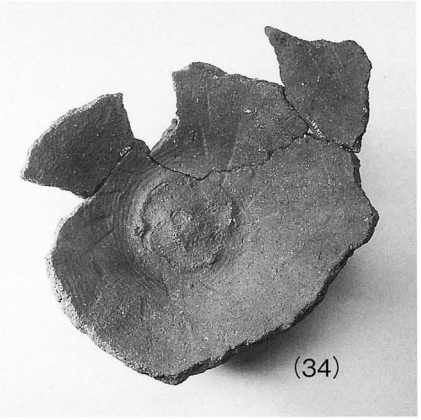

(32)

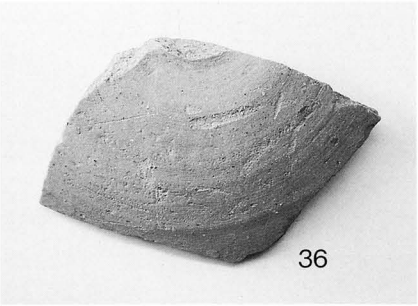

(32)

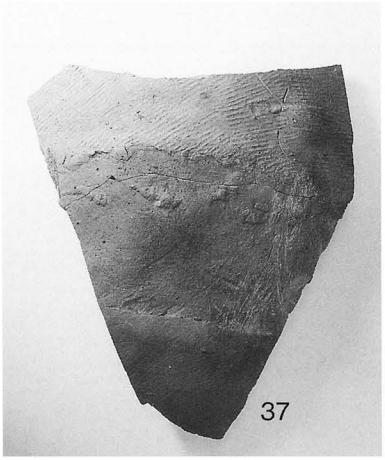
33

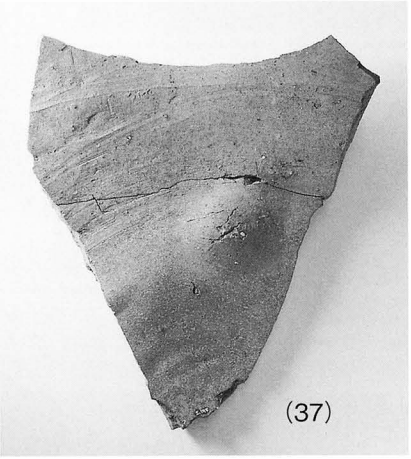

35

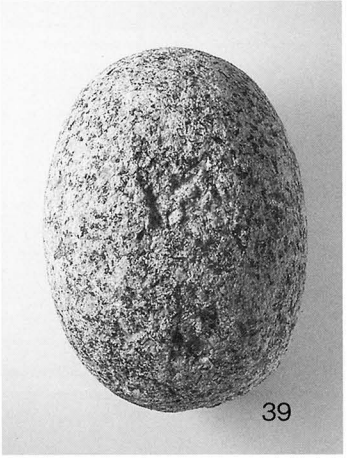

34


(34)

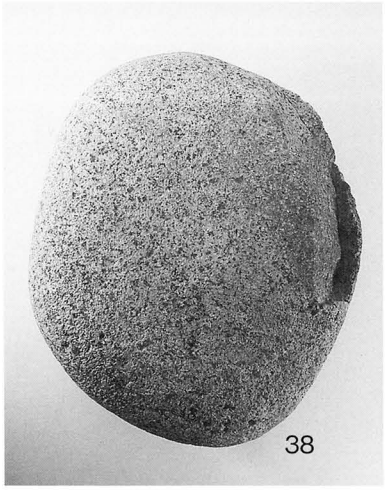

36

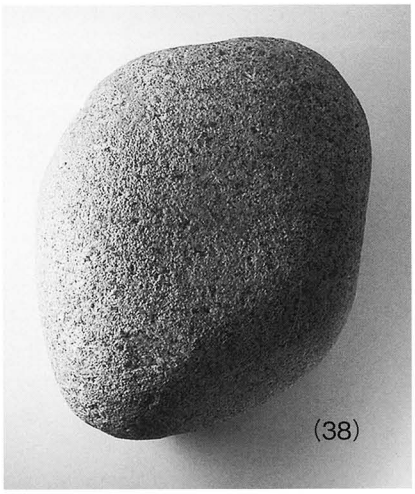

37

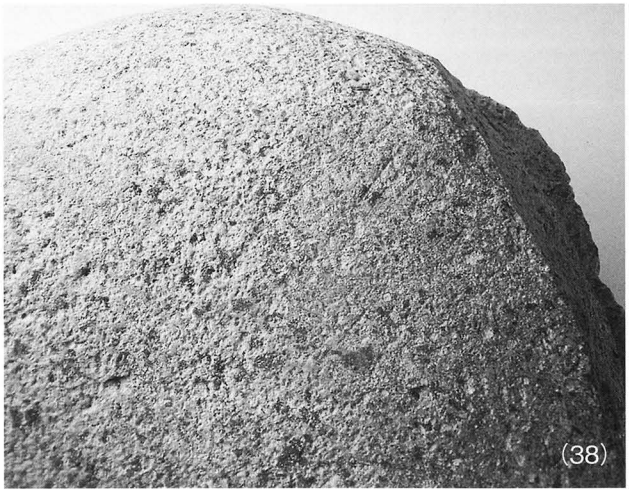

(37)


39

40

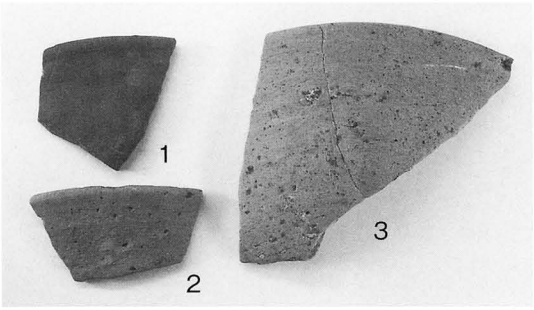

38

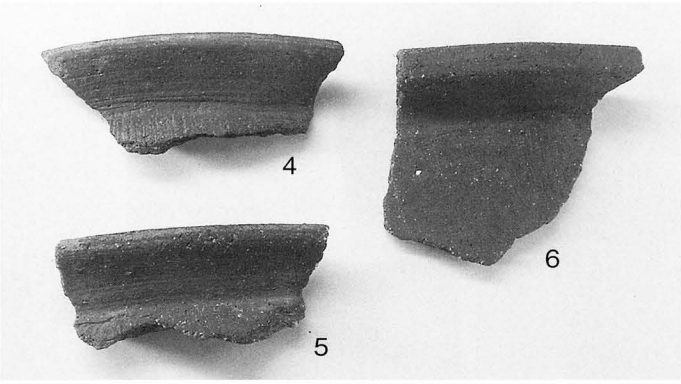

(38)

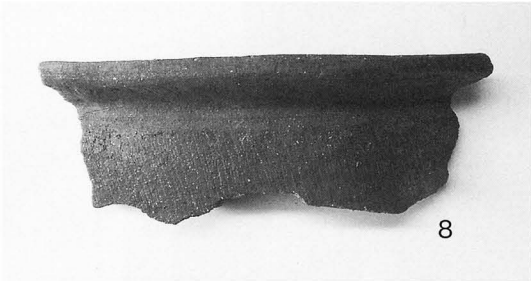

(38)

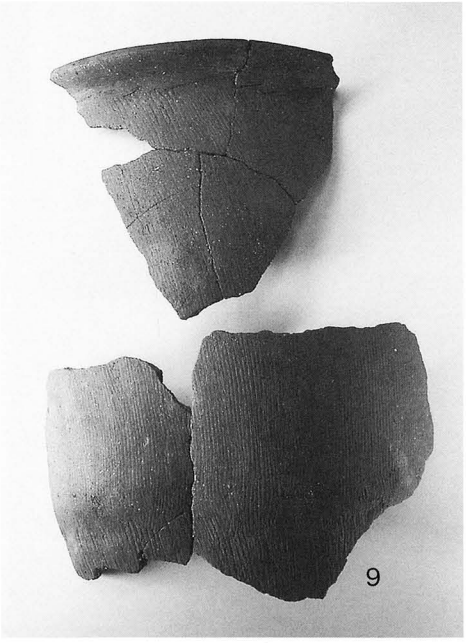
図版 19

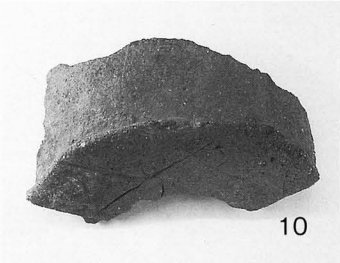
2 竪遺物

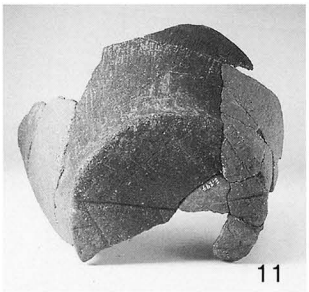




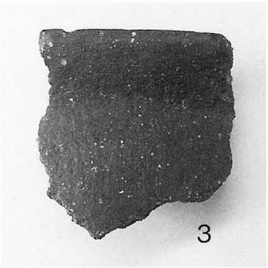


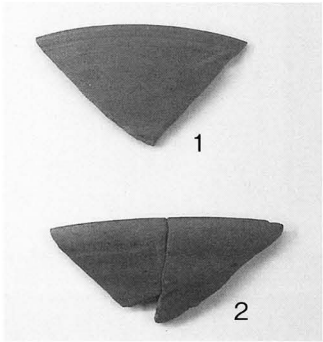




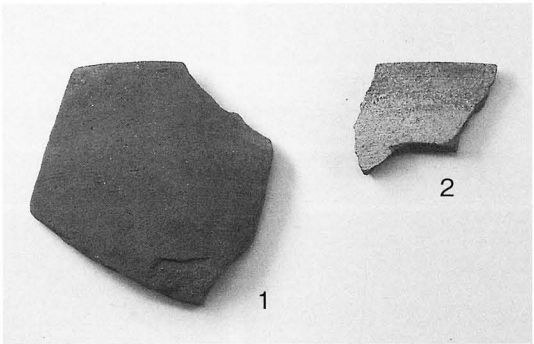


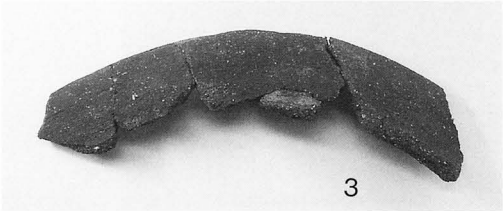
3 竪遺物

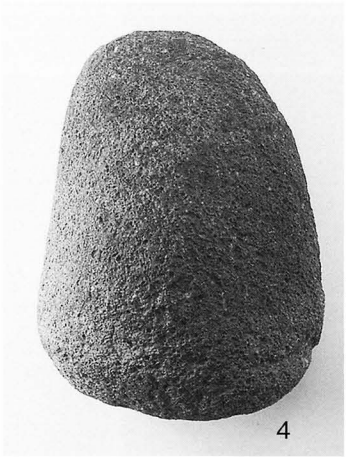




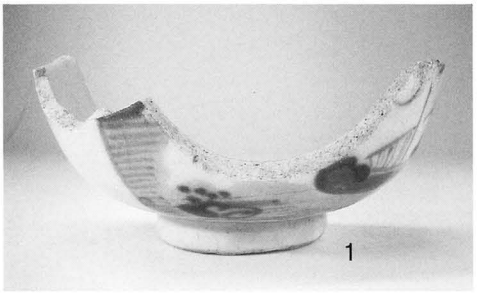
4 竪遺物



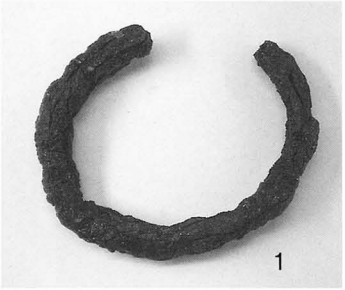




18 土遺物

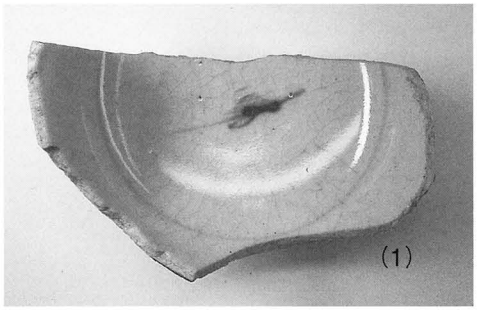


29 土遺物

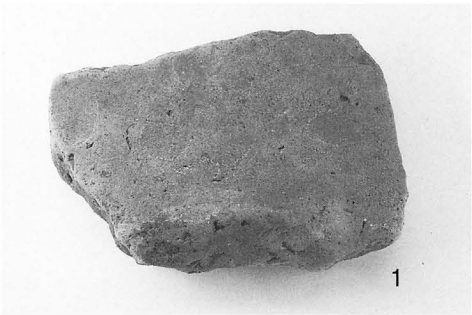


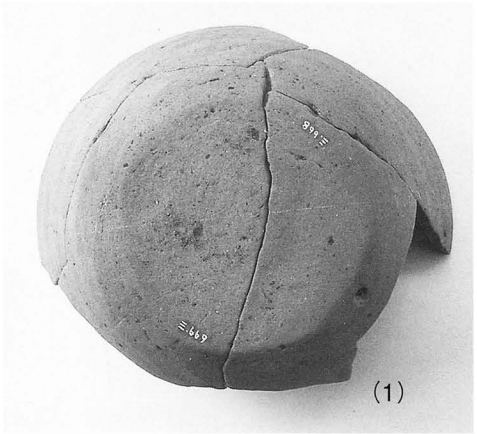
21土遺物

30 土遺物

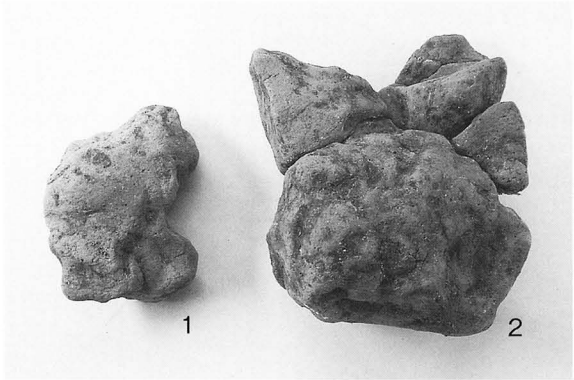


39 土遺物

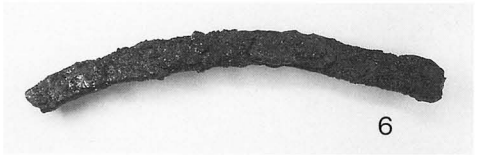


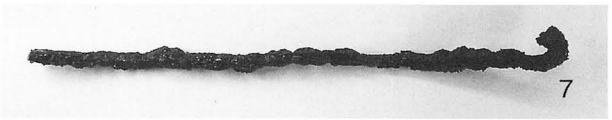


33 土遺物

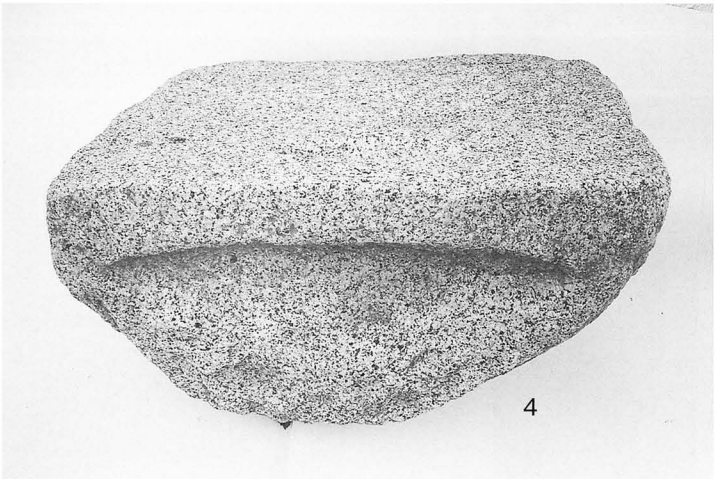


台座地点
出土遺物

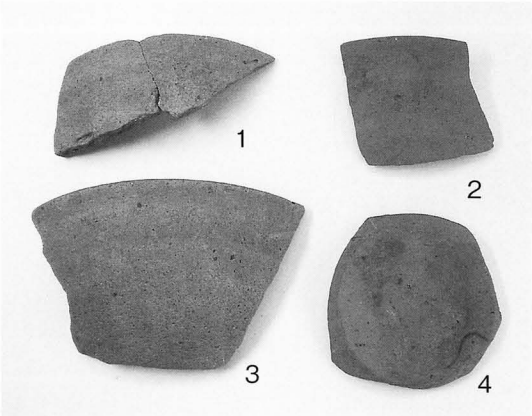




台座地点遺物

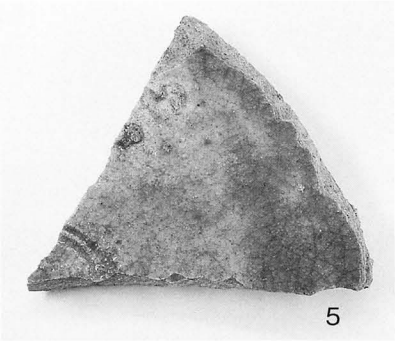


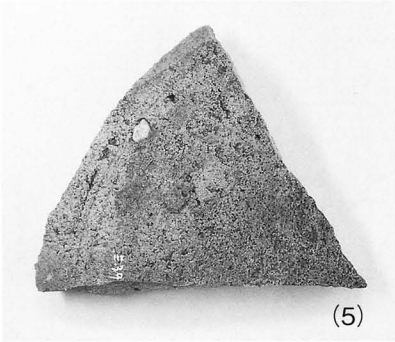
1 溝
遺物

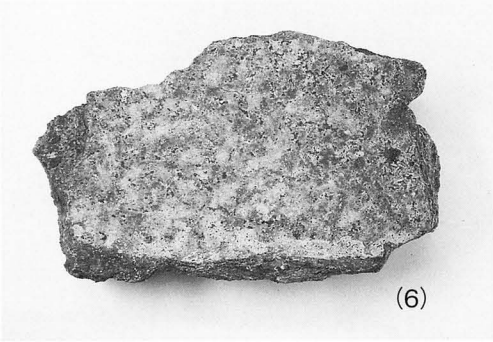


図版 21

1 溝遺物

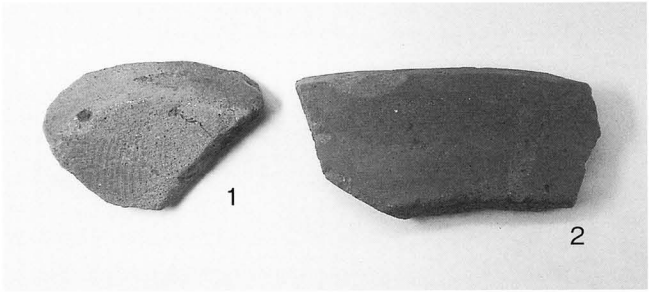


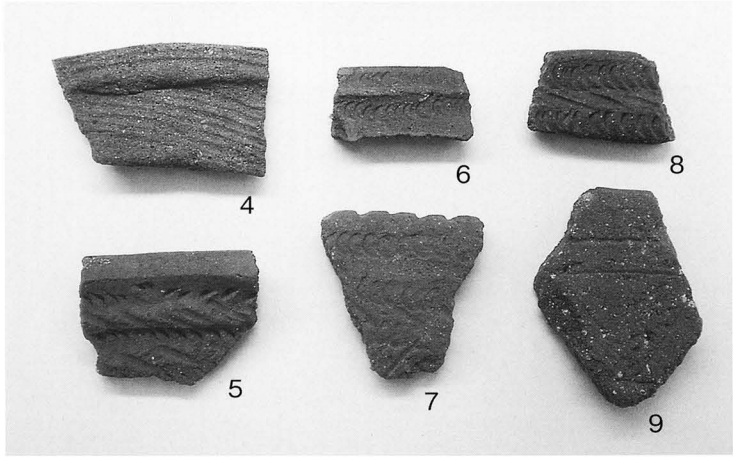


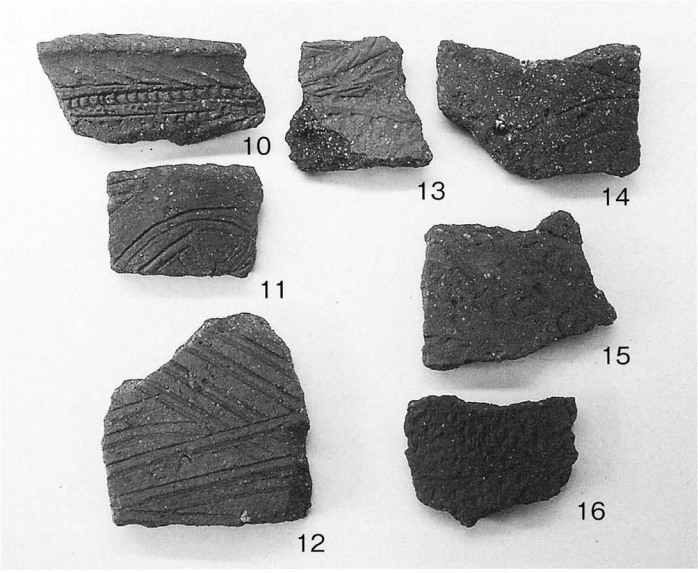


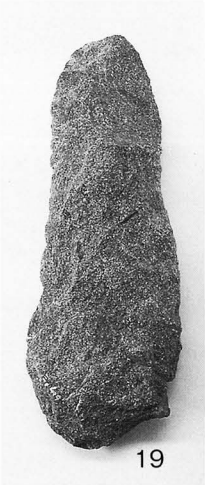
3 溝遺物

2 溝遺物

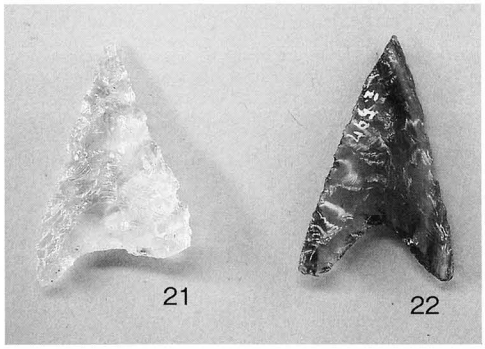




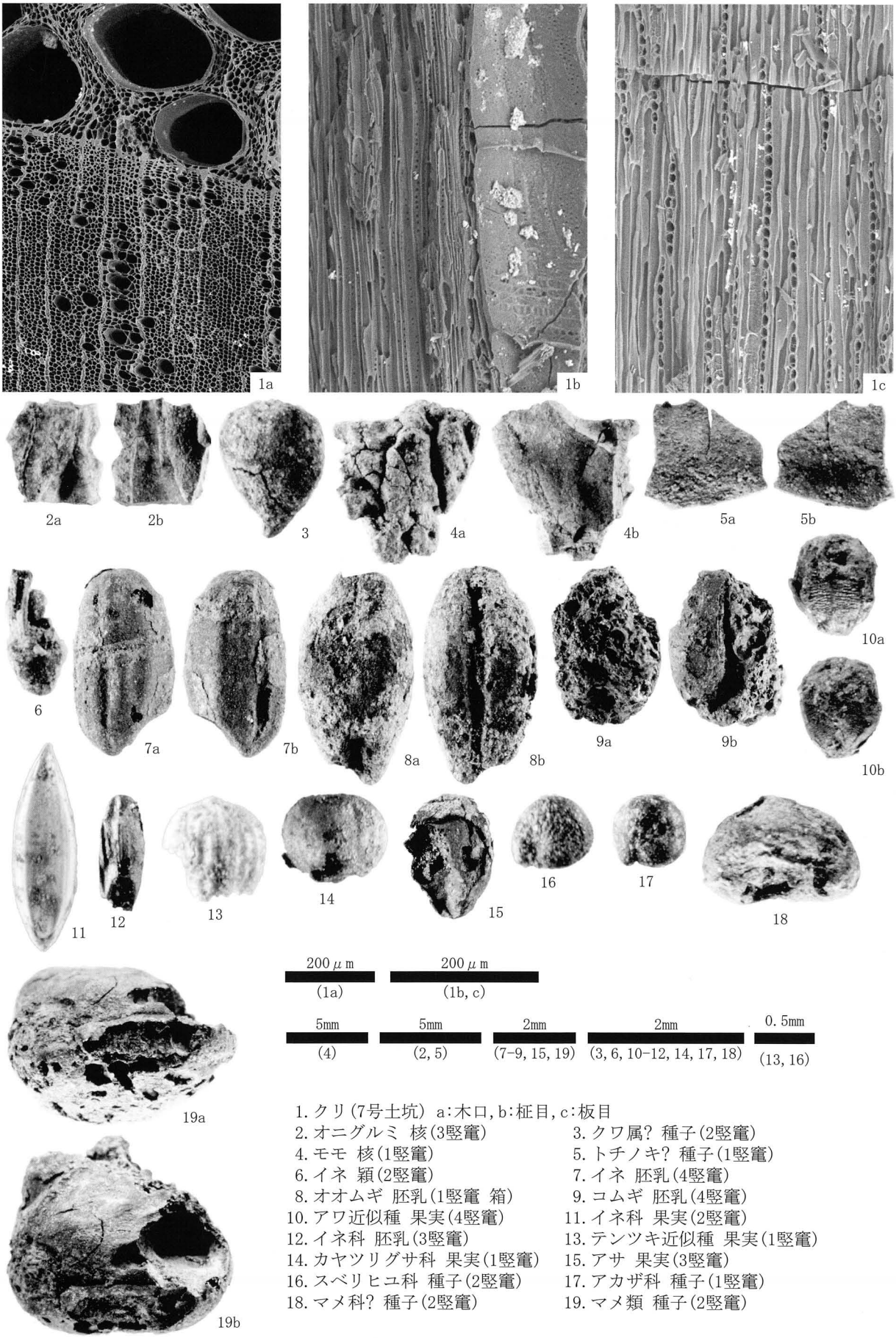




遺構外遺物



炭化材・種実遺体

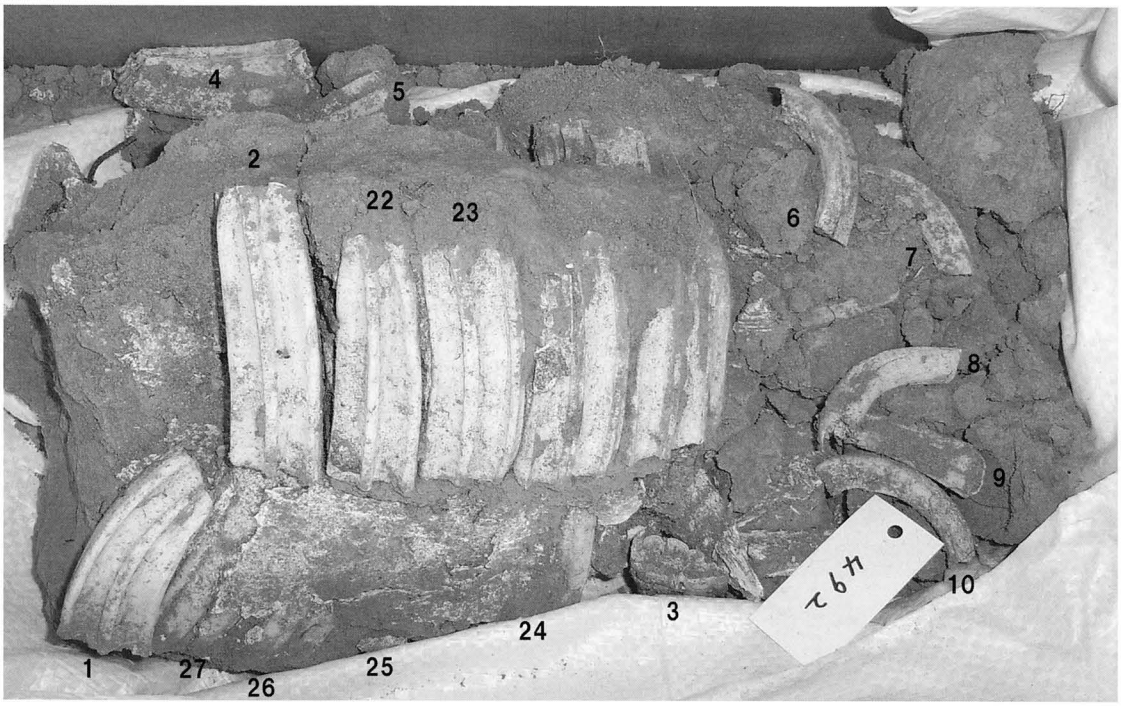


1. クリ(7号土坑) a:木口, b:柾目, c:板目
2. オニグルミ 核(3堅竃)
3. クワ属? 種子(2堅竃)
4. モモ 核(1堅竃)
5. トチノキ? 種子(1堅竃)
6. イネ 穎(2堅竃)
7. イネ 胚乳(4堅竃)
8. オオムギ 胚乳(1堅竃 箱)
9. コムギ 胚乳(4堅竃)
10. アワ近似種 果実(4堅竃)
11. イネ科 果実(2堅竃)
12. イネ科 胚乳(3堅竃)
13. テンツキ近似種 果実(1堅竃)
14. カヤツリグサ科 果実(1堅竃)
15. アサ 果実(3堅竃)
16. スベリヒユ科 種子(2堅竃)
17. アカザ科 種子(1堅竃)
18. マメ科? 種子(2堅竃)
19. マメ類 種子(2堅竃)

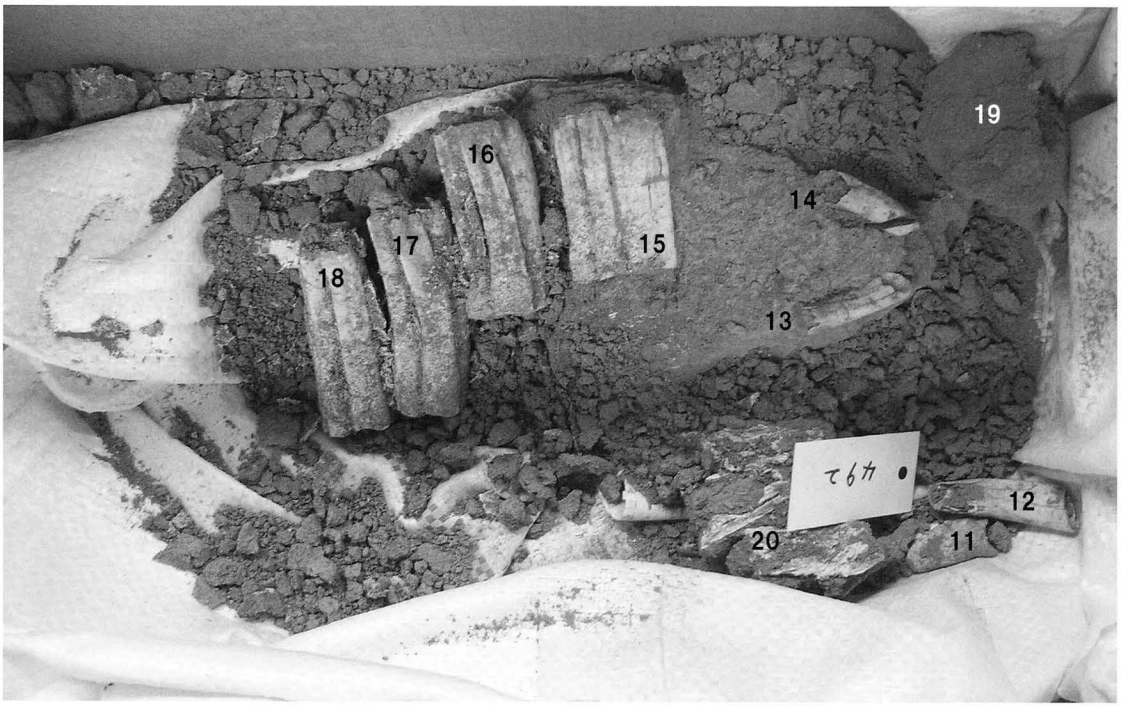
焼人骨

1. 前頭骨?(1号配石)
2. 歯牙片(1号配石)
3. 歯牙片(1号配石)
4. 大腿骨(1号配石)
5. 前頭骨左眼窩上縁片(7号土坑)
6. 左頬骨(7号土坑)
7. 下顎骨左下顎頭(7号土坑)
8. 側頭骨錘体部(7号土坑)
9. 頭蓋骨(7号土坑)
10. 頭蓋骨(7号土坑)
11. 肋骨(7号土坑)
12. 肋骨(7号土坑)
13. 四肢骨
14. 四肢骨(7号土坑)
15中手骨/中足骨/指骨(7号土坑)

1 号土坑馬歯(1)



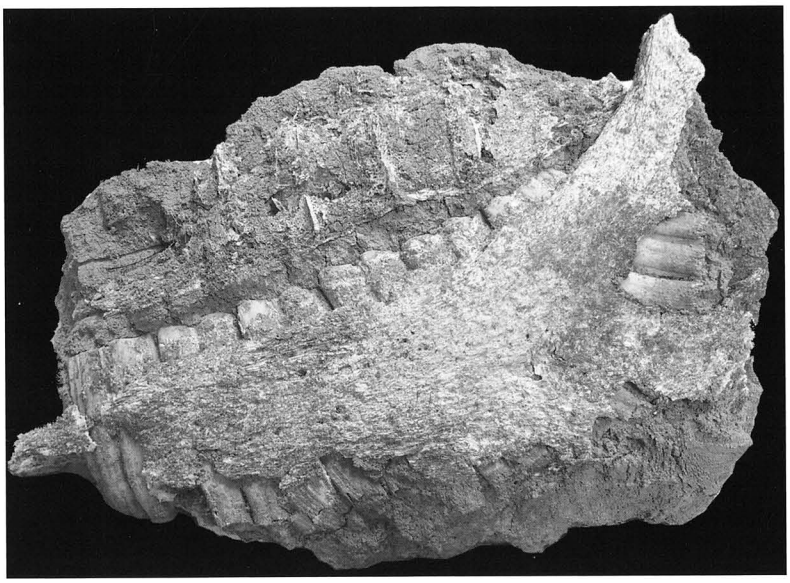
1．上面（右側頬側面）



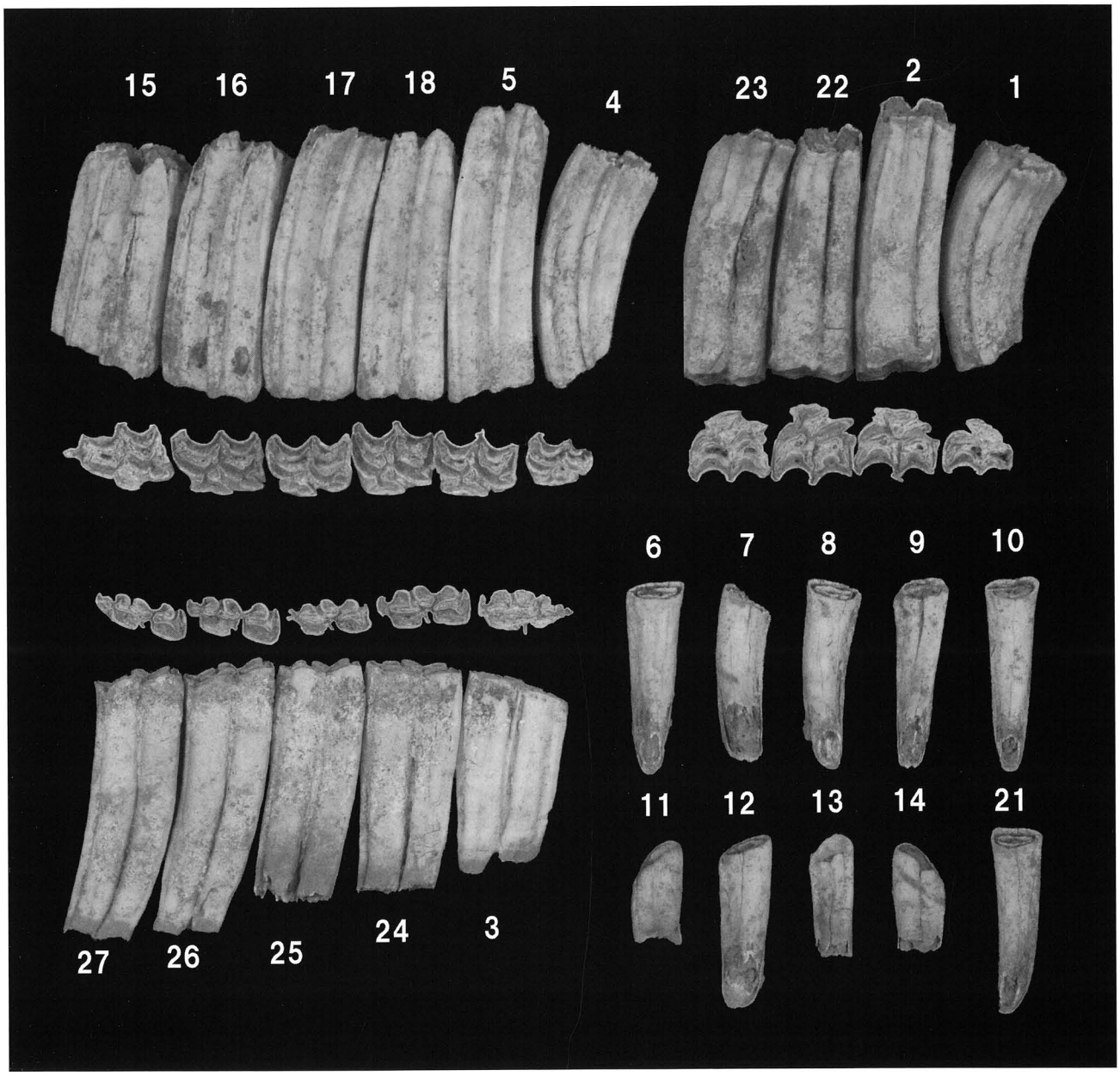
2．上部除去後（左側舌側面）

4．切歯・臼歯（図版 25 の下の写真番号は分析時に付与したもの）
左上顎臼歯［15:P2、16:P3、17:P4、18:M1、5:M2、4:M3］頬側面。下部は咬合面
右上顎臼歯［23:P4、22:M1、2:M2、1:M3］舌側面。下部は咬合面。P2、P3 は顎に植立。
右下顎臼歯［27:M2、26:M1、25:P4、24:P3、3:P2］頬側面。上部は咬合面。M3 は存在しない。
切歯［6～14、21］

図版 25
1 号土坑馬歯(2)



3. 左側頬側面



4. 馬歯

報告書抄録

ふりがな	さんかしょいせき
書名	三ケ所遺跡
副書名	市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書
巻次	山梨市文化財調査報告書　第12集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	櫛原功一・松元美由紀・植月学
編集機関	財団法人　山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055-263-6441
発行年月日	西暦　2010年1月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
さんかしょいせき 三ケ所遺跡	やまなしけんやまなししさんかしょ 山梨県山梨市三ケ所564-2	205	107	35° 41′ 30.7″	138° 42′ 27.6″	2008年7月29日～10月31日	1640㎡	市道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ケ所遺跡	集落遺跡	平安時代～中世	竪穴住居4（平安時代）・掘立柱建物5棟・土坑・溝・ピット・池など	縄文土器（諸磯式）・平安時代土師器・中世カワラケ・陶磁器・石造物台座・鉄製品・馬歯ほか	1号竪穴より墨書土器「東大」、仏鉢形土師器椀出土。1号土坑より馬歯出土。火葬骨2か所で出土。

要約	縄文時代前期に土器散布。9世紀後半に掘立柱建物群を主とした集落形成。10世紀初頭に竪穴住居を主とした集落となる。中世には条里溝により東西、南北方向の地割施行。中世以降と考えられる馬の埋葬墓1基あり。清白寺に関わる江戸時代の石造物台座群、中世以降の火葬骨（火葬施設か）、墓坑。

山梨市文化財調査報告書　第12集

三ケ所遺跡

— 市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書 —

平成22年（2010）1月29日　発行

編　集　㈶山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055－263－6441

発　行　山梨市・山梨市教育委員会・㈶山梨文化財研究所

印　刷　㈱帝京サービス